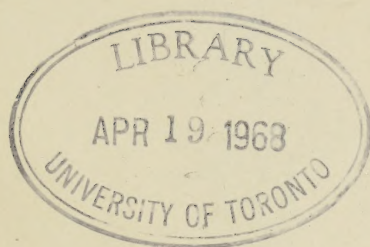
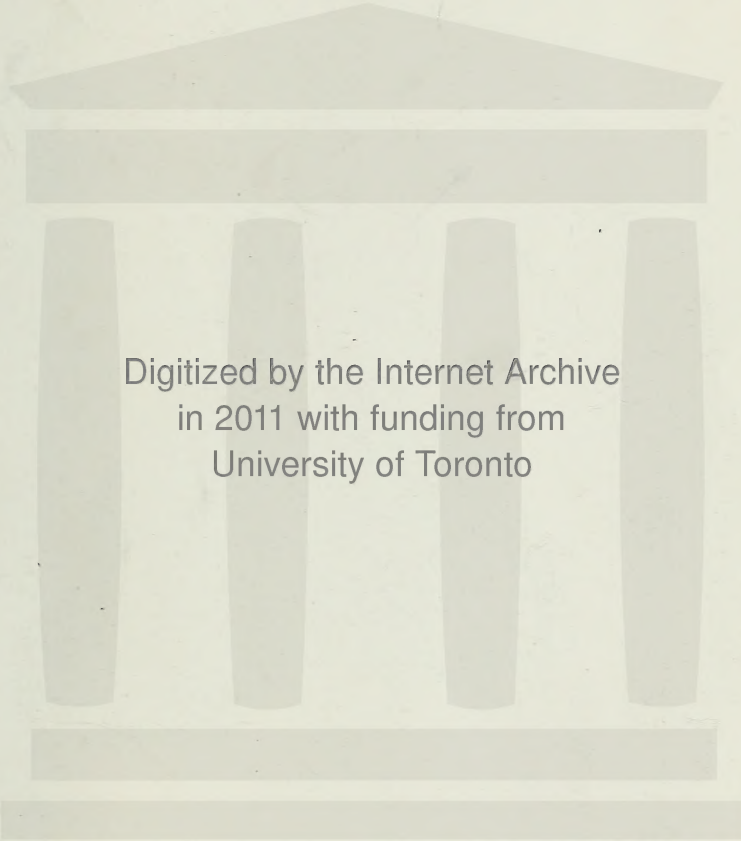
柳田國男先生監修

秋田叢書別集

菅江真澄集 第四

眞澄翁を優遇せる秋田藩主天樹院佐竹義和公

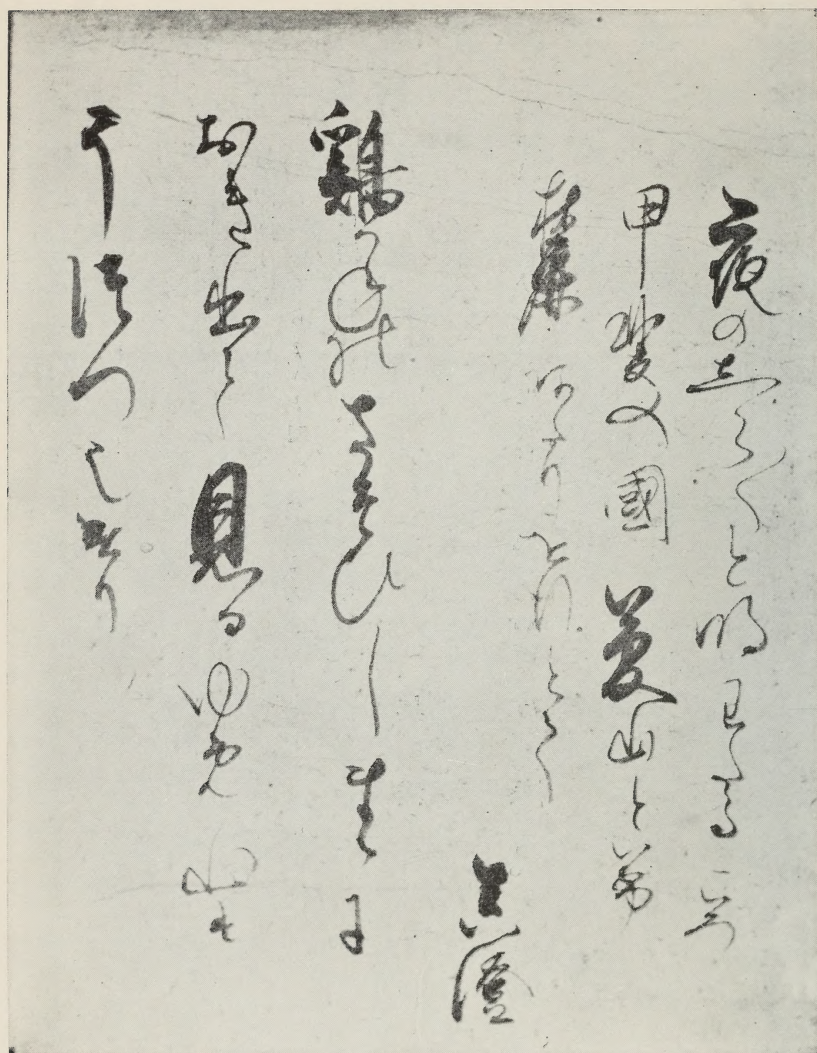
秋田市外天德寺藏繪像

眞澄翁短册

仙北郡六郷町　熊谷こう子氏藏

菅江眞澄翁遺墨（其七）

うつしてはおとこそきかれたのしさは
ちよまつかれにかゝるたきなみ

秋田市　安藤和風氏藏

菅江眞澄翁遺墨(其八)

仙北郡六郷町栗林治郎作氏藏

夜のしら〳〵と明わたるころ
甲斐の國夢山といふ麓あたりを行とて

眞　澄

鷄かねのさそひしまゝにおき出て見るゆめ山はうつゝ也けり。

秋田叢書別集 菅江眞澄集第四 目次

口繪

解題

本集に編輯したる菅江眞澄翁の著錄は「齶田濃刈寢」以下十六種の遊覽紀行文及び寫生圖等である。之を地理的に見るときは、秋田地方の部にて從來編輯したるものゝ殘部と、信州の部全部と、北海道の一部、及び極めて斷篇ではあるが、翁が所謂「旅の生活」に入る前のものと思はれる三河國の紀行文等である。又これを年代的に見るときは、翁が「此の日の本にありとある、磯の上古き神社を拜み巡り、幣奉らばやと」鄉里三河國を立つて、旅の生活に出發した最初の紀行文が信州に於ける「委寧能中路」であつて、天明三年といへば齡三十のときであり、又「高松日記」を書いたのは文化十一年であるから六十一歲のときである。此間約三十年、人間の一生としては可成りの隔たりである。隨つて、年齡の關係や周圍の事情及び環境の變化等によつて、趣味にも、ねらひ所にも相當の動きを見せてゐる。例へば同じく山水禮讃と風土探究の目的には相違ないにしても、壯年時の旅日記は主として和歌を中心として記錄を續けて居るのに、老境に進むに從つて鄉土研究、史蹟調査といふやうに變化して居る事が感じられる。

本集に集錄した翁の著錄の原本を特に本會の爲めに御開放下された左の方々に對して、こゝに會員各位と共に厚く謝意を表する。

書名	所在地	所蔵者
齶田濃刈寢	北秋田郡大館町	栗盛教育團
小野のふるさと		同
高松日記	平鹿郡植田村	近利左衛門氏
駒形日記	仙北郡飯詰村	江畑新之助氏
比良加の美多可		近利左衛門氏
月廼遠呂智泥	東京市	佐竹侯爵家
雪能袁呂智泥		栗盛教育團
勝手能雄弓		佐竹侯爵家
花の眞寒泉		栗盛教育團
枝下紀行（寫眞）	東京市外	柳田國男氏
委寧能中路		佐竹侯爵家
わかこゝろ		同
洲輪の海（寫眞）		柳田國男氏
いほの春秋（同）		同
來目路乃橋		佐竹侯爵家

蝦夷廼手布利　同

以下各卷にわたつて解説を試みる。

齶田濃刈寢　一卷

天明四年九月十日、翁の年三十一歳のときである。羽越の界なる念珠ケ關に宿り、それより北進して鶴岡に入り羽黒山に參詣し、最上川を下り酒田・吹浦・象潟・本莊・矢島を經て山を踰えて雄勝郡に入り、柳田村に辿りて草彅氏方に滯留して越年して居る。其の間山水の景色を禮讃詠歎せるは勿論、特に土俗方言等の奇異に興味を感ずる所多く、山家の雪中生活などを巨細に描いて興味津々たるものがある。尙、文化地震前の象潟に舟を浮べて其の風色を愛づるの記事は、他に類例のないものであらう。

小野のふるさと　一卷

此の一卷は、秋田圖書館本には「齶田の假寢」の後篇になつて居る。年月から云へば、無論これに連續したものである。尙本書原本の題簽は剝落して失はれたものらしく、其跡に書いてある「小野のふるさと」の文字も、寫眞に見らるゝ如く後人のものらしい。

內容は翁の小序にもある如く、天明五年の正月から四月まで雄勝郡內各地を歷訪して、景勝の地に遊

び、舊蹟を探り、土俗に親しみ、尙其の所々に於て文人墨客との交遊の記錄であるが、小野小町の舊蹟地小野村に至つては特に丹念に古記を尋ね口碑を漁り種々の異說を擧げて、彼の薄倖なる末路の佳人に對して弔意を表して居る。なほ、別に翁の記錄に「小野の寒泉」と題する一冊がある筈で、これには山本郡下岩川村の傳說小野小町に關する事を書いてあると思ふが、今原本も寫本も見當らない。

高松日記　一卷

此の一卷は、近利左衛門氏藏自筆本「雪の出羽路、雄勝郡」の中から別に切り離したものである。文化十一年秋の紀行であるから、「雪の出羽路、雄勝郡」編纂のために調査行脚した時の所產で、同じ雄勝郡内のものでも、次の「駒形日記」と共に、前の「小野のふるさと」より三十年程後のものである。内容は高松山麓の山村を縫ひつゝ山中を跋涉して紅葉狩りをした記事であるが、其處には變化に富む自然と人生の種々相が見られた。

翁の著錄に、今原本の所在不明なる「霧の高松」といふのがある。或はこれと內容を同じうし、又は關聯するものでないかとも思はれる。

駒形日記　一卷

此の一卷も、「雪の出羽路、雄勝郡」の草稿本と認めらるゝ江畑氏所藏本の中のもので、翁の自筆である。翁は文化十一二年の頃雄勝郡を行脚して居たので、多分此の頃のものであらうと思ふが判然しない。又別に完本のものがあつて其の稿本でないかとも思はれるが、これも明瞭せぬのは遺憾である。

比良加の美多可　一卷

平鹿郡增田地方に關した物を集めたものとして同地方に此の寫本が珍重されて居るが、實は「雪の出羽路、平鹿郡」の草稿の一部を一冊に纒めたもので、必ずしも增田附近の記事のみではない。原本は植田村近利左衞門氏所藏であるが、もとは「雪の出羽路、雄勝郡」及び「月の出羽路」の稿本と共に雄勝郡杉の宮に殘されたものであるといふ。翁が旅の宿りに、各地に其の草稿、日記等を殘した形式を示す良き例の一つである。「出羽」、「ひらかのみたか」の章は、當初「雪の出羽路」の卷頭に用ひるための準備であつたかと見える。

月迺遠呂智泥　一卷

文化九年春より南秋田郡寺內村を根據として附近を來往して居つた翁が、此の七月十六日、那珂通博鎌田正家、其の他の歌の友達と連れだつて太平山に登り、山上の月を眺めんとしたときの紀行である。

オロチネは太平山の異名である。生憎雨の夜であつたが、それでも頂上に待つて居る中に雲の中から月光が仄かに照り輝いたのを喜び合つた。のみならず、假令山上の月は十分觀賞し得なかつたとしても、翁も、又吾々讀者も決して落膽はしない。その往復の記錄が非常に大きな收穫であるから。
本書は最後の文が跡切れて居るが、山の寫生圖には素晴らしい作が多い。

雪能袁呂智泥　一卷

此の一卷は雪に覆はれた太平山及び其の麓のスケッチで記錄年代は不明である。多分文化の末頃かと考へられる。「雪の出羽路」の姉妹篇に「勝地臨毫」と題する十二册本の寫生圖がある。これは雪月花の出羽路と共に地誌と見做して秋田叢書に收錄したが、此の「雪能袁呂智泥」も、「勝地臨毫」と一類の寫生圖と見られる。

勝手能雄弓　一卷

本書も亦文化九年八月、翁が兼ての親友なる那珂通博、及び江田、廣瀨の諸友と旭川の勝手神社に參詣したときの紀行である。例によりて沿道の山水や土俗の珍奇なるものは見遁さず、歌とし文とし繪として採蒐して居る。殊に南朝の忠臣藤原藤房の遺跡などには口碑により傳說に基き、或は諸書の記

事等に據り相當突込んだ研究が記錄され、實に其の知識の該博なるには驚くの外ない。

因に、最近秋田市に於て發見された「花の出羽路」によれば、「月のおろちね」と本書とは、共に此の「花の出羽路」に收められて居る。

花の眞寒泉　一卷

翁の小序によれば、本書は「櫻がり」といふ一卷を書き終つた筆のまに〳〵、ところ〳〵でむすびし寒泉を書き集めたとあるが、此の「櫻がり」の著錄年代は寛政年中と思ふのに、本書には多く秋田、仙北の名ある淸水を書きあつめ、且つ「雪の出羽路」の事等を書いてあるので、未だ其の著作年代を確定的に判考することが出來ない。名泉十九ケ所を擧げて故事傳說等を書いて居るが、最後の「富田の淸水」の一ケ所は弘前の地內にある爲めか、原本の目錄には除けて居る。

「枝下紀行」　一卷

此書は、翁の自筆草稿の綴込み「ふてのまゝ」の中の一斷篇で、「枝下紀行」とは便宜上編者が假に名付けたものである。枝下といふは三河國矢作川の岸に在る下枝下村だらうと謂はれて居るので、此の紀行は翁が信濃に入る前のものと見なければならない。這囘柳田國男先生の御許しを得て、之を輯錄し

得たことは此上ない喜びである。

委寧能中路　一巻

眞澄翁は四十六年の永い間旅で暮した、其の旅日記の完全して殘つて居る最初のものは此の「伊寧能中路」である。卽ち天明三年二月末に故里を旅立ち、それから信濃の國に入るまでの日記は盜人にとられたとして、此の書は、三月半ばに信濃國飯田に著いた時から書き初めて居る。信州には可成り知人が多いらしい。彼方に訪ひ此方に立ち寄つてだん〳〵と天龍川を遡り、鹽尻から一寸左折して本洗馬の里に著いたのは五月廿四日で、其の以後此處を本據として此の遠近を往復して、十二月半ば迄の日記で此の一卷は終つて居る。

又、此の年八月十三日から數日間、姨捨山の月見の紀行は「わかこゝろ」として別に一册を成し、又母の三年忌に際して詠んだ歌を集めて、「手酬草」として別記してある事も見える。

わかこゝろ　一巻

前記の如く、天明三年の中秋姨捨山に登りて名にし負ふ明月を眺め、心ゆくまで讃歎の歌を詠んで居るのは此の一卷である。

洲輪の海　一巻

これも「枝下紀行」と同じく「ふてのまゝ」の中に收められて居る斷篇で、天明四年一月十五日諏訪神社の筒粥の神事に參詣した紀行である。

いほの春秋　一巻

信濃の國に入つてから春も過ぎ、夏秋冬と一年あまりを過した。ある日可摩永といふ岡の一つ家に遊んで、此の山住の心に準らへて、此の國に來てから經驗した四季折々の自然の推移と、それに人生の形相を織り交ぜて其の興趣を描いたものである。「天明四年春、本洗馬の里にて」書いたものである。

來目路乃橋　一巻

翁は陸奥に行かうとする希望を持つて居る。天明四年六月の末本洗馬を立つて先づ越後に向つた。本書は其の旅立ちから途中清水の里、桐原の牧、筑摩の御湯等を見巡り有明山の麓を過ぎ、曲橋を渡り、善光寺に詣で、戸隱山に登り、而して七月三十日越後路に入るまでの紀行文である。年代順からすれば「齶田濃刈寢」はこれに續くものである。曲橋を久米路の橋といふところから此の書名が出た。

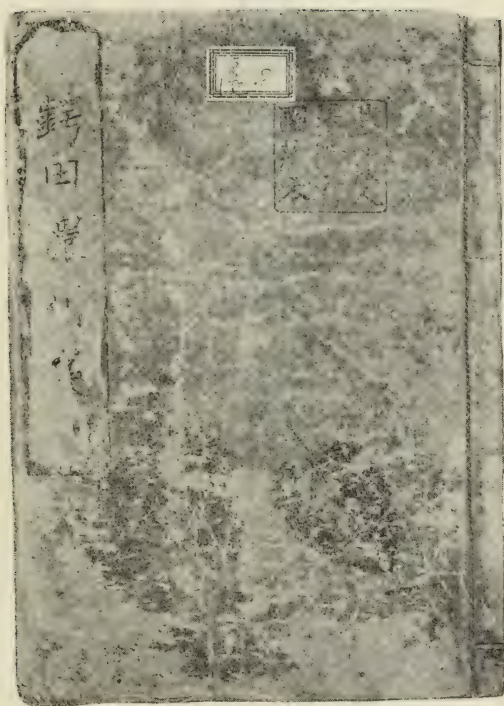
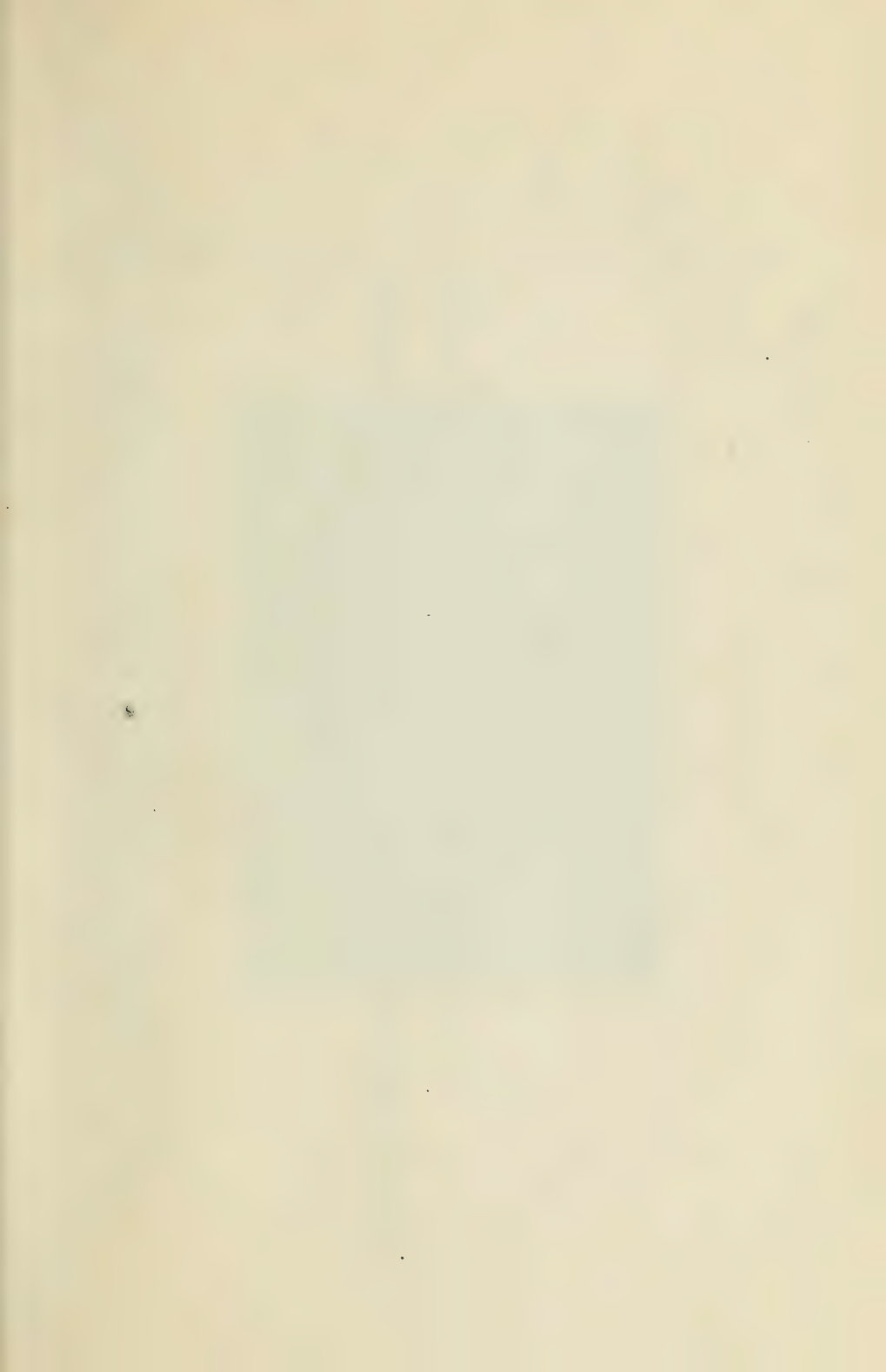
蝦夷迺手布利　一巻

これは北海道滯留中の紀行で主に蝦夷生活を描いたものであるが、翁の遺著の中でも最も異色ある、最も珍重さるべきものゝ一つであらう。

寛政五年五月廿四日有珠嶽へと志して福山を立ち、或は船に乘り或は陸路を辿りて北海道の南岸を傳ひ、遂に有珠嶽、羊蹄山に登つて六月十一日虻田に著いて擱筆して居る。其間或は蝦夷の舟に乘り或は其の家に宿り、或は音曲を聞き生業を尋ね、或は土俗言語等、寔に丹念に彼等の生活を記錄して居る。當時に於ける蝦夷生活の記錄は、本書に越すものはないだらうと云はれて居る。時に翁の年三十八歳。

尙北海道に於ける翁の著錄は「智誌磨濃膽咀春」、「ちしまのいそ夏」、「ひろめかり」、「婢呂綿乃具」、「ゑみしのさえき」、「蝦夷喧辭辯」等があるが、是等は總て次卷に收錄する事として、本卷には年代順からすれば前後するが、紙面の都合上此の「蝦夷迺手布利」一卷を收めた次第である。御諒恕を乞ふ。（又「蝦夷の窟」、「千島の名殘」の二册は未だ原本も寫本も發見されて居ないのは遺憾である。）

昭和七年三月　編輯同人

齶田濃刈寢

天明四年甲辰の九月十日出羽の國に入たるより、おなしき、しはすの三十日の夜まてかいのせ、はくろやま、きさかたのことをしるす。

九月十日
出羽鼠が關

いてはのくに田川郡鼠か關といふ、うまやのをさかやに泊りぬ。これよりなへて庄内とよふ。こゝより、なにさ、かさと、言葉のしりへに、さもしつけて、ものいふことはしまりぬ。

磯よりは、けしきはかりも離れて、ちいさき嶋に辨財天女の御祠ありて、鳥居は、よせかへる浪のうへにたてり。こゝら大なる岩のつらに、波のゆりあけたるあとより、たりなかるゝ水は瀧の落たるやうに、黑きいはほのあはひ〳〵をつたふなと、しろかねの糸すちを、あまたみたしかけたらんかことに、入日にひかりさゝやきたり。

うち見れはかけてかしこししま山の神の鳥居のなみのしらゆふ。

小岩川西光寺

十一日。このせきやをこへて、早田といふ處の畔みちをつたふに、

かりあけし里のわさ田の名もしるく朽根に殘る秋のひつちほ。

ほとなく小岩川に來けり。西光寺に住給ふ天眞上人をさふらひて入は、いとねもころにのたまひて、菊もてあそひ給ふたるなかに溪風といふ色よき菊を折て、これに歌あれと聞へ給

ふに、

八重霧のまかきのしたにかせたちてありとや匂ふ庭の菊か枝。

世のなかのことかたりて、けふはくれたり。

十二日。雨風はけしく磯輪いかれしとて、上人、いま一日とゝまりてとのたまふにまかせて、おなし御寺にあそひて、此里の田つらに磨石（とぎ）とて、人しにうせなんころほひには、うちものときたるあとの、かならすみゆと人のいひけるまゝ見にまかりしかは、かなたこなたと、そかあとあらはれたるもあやし。

とぎ石

十三日。夜あけなんころ、なる神いたくひゝきて、はやちふき、あられひふりて、此寺の軒をうがつとおほふに又雪のいさゝかふり出たるは、あなめつらしといへと、時しならぬはつ雪はけしきなきおもひして、高浪の音のおそろしさに、さらに、かしらさしいたす人もなし。くれ行ころ空はれ渡りて、名におふ月の光海の面にかゝやきて、あへかなるゆふへ、庭のくまなるかきねの菊に風落て、ゆら〳〵と立るもよしあるこゝちせられて、

九月初雪

又たくひなか空たかくてる月に光をかはすにはのしらきく。

あるしの上人のいはく、

あれはてし庵の庭の菊なからさほのかはらと人やめつらん。

となん聞へ給ふ返し、

よそまても盛ときくの名に匂ふさほのかはらの秋は有とも。

やまぢの風

十四日。けふもあしたより波たかく、切通しといへる磯山いかれしとて、ゆきかひなし。人來りて、こはおそろしき空のけしの、濱くづれうせたり。此土あぐるとて又大波よせ侍らん、それまての日よからし、あすも、かゝるやまぢふかんとかたる。やまちとは、北より吹來る風をいへり。

温海に到る

娘を遊女に

やぶけ

十五日。この寺をたちて住吉阪をくたり、釜井阪のきり通しとて、いはほをわかちて人越たり。此あたりことなくくれは、はまの温海(あつみ)にいたる。山のあつみといふ處にありける、いて湯に行とて、みちもさりあへす人のかよひぬ。このあたりの里なるとまる人も、まち人も、なへてむすめ持たらんかきりは、あそひくゞつにやるをならはしにせり。こを、はまのおばとよふとぞ。暮坪(くれつぼ)の立石とて、大なる高き石海中にありけるに、なにくれ、もみちたる梢に松のましりたるなと、世中に沙もてものしける、もてあそひのうつわみたらんかことし。やぶけとやらんいひて、こゝを源義經のうまはのあとなと、磯のいはほを鹽たはらとよふ、たはらつみたるかことし。又こなたは綿なと重ねあけたらんにひとしと、行人ゆひさしたり。鈴田に來けり。過つるとし世中やはしかりつれと、此秋のなりはひ、いとよしなと人のかた

鳶谷阪
男女風俗
さえの神
鳩村
圓位法師の歌
小鳩の茶屋

りもて行を聞て、

八束たる鈴田のいなほうち靡きことしは民のゆたかなるらし。

瀧あり、名を例の不動のといへり。はまの五十川に至り、つき橋を渡りて鳶谷阪のうへより
あたりのそむに、いとよきところと人のいへと、雨雲たちかさなりて、ほゐなくこへたり。
このくにのならひとて、かしらには、ごもつかうといふものを着て、頭巾をそかうへにかう
ふり、又手布とて三尺にあまる布を、おとがひよりいたゞきにかけてむすひ、眼のみ出して
ありく。こは、男女夏冬のけぢめもなくせりける。山みちの岨なるところに、さえの神の森
とて、大なる木の五尺はかりなるを、おのはしめのかたちに作りて藤かつらにつなきたり。
ことなれる神のと、顔ふりそむけて、いやし侍らぬ人多し。鳩といふ村に出たり。此月のは
しめに、みな家やけたる黒きはしらのみ、かなたこなたに立たり。いにしへ圓位法師こゝに
一夜明し給ひて、なにかしにたまはりしとて、「山はたの岨のたつ木に居る鳩の友よふ聲の
すこきゆふくれ。」此色紙形里の長に給ひて、遠つおやより持つたへたるを、六十とせあま
りさきなるとし、かゝる火のためにやかれうせたりとかたる。此歌、紀の國ふる畑と聞へし
はいかゝ、又此鳩にてやありけん、おほつかなし。はた切通しといふ處あり。磯なる岩のあ
なことに、わら火さし入て早虫といふものをとりて、小鯛つる餌とせり。やに入て晝の飯く

笠とり山

三瀬の宿
義經の古笈

矢引の山路

へは、あるしの女、かゝるきたなけなる住家なれとも、「あつみ出て來て小鳩の茶やに、はなをひともとわすれてきたか、あとて咲やらひらくやら。」とうたふも、わかある家なりとわらふ。提口（ひきけくち）といふ岩つらを渡りてみちいそくに、風いたく起りて、みの笠吹もていかん、こはいかゝせんとたゝすめは、名さへ笠とり山にて侍るとて人の過るを聞つゝ、

あめの日はぬれて越なん風はやみ笠とり山をわくるたひ人

やをらくたりて、三瀬（さんぜ）のすくに宿かる。こゝなる本明院といふうはそくのやに、ふる笈のふたつありけるは、いにしへ義經やまふしのまねして、みちのおくにかくれ行給ふとて、こゝなる藥師ふちの御堂にしはらくとゝまり給ふとか。さるゆへこゝに殘し給ふとなん。ひとつの笈（長二尺六寸横一尺五寸）のおもてに、日月天人なと金色にゑりたり。これや、よしつねのおひ給ひたるとかたり、又日月にりんほうのかたを、おなしさまにかいたる笈（長二尺七寸横一尺八寸）を、むさしほうおふたるとそ。柄くちたる長刀あり。かゝるうつわ、いまより何の料にか持いかんとて、みほとけに奉り給ふとなんかたりつたへき。

十六日。つとめて中山といふ處をへて矢引といふ山阪の路のほりて、家ひとつあるにものとへと、さらにこたふる人もなく、柱につなきたる猫のみ、ねう／＼となきてけるわひしさに、まへなるあくらに遠方を見つゝいこへは、かりかねの聞へたるをあふきて例の戯れ歌

を、

　行鴈よしはしはとまれ人はゐしやひきの邑の名になおそれそ。

うしぐら

來る里のやの棟に、うしぐらといひて、かたそぎのことき ものをあけたるは、濱風にそとられぬ料なる。かゝるなみ風あれけることは、近き日、ぬす人をとらへて海にうち入たる、そのしかばねを浪のゆりいたしけるまでの空、かくあれにあれて、よき日いてこじといひ、又山おくより樵木いたすとて、あまた山川にうち入て水をとゝめおきて、さと、きりはなては、此よとみたる水にさそはれて、あまたの木を里のめくりまていさなひ來けり。そがため神に雨いのるとも、旅人のくち〳〵にさたしたり。

片貝の松

片貝のとひつき松といふあり、下つ枝は五葉、上の朶は二葉の木なり。木のもとによりて、

　めつらしな世に見んこともかた貝の實はたか植て五葉二葉に。

栃屋の常林寺にて

大谷、水澤を過て橳屋といふ里に至りて、過し日別たる良瑞といへるすけにまみへんとて常林寺に入て、こよひは此寺禪林にいねたり。戌の時はかり、ふしたる扉の音なひもなく月のかけさし入るまゝ、枕上のまとおし明れは、月の山もいと近きところにて月のおもしろかりければ、「月の山くもらぬ影はいつとなく麓のさとに住人そしる。」すしてあふき又ふるさとをおもへは、ときの間に空かきくれかせ吹起りて、神なりひかりて、おとろ〳〵しきけしき

にふしたり。

月山を望む

十七日。きのふの空にひとしけれは、いてたゝす。とらひとつはかり空きよらかに晴て、月のすさましくてれるに、月の山のいたゝきに雪のしろく見へたりけるを、

ふりつもる雪にてりそふ月の山かけ猶さゆる曉のそら。

十八日。ていけよしとて、いて立んとすれは時雨ふり來て、ゆふへ近う風ふき又雨頻ぬ。

中の節句

十九日。けふは中のせく也とて、やごとに祝してあそふ。三九日をいはふためし也。風なこみたるまゝ此寺をいてんとすれは、風いたくさはきぬ。ほたきやの翁のいはく、過つる日加茂といふ處の沖にて、みたり、つりしたりけるふねくつかへり、二人しに侍りき、そのあれならんか。手を折て、けふは未也けり。きのふより、つちに入てけるゆへにこそあらめ。しはしはかゝる空ならんといふに、又ふり出たれは雨つゝみして、あるしのせしは、月忌とて法の行ひに出行給へは、いとまいはて別れて大山の里に至る。

大山の里

こゝなるみやしろこそ椙尾の神と申奉るならめ。このあたりのはまにて箭根石（石弩）ひろふといへるは、いにしへよりしかり。又時雨ふるに、

いたつらに空はしくれて杉尾の杜の梢はいろもかはらす。

あられうちし、風さく吹ぬ。

鶴箇岡
海山の産
木食の上人
つな渡り

旅人の菅の小笠やみのゝ袖あられたはしる杉尾の濱。

鶴箇岡にいたる。いにしへ、さかみの國つるか岡邊の八幡乃社をうつしまつるゆへとも、義家のうし、ちゝのつるに、こかねのむかはきさせてはなち給ふか、此岡にむれあさるとて、さる名の聞へしともいふと里人のかたりぬ。里とみ榮へて、海山のもの持出てうる、日毎の市なり。あきあぢ（秋味也、鮭の鹽引をいふ。こは、いては、みちのおくにて、よき味に舟行しなといふより起れることはなり）かんとう（木の實の名也）かぶなし（梨子のかた蕪に似たり）笹飴（さゝの葉にのせたるあめをいふなり）あきなふ中に、やちもたせ（谷地藻菌とか、やちもたけならん）といふくさひらをうる。これなん、がつぼの根に生ふるといへり。かつほは眞菰草のたかきやうなるもの也、あさかの沼のはなかつみといへるくさにて、がつぼとも、がづごとも、がつきともいふところあり。此里中の人市といふ處を越て、七日町にやとつきたり。なにくれ、ものうりありくを聞つゝ、

岡の名のつるにたぐへて是も又ちとせを呼ふ市のうり聲。

あるしのもの語を聞は、この里の開口寺、又岩本といふ村のみてら、此ふたところに、越後の國野積の山寺にて、「墨繪にかきし松風の音」とよみ給ひてけるにひとしき、いきほさちもおましませりと聞へたり。こはみな、木の葉、草の實をくひものとしてをはりをとりて、なきからのみ世にとゝめたる也けり。しかはあれと、弘智大とこには、をよはさりき。又云、ちかき里のいはほのかたひらに、四寸のみちとていと細き路を行ほと、一町あまり過て里あ

り。こゝより、さらに通ふへきかたなきとか。その邊につな渡りとて、いとゝき谷河のかなたこなたに綱引かけ藤かつらをわかね通して、山賤ら、柴、つま木なと、くらまのふご落しにひとしく、まつこれをおろしやりて、そかあとに、かのわかねたる藤かつらにしりかけて、うたうたひ越けるは、なりたるわさとて、からきおもひも見へさりけるとそ。

羽黒山詣で

二十日。空ことなし。此日羽黒山にまうてんとて、やを出て、やかて梵字川のへたをつたふ。此みなかみは月の山の雪消の水、湯殿山のしたゝりといふ。赤河といへるを舟にて渡り、三橋といふところに來けり。三ところに、ちいさきはしを渡したれは、しかいへり。

　行駒のあし音ふたつ三はしの短きほともかつしられぬる。

松の聖

御神馬

とゝなへ捨て、荒川、神路箇阪をへて手向の町といふに入ぬ。中の阪、赤阪、念佛堂に至る。こゝなるふる墳の石に藤原氏と記して、元應二年とかいたりけるは、いかなる人のと、なみたこほれぬ。八日町になかれたるは滑(なめり)川とて、ゆへある流と人のいへり。いかめしきやに松の聖にあたるといふ高札をさしたり。けふより百日の日、いみしきいもゐに帯もはなたすまろねして、除夜の宵に火祭りとてかんわさありけるに、さいたちてけるうはそくなりけり。やのうちには酒さかなとゝのへて、あるししたり。御神馬と札たてたるは、いかなる馬のありてかとさしのそけは、大なる黒牛のつのふりたてゝ、うゝとうめく。こは馬をいみた

るにやあらんか。此かたを画にかきて家毎におしたるは、あし手、火にやかぬましなひ也とそ。ある人此邊に大僧正行尊の塚ありけるよしいへは、此あないにとへと、われとし老たれと、いつこともしらし。むかしゑやみはやりて、山も麓も人みな此やまひにおかされふしなやみたるを、行尊大德、桃の實をとりて水にうち入て加持し、人々にのませ給へは、みなあたゝかさたちまち去て、いえたりと聞傳へ侍る。桃清水とて今になかれたり。行尊つゐに、此山にてをはりをとり給へりとそ。其塚はいつこともしらねと、路のかたはらの木にかいつけぬ。

行尊の加持

　　世に匂ふ花の言の葉殘りてもありとやこゝにとへる人なき。

あない、何記し給ひしそ、こと國の人は、かく落書のみし給ふとわらふ。二王門に入ぬ。まゝ子阪といふところあり、むかし繼子捨たるところ。下居宮、閼加の井、祓川をはしより渡れは、岩のうへに倶利伽羅不動尊のたゝせ給ふあなたに、あまたのこするゑ紅葉たる中より落瀧つなかるゝは、錦にかゝる糸すちにひとし。此水に口そゝきて、

二王門を入りて

　　かきつもる心のちりをはらひ河早瀬にたくふ峯の松かせ。

杉のむら立る中に五重の浮圖あり。軍荼利明王、又妙見ほさちのおましますは、承平の頃平將門の建給ふたると聞へぬ。一の阪の左に石あり、燈明石といひて、夜毎に火をのつからと

二ッ石

二の阪

兒堂緣起

本堂参拜

遠く望むに

もるといひ、又水石とて山おくにありけるよりは、水したゝりなかるゝといひ、是を羽黑山の二ッ石と人ことにたふとみたり。むかしよりいひ傳ふ歌に、「相おもふこゝろをとはゝふた石の朽も絶んなかの契は。」二の阪をあぶらこぼしといふ。たけくらべの杉、伊弉諾山、若一王寺とよふは、伊弉諾、伊弉冊の二はしらの尊を、あかめ奉るところ也。いさなき石とて大なるいはほを、ふたつにやふりて生ひ出たる櫻あり、花いとよきよしをいふ。名を石わりさくらとよふ。西行戾といふところあり、いかゝしてかもとり來給ひしやらんと、あないの翁ほゝゑみたり。兒堂といふあり、こはみちのおく信夫郡藤崎庄、たれといふ人の子藤松丸とて、母にをくれて此羽黑山にのほりて、すけせんとて來りしを、このちこのかたち世になうきよらなりけれは、あまたの僧侶けそうし戀したひて、かなたこなたにつれ行、われか心になひけ、かれにしたかへとあらそひこしろひて、はては此子をむなしくなしぬ。其ためかゝる堂建てゝ、あとゝふらひしといひつたへき。又刀笈搜といふうたひ物には、まゝ母に捨られしと作たりと人のかたりぬ。やゝのほりえて御前にぬさとり奉る。玉依姬、伯禽州姬命(玉依姬御子也)稻倉魂神、倉稻魂命なりとも申奉る。又稻倉魂神うへならんとか、世に羽黑權現と唱へ奉る。月の山は月讀尊をあかめまつり奉なり。湯殿山にまつり奉るは大山祇命、又は大巳貴命、あるは彥火々出見尊とも聞へたり。木々生ひ重るなかより、遠方の海つらに

八乙女の浦、こなたに、こかねの峯見へたり。こは、みよしのゝかねのみたけをうつして、藏王ごんけんをあがめまつれり。この山の巖みな、こがねのいろしたるゆへ、山の名もしか金峯と聞へたり。戀の山といふも、こゝをさしていふといへは、

　こへ行かはたもとやくちん戀の山分そめしよりぬるゝ習に。

月の山に雪つもりたるを見て、

　ひるも猶俤けたて月よみの光をそれとみねのしら雪。

山鬼おらじ

あないの翁、念佛車とて、柱になもあみだぶとかいたる車ひたにうちめくらしけるを、いさ、みちいそかん、日もくれなんといへは、わかせ（わかき男わかせといひ、わかき女をめらしといへり）ならねば、いきくるし。よし暮たりとも山鬼はおらじ（狼を海鬼といひ、これにたくへたる山犬といふなるを、やま鬼と里人のいへり）いましはしやすらひ給へと、岩つらにしりうたけしたり。からすの、ねところへ行とてむら〳〵と過たるを、

　ねくらとふ麓の里のむらからすをのか羽黒の山に暮行。

松の聖行列

松の聖の二人、あまときんといふものを着て、しろき袴に金剛杖をつきて、うはそく、志羅あまたしたかひて、貝ふき、ねんすならして、天宥別當の蔓荼羅ゑりてかけ渡し給ひし、念佛橋といふ石橋をねり行たり。

文珠坊にて

夕くれちかく文珠坊にやとかる。あるしうはそく、むかし、あか家に、はせを翁一夜とまりけるとて殘りたる短册、近きころうせたりなとかたりぬ。

寶物品々

この山

のふるき實をとへは、むかし世中のさはかしかりける頃、むさしほう辨慶、よしつね、政所坊(まさころ)かやに、もゝかあまりかくろひとゝまり給ひて、むさし坊の手にて、ほくゐきやう、あみた經かい殘しける。其ころの笈一ッあり。はた、くさ〳〵のものあるかなかに、へんけいの糟鍋とて持つたへたるもあやしといへり。又いつの頃にかはしめけん、黑川邑のたみ、む月のはしめには、としことに、さるかう舞侍るはめでたしとかたりぬ。

廿一日。あさとく山岨のみちをくれは、山谷の紅葉いとよし。こを、しはし見つゝたゝすみて、

うすくこき峯の栬の紅に山ははくろの名に似さりけり。

瀨川、三か澤、添津、山崎、茢河、かゝるところを過來れは、阿古谷稻荷と華表に名のりたる前にぬかつく人あり。いかなる神にておまし奉るといへば、このところこそ、みちのおくに名たかき、あこやの松にて侍れ。いにしへはこゝもみちのおくにて、今は出羽とそなりぬ。その松もいまはくちて、かゝることと木の松をうへてけるといひて、山みちにさりぬ。ちいさき川をへたてゝ、さゝやかの祠のありける。いかなる神にてわたらせ給ふやらん、とはさるはくやし。鳥海山いとよく晴て、のこるかたなう見やられたるに、

あまつとふしらふの雪の俤はつねき(マヽ)へなく鳥の海山。

余目のぼう送り
最上川渡る
馬の尾を巻く
板敷山見ず
酒田の驛

古杉邑、まはたで村に入ぬ。此里のうしろの沼を古川といひて、いにしへ寂上川こゝになかれしとて人のおしへぬ。余目の里のなにかしか宿にとまる。くれうち過る頃より、かね、つゝみにはやしありくは、ぼうおくりなりけるといふ。ぼうとは、ゑやみなとをいへり。

廿二日。つとめて新堀といふところより、いなにはあらぬとすして寂上川のきしに至りて、こき出る舟をしはし〳〵といへと、さらに耳にも聞入ず過たりけるをねたくおもひて、

渡しもりよへとつれなくもかみ川いなとこたへてくたすいなふね。

やゝふねのよせたるにのりて、からくしてきしにあかりぬ。三尺あまりの弓腰におひたる、老尼のめくらとちの、おなしとちの綱にひかれありくは、梓巫女なりけるとそ。馬いくらも曳行か、尾かみみな卷つかねたるは、ところのならはしさなん。すぎやう者ふたり羽黑山にまうてのほるといふに、阿古谷の神に手向はやとて、歌ひとつ作りて此たよりにたくふ。

まもります神にとはなんふた葉よりあこやの松のありし昔を。

「みちのくのあこやのまつに木隱れて」と、すしつゝ別たり。此邊にてやあらんか、「みちのくに近き出羽のいたしきの山にとしふるわれ そ わひしき。」と聞へたる山は、いづことゝへは、其板敷山こそ清川の里の川むかひにて侍れ。こなたよりは見へ侍らぬと、里の子のいへり。酒田のうまやに入て、吹浦の關こへん料に、せき手とりて行。「袖の浦の波吹かすへ秋

疱瘡神祭り

みち芝

尾落伏邑

永泉寺緣起

風に雲の上まで涼しかるらん。」と聞へしは、宮の浦のこと也けれと、今はもはら、このさかたをさして袖の浦とのみいひならはせり。此磯ちかく行は、高波ひとつうち上たるに、みの笠いたくぬれたるをわひて、

旅衣なみにぬれたる袖の浦たちこそわふれほすひまもかな。

「忍かねしほひもしらぬ」とよみ給ひしは、洞院攝政さきの左をとゝの、新續古今戀の中に聞へ給ひしは、まことに、みちひなき北の海のそこまて、おもひこし給ふことのめてたしとゝなふ。路のかたはらにわらうたしきて、そか上に、おしなかのわらくつ、五色の紙のみてくら、かはらけのさらに糸つらぬきて長箸そへたるは、もがさの神祭るとてその家にものして、村さとのはしに捨たる也けり。阿良太女といふところにくれたり。

廿三日。雨にぬれて新田目を出るとて、おもひつゝきたり。

たひ衣たつより袖はかはかぬに何あらためて露のおくらん。

ほとなく十日町といふ村をくれは、みち芝とて蕭畜といふ草をあめにぬれてつみありくは、この草雷盆にすりくたきて米に交てにてくらへは、いみしきはらの藥也とてつかねとりぬ。尾落伏邑なる劔龍山永泉寺のふる寺見んとて、此みてらにあないして入て、書つたへたる書を見れは、出羽國庄內飽海郡大泉庄遊左鄉尾落伏村のかゝる寺は、人皇四十八代天武天皇御

うやむやの關

慈覺大師護摩の檀

玄翁禪師

宇白鳳の年、鳥海山とおなしころ、役正角の闢給ひしところなり。それよりもゝいそとせをへて嵯峨天皇の御代、鳥海山に手長、足長といふ毒蛇ありて、ゆきゝの人をとりくらひてけり。これを諸天萬神めくしとおほし給ひて、梢にあやしの鳥をすませて、毒蛇居れは有哉と鳴き、あらねは無哉と鳴しとなん。「武士の出さ入さにしをりせんとや〳〵鳥のうやむやの關。」「こしやせんこさてやあらんみちのくのとや〳〵とりのむや〳〵の關。」といふうたあり。此せきの名を無哉〳〵、布耶〳〵、有耶無耶、伊耶無耶、母耶〳〵と聞へたり。せきのすへたりしふるあとは、三崎山の大師堂と女鹿(めが)とのあはひをいふ。慈覺大師、かの毒蛇降伏のため行ひありしといふ其あとは、今いふ護摩の檀これなり。かゝるをこなひのたうとさに毒蛇みな二ッにやふれて、頭は鳥海山の頂にとひ行、尾のつるきはこゝに落たりけるとて、さる時より劔龍山といひき。ところを尾おちふし邑とよふ。又蛇體石といふ岩あり、その謂にやありけん。はた文和のころほひ本源道也といふ律師住給ひて、六百九十五年になりぬ。かくて、台密の兩宗をこなはれしこと年久し。又能登の國惣持寺なる峨山禪師の嫡嗣玄翁禪師、世中の名ある智識もとめ給ふとて國〳〵をへめくり、此寺に至りて此律師にまみへ給へは、りし、玄翁のとこにめてゝ此せしを弟子とさためて、りし、寺をかくて玄翁禪師にゆつり給ふ。あくるとしの夏のころほひ、律師身まかりてより曹洞宗になかれたり。玄翁

奈須野の殺生石

十景・七不思議

禪師水の邊にのぞみて、あかすかたをうつし、きたみなし給ふたる水鏡の御影とて、いと黑くすゝつけるを、とばりおしあけて拜みたり。そのころ鳥羽の帝をおかし奉るきつね、下野國奈須野の原の石となりて、空をとふ禽、つちを走る獸、其石の毒にあたりてたふれ、はねをふためかして死うせ、ゆきゝの人もうちなやみけれは、人皇百一代におましますす後小松院の御時明德二年庚午春、かまくらより惣持寺に、なすのゝ石の亡魂とふらひてたうへと御つかひありしかは、まつ太徹禪師をつかはしたまふに、かの石の邊に、なにくれのしら骨雪のつもるがごとにみち〳〵て、そか前に近つき給へは、頑なる石の面に汗したりけるとぞ。をりしも玄翁禪師、病ありて奈須の出湯に行てゆあみし給ふとて、この石にむかひて云、汝元來石頭、謂喚殺生石、靈從何來、受業報如是哉、去去、自今以後稱彌佛、生眞如全體といひて柱杖の石つきもて三たひ撫て、會取せよ〳〵とゝなへをはりたまへは、此石ふるひうごきて、たちまち三にやふれてちりぬ。かゝること、うたひものにもしか聞へたり。世中に石のたくみの石わるうつわを、此禪師の、みなをよふこと、かゝるゆへにやありけん。後小松院、宣命給はりて大寂法王能照禪師と申奉る。此能照禪師、應永三年丙子正月七日遷化し給ふ、おほん年七十二。その遺偈云、四大假合七十二年、末后端的蹈飜鐵船と聞へき。この寺の山内十景といふあるは、斷巖古木、池橋新月、南瀧遊魚、西溪鳴鳥、東嶺松風、北林竹雨、洞岸冷水、谷

口石鼓、寶殿紫雲、丹山暮煙。またこの山の七不思儀といふは、一には開山禪師の木像、帳のうちに在して山のうちめくり給ふ。二には鎮守明神にしろき狐ありて、よしあしのさとしをせり。三には、此寺に身にけかれある女通夜することあれは、わさはひをうく。四には、たつのみやこより火ともして山をてらす、こゝろまめやかなる人これを見る。五には、天狗この山を守りて其しるしをあらはしぬ。六には池の蛙聲なし。こは開山禪師みすきやうありけるころ、池の蛙もろこゑに鳴てけるを、あなかまとのたまひしより、あまたありても鳴ことあたはしとなん。七には盜人寺に入は、えいてす。しかるゆへにや扉にかけかねをつくらすと、ひと巻のふみにかいのせたり。

簾の掛物

此寺のふるきたからとて、簾のかけものあり。たけ四尺、幅二尺、あしに鴈のかた、そかなかはには牡丹に胡蝶のつくり繪あらはれたるは、世にめてたきもの也。こは玉藻の前の調度にして、此寺にむかしより殘りぬ。玄翁禪師に給はりしものにやあらん。

湯あみの式

廿四日。雨ふれはあるしの上人、けふはなにくれかたらん、とゝまりてと、せちに聞へ給へは出たゝす。湯あみの日なれは、大鼓、なる神の頻かこさくにうちならして、開山禪師の御杖をまつさきによこたへ、手ぬくひ、香爐なと、あまたのすけとり〳〵にもちて、「おんすり〳〵といふことを、こゑとよむまてとなへて、ゆあみとのにいりて御杖のもとをそゝきて、

吹浦を過ぐ

秋田縣地に入る

慈覺大師堂

たがく

持たる手ぬくひして、おしぬくひてかへりぬ。玄翁せしのみかたち、いけるかことに、とはりあけて人々をかみたり。あるしの上人すみてける、眠藏といひてける埋火のもとに、夜ひとよかたりて明たり。

廿五日。劔龍山をくたりて、しはしのほとに吹浦といふ磯やかたにつきて、人のゆきかひしけかりけるを見やりて、

あさまたき汐風さむく吹浦に波かけ衣きぬ人そなき。

こゝの關屋に入て、さか田よりもていたりしせき手あらためて旅人を通しぬ。鳥崎(とやざき)のはま、瀧の浦をあゆみて女鹿(めか)の關になりて、せきての札わたしぬ。椿のみ生ひしけりたる岩つらのみちにあしさし入て、やをらくたりて三碕阪に至る。慈覺大師の御堂は、もがさ、はしか、かろらかにまもらせ給ふとて、子のため、むまこのためとて人まうてたりけるか、此みまへにうつくまりぬ。この御堂のしたには、手ながにとられたる人のかはね、あまたありしかと、いまは岩落かさなりて見へさりけりといふ。手なかは水のじちもありけるにや、海に入ては行かふ舟とゝめてける。世におそろしのものなりけりと、かたり傳へ侍る。坂の半をくたれは慈覺大士の御足の跡とて、石のおもてに蓮のひらけるかたにひとしと、行人ゆひさして通りぬ。柴人二人山より出來て、是たがへて何にてもあれ手にとるこ とを、たかくとはいへりとて、あらこに入たる

小佐川にて

手かけ

庄内のおこしやすめ村

小走り

飛嶋を語る

を見れは、やき蒲萄の實に似たるもの也。こは、よき齒の藥なりとて市路にうるめる。味は蒲萄にひとし。人のふみあつらへたるまゝ小佐川といふ磯家に至りて、其ふみの名たつねて入れは、しら豆、おしきに盛てさし出しぬ。これや手かけとて、誰にても入くなる人に、かたはらの煙管、たはこ入、なにゝても手にさはるものをさしいたせは、來けるもの、そか手をいたゝきておきぬ。いさ立出んといへは、われも汐越にいかんとさとめけれは、やかてくれたり。あるしの云、あか生れたる里は、過來給ひつる庄内なる、おこしやすめといふところなりしか、こゝに養れ來しといふ。つな舟くるところの河あるさとか。しかり。いかなるみこしをか、やすめ奉りしところならんかといへは、さならし、往來のへたにて、いねたるやの扉を叩て、ふねやれ、さしかへれは又ふねよはふこゑの頻りけるまゝ、人ことに、おこしやすめずといふつるに、やかて村の名となりけるとかたるに、何ならんうちならしありくは小走といひて、そかくびに、ちいさき板をかけて此村をめくる。夜まはりといふものなり。はや亥の時ちかしといへは枕とる。

廿六日。波風はけしく雨ふれは、おなし家にくれたり。あるしの翁、見たまひし沖の飛嶋の尾がみかしまには、こがねの龍、巖のつらにわたかまれるは、まさしく其鱗まて作りたらんかごとし。夏の海ならはいさなひてんに、をりあしく侍る。船みち九里あまりいとちかし。此春

風の様々

くだり穴

鬮村は鬮址か

汐越に到る

行たりしかは大なる鯨八ッ、せをならへてうかひ出たるに、こは、ふねかへさんとかちとゝめて、おほんゑひす、さまたけなせそとたのみしかは、海そこにかくろひたり。又とゝ、あざらしなといふ、うなのけものもとびあかりくて、あまた此なみちにすみけるといふに、風ふきおこりたり。こや、だし（東風をいふなり）なり、ひよりよからじ。たし、山ぢ（北風なり）ぢみなみ（南風をいふ）かゝる風をなべて浦西とて、四方の空に雲集りてあれとなりて、舟をあやまつことなり。かくありては二日三日もよき日あらし。しかはあれと空なをりたらは、あすはあゆの風ふかん、いて行給ひてといへり。夜更て、こは、なる神すといへは、あるしの翁枕かみにふして、くだり穴とて岩にうつほのありけるに、あら波のうちいるゝ其音にてこそ侍らめと、はなうちならしてけり。

廿七日。風西より吹は、空よからんとてたつ。坂ひとつ越てくれは、川袋といふはまをへて鬮村に至りぬ。此鬮むらこそ、いにしへの、うやむやのせきのあとならめ。三崎山の地獄谷の邊とは、人のいひあやまちたらんか。小河ふたつ渡りて右の方に岡あり。小松むらたてる、しらすなこのこたかきところを鳥耶杜（みやもり）といふは、まことに、とやくく鳥のうやむやの鬮のむかしならんか。頓て、しほこしの浦につく。まつ蚶潟のはつかはかり見へたるに、「世中はかくてもへにけり象かたの海士のとまやをわか宿にして。」とすして、やのあはひ、橋の

うへなとより、嶋いくつも見へたるはおかしとおもふに、行人、「八十八潟九十九杜」とうたふ。由利郡干滿珠寺の西なる袖かけ松の邊にゆけは、風の音さはかしく、あられふりて、又時雨て來り、めにあたる島〳〵みな曇りて、艳の色のみうすくてれり。たゝ風のをやみなくふきて、こゝらのしまの梢の紅葉雨よりもふり増り、つりする海士は棹よこたへて、舟さくさしてにけ行なと、めしはしもはなたれす。

あま衣にしきにかへて蚶潟の嶋山あらし誘ふもみち葉。

又雨しきりてけれは、ある磯やかたの軒によるとて、

象潟にて

たひ衣ぬれてやこゝに象潟のあまの苫やに笠宿りせん。

たゝきさかたの秋の夕くれと空うちなかめて、此さとにやとりたり。

廿八日。きのふのやうに雨風すれは、はか〳〵しからし。はる〳〵こゝをさし來て、ほゐなうかへらんもうけれは、晴ぬかきりは、「海士のとまやにあまた旅ねぬと、顯仲朝臣ののたまひしも、けにもとおほへて、けふはあたり見ありく。此磯のなのりそを神馬藻といふは、いにしへ神功皇后、このなきさにみふねよせ給ひて、御馬やしなはんに秣なけれは、磯菜、にぎめなと、はた、なのりそをもはら秣にそし給ふより、此草を神馬草と、しか書ける。又此みてらに、このふることをたくへて磯の翁のいひけるは、いかゝにやあらん。かなたこなたさ

神馬藻

別れ島

可保の湊は何處

遊女

磯の島々

鳥海山

島を見やられたるに、はま風あららかに吹て、みの、かさ、吹もていかんとせし。遠かたに見へたる尾上のしまこそ、別しまにやあらめ。こゝをせに聞へし、「わかるれどわかるともおもはす出羽なる別のしまの絶しとおもへは。」可保のみなとは、いづことしる人なし。過來し、かもの濱にやあらんか、其名の似りけり。懷中記に、「君を見ねはかほのみなとに打はへて戀しきなみのたゝぬ日そなき。」と聞へたる歌あるをおもひ出て、倘ゆかしかりき。

廿九日。雨よへよりをやみなくふりて、浪の音さはかし。さうしのあなたに女盞とりて、ゑひなきになきて、あらぬ戯いふは、かみ長とて、この磯のくゞつ也。又人にひめしのひて、夜更て戶ほそ叩くるあり、是をこもかうむりといひ、はた、なべといふひと夜つまもありと、相やどりの旅人の集りて、むつかたりにせり。古城のあとをゆんてに、中橋といふ川へたより小舟さゝせて、妙見嶋（天註——妙見祠は潟のへたに在。）、いなりしまに人の行とて小橋わたるを、入道島のかけよりほのかに見やりつゝ、岸につりする男女やかて棹を捨て、しちみ、黒貝、うは貝なとひろひありく。ふねは、まとしま、けんかい島をめくるに、雨いとよく晴たり。能因嶋よりむかふ方は、鳥海山のすかたは、ふしを、やよひの末卯月のはしめつかたみたらんやうに、かのこまたらのしら雪に、雲ひとすちなかれたることにかゝりぬ。此山は大物忌の神のしつまり給ふ、麓は蕨の岡より、のほりまうつるみねなり。此かたのきしへによこほる山を大ひらと

象潟ふとん
毛笠
尙辿る島々
磯邊の神々

いふ、此山の邊をむかしのふるみちといへり。藻かり舟の集ひありくは、なかれ藻をかりてつらねあみて、馬のせにかけて寒さをしのかせ、まち人は夜のものゝふすまとす。名を、きさかた蒲團といへり。鍋粥島、兵庫しまこき行に、あしの穂に鷄の尾羽ませてあみたる笠毛かさときてもはらせりをきて、みのゝ袖をかゝけ、ちいさき舟をとはせて、「おそさ〳〵とふたこゑ三聲」とうたふは、ふな音頭といふ歌也けり。やかて此あま人舟よせ、とかま、こしよりとりて玉藻かりとるは、からすしま、椎島、まがくし、今津しまといふ。松のむらたてるに鷺の居たるは、雪のふるかとまとふに、此舟の近つくにおとろかされて、みなたちぬ。しゝわたり、つゞきしまとやらんは、糸引渡したらんがことし。大嶋、めをとしま、松のふたもと生るゆへにや。いくはくの島の中におやしまといはんは、苗代島、ひらしま、ならしま、へんてんしま、蛭子島、こゝらのしまかけに鵜の嘴をそろへていをゝくひ、はねをひらけて、岩のうへにゐならひたりけるを見つゝこくとて、

おきつ島鵜のゐる石にふねよせてなみかけ衣象潟の浦。

鷹嶋、天神嶋、大森など見やり、大平の端に梢かれたるは田の神の杜なり、守夜神をまつるど聞へたる。なへて潟のへたは田面畑にて、秋は五くさのみのりたるをかりつかね、小舟いくはくもこき出て、島のなかめいやますと人のいへり。鴨うかひたらんかことに、ちいさき

願かけ櫻

親鸞腰掛石

浪荒き崎々

しまいと多きを、さしめくらし〳〵來れは、あさりの小舟ひとつこきよるに、たちさはくおしかもの羽音は、うしほの涌くるかさまさひぬ。大潮越、こしかけの八幡の社、こなたに見へたる冬木立の中にしろき幡のひるかへりたるは、しら山の神をまつり奉る御社。蚶滿寺（蚶といふ貝多きゆへきさかたといひ、しかいふより、きさみつる寺といふへきを、神功皇后のふることをひき、しほひるに、しほみつにのことにたくへて干滿寺の聞へありけるならん歟）の西に舟つきて、しはしおりぬ。西行上人の「波に埋れて」とのたまひし櫻は、水の上に枝さし出したり（いにしへのさくら枯て、こと木うへけるとなん）。此朶ごとに紙ひきむすひたるは、なにの願ひにやあらん。はまひさしのやうなるところに石あり。これや親鸞聖人こしし給ひたる石と、めくりおしかこひ、いしふみにしるしたり（汐越淨專寺、肥前國西方寺建之とあり。）　合歡の木の冬かれたるかたはらに、「象かたの雨やせいしかと記したるは、世に多き、はせをの翁のつか石なり。みしかき黑ごろも着たるほうし、かのこしかけ石にいやして、「松しまやをしましほかま見つゝ來てこゝにあはれをきさかたの浦。」と、聖人のふる歌をひたにとなへて、なもあみたと、ねんすならして去ぬ。ちかき世の遊行上人の歌とて、「いつかとはおもひをこめて象潟のあまのとまやに秋風そふく。」と、人の語りしをおもひ出たり。いさ日もくれなんとて、かれあし茂りたる中を舟引出して、磯ひと山なと見やりつゝ、もとの岸にやをらあかりて、三熊野の神あかめたるいはねにのほり遠近見つゝ、あまが崎、さいの神、とがさき、不動さき、此あたりはあら浪うちよりて、潟見しめにはお

人々風俗

そろしくおほへたり。「おしまれぬ命もいまはおしきかなまたきさかたを見んと思へは。」此歌、時頼きみ此なかめにうかれて、十首の歌よみ給ふ其ひとつ也けり、外はもらしつ。行かふ人の、アツシといふ蝦夷の嶋人の木の膜におりて、ぬひものしたるみしかき衣をきて、ちいさきゑそかたな（まきりといふ小刀なり、蝦夷人是をエヒラといふ）こしにかけ、火うち袋そへたり。つり海士は、たぬの（手布なり）につらつゝみて毛笠をかうむりて、男女のけちめも見へで、あちこちとのそみ、さしめくらしたり。かなたこなたと見ありきて筆にまかせて、

きさかたのあはれしりとや夕まくれこきつれかへる海士のつりふね。

としふとも思ひしまゝに蚶潟のあはれをしむる夕くれの空。

旅衣わけこしこゝに象潟のうらめつらしきゆふ暮のそら。

磯は昔の潟

こゝらの島は夕霧にかくろひて、いたゝきのみいさゝかあらはれたるに、舟人の行か棹の音のみ聞へてまとふ。かなたの海つらはおらかに、むら立る巖に浪うちいれ、くだりよる音のすさましう聞へたり。其いにしへ、かゝるところみな潟なから、浪にまさこうちはこひ潟あせて、かくがとなりぬ。其島のおもかけは、岡ひきゝ山のことく殘りたりといふ。まことにしかり、此浦のなかめは、たゝこゝろしゝまになみたのみこほれて、いとゝふるさとをおもふ。

飛村　あまはぎ河　道しるべ　本荘の火事

なみ遠くうかれてこゝにきさかたやかつ袖ぬるゝ夕くれの空。

とはかりありて、やにさし入たり。

三十日。しほこしをたつ。大汐越の村を出て、飛といふところに至る。いにしへ、みちのおくのしほかまひとつとび來けるとて、今神とあかめて、村をもとびと附たり。そか沖のとびしま、波路はる／＼と見やられてけり。金浦（このうら）といふ磯やをこへて芹田のつなふねわたり、あまはぎといふ河にかり橋かけたり。此河、水いさゝかありて沙なかるゝ川なから、是をわたらんとてあしさし入れは、ぬま田なとのことく、はきふかく入て、旅人こゝに、いのちうしなふことあまた也。もしわたらんとならは、ところの人のこゝろまめやかなるを、あないにしてこゆへし。又、かく橋かけわたすこともありと、人しんしちにをしへたり。しほやくところありけるに、

もしほやく海士のとまやの夕けふりたつをしるへに宿やからなん。

いくはくの路くれて、かたはらのたかき柱を星のひかりにたとらんしるべとして、こをちからにもとめ／＼くれば、柱（雪のころ、みちまとはぬ料に、みちのかたはらにいとたかき柱を立、あるは、くゐせなさせり）たへて見へさるは、いかゝあらんとおもふに、つゝみ、かひ、かねをならして人の聲とよみたり。こは、いかゝと見るに、火のたかうもへあかりたれは、行すち、いとあきに見へたり。火のわさはひにこそありけれ。

や、ひとつあるにとへは、本莊といふ里といらへぬ。いま家ひとつやけたるさはきに行かひしけく、みちもたとらて、いきゝあゆみて里のはしに宿もとめたり。あるしの女ともし火さり出て、あか袖のぬれたるを見て、埋火のもとにたもとをほしていねたまへなと、ねもころ聞へたるに、

たひ衣浦つたひきて寄る波のよるこそしらね袖はぬるとも。

梅田

かんな月の朔の日。すなご坂といふをこへて梅田に至る。此あたりのやま〱、みな、もみちたるが、さんごの梢立ることに、こと木は露見へさりけれは行かてに見つゝ、山は、にぬるかと行人のめつるに、

二月に咲花よりも紅の梅田のさとのにほふ栬葉。

前郷に泊る

みやうち、玉の池、相川（つなふれの渡しあり）たてじ、くろさわ、妙法、瀧澤川といふへたに來けり。此水上は鳥海山のみねより落て、水とけれは、舟のくり〱としてつきぬ。このゆふへ、前郷（まへこう）といふ村にいねたり。

二日。あさとくいて來れは、きのふの雨風なこりなふ吹晴て空いとよし。をみのうち、いかすをへて、小菅（こすげ）野といふところの見へたるに行とて、

山陰に一すち見ゆるかよひちや小菅のさとの冬かれの頃。

矢島の郷

はた〳〵

川袋の奈曾白橋

かゝり澤、なかの岡、山田、上條、きのふわたりし河をふたゝび渡りぬ。あなたのへた、こなたの岸に葛をつなきて、市にや行けんあまたの人を、ひまなふわたいたるを、

行かひはまさ木のかつらくりかへし引手あまたにわたす舟人。

よし澤にあかりて玉坂、前杉なといふところをくたりて、矢島の郷に泊る。

三日。霜すさまし。水みな氷ゐたれと空のあたゝかさ、いはゆる春ならん。けふはうらふれにやあらん、こゝちそこなひて、よへの家に休らふ。此里より汐越にゆくは、山をくたれはいとちかしといへと、雪の降けるにおちて、本莊（本莊にいたれは四十八町を一里として十二里のみちなゆきてけりとか。やまちを行は六里の道にて汐こしにいたるといふ）におもむきてゆく。魚うる海士のかへるといふは、はた〳〵といへる、いをあきなふ也。こと國に見ぬいをなり。この鰰（はた〳〵）といふ魚は、冬の空かき曇り海のうへあれにあれて、なる神なとすれは、よろこひて、むれりけるとそ。しかるゆへにや、世に、はたた神といふ。さるゆへならん、此あたりは冬に入て、なる神たひ〳〵せり。南の國とはことなる空也。文字のすかたも魚と神とをならひたり。

四日。鰰のいを、なにくれのいをうる市たちぬ。

五日。二箇部に（しほこしの邊のはまを、にかぶといふ）生れしといふあき人の云、過て來給ひし川袋といふところの邊に、しらいとの瀧なと、おかしきか、みつあり。こは、鳥海のみねより落瀧つなかるゝな

り。それにかけ渡したる白木橋といふは、たつねて侍る奈曾白橋これなりといふに、「いではなるなそのしらはしなれてしも人をあやなく戀わたるかな。」といふ名ところ也。あまたの人にとひつゝ、しらて過來しはくやしかりき。

たつねこし其かひなそのしら橋をしらてあやなく戀わたりぬる。

寂蓮の歌と象潟

又ある人、寂蓮法師「あまをふねやそしまつたふ浪のうへにこきのくあとは松のひとむら。」とのたまひしは、象潟にてやあらん。八十八潟九十九森といふ一ふしの歌にてもしられ侍るといふは、いかゝあらん、しらし。

伏見村　女の夜業

六日。里過き山越れは山河あり。よへの雨にやまさりけん、水ふかくして舟わたさねば、伏見村に宿かる。乙女ら、ほたさしくへて、むまた(科ともいふ木也)といふ木の皮を糸によりて袋にせりけるとて、是をつむじといふ物に卷て、手しろ(手代といふなり)もてすりまはし、又藤かつらを糸によるとて、よなへにせり。此手しろの音のみ枕にひゝきけるとおもふに、とりの鳴てけれは、

しつのめか手にとる糸のなかきよをくりかへしなくくたかけのこゑ。

なにくれとものおもへは、いねもやられす。

又いつかこゝにみつかん草枕一夜ふしみの夢の餘波を。

七日。けふも雯ふれは、ふねいたさしなどいひあへるに、雪のいたくふりて、往來たゆはか

り、はつらひとなりてけれは、

けふも又おなしやとりに呉竹の伏見の郷にふたよ明なん。

八日。きのふより雪をやみなくつもりて、わらやの軒にひとしくなりて、竹の林なと、岡のことくふしかくれたりけるに、

みとりなるいろこそ見へねおしなへて雪にふしみの里のたかむら。

九日。やの上より雪のくつれ落るか、つちのふるひうこくかことし。日のほのかにてれは、梢の雪すこしちりて、むら雀なと、かなたこなたに、すみかもとむ。

十日。みちつきたりといふまゝ、ふねにのりて川ひとつ越て、雪のなか路をかいわけ行は梭はしとて、木を間遠にあみたるに雪のいたくかゝりて、日のてれるに半けち行たるを、見るたにおそろしき谷川のとよみなかるゝを、人にたすけられて、からうしてわたりぬるに、はしもゆら／＼といよゝ身もふるひて、やをら、はしわたり得しとおもふに、又、やくらなさくたるにひとしうはしこおりて、いきつぎあへす、あせおしぬくふ。やけ山といふところを越るとて、雪のたかねおりのほりて行に、あらぬかたに道ふみ入たるは、柴人の、かりそめにかよひしあとならんか、はた旅人のまよひしすちにや。あとあまた見へたるを、かれかこれかと、越のなかつ國より藥あきなふ男二人さきたちて行をあないに、そかしりよりめくると

をさ橋

焼山を越す

越中の藥賣

御國と答ふ
刑罰の柱
たむろ澤村
西馬音内庄

て、

まよひこしふみかふあとをしるへにてわけわつらひぬ雪の山路。

かんぢきといふものをさしはきて、たか雪の氷たる上を、杣木曳おとす山賤にとへは、この山くたり侍れは、おくに〻て侍る（秋田の領なといふ詞也）と、たうとみてこたふ。そりに、つま木つみてまれに行かふのみ、さらにこと人なし。又山くたればみちいつこならん、あなたこなたにふみつきたるは、あら熊、ましらなとのけもの〻、わけたるあとなりけるとか。はるけき谷そこに人のすみかありけるか、雪のしたになりて、けふりのみそ、ほそくたちける。からくしておりはて〻けれは、路のかたはらの太雪にかくれす、いとたかやかなる柱に、なかはより貫木さし通して、田、はたけのものぬすみとりたらんものは、此はしらにく〻りつくへしとかいつけたり。こは里〳〵の口にみなしたり。ひねもす雪路にこうじて、たむろ澤といふ、家の三ある村にとまりもとむ。瀧の糸なと見たらんかことく垂氷のか〻りたるに、夕月の影さやかにうつろふをあふきて、なかめたり。

見るかけのさむけくもあるか夜と〻もにたるひに宿る月はすさまし。

十一日。けふもひねもす雪の山路を分てたとる〳〵、雄勝郡西馬音内の庄、にしものないの里につきぬ。

まちの日
どす
がア
はたる
篊たいまつ
眞澄蓑著て

十二日。雪いやふりたれは、えゆかで暮たり。

十三日。けふはこゝのまちなり（市たつことを町とはいふ也。）鮭のいを、鮭のはらゝ子、なにくれあきなふ棚の上なる、鮭の頭ひとつをぬすみとりて、蓑の袖に引かくしたるを、あるしの女見つけて、どす（人をのりたる詞。又しら人、こくみのやまうあるを、どすとはいへり）ぬす人、ものいたせよ。いな、しらじ。いふな、たはこふくとて、やに入たるひまに手さしいたし、とくとりたるを、すき見（かくろひて、もののひまよりのぞくをいふ、透見なり）しるに、がア（下擢女なとのつれの詞なり）ぬすみたり。此代の錢いたせ。はたらずともやるへし。はたるとは、せむる也。かゝるふるきこと葉の殘りたるを、此あらかひに今聞たるもおかし。日くれんとするより風吹おちて、雨は、ゐにゐてふりぬるに、そぎた、くちて、やねあばれたれは、いたくもりて、こなたかなたとをるところもなう、ふすまうつして蓑とりおほひ、篊のついまつ（松のやにを、すゝ竹の葉に卷て、ともし火とせり。是をまつやにといひ、又さゝたいまつといへり）ともして埋火近うよれは、風あららかにおこりて、やもゆるきもて行は、あまたの家より起出て、此風しちまにせんとよはふ聲〳〵せり。あがみのきたるを見て、あるしの老たる女あきれて、足の具も笠も、きたまへとわらふ。夜あけなんといふころ、しはしと枕とりぬ。

十四日。風おさまりて雪あられふる。われひとりおき居て、手ならひにたゝう紙にものかきつゝ、更たる家つまに月のさし入たるを、

むら時雨ふり來ぬほとは板ひさしもりてやこゝに月かけそさす。

此三日四日この宿にありてけるに雪いやふり、ふゝきに、えいでたゝす。けふのまちにかよはん料にとて、雪俵、又たはらぐつといふものを人毎に作りて、そかなかに足さし入て、たはらの袴きたるかことに太雪ふみならしありき、ひやこ寒きをいふさはら虚言せしといふ詞也、是をさはらとも、又はなたまけるともいふ也にはあらしと、いひ捨てやに入て、やかて春は、めはらん柳の枝をさしくへて、落ちりたるふみのやぶれにて、あを鼻おしぬくふ。せなあぶり、はらあぶりといふことをして帶ときあたる。母さし入て、此雪よ、あなさむ。わらしよ、てうせすと火くへてよ。柴こ何子、かこと、國のならはしにて、子もしな付ていふことつれなりもてこと、火のへたのみさらで明たり。わらしとは童をいへり、めらしとは、わかき女をいふなり。

十九日。いまた明ぬより、おぢ、起出よといふ弟をおぢといひ、妹ををばといふならはしなりけり。また、とはくらしといへは、けしね米をいふ、かしよれならん鼠のものせしそ。あねは、いつこにふしてけるそ。あねとは、あるしのめをいへり。何太郎がかゝ、何子かかゝとゝと、さらにさして名を呼ふことなし。夜あけはてゝ雪みちふみしたき、杉の宮といふところに至る。三輪の神をうつし奉るといふ。まことや、ふるきみやしろとおほへて、としふる杉むら立り。里の翁の來て、此御神はいにしへ、やまとの國みわの神垣より、とひてこゝにうつり給ふなと、われしれるかほにかたる。みち

雪たはら

せなあぶり はらあぶり

柴こ、火こ

おぢ、をば、あれ

杉宮三輪大明神

柳田村草薙氏

雪垣をする

雪深ければ

風雪强くて

のおく栗原郡大日嶽のこと記したるふみに、戈宮四座傳云八千戈神、經津主神、武甕槌神三神也一社在於羽州駒形莊杉宮村古云三輪碕邑也所祭神一坐三輪大明神同體也、謂之杉宮大神宮、殿猶存有祭日別當云々。」といふことあれは、此みやしろのひとつにやあらん。御物川おもの川といふを渡りて柳田村といふ、さゝやのやのみ多くならひたるに入て、草薙くさなぎいにしへ源よしいゑ公いて羽の國に入來給ふのとき、弓もて、のなもせの草のつゆなきはらひしとて、くさなきと呼給ひしとなんにかしといふ、なさけある翁に宿こへは、雪消なんまてこゝにあれなと、ねもころにいひてけるをたのみて、けふは暮たり。かくてこゝにつれ〳〵と明しくらしてけるに、冬こもりせんために、あしのすだれ、いなごものむしろもて雪垣といふものすとて、やのめくりをおしかこふに、ほとなうゆきのいたくふりて、このもかのものわいためもなく、たゞ、かく日數雪とゝもにふりつもりて軒もかくれ、ひきゝやねなとは棟もしらす雪のいやたかうかゝりたるを、里の子かいしきといふものを手毎に持て、やのうへの雪をかいおろしたり。朝夕ふみなれたる三の徑もあとなけれは、かのたはらはきて、ふみならし〳〵通ふ。中垣のあなた近となりへいかんにも、雪袴ちくさ色のあさばかまなりしなのぢにて行袴といへりといふもの着て、蓑帽子みの頭巾なり、又馬のつらといふかうむりもありをかづきて行かよひたり。あな、つらかましないかくばかりつよきといふこと葉なりふき雪吹をいふ也なりけりと、聲をふるはして行に、なにたまげるおとろくことをたまけるといふ、消魂と書けるにやあらん歟よ、いつも冬はかゝるものにこそあらめといふを、しりなる男、こや、くたましない又くだまともいひてさまたげあること也やつかな、はやいきねと、みの

硯水凍る

毎日の挨拶

煙草ふき時

かんぢきの由來

打たゝいて過るを、ゆるさしと戯れていきたり。たかきやね、木のうれなとより、雪の落ちる音すさまし。朝に硯のふたあけてけるを、やの翁か見て、此しが子（しがとは氷たいふなり）よ、水のしみて、ふて子もた、（筆といふこと葉也）とられ侍らしさ、埋火の邊に近くさし入て、ものかくかしらつき、いつらを雪とやたどらん。いつれの日も、人、けふしはしめて入來れは、たゝ、めでたしといひて入ぬるは例のこと也。わらはおふたる老女あさきぬをかつきて、雪垣のうちにかしらさしいりて、けさははア、かいな風にてはア、わろし。いゑのわらしが、つれ出よ〳〵と、はたりしまゝに來しが、はや煙草ふき時也（巳のときはかり、けふりらふ、たはこふきときといふ）吹て休とていぬ。たま〳〵、近き里の、なにかしかやに行とてこゝを出るに、野も田つらも、ひとつの眞白に波のより來るやうにゆき吹わたるは、たゝ、海のうへなと行かとおぼふ。田はたけ、岨、河つらなとを眞すぐにいかんには、かんぢき（又かち木ともいふ）とて杉のさえたおしわかねて、くつのことくさしはきたり。其いにしへ、よしいゑのうし、あべのやからをせめたまはんとて軍いたし給ふに、俄に大雪のふり來て、路かいけちてちからなければ、兵にあふせて、あたりの杉の枝折らせ、これをおしわかね繩もてつゝりて、さしはきたるに行ことやすし。かゝるときよりいまし世まて、ものし侍るかんちき也と里人のいへり。其頃雪時ならす、水無月にふりしとなん。其いはれは、あべのやからは神宮寺の淵とて、そこなきところにすむ、あやしのいろくずの子なれば、時しに

駕籠そり
目すだれ
湯澤に行く
はきぞり
犬自慢

あらぬ雪ふらせけるじちも侍りけるど、あやしのものがたりするは、かんしきのはかせとやいはんか。人のり、よねつみたるなと雪車あまたひくなかに、くすしなとは、とみなるやまひにやいそくならん、雪のいたくかゝりたる、ものみより（そりにこしのことくつくりのせたり。是なつれの旅籠のことく作りて、かこそりといひ、又箱そりといふ）つら、いさゝかいたして、ひかれ行ありさまを見つゝ、「初みゆきふりにけらしなあらち山こしのたひ人そりにのるまて。」といふ、ふる歌のこゝろおもひあはせたり。行かふ人は、めすだれ、又めあてともいひて、うすものをぬかよりおほひかけたり。こは、眼のやまうなきためなり。

霜降月のなかは、湯澤（いにしへ出湯ありしといへり、いまも山はたけの畔より湯いつるところあり。かくちといふ、たはこいつる里也）のうまやに行は、雪は五六尺にあまりて、かた岨、谷なとをのぞむがことくおほへたり。かく、しみ氷りたる雪の上に小供らあつまりて、はきぞりとて、細き木の二尺斗なるにつなをわかね付て、くびにかけて、軒ひさしの上よりいくたびも〱くたりてあそぶ。又わらは、狗引いてゝ、かゝるむく〱とこへたる犬子はあらし（荒きならん、ちからつよくふるまふ也）といふに、いな、其犬子は、みのこなし（いとよはく、ことい ぬにをそる（マヽ）ゝを、みのこなしといふ）さはらまけな、あか犬子。そかいぬ、きのふふられて小たぐりしたり。　せしそ。いな、それがこそはなたなれ、此しろ子は、ありまなにかしのかみめし給ひし狗のためには、むまこなるよとあらかひけるに、いぬはみな、家のうへに高雪をつたひてかけのほ

松やにぶて馬のおもつら

久保田暦
高窓から足

れば、おなしう、わらはべもはせのぼりたり。日くれて、ある山里に宿かれば、やのあけまき灯の本にありて、松やにぶて（火くらくまたゝけば、かれはしにて打ぬ）いとくらしとて、こうみ八寸、はな六寸とて、たばかりして、しなたといふものを縄によりて、馬のおもつらといふものをあむ。門を叩て入來るうばそく、こは、六日をこなひたる柴燈の護摩の御札なり。是おしてとさしいたし、此うはそく、こうじたるにや、いとはや、はなうちならしてふしぬ。あさとく出たちてけれと、みちのいと遠くて暮くれ近く來れは、あらぬすちに、ふみまよひこし。からうして、行かひあるすちに來たりて、

けふこゝに雪の山路まとひくとふる里人や夢にしるらん。

又ほのかに行方見へたるは、ひねもす雪車引たるか、いくすちも見へてありけれは、十もし七もしいひつゝきぬ。

そりのあと一筋見へてくれにけり。

かくて草彅か家にかへりぬ。

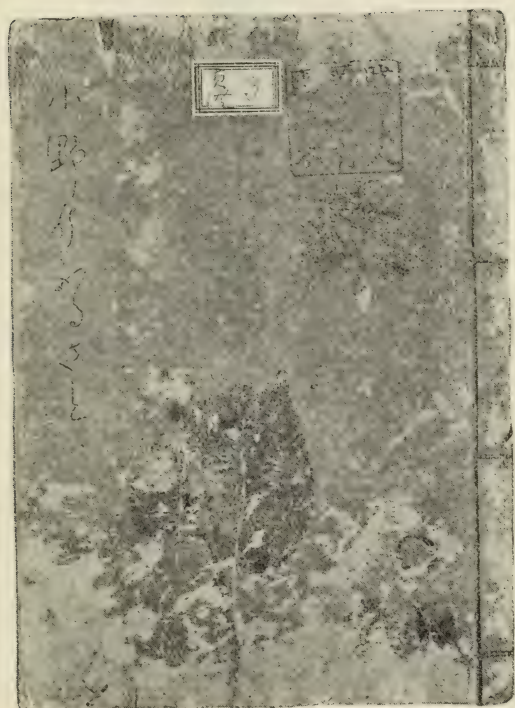
久保田の里にてかうかへたる暦も、廿日あまり巻殘りて、ことしもくれんとす。唯あけくれ雪の中に冬こもりして、手を折て日數つもりき。たか、いひしならん、「大雪やまとから見ゆる人のあし。」まことや、高まど、軒ひさしなとの上より、行かふ人のわらくつのみ見へた

かまくら
年の市
きどころ寢
せやみ
秋田の假寢

り。わらはべ、かまくらあそぶとて、やよりたかき雪をうがち大なる穴をほり、そか中に笹のともし火して、あらぬさまかたりて更ぬ。雪の曙のおもしろさは花に見たらんに増りて、梢もなき山の遠かた、たとへんかたなし。里ごとに年の市とてさはけども、ゆづる葉、うらしろなければは、雄松、五葉なとを、高雪の下よりからくしてほり起してうりたり。人の家居はゆきのふり入ぬ料に、いなむしろかけて、是にくゝり入ぬるは、穴なとにおりめぐるこゝちせり。みそかになりたるあした、かくそおもひつゞきたる。

月も日もつもりて雪のなかに行雪車のはやをの早き一とせ。

夜くたち行ころ、めのわらは、きごころ寢（うたゝねをいへり）したるを、やよ、せやみ（せをやむとは、人にしたかはで、はか〳〵しからぬをいへり）おきよ〳〵、風ひかんに。あけなは、いねつむ日なれは、とくふさせんにといひて、ともに、はなそよめかして、ひちまくらにうたゝねたり。此いねつむといふは、「秋の田のかりそめふしもしてけるかいたつらいねを何につまゝし。」と、藤原成國の聞へ給ひし歌のこゝろにかなひたり。秋田のあかたにてあれば、ことさらおかし。鶏もとしやおしむらん、聲のかきり聞へたり。故郷を思へは二百餘里をへて、玉くしげふたとせ、旅に、としをむかふなるらん。

小野のふるさと

天明五年乙巳正月朔より四月のすゑまて、出羽の國おかちの郡のあらまし、小野小町のふる跡をたつねしを記たり。

柳田村にて

膽氏波の國雄勝の郡、飽田のあがたにて年を越り。天明五年正月朔、はつ日きらひやかにさしのほゝ光に、雪の山々にほやかに見やられて、軒端とひかふ、むらすゝめのさへつる聲も、けふはわきて長閑なるおもひして、とに、いやたかうつもりたる雪を見つゝ、

あさ日影匂へるまゝにふりつみし雪はみなから霞む俤。

種々の供物

家ことにさし入て、ことふきめてたしといふめる人の、こと葉ほこりかにしはふきありく。鴨柄はしらなとにかけたるいなほ、あはほのもちゐ、又おかのもちといふは、うかのみたまのもちゐならん歟。なりひさこのことく、中くほかにたいらかなるを、家にすむ男の數にあはして神に奉る。かゝみもちは例のことなから、栗、柿、干蕨、鯡、昆布、五葉の枝そへて、遠つおや祭るとて、かゝるいをのなまくさもいとはて、たま棚、佛のみまへにすへたるは、あがりたる世のふりおしうつらさるは、めてたし。星をかさしておきいで、五千百回なゝ流れ、

若水くみて

八潮の澤の七瀧の水と唱へ、むすひあけたるわか水を、まつ、をさなき童よりのみ初て、老た

る人の手にて、かはらけさゝめたり。人々、わかんみむすひのおほん前にぬかつき、此御前をはしめ、あか棚の上におけらのふる根をたきて、なみゐたる人もかき、身のうち、衣なとにくゆらせたるは、ゑやみせぬをこなひとて、いたくこかしたるは、ふるきためしにこそあなれ。雨、時のま降て神ひとつひゝきたるは、としのゆたかならんさとしなりけりと、里の子、いやしよろこひたり。

おけらの根を焚く

二日。あられふり、雪となりて冴へたり。ふり重りたる雪のなかより短くあらはれたる梢は、花をあさむくかことく、ゆきのつもるもおもしろし。こゝを柳田といへは、

　　また雪のふる枝なからに白妙の糸うちなひく里の柳田。

三日。凡きのふにひとし。

四日。湯澤のうまやにまかりて、山田なにかしといふ人のやに東海林東海林をしやうじとよむなにかしといふ人ありて、かはらけとりて、ひたにわれにすゝめたるに、いなみかたくのそめは、酒をたうび侍らすは、この湯澤といふことを、かゝるうたげのこゝろもありて、とく作り出たまへ。さならては、いたくもり侍らんとせちに聞へしまゝ、

湯澤の驛

　　たのしさよ千代もかはらすくみかはす湯澤の里の春の盞。

五日。やのくまに、小松しけりたるを一もと立たるに、猫のかきのほりて、ねう〳〵といさ

む聲も、日に〳〵春めき行こゝちせり。

七草刻むに

六日のゆふへ七草はやすを聞は、「とうとの鳥とゐなかの鳥と、わたらぬさきに、たんたらはたきにたらはたき。」と聲うちあけて、菜かたなもて叩く聲家ことにとよみたり。

年始客來て

七日の粥は、おほそうふる里におなし。万歳のうたひこゑ、あきのさし、ふくたはら、ちゝのこかねの箱なと、家〳〵に、ものもらふ、かたゐ出入ありく。いやしに人來れは、手かけのおしきに、うちまき、ほしかき、とんふ、栗盛出てけるを、いさゝかぬかさげて、酒のかはりとて

やせ馬

錢つゝみたるを扇にのせて、さしいたしてかへる。又童べのくれば、やのあるし、松の葉に錢貫きて、此馬やせてさふらふなといひつゝやる。松の小枝にせにつなくことは、いて羽、みちのくにゝありとか。

避病の禁厭

八日。もろこしの空より、やまひの神渡り給ふをおひやらひ、やにいれじとて、くま〳〵うちはらひきよめて、戸口の柱、石すへなとに、やいと一火せりけるを見をりて、

氷ゐしやま井の水やいさはやも解てなかるゝ春は來にけり。

九日。あしたより、うら〳〵とのとけし。

岩碕に行く

十日。岩碕といふところに行とて、鳴澤といふ村はしに、雪をわかちてなかるゝ水のありければ、

きのふけふ山路は春になる澤の水こそみつれ四方の長閑さ。

初庚申

やかて其ところに至りて、石川なにかしか家にとまる。けふ、はつかのえさるの日なりとて、ほたきやのうつばりに、おとこむすひとて、縄もて一ところゆひたり。此とし、家にぬす人のこぬましなひとぞ。庚申すとて、かげのみたれこゑ聞てふしぬ。

牒祝ひ庫ひらき

十一日。けふは、日記せる牒のいはひといふことはてゝ、うかのみたまのみまへに、みは、すへもの奉りて、あるしをしたり。いさ、よねくらひらかんとて、雪にかくろひてうちのくらけれは、灯を手毎にとりて入ぬ。

十二日。あしたはれて、ゆふへの空くもりたり。

十三日。きのふのことし。

又の年越し

十四日。またのとしこしなりとて、なにくれとゝのへて、やのうちと、はらひきよむ。午ひとつはかり湯澤に歸へり來たり。夕ちかう門ことに柳さしけるは、ためしにこそ。此柳を、

門にさす青柳の糸くる人のたもとになひく夕くれの空。

鳥追ひ

十五日。けふは鳥追なりといひもて、しら粥に、もちゐひ入てくらふ。狗、猫、花、紅葉なと、いろ／＼にいろとりたるかたしろを餅をもて作り、わりこに入て、わらはへ、家ことに持はこひたり。これを鳥おひくわしといふ。日くれちかき頃、小供等あまた、しろきはちまきを

木貝

田むすび

米ためし

もちやき

ふきとり餅

し、ちいさきかたなをさして、さゝやかの棒をつき、木貝とて、うつほなる木の笛を吹て、うちむれてはやしたて〳〵里〳〵むら〳〵をめくり、夜さりになりては、田むすひといひてわら十二すちをむすひ、大につゝきむすひたるを、田のひろけれは世中よきためしにひき、はた、ちいさきむすひいくつもいてくれは、田のみのりすくなしと、さたせり。又こめためしすとて、よねを十二たひはかりて一とせのうらとふ。埋火のへたには、女のわらは集りてもちやきすとて、さゝやかにもちゐひきりて、ふたつならひに火にうち入てやくに、聲とよむまてわらふ。こは、すきたるためしにやあらん、女のかたより手いたしたるは、又、おとこゐよりたるはなと、これはかれ、かれはこれよとなつらへて、よともにしたり。

十六日。あしたより雪ふり、さむさしのきかたし。やことにくらふ、ふきとりもちといふは、あつ湯にうち入たるもちに豆の粉ふりたるか、雪吹に人のふかれたるを吹とり（ふきたふれならん歟）といふに似たるとて、此ことにたくへたるといへと、まことは、福取餅ならんといふ老人ありき。

十七日。柳田の里にまかる。門にさしたるなにくれの木に、鶯のうつりありくもめつらしけれは、

また花の咲ぬを恨み鶯のをのれとくるふこゝろさをしれ。

十八日。湯澤にいきてんといひてやみぬ。

十九日。かくて其うまやに至る。空うちくもりて雪いやふりぬ。

初灸の日

廿日。けふは、やいとしそむる日なりとて、昆布のうへに艾のせて、たゝひと火して、かしらのうへにおきたり。

新金谷邑

廿五日。此五日はかり風のこゝちにして日記もせさりき。この日、新金谷邑といふところにいきて高橋氏の家にさゝまりて、湯澤のうまやなる長谷寺に住給ふ、万明禪師にまみへたり。

雪虫

廿六日。柳田に行とて路しはしくれは、袖の上なとに雪虫といふものとひ來るを、見る人、かゝるものゝいつれは、いまよりのちは雪のふりこしといへり。

厄年祝ひ

廿七日、廿八日、廿九日、三十日になりぬ。けふも又とししとりすとて、やくとしいはふためしせり。

きさらき朔日。長閑に、よものやま〳〵の雪かすみたり。

此まゝに花ともうつれうち霞み長閑に匂ふ雪の遠山。

初午の日

二日。はつ馬なりけれは、げんごう田の森の安具理子のみやとてありけるにまうつる人、野みちにむれり。

こやし運び

彼岸の口よせ

蘚を供ふ

三日、四日雪ふりて、五日いとよく晴たり。五さか六さかの雪も日かけさき方は、かなたこなた、けちはてゝけるかたには霜降たり。雪いさゝふるに、馬のつらといふものをきて、けらみのをきて、そりひきありく男等のあまた、をのか田畑のあるをこゝろあてに、雪のうへに、こやしとて、いつくさのやしなひのためもてはこふを遠かたに見れは、はるけき海つらにふねの行かと見やられ、たゝしろかねの山、しろかねのみちのおもしろきを、ふる里人と、みたらましかはと、ものおもひつゝ湯澤につきぬ。

六日。うらゝかにはれたり。七日、けふは、かの岸にいたる日也といふ。口よせとて梓巫のすむやには、柳の枝に糸かけて門にさしたるしるしに、人尋ね至りて、なきたまのうへをうたふを、聞人、なきいさち集ふ。

七日。蘚めせ〳〵と市なかをよはふをよひ入て、此野老をあか棚にそなへ、われもくらひぬ。

あめつちの惠うるらしうちつとひ廣き市路のところせきまて。

八日くもる。九日、久保多の里に住ぬる貞敎、宗信といふ人とかたる。けふ此人々、其里にてかならすかたらんといひて出行を、しはしとゝめて、

わかねやる柳の糸の春風におもひみたるゝけさの別路。

たひ衣たち別ても二月の空音な鳴そはるの鶯。

十日。いはさきに行。こなたかなた、ふみけちたる雪のあはひに、かれたる草のもへたるもなかばは青し。又三四日ありて湯さはにかへりぬ。

十五日。さかふちかくれ給ふたる日なれは、みてら〳〵の門もせにまうつる。「花のもとにて春しなん。」と、しりたる人すしたり。

十六日のゆふへ、田の神にもちゐひ奉るとて、よろつのためせり。（田神に餅を）

十七日。雪いたくふり來けり、晴て又雨しきりぬ。この日柳田の里におそひて、艸𦾔氏か家にいねたり。

十九日。あめ風いやしたり。

廿日。ある鄕に妻むかふるのわさしたり。（婚禮の習俗）まつ、むこかねの毛利木とて、二尺あまりの勝軍（ぬるての）木の、もと末を紙につゝみてしら臺にのせ、又女の家よりも持來て、かく二もとつゝ四もとを合て、こなたかなたへ、一もとつゝとりかへてかへる。（毛利木）此よめをおひ出たるしりべたに、かの、もり木をあてゝ、すくひとて五尺あまりのあらたへの布を、よめの肩よりかけて、おふたよりとせり。（すくひ）こはみな、つねのわらはおふにもせり。むこの家より莚一ひら出し、女のかたよりもむしろ一ひら持出て、むこのむしろを上に、よめのむしろをしたつかたにしくは例（莚一枚づゝ）

錦木と細布の意か

ばかい崩ゆ

のことなるを、これをあらそひて、女のかたよりは女のむしろをうへにしてんと、まくり手にひこしろひ、あらかひせり。女のむしろうへにしかるゝを、いみしき男のはぢにいひなせり。小刀なともて、むしろ二をさしつらぬけば、しきかふわさのならさりけるならはしなりとぞ。此もり木はにしき木にて、又よめおふときのしら布をすくひとて、かならすもて渡るは狭布のほそ布ならんか。みちのおくの國ちかけれは、かゝるためし、おもひあはしたり。はた遠きむかしは、このくにもみちのおくといひたれは、さもありなんか。ぬる手はわきて枹のいろふかけれは、錦ともいはんか。此もり木をひめおき、其人身まかれは煙として、しら骨あつむるときの箸となしけるためしとなん。

廿二日。湯澤に行に、たかやなる雪やゝ消のこりて、墻に崩るばかい（路子ないへり）ひこ〳〵（羊蹄草ないふなり）つみありき、かこべ（ちいさやかの竹かごな、かこべといふ。又科野路にては櫻の皮の煙草いれを、かこべといふ）といへるうつはに、つみありく女むれたり。市路になりては野老〳〵とうりありくを、市女笠をかたふけてかひくらふ。

廿九日。柳田にくるに、杉むらなと、また春のいたらぬこゝちに雪のありけれは、

はるなかは杉の下みち來て見れはまたふみ殘る去年のしら雪。

やよひ朔日。よべより雨ふりて、遠方の山きはの雲おかし。

二日。霞の衣うら〳〵と長閑に、川邊まて立わたりたり。

雛遊、闘鶏

三日。ひめなそひのためしは、いつれの國にもひとし。此郡をれうし給ふ御館にて、闘鶏ありけるを見にまかれる人々、又わらはは、鶏を手ことにかゝへありく。やのあるし盞さしいたし、又けふの歌ありてなとせちに聞へたれは、

みちとせの春にあふむの盃やむかへは桃のかけにゑひぬる。

蛙の目隠し

四日。雨ふりていとさむし。又雪の、ちか〳〵の日降こん、「かへるのめがくし」とて、いつもかゝるためしありけるとそ。

万作の花

六日。空うらゝかにいとよし。岩碕といふ村に行とて、杉澤とかやいふ村中に、垣ねおしめくらして黄なる花咲たり。この花は、むつきのはしめ、いまた雪のかゝりたる垣ねに匂ふ万作といふ花（木まんさく、草まんさくとてあり。草万作は福壽草のこと也）（天註――まんさくは青葙にて字未佐久ならんかし。）なり。此里のことわさに、「まんさくは雪のなかよりいそげども、はなは咲とも實はならぬ。」とうたふ。其花の枝をとひめくるも、よしありけにおかしけれは、

住やたれいさとふらはん鶯も宿さたのまんさく花の陰。

岩碕にて

石田大膳館址

いはさきになりて石川氏か家に五六日ありて、山かけの雪もやをら消はてゝけれは、いさ野遊ひしてんとて、やのめくりをいさゝかのほりて、たかだてといふところあり。石田大膳といふぬしのすみかのあとなり。承享（マヽ）の頃、冣上源五郎義光のいくさし給ふにとられてけり。

林泉のあと殘りてけるを見れは、年ふれ松をからかさといひ、なかるゝ水を皆瀨川といふ。此河のあなたをは平鹿郡といふ。雪のむら消たるを磨戸山といふ。此山にいにしへ鷹のみつの子をうみてけれは、其おや鷹、朝夕此こをはくゝみありくを、鷲のとひ來て、さきくらひたり。こを子鷹やすからすおもひけん、其わし、たゝちにこの三のたかにとられたりけりとか。こは鳩をかたらひて、わしをくひふしたるともいふものかたりありき。はた、ふるき歌に、「出羽なるひらかの三鷹たちかへりおやのためには鷲もとる也。」此こゝろは、其ものかたりを光俊よみ給ひしならんか。こを、ひたにすして、遠方のたけ〳〵を見やりて、

花もいまひらかの山のそれならて木のまにしろき雪のむらきへ。

こなたの霞の上に、鳥海山のそひへたちたる眞白のすかたは、ふしにたとへつへう見へたり。又外山のいたゝきに雨下のありける家は、秋のころ鳩をいくつも糸つなきおけは、あまつ空に行鷹のとひくたりてける。此鳩は七霞を見通す、まなことき鳥なれは、おちおそりて尾羽うち叩ておとろきさはきけるに、ほとほなく鷹のくたりて鳩をつかまんとほりすれは、此鷹、網引かふせてとらへける、鷹まちのやなりといふ。春は、やま歸りとてよからぬ鷹なれは、來しともまたじと、なめらかなる苔のむしろに圓居してかたる。夕くれの空たと〳〵しきまてありてかへらんといふに、御寺の西のたかゝらぬ山を、毛なしと呼を聞て戯れ歌。

磨戸山の三鷹物語

鷹まちのや

毛なし山

梓巫女の家

たれかいつこゝに其名をつけびんや毛なしの山も夕月のかけ。

といへば、聞人おとがひをはなち、手をうちてわらふ。里の中路を來れは、わらふきのふせるかこときさゝやかの家に、ものゝ音したるを、人たゝすみてきく。何ならんとおもへは、眼見へたる梓みこの弓をはちきて、なきたまを、かたはらにあるかこときいひ、なり行なと、たなこゝろをさすにひとしうかたれは、人々なみたこほしなくめるに、

梓弓とるにひかれてなきたまのたとりやくらし夕暮の空。

と、かく作たれは、いよゝ人なみたおしぬくひて、やをら家路にかへる。おほろならぬ月影に、すちあきらかなり。

万歳樂〱

十一日。庚申すとて物かたらへは、うつはりの鷄かけろと鳴たり。いさ枕とらんとすれは、なへいたくふりぬるとき、人々聲をそろへて「万歳樂」〱と唱ふ。このいもゐしたる人とも、庭の面にむしろしきて西のかたをふしをかみ、ぬか三たひつきてふしぬ。

十二日。また冬枯のまゝなる梅の梢に鶯の聲おもしろくて、

梅か枝はいろこそみへね鶯の聲のみ匂ふ庭の一本。

暮の變化物語

十三日。月のおもしろさに軒ちかくをれは、ひちまくらにうたゝねしたる女、かしらもたけて、ちやこ〱（猫をよはふに、ちやこ〱といふ、みちのおくにては、たことよふ也）と、猫よふかとおもひつれは、ふりたる井のひきか

たんばの木
だを鳥

やさら祝ひ

ぼひあげ

かたこの花

へるなるよ。こをむかしみしかと、あし手なとに毛のいたく生ひてけり。こは、かぶろわらし（小童をいふ）とへんくゑ侍らん。あなおそろし、身の毛いよたちたりとて、おくふかう去ぬ。

十四日。よへより風吹雨頻て、辰の時はかり、いかつちおちかゝるへう鳴わたり電ひらめきたるに、たんばの木、又しこのへ、しころともいふ（黄蘗の木也）梢に、だを鳥（鵪たいへり）の集りたるか、此ひゝきにおそろきて、むら〳〵とさはきたり。

十五日。けふは、やさらといひ、てんげともいひて、田の面におりたち、畑うち初る日のいはひとて、家毎にもち飯うすつきたり。

十六日、十七日、十八日、日毎に雨ふれり。男等耕をるを、こと田、遠の千町なとの男、たかひに手して、うまねきて一ところに集ひて、これを、ぼひあげとて日なかばにわさをとゝめ、みなやにかへりては四五日もやすらひてけるならはしを、春田うつにはたひ〳〵せりけるとぞ。

十九日。例のことにふる城のあとに遊ひて、かたこの花（かたくりともいふ 旱藕のことなり）にましり咲たる菫のありけるを、女のわらは、こは里かたこのさつみとりぬ。すみれ草をさとかたこはなとはいふなり。おもひしことを、

むかしたれこゝにすみれの跡しるく生ふるを春の形見にそつむ。

俗謡一ツ

男女聲のかきりうちあげて、「いはさきのたてのみこしの澤かじか、日さへくれゝはこちや〳〵と。」諷ふによそふ。

長閑しなうたひ暮して春の野の淺茅か上にむれるさとの子。

こぶしの花

さかしきみちをくたりて、小川にそひていつるへたに、こぶし（辛夷）の花咲たる梢に風吹わたるをあふきて、

吹まゝに花の梢のしら露も風にこふしの匂ふ夕くれ。

やにかへれは雨ふり出たり。

二十日。よんへより雨ふりをやみなう冴へかへりたれは、埋火のもとさらて暮たり。

廿一日。きのふのことし。

種蒔櫻

廿三日。雪いさゝか降ぬる垣ねに、咲そめたる花のめつらし。これを柴櫻といひ、又の名を苗代のをりにあひて匂ふとて、たねまきさくらといふ。此花は甲斐の國の山中にてみたり。ひかん櫻にひとし。鶯の鳴たるを、

しら雪のふるかとみれは芝櫻しは〳〵來鳴軒のうくひす。

またきと、らくとの前句附

廿四日。湯澤にかへる。此夜、雨風のつれ〳〵に人のかたるを聞は、むかしあるまたきの句に、「蕨を折にあびやれ、ばゝもさ」となんありけるに、らくが、つけたりけるはおかし。

「さうまにしん、くゞつまいれてにてくもそ」。蕨を折にまからんに、いさたまへといへり。ばゞもさとは祖母申ならん、さは、いさなふこゝろか。ばゞもさ、かゝもさといへり。さうまはさうまい、早賣のこゝろに、あたらしきをいふ。にしんは松前の島なる二月のころとるいを、數の子のおやなり（こと國にては、かどゝもはらいへと、其島にてはたゞにしとのみいふ。）くゞつま（又あたぶともいふ）は多きこと、いたく入てなり。くもそは、喰ひもうそうする也。またぎとは狩人（熊、ゐのしゝなとうちありくた、またきといふ）をいひ、らくとは、ゑた、皮はきのわさせるものをいふ。此國のならひとて、前句といふことにあしさはにいだして、しる、しらぬものしてけれは、上手いと多し。「又けふのけふりはとこのあはれやら」といふ句に、「草かりなから申念佛」とつけたり。又「山高くして谷のふかさよ」といふに、「郭公せなかを見せて飛て行」。又あき人と山賤としたるに、「大椀にこぼるゝほどに酒もりて」「蠅おひなから馬のこうだん」。こは、にこりさけをあきなふ家のあくらに馬口勞なとありて、袖のうちに手をにきり、馬のあきなひするこゝろ也と、夜とゝもかたりき。

廿五日。梅のはしめて咲たる枝に、鶯ならん花ふみしたきけるを、近くよりたるにおひやかされて、いつこにかうせたり。花のふたみつ、ふみおとしゝはにくし。

　春雪をはらひ馴たる鶯の羽風にこほす梅の初花。

廿六日。雨すこしふりて空さむく、かくさたまらぬ日を、いつまて待てかいて立けんといふ

を、ある人聞て、浮雲流水のこゝろもて、いかにふる鄕へはいそきけるそとゝふに、

雲にたくふ身はふく風にまかせても心にかゝる故鄕の空。

とこたへたり。

金谷邑の故事

廿七日。金谷邑にいきて、ふるあと見ありくに、よし家のいくさをいたし給ふたるとき、此路（いまは田はたけとなりたり）にてしはしいこひ給ひて、柳をきり、くゐせとして、しらはたのさほゆひそへ給ひたるとて、今しらはたといひ、又箭一すち落のこりたりしとて、こゝを金矢といひしよりいまもしかりと、はたつもりの翁かたる。

野火燃ゆ

廿八日。空あたゝかにておもしろけれは、近となりの邑岸まてうかれ出るに、野火たかくもへあかる。雉子の聲聞へたるは、「傳へきくいましも袖のぬるゝかな野火けつ雉の羽のしつくに。」此こゝろにやありけん。ひなゝとのこもれるかたにやあらんと、なみたおちぬ。

田に働く人々

田の面に馬を引ありき、たかへす女を、させる（馬の口とる女なり）といひ、馬の尻より眞鍬して押行を、しくはといふ（尻鍬ならん）。山田、ぬまたのかたには大足（おほあしなおあしといふ）とて、三尺あまりの板のくつさしてかいならし、かた田は馬にてならし、ひとろ田（こひちの田なり）の面に小舟さしめくらし、そがしりよりは例のしくはしておしならし、こき行も、ことなるわさのおもしろくて、

水馴棹さしかへしては幾度も春の山田をめくるふな人。

あせつたひに、さすごり（虎杖をいふ）つむ小供ら、田のゐせきの石ふしとらんとて、はせめぐるを、田の中のさせ、あと口（田のみな口をいふ）よごめ（止るをいふ也）たるを、すでにやふりしなど、いかりのゝしる。夕ちかうなれは、やま〳〵たけ〳〵野火うつり、遠方の里に火のあやまちなと見へたり。

廿九日。雨にぬれて、花のふたつほころひたるもおかしく、

山に雪殘る

三十日。雪は山の端に殘り、盛なる花も見へす。春の暮行をねたしとおもひて、とに遠方をなかめたるを、笠とりたまへ、雨のふり來たるとて、めのわらは、もて來るに、

ぬるゝとも小笠はとらし春雨のふるさへけふのなごりとおもへは。

卯月朔日。雨、かはかりふりて晝晴たり。神のみむろに榊とるころほひまて、谷陰の雪は星のやうに消へ殘りて、梅も櫻も梢にすくなう、朝霜ふかう空の冴へぬれは、ほた火のほとりさらて、やま〳〵をむかふとて、

夏來れと青葉はいまた遠山の木の間に殘る去年のしら雪。

二日。ていけよけれと風ひやゝかなれは、おもき衣いくつも〳〵かさね着て、いつの日にか衣ぬきてんと、花のかにそめぬ袂なれは、春の餘波おもはぬもことはりにこそ。

ぬきさらてきならし衣其まゝにまたうらさむく風通ふなり。

山の栞色々

ある翁の山つとゝて、ほな、いはだら、あいぐき、こゞみ、しほで、しどけ、ふすべ（せんなうともいひき、わさひのこ）

となりもちぐさ（蒲公英をいふ）聞しらぬ菜いと多く、かこべも、やふる斗持來るを、とりあへすあつものにしてんとて、細なかれのありけるにおりて、女、此草ともあらふに聲おかしう、「此澤の、ぶなとしどけかものいはゝ、おさこゐたかと聞へもの」このしほてこへ」とうたふ。ふなも、しどけも、みな草の名、しほてことはやしたるも草の名なり。中垣のあなたに、くすしのこもりに水そゝくを見れは、くつわからみ（黄著）こごうのまへたれ（柴胡）かぶらぶす（半夏）のゝ葉、しのは（大黄）

薬草種々

菅艸の花はいまた咲ねと、日くらしといふめるとそ。

種蒔き急ぐ

三日。田のくろにたねまき櫻咲たるか、半はちりはてたるを歌に作りてあれかし、とく〳〵といへは、

田の面にたね蒔櫻ちるとみていひやとひてやいそくなはしろ。

柳田村に行とて、あせ路をつたふに、女の集りて種まくを、

あら小田に種まきわたす賤女かまゆにこもれる柳田のさと。

行〳〵、梅、すもゝのはなの夕はへおもしろし。

このけなき女行くとて

四日。風のこゝちにや、かしらいたみて、ふしたる枕かみなる、さうしすこしあけて、とを見やれは、國はいつれならん女の、男にいさなはれて行を、水くむめらし、桶を捨て家にはせ入て、あなる女を見よ、からのけもなし（まゆけな顔の毛、又からの毛といふ。）わかせ聞て、餘所國の人はみな、このけ

白杏の花

焼野の菌

から〳〵じ鳴く

そりぬるといへは、女、あな、さたけなし恥かしきといふこと也とかたるを、あるじ、なにのつりことあらそふことをいふするそ、日は、たけたるそといかるを、すは、つくるそといふなにくれと、はらたちのゝしりてけるを、つくるとはいふ。日くれ行ころ人の身まかりし家にて、つゝみうち、かねうちて、聲とよむまてねんふちをとなふ。遠近の山の野火は、夜ことにかゝりたり。

五日。かきねゆひめくらしたるうちに、何の花ならん、雪のふりたるやうにちりたるをとへは、あむずの花なりけるよしをこたふに、

家つとにおられしとあむすいかいのあなたの花はちり過にけり。

六日。やけ野に生ひたる、さゝやかのくさひらを人のくれたり。うまさ、にるへうたくひなし、なは何とかいひてん。巳の時はかり雨ははれたり。

七日。近きさかひの花見ありきて、夕ちかう歸る。杜のした路に至れは、茂りたる柳の梢に風おちて、なにくれの花ちりぬれは、とゝまりて、

又たくひ嵐になひく青柳のいとかけとめよ花の梢に。

八日。杉のみやの神の祭りなりとて、人むれてまいりぬ。きのふより風のこゝちして、此おほんかんわさにもまうて奉らす、はるかにぬさとりをれは、梅、櫻、もゝ、なしなと枝をましへて咲たるにかくろひて、から〳〵しといふ鳥、聲もさらすさへつるもおかし。門にたちて

ゑびすかせ

眼なき女、左右の手に、木の實の黑きずゝのいと長きを末に、けものゝ角、貝からなとつなき、ひたにすりすりならして、「あなおもしろの」とうたふは、ゑびすかせといふものにて、うらとひなとをわさに世をわたる女なりとて、よね、おしきに盛てやりぬ。

貝澤の淵祭

九日。由左磐にまかるみちに人つとひ行は、貝澤の里の淵祭りとて、水神のかんわさにまうつる也。女、此川へたに立て菅笠うち入てなかしたるは、子めやすく生へき願ひのかなひたる手向となん。

畫家北溟

山田何かしかやにつけば、久保田の里の眞崎北溟といへる人ひねもすかたらひて、題五をかいて、是に歌よみてよ、みな、かたにかゝんといへるにいなみかたくて、當坐にせり。

山家花。

世中のうきにかへたるおく山もこゝろうつろふ花の下庵。

漁家花。

さすかたにさゝてやつりのいとなみも花にひかるゝ春の浦人。

田家花。

せきいるゝ苗代水もいろ深み田つらの里の花の盛は。

娼家花。

河竹の世のうきふしもわすられて花にうかるゝ此頃の空。

侯家花。

ものゝふのやたけこゝろも盛なる花にやはらく春の長閑さ。

あるし、こはすみやかなると、まきをさめてけり。

十日。まさき北濵のぬし、けふなん出たちけるとて、れいの、つかみしかき筆して、相遇暫時復相別、離莚握手酒盃清、梅花枝上殘花雪、君似東西南北行。」といふ、からうたかいつきて見せけるに、われも又此ぬしにむくふとて、

花に馴れ月にかたりし旅衣あかぬ色香に立別ぬる。

やのあるし、花見にまからん、山ふみに行なんやといさなはれて、大なる櫻の盛はけふ過てんと見へて、なかはは散たるをあふきて過行に、

山風の吹來るたひにゆきかひの折らてそかさす花のした路。

湯澤の神明社にて

かくて神のおまします玉垣に入は、うちとのみやしろをきよらかに作り奉りたるに、ぬさたいまつりてけり。こなたの舞とのに男集りて、つゝみうち、三のをこゝらはちきてあそふ中に見しりたる男、手してまねきたるに入は酒すゝめ、

肴は楢葉に

さかなは、くき（川いなの名也）ますのいを、みな楢のわか葉に盛わかちて、やにゐたらんよりは、たのしさいかゝあらん、これこしめせ〳〵

老女舞ふ

遠近展望

と持出たる男やかてゑひて、ひさおしたて、つらおしぬくひ戯をせり。野遊にやあらん、わかき老たる女七人、はしこよりのほり來て、こは、ゆくりなふまみへたるなど、手をみなひてゝものいふに、さかつきとらせて酒しひそし、なによけんと、さかなものしければ、なみ居る人のつらは、青葉さす夏山の紅葉したるとやいはん、夕日かけにてりそひたり。老たる女手をうち出たるに、こゝらの人ゑひしれてうたふにあはせて、いとわかき女顔そむけて、「蛙なく野中のしみつ」とうたひ出れは、男女はな聲にうたひつき、あらぬさまにほうしとり、つゝみならすに、としは八十七十にやならん女の、みつわさしたる腰をのはし、雪をかさしたるかうへをふり、ふるひたる聲にしはぶき〳〵手を叩て舞ふに、そかゆかりの人にやあらん、むねいたきふりして、とに出たり。扇ひらいて肩ぬきたる男、やかてたくりせりけれは、犬のはいわたるなど風情もあらされは、遠方を望みつゝかたはらされは、高山のいたゝきに雪はのせたるかことくけち殘り、ちかき里の家毎の花は、うれのみあらはれたり。わか葉の梢に風すゝしく吹て、遠近のなかめいとよし。女ひとり、とに出て、「朝の出かけにやま〳〵見れは、霧のかゝらぬ山もなし。」あなる山のをくらきよ、もや（霧霞のたくひをもやといへり）ならん、雪あるこなたよりは、けふりたつとゆひさし、しろくよこたはれるなかれは、みなせ川と、やにあるかきり、みな出てのそむ。あなたは、はかまこし山、松岡なとかそへたり。あるふみに、嚼宮、

市の品々

駒形莊在於松岡村（古齢村）瑞崎或云松岡山」所祭神一坐素戔嗚尊、或云、合祭大日孁尊謂之嚼大明神、小宮猶存有祭日別當」と聞へたるは、あなたにてそあるなり。夕になりてかへる。

十一日。夕より雨そほふりたり。

十二日。きのふより、くすし榎本氏英か家に在て、市のあきなふものをみれは、わかいといふくさびら、すゞのたかうな、よりでとて、あけひといふ草のわかゝづら、とりつかねてうる。ゆふ附行ころ、みたけとやらんいふ山のあたりを郭公のはしめて鳴たるは、めつらしとおもふに、いつこにかさりぬ。たつねいかんにも、あし垣ゆひめくらしたれは、すへなくたゝすみて、

あし垣のあなたの空の郭公夕月影に聲なへたてそ。

御物川の漁

十三日。ある翁にいさなはれて河瀬のあひき見にいきてんとて、おもの河のへたに草おりしきて、翁、こしにつけてける、ひさごのさゝへとりいたして盞とりぬ。くき、せぐろ（くきも、せぐろも、いをの名也）とるとて、小石もて川瀬にとりつかねて、いをの入來へきわさをせり。水のとゝまりてなかるゝところを、うたといひ、そかうへをさして、かゝみとよぶは、魚とる人のこと葉にそいひならはせる。

酔泣の翁

翁、なりひさごを枕として、かくやあらん、むらゐにはあれと聞たまひてよ、申さん。

たのしさよ老のこゝろもうつきてゝ又逢事のかたき世なれは。

といひつゝ、たゝなきにないたり。こはいかに、うつしこゝろにやと聞に、かたはらのあけまき、醉れはいつ〳〵も、かくなみたおとしけるくせにて、とわらふ。老の歌の言葉ことやうにあれと、そかこゝろあはれなれは、かいのせたり。わらは、蘆のわか葉をひたにあつめてこれをわかね、笛に吹聲おかしう聞へてけれは、

蘆の葉笛

　あしの葉の笛の音たかく河やしろ浪のつゝみもうちそへてけり。

小供らあまた野路を分行か、とゝまりて、これこのすかんほの枝に、あきづの、羽やはらかなるかのほりたるは、いまや、ぬきいづらんといふ。すかんほは、いたどりをいひ、あきづとは秋津虫のこと也。日くれて家にかへりたり。

すかんぽ
あきづ

十四日。小野小町のふるあとゝふらはんとて湯澤をたちて、せき口村、上せき村になりぬ。山かけをほとゝきすの百千反なけは、

小野小町の舊跡に

　里の名の關守もかなほとゝきす過行かたをさしてとゝめよ。

酢河

酢河といふを橋よりわたる。岳より落來る出湯の末のなかれにや、水の味ひ酢して、もろもろの魚すむことなしと行人かたりぬ。古記云、酢川岳跨奥羽兩境、西北大岳而有濕泉」清和帝貞觀十五年六月己午、授濕泉神從五位下、となん聞へたり。いとふるき、みたけそありける。はるかに其あたりをあふきて、ぬさ奉り來れは、夏木立しけりあひたる中に、鶯の春の

いろ音殘したるはめつらしく、

夏草のしけきねになく鶯はかへる酢川の路やまとへる。

小野鄉にて

良實の遺跡

金庭山覺嚴院

小町の古琴

熊野社

中泊、水口、十日市町邑、寺村、なへて西馬音內の庄小野鄉といへり。其いにしへ、いてはの、郡司良實の住給ひしといふ家居のあとは、桐ノ木田といふところに、めくりの堀のあと、かたはかり殘りぬ。良實のたて給ふたる菩提のみてらとて桐善寺といひ、むかしは天台のゝりを行ひ、なかむかしより禪家の法をつたふ。小野邑に至れは金庭山覺嚴院といふうはそくあり。なにくれのことはまほしく此うはそくをとへは、あるしの云、あか遠つおやは三十八代さきなる圓明坊とて、これも天台のなかれをくんて、良實につきそひ奉りて都より來りて、こゝにとゝまりしいにしへをかたる。むかし、つかろの守の御使ひ一夜あか家にとゝまりて、あなる、うつはりにかゝりたるはいかなるものそ。あるし、なにゝてさふらひけるや、しらす。唯いにしへより、かく紙につゝみ、八重繩にゆひたりとかたる。ひめたるものなりとも露人にかたらし、中見せてたうひよ、とく／＼とせちにいへは、あるし、かまもてきり落して、ひらいたるに、いとふるき木のきれのやうなる琴なり。こは、小野の家のふるき調度ならん。又小町姬のもてあそひけるにやとおもひ、この琴を、ひたすらたまへと、いくはくのこかねいたして、かひてけるとそ、いひつたへ侍る。熊野のみやしろのありけるは良實の

建給ひて、此國に見ぬ瓦なともてふき、大なるいらかと聞へしか、今は、さゝやかにやつれておまします。此あたり耕し侍れは、やふれたる瓦あまた鍬にあたり侍る。いにしへよりは、みちなとも、ふみかへてけるならん、あかいにしへ住家のありしは、あなたの木々むら立るところなと、をしへたり。熊野社にぬさ奉る。此みやしろの左はこがねのみや、右は和歌のみやと申奉りたり。里の子の云、小町姫は九のとし都にのほり給ひて、又としころになりて此國に來給ひて、植おき給ひし芍藥とて、田の中の小高きところにあり。いさたまへ、見せ申さんとて、あないせり。其めくり、しば垣ゆひめくらしたる中に、やかてさくへう、ゑひす藥の花茂りあひたり。これを、いにし頃より九十九本ありて、花の色はうす紅にして、花いさゝか、こと花とたかふなと、此盛を待て田植そめてけり。枝葉露はかり折てもたちまち空かきくもりて、やかて雨ふり侍る。まことにや雨乞小町ならんとかたる。石ふみに書たるを見れは、小野小町大同四年己丑生昌泰三年庚申年九十二卒行」としるし、又九十九首の歌を詠し、名を法實經の花といへり。歌に、「實うへして九十九本（つくもつくほの）あなうらに法實歌のみたへな芍藥。」となんありけり、もてあそひ給ふたるけにやあらんか。小町姫のあねの君のなきから埋し、ふるつかのしるしをゆかりの松といひしか、十とせのむかしかれたりと人のかたりたり。其邊に藤のかゝりたれは、

九十九本の芍藥

ゆかりの松

二森八十島

小町は鹿の子か

我父と契る

八十島の怪

かれし其むかしは遠し松の名のゆかりはしるし花の藤波。

田の面の二森といらふは、いにしへの八十島のおもかけ斗殘たる也。むかしはこゝを、おもの川なかれしといふ。岩屋といふところに、小町老となりてしはし住けるよしをかたり、又聞つたふる歌とて、「有無の身やちらて根に入八十島の霜のふすまのおもくとちぬる。」こは小野小町のよみ給ひしなり。又たれならん、「おもひやるこゝろのうちのしほみちて袖の波こす小野の八十嶋。」見たまへ、二森は小町世にすみ給ひしとき、深草の少將の塚をつかせ、又みつからのをも、かねて此つかにならひて作らせ、われ世さらは、かならすこゝに埋みおくへきよし聞へて、かくれ給ふ。又あやしきことなから、小町姫は鹿の生たる子也。其ゆへは、よしさねに、世になききよらなる女通ひける、そかはらみてうみ落してのち、鹿の形をあらはしたりともきゝ、小町ひめ、をさなきこころ人にぬすまれて、みちのおくの、いまのみやこのあたりに住てけるを、よしさね、かゝることゆめしらてこゝに至り、此女、世になうみやひかなる女なれは、めさしそめ、行末をちきりて別れ給ふに、月日へて、おやといふこと聞あらはれしかは、小町姫なきいさちけれとかひなく、小町姫、われこそ世にまれなるつみんさならめと、これより、世のなかの人に露の契もかけさりけるとか。此ものかたりに、「みやこしま邊の別なりけり」といふ歌、おもひあはせたり。ある翁、八十島のいはや、なりうこ

くことあり、又かりにすかたをあらはし歌よみて、かいけち給ふこと、はた夕くれなとに、かほよき女にみちにて逢しか、行衞もしらしとかたることをり〳〵也。二森は、八十島のうちに、ふたつつかつくらせ給ひしならんか。

野中山小野寺

野中村の野中山小野寺といふも、ゆかりありけるみてらなり。本尊の千手ほさちは定長の作り給ふ、今におましませり。慈覺大師、小町姫のふるき手ならひの反古集めて、百とせのすかたを作り給ふ。今に殘りたるを、さうす川のうはと人ことにいへり。いにしへ實方あそ、此里にめくり來給ひて、「なきあとやありしむかしの雲の月小野の人かなしはしあひみん。」と聞つたへて侍るとて、かたり捨て、此翁は小徑に入ぬ。ある家にしはらく休らへは、あるし、すゝつきたる箱のうちより、とりいたして見

七番の札所

せたるふみに、ひえの山なりける圓教あさり、國めくり給ひてこゝに至り、とゝめおき給ひし觀世音の像は、定長にあふせて小野寺に納め給ひたる也。此國に三十三所の觀音ほさちをあかめたる、其ひとつの七番の札をさむる人、「夜もすから月に小野寺のそのゝ花うてなの露に身をやとすかな。」又寛永十二年の頃、伊勢の國より分部左京亮政壽といふぬし、

分部氏の歌

國めくり來給ふか、「ことの葉のたねに殘りていにしへのあとなつかしき小野のふるさと。」佐竹なにかしのかみにつかへてける治俊の、もてなしの役にありて此返しを、「いにしへのあとのあはれを問こそはさすかにはなのみやこ人なれ。」とそ。かゝることともしるし

たる、こゝろありける里の長也。又あるしのかたりけるは、一とせ日てりつゝき、田はたけ、みなかれ行まゝ此芍藥の邊にいもゐして、「ことはりや日のもとなれは、とうたひしかは、雨たちまち降て其しるしをあらはし給ふ。小町姫にもの奉り、此むくひに人々の妻、むすめの、みめよきを集めて歌うたひ酒のみて、さはにはやし／＼すれは、ときのまに、よき空くもりて、やをら雨ふり出れは、いそきみな家に歸れは、雨はいやふりにふりて、はたつものもみな波にゆられて、晴行空もみへす。せんすへもなう、又こと神にいのりして、やゝはれ行てけるは、うたての小町姫やといふ。小町の雨いのりのうたといふは、世にいふさはことなれるあり、「ちはやふる神もみまさはたちさはき天のと河の樋口あけたまへ。」といふと聞ご、さりとては又とすしたり。はた、此うたうたひて其しるしのあらはれたるは、身の毛いよたつ、ありかたさと人のかたらへは、民のなけき、あめにかよひしならんか。小町姫のうへは、世中にまち／＼にかたりつたふることは、あけてかそふるに、いとまあらしかし。ちかき世に、はいかいの連歌師、芍藥の枯葉折て家つとにせんと、たゝう紙のあはひにいりてけれは、あめたちまち降て身いたくぬれ／＼かへるとて、「又れいのあふむかへしやむらしくれ。」遠かたによこたへるたかねをとへは、こたへて、さなひらひとなし七里（ひどとは、ひきゝところ澤なとないひ、行ほと三里あり、小徑ならんか）といひて、むかし雄勝峠に通りし路にて、こゝを日くらし山といふ。花の木あまたの

小町の木像

うちに大櫻とて、花のいと大に咲といへり。山ふかく谷幽に、みねそひへ、みち曲たれは、いつもこゝにて日くらしけるゆへ、かくいふにてやあらんとかたりたり。ふたゝひうはそくの家に入は、あるしよろこひて、なにくれとねもころにかたりぬ。むかしは、こゝらのたから持つたへて侍りしかと、もかみよしあきの軍のころ、火のためにやかれて失たり。いかなるゆへにか、此小町のみすかたのみ殘りたりとて、いとふるき木像ををかませたり。花あまた咲たる、ちいさきみやしろのおましますをとへは、はしり明神といらへぬ。いかなる神のみたまにやありけん。なたかき雄勝峠は、日くらしにて侍ると聞傳ふといひつゝ、雨のふり出るに、とに、あるし出たれはわかれて來つゝ、横堀といふところの實諧といふ老人をとへは、ちかきころ郭公聞しとき、

横堀を經て院內に

　かきくらき若葉隱れにさそひ來てまた忍音の山ほとゝきす。

しろかねほる山見にまかるとて、院內といふところにとまる。なかゝる水を桂川といふ。水上は雄勝の峠、もかみにくたる溪かけより落來となん。橋の上にたゝすみて月をあふきて、

　てる月の中になかるゝ桂川よるはことさらすみ渡りぬる。

院內西光寺

十五日。森のした路のなかれを左に、阪ひとつあかれは、谷かけを郭公鳴けるに卯の花のあ

銀山の開闢

ざるあげ歌

れは、

卯の花の波かけ衣たつね來てたへすかたらふ山郭公。

西光寺のあみたふちは、いせの國の府にたゝせ給ふに、ひとしき作にてありけるよしをいふ。麓より雪殘りてけれは、行〳〵袖さむし。此山のいにしへをとへは、ある人の云、石田三成のいくさやぶれし頃、兵あまたうち死しけるなかに、伊勢の國の林次郎左衞門、みちのおく會津の渡邊勝左衞門、この國なる石山傳助、かゝる三人の武士命をまたくして、小野の里の石山かゆかり尋て來り、砂金ほるをわさにてかくれ居れり。あるとき村山宗兵衞といふ人の夢に、神の告給ふことをしるへに、長倉山を越へて谷ふかうたつね入は、見し夢に露たかふことなく、こはかしこしと、かゝる人々にもかたらひ、かねほる人あまたたつさへて、慶長十年にひらけ初たる銀のやまなり。大床、小ざこ、とひぶき、灰吹のとこ、石うちくだきて、しろかねとるかな槌の音、谷にこたへ、山にひゞきたり。板に沙のせて、ゆりながし〳〵たり、奈須のゆりかねも、かゝるものにやあらん。女、あまた聲をそろへて諷ふは、ざるあけ歌とて、砂をざるといふものに入て、これを水より上るにうたふ也。銀ほる穴をしきといふ。此うち、いくはくかひろく遠からん、いとくらくして、かねより生るゝ水清く流れたり。木のもとに分入て、

大山氏を弔ふ

東鳥海山

古の雄勝宮今相川權現

三浦荒治郎の首物語

あさつゆをはらへは袖に玉とちる光ことなる白銀の山。

やがて院内にくたりてけり。此里の御司、大山なにかしのうし隱れ給ふたるとて、御ほふりいとなみせり。歌なともめてたく聞へ給ひたるに、けふは、けふりとのほり給ふとなけいたるを聞て、

いやたかき其名は四方に橘のちりし軒端を思ひこそやれ。

かみ關より小徑に入て、ひんかし鳥海山といへるあり。此峯は雄勝宮にして、いにしへ、駒形莊雄子(おしこ)骨山(ほねやま)といひて、雄勝の尊を祭り奉りてけり。雄勝、吾勝の二神にわたらせ給ふを、吾勝はみちのくにゝまつり、雄勝は此出羽にまつりたるゆへ、しか雄勝郡といへり。今は此雄勝の宮を相川大權現とゝなへ奉りて、さらに其ゆへしれる人なし。夕くれはてゝ湯澤にかへりて、山田なにかしのやにいねたり。

十六日。氏英のやに行は、あるし、わかよみたる花の歌ありけるを見て、

よしの山おくをつくして尋ぬともかゝる言葉の花はあらしな。

と聞へたれは返し、

色香なき言葉を花とみよしのや人の心の奥ふかくして。

十七日。雨ふりけるつれ〱のあまり、松井なにかしか家に遊て、なにくれのふみ見ける中

に、三浦道寸といふ人の書たるふるき歌あり、手なとめてたし。道寸は三浦荒治郎の親にてありける。荒次郎のくび、うらみおもひけるにやあらん、高き松の朶にかゝりて行かふ人をにらまひてけれは、人、風のこゝちにふしなやみ、あるは、わらはやみしけるを、忠室善師杖をとゝめ給ひて木のうれあふきて、「現とも夢ともわかぬ一眠うき世のひまをあけほのゝ空。」と戯歌ありしかは、其くび、つちに落し、むかしのものかたりにくれたり。

山吹も咲く

十八日。あたり出ありくに空かきくもり、垣ねの卯の花は、やがて咲へう見へなから日數へたり。山かげの郷の桃も櫻も盛なるに、ほとゝきす、かんこ鳥の鳴に、故郷をしのひ出てゆかし。相しりたるあき人山吹の花折て、これは銀山の麓の里にて、もてまいりたるつとなり。ねかはくは、是に歌ひとつあれといへるに、

しろかねの色にはおはてやきかねのこかねとやみん山吹の花。

陸奥に行かん

去年の冬より、かなたこなたの人になりむつひてくれたれと、いつまて、かくあるへうもあらねは、みちのおく見にまからんとおもひたては、人々にいとま申てんと、けふの夕附行ころ柳田にいきたり。ちか〳〵の日わかれん、なとかたる。

十九日。ていけよし。暮はつるころ、魚とる火ならん川つらに見へたるは、あひきせりけるといふ。

宮傳にて

貴船の社

けらこ

霧機山の惡路王

二十日。あしたの間くもりたり。河のあなたなる宮傳といふところに行とて、貝澤を過て其村になりて、東海林なにかしのやにかたりて、桐の花咲たりけるに、

　陰くらき青葉をわきてめつらしな桐の花咲宿の夕はへ。

さゝきなにかしといふ、から歌よみける人來りて、圓居にくれはてたり。

廿一日。雨ふる。しはしのはれ間まち得て、貴船のみやのありけるにまうてたり。こはいにしへ、みやこよりうつし奉る社にて、こゝを宮傳といふも、其ゆかりの名ならんと人のいひたり。此社に奉る。

　おもの河わたりえし身のかひありてこゝにきふねの神そまします。

廿三日。けふこゝを、二三日ありて出たつに、雨又ふり出たり。あるし、長きうまや路にきよさいひて、あまつゝみくれたるうれしさに、

　雨なみたぬるゝはかりの旅衣袖こそほさめ人の情に。

あるし桃二といひけるか、「風薰る笠の行衞や田植時。」といふ別の句をせり。佐々木なにかしとゝもにかたらひて、鎌剪（かまきり）といふわたりを越へて、何かしに別たり。やをらかなやに趣みちにて、けらこといふものをかつき、さいもくになふたる翁にあひぬ。見なりたる人なれは、なにくれとかたり來れは、此翁、松岡のきりはた山は、むかし、あくる王といふ鬼すみて

田澤邑巖窟

嫁入の俗習

とゝこ養ふ

鮭の泡子

けり。そか妻なりける、たてゑばしさて鈴鹿山のおくにありながら、夜な〳〵通ひ來りしといふは鬼のしちならん。こはみな田村さしひさの大人にきられ、ほろほし給ふなさ、又田澤の邑の內野の岩あなさて、此うへほ、あゆむほさ（一里斗ありけるよし）遠くいたれは、石のつらにしなしなの貝、はた熊の蹄、猪しゝのつめなさ生ひ出たる、名たかき巖窟もあり。これらみな見ところあり、かへさのつとにいきたまへ、さいひて別たり。

廿四日。新金谷村にいねたり。此夕、風すさましうふきおこりたり。

廿五日。ちかさなりの邑に、よめいりすさいふに見にいきたり。むこかねの邊に小宿とて、人のやに入ことあるに、一のもりさいふ男、むかふ女をおふ。もり木は五色のこうよりもてゆひて、此もり木をとりなをし左右の手に持も、天地和合なさゝいひて、手のわさ、ゆへありけることにこそあなれ。例のもり木を女のしりへにあてゝ、小宿によめをおひ入たり。むこのやまても、かくておひ行ことなり。柳田に來けり。

廿六日。女のわらは、とゝこ（蛾をいふ）の、はや一重ぬいたりなさいひもて、桑つみありきぬ。高橋なにかしさともに、野遊すさて夏草ふみしたき、古河（いにしへおもの川のなかれたるすちなり）さいふ處に出たり。去年こゝを鍬もてほりしかは、鮭の泡子いくはくもいてたり。此川なかれしは五百年のむかしならんに、此いを土のうちに在ても、ちさせをまつさいふためしもあれはにや、さいふ人

遠望の山々

あり。此泡子日さしあたりしかは、霜なとの消行やうに、みなとけうせたりとかたりぬ。こゝを過て野も山も、にぬりたることき躑躅の中にむしろしいて、かれ飯たうひ酒のむ。夏木たちの茂しなかより、鳥海山の雪は、ゆひもてかきなかしたるかことに見へ、ひんかし鳥海の山のあなたに雪のまたらに殘たるは、かむろ山（神室山とそ）といふ、いかなる神の室やありけん。霧機山は松岡山のうしろになりぬ。かしこの雪のけちたるは、横手てふうまや路のみたけなり。此みねには鹽湯彥のみやしろをあかめ祭る。其あたりに雪か雲かとたとるは、阿仁（あかゝれほる山なり）山ならんか、ゑもや、みちのくにゝなたかき岩提にはあらしかしなと、めにあたるやま／＼たけ／＼を見つゝ、おもひつゝきたり。

うすくこきみとりも秋は山姬の錦をるらしきりはたの山。

小野村美人多し

はなたのやうなる布を、あつ／＼とさして着たる、いときよらなる女、老人にいさなはれて行は小野の人なり。あな、めてたの女と、人うちまもりたり。小町ひめのゆかり殘りて、いにしへよりいまに至りて、小野の邑にはよき女いて來るとは聞と、かゝるかほよき女は、世中にあらしなと醉なきしたり。笠に音して一さはら雨ふるに、さ、かへらんと、つゝし、わらびを、いたく折つかねて家路にいそく。あす、かなやにいかん。

廿七日。あしたよりくもり、夜邊の空くらく星の光ひとつたに見なくに、郭公軒ちかう聞へ

たるは、すゝろにおもはれて、

此宿の花たち花や匂ふらんこよひはちかし山郭公。

道祖神多し

廿八日。あたりの神かきをかみありく。幸神（さいのかみ）といふ社には、おばしかたの大なるも、ちいさきも、木に作りておし立たり。さちいのらんためか、此神の祠、むら／＼、里といふさとにみな祭り奉る。

湯澤の馬調

廿九日。なゐふるに木草の露もこほれて、袖ぬれ／＼て金谷を出て、湯澤に近きところより雨ふりいてたり。かくて其ところになれは、馬しらべとて馬いくらともなう、みちもせに曳出たるを、さふらひ改て、ふみにしるすは、なにの毛の馬はこの春死て侍るといひて、馬の耳尾かみなと、きりてけるをみな書しるし、背の中おちくほみ入て、ひさこの形したるを、せんどう馬とてあまた引出たり。此夕、氏英のやにとまる。あるし、郭公をこよひのあるし侍らん、くるゝより聞へてなとかたらへと、さらになかさりけれは氏英筆をとりて、

夜をこめてなかはなかなん郭公聞ぬ限はぬるとしもなき。

と聞へしを聞て、

なかぬ恨山ほとゝきすまつ風の吹さへそれとしのはれそする。

高松日記
駒形日記
比良加の美多可

○高松日記

雄勝郡板戸村

文化十一年の秋なか月の五日、板戸（川向ノ莊なる板戸村をいふ）といへる處に居る曾我吉右衞門といふ、年七十とたかく、をのこ子二人、孫七人、彥三人もたるが、さらに老たるけぢめもなう丈夫（ますらを）のふるまひすれば、この曾我の翁をあないにたのみて、此村よりして山路分入る。

山路に入る

翁が上祖は陸奥の桃生郡より來て、十二三代を經しものかたりをしつゝ大森山を艮に見なし、種苗池澤（たないけ）といふ處の山坂を登り水窪などを左に見やり、仁左衞門澤といふが、紅葉色ことに染わたりて旭まばゆく、うち見すてがたくあゆみもはてず。右に釜の澤、また釜穴ともいふ處あり、其あたりもことに紅葉ふかく、目とゞまる山路也。鳥屋場森の梢わきて色ふかく、いふべうもあらず。坤をさして山ひとつ踰れば紅葉ことにおもしろし。中山といふを分出わけ下れば高松ノ莊也。

高松莊坊澤

麓に村あり坊澤といふ、むかし坊主の跡といふ。岨に山神、稻荷の神座ナり。左に見下ろす谷底に、酢川の水とはこと流れなる柴橋をふみて、山路にや行らむ人二人リ入ぬ。

三津川村農家

石の陰元形

十王堂

せんだん塚

三津川村に來て、ある家に入りてしばしと休らへば、籠の中に粟穂とりつかね、そを火の上に釣りて乾し、また梁のところせきまで繩ひきまとひ、これに編たる煙艸ほすとて幾重となく引はえて、家のうちは人みな、せくごまりありきて、爐の中場の面にも、みや木のごとなる楷たき立て女どもならひ居て、蕁麻（山藍な省語にあゐといへり）の皮剝て、かい撫て絲とらしむ。つかりたしつゝ、うちむかふ。外に出れば前森山、雷の倉など名ある山々いと高く、弓手に山ノ神の御階いと高し。そがなからに道祖神座り、此社に石の陰元の形をあまたするたり。あやしとうち見れば、そがの翁もほゝゑみて立り。十王堂あり、あらゆる木佛いくはしらもならびおはしたるに、五六柱、幣とりもたるあり。こは人の戯にせしことから、しかすかに、あがくにのてぶりおはします佛たちかなと、うち戯れつゝいへば、誰がしつるにやと、あない笑ふ。此荒川は泥湯川、河原毛川、桑野澤川、かゝる三ツの瀨ひとつに落會て名を三津川といふ。是を黃泉の三途川になずらへて、奪衣婆の像を造りするて、そのよしもて優婆堂村といひしとなむ。そは今の十王堂なりといへり。また川原毛山より靈通山善導寺を三津川村に移して、優婆堂も十王堂も善導寺もみな同じ堂也。畑中に茶の木二タ本ト生ひたるせんだん塚とて、修行者こゝに居て、牛千駄の薪に火をかけて火定うせし跡なり。下新田といふ山里には山路行といふ。十王堂の坂とていと／＼さかしきをくたり、泥湯川の獨木橋を渡り、またおな

萩栗の木

倘山路深く

鳥居木

燒山ヲ通融縣と

じゝまにはる〳〵と手をつきてのほれば、渡り得し橋は深谷の底に見えたり。わけ行ク路のかたはらに萩のいと〳〵多く、此萩の脚葉は萩にて、うれ葉はみな栗の葉にてぞありける。こはあやしの萩といへば、此あたりにては萩は栗と化り侍る事めづらしからぬ事也と、あないも來かゝる人もいへり。山萩は老木となりて桂と化レることあり、そを萩桂とて大樹の桂に萩の花咲クはあれど、萩の栗と化るを見しは今ぞはしめなる。こは此山路にのみありけることにや。萩栗は大木と生ひのぼりても、小栗のみ實るといへり。北に鎧嶽奥宮嶽ノ古名を與呂比の嶽といふ南に椽長峯、午未ノ方に嶽長峯、末に山臥長峯、穴澤、曲師澤など左に見なし、また深谷のそこなるやうに下新田を見やり、東に奥宮岳の燒蔓根、千度などいふ處見ゆ。水飲澤、小首、大頸戸などいふ處〳〵を行ク山岨に鉤栗の木連理あり、山賤らはこれを鳥居木、また山神の鳥居といへるもをかし。滑澤、切リ路といふ處に來て休らふ。毒水といへる坂中に寒水ありて掬ぬ、名におふ毒氣ノ露斗リもなくいと〳〵よき清水也。やかて燒山になりぬ、此山を人みな通融縣と呼て句にも作れり。いかなるよしありて、しかいふ名ありと人にとへば、目蓮尊者の母この山なる地獄におちおはしたる也、もともゆゑよしある地なれは、さはいふといへり。こは血盆經の由來記したるふみに、目蓮尊者昔日往ニ到烏州追陽縣一といふ事について、その烏州は羽州に通ッをもて此國のことゝして云ク、諸經論を便覽して、發起の宗旨をあかさんと

幸左衛門湯

善導寺跡

八万地獄

欲して尊者の徳行を報美すれば、目連すでに六神通を得て報恩のために父母を度せんと欲して、道眼を以て三界を視給ふ。その便に羽州の追陽縣にいたりて血の池を見て、許多女人の罪苦をかなしみたまへり。其後亡母の餓鬼道に墮て居たまふ、云々といへり。羽州は國ノ名、追陽縣は地名也、西域記に見えたり。本朝東北に羽州あり、湯殿山、羽黒山といふ靈地に血盆經六十六部を納る事は、天竺の羽州の追陽縣に准してなり。」といへり。その湯殿山、羽黒山になすらへたりし追陽縣を、また此川原毛山にたぐへもて通融縣など書なし、はかなくもあやしくも少童（おさなきもの）のあどなき物語などするが、ここに莊年（よきとし）をして髭かい撫て人の語るも、むけに、はかなきこゝろぞせられたる。幸左衛門塚といふあり、その塚の下タに幸左衛門湯といふ温湯あり、幸左衛門こゝに死（みまかり）しより涌き出し湯なりといへり。また、湯ありて浴して、こゝにそれが身まかれりといへり。むかし靈通山善導寺といふ眞言宗ありしを三津河村に移し、また稻庭にうつして、今領通山廣澤寺といふ禪林これなり。此寺の跡に奪衣婆堂を建たりしか野火にやけてのち、三津川村に優婆堂をうつし建たり。そを今十王堂とせしなどいへり。路ノ傍に、石佛あまたすゑたるあたりを經塚といふ。そはいつの世に、いかなる法師か書たりけん、一字一石にしるし堆（つか）にこめたるが塚くづれ、こと石交りてあらはれ出たり。血の池と名におふ處谷陰に在り。八万地獄とて火井（ひのあな）二ツありて高く燃えあがる、其

川原毛溫泉

湯小屋一二

硫黃光明礬を產す

火の色白ク風に鳴リ谷にひゞきわたりて、冷しく恐し。谷水にかけわたしたる丸木橋あやうくふみて、川原毛の溫泉に至るに九曲をくだれば、高さ十七八丈斗りとおほしくて湯の瀧おちたり。病人(やまうど)みな螻蓑(けらみの)といふものを着て、編笠のやうのものに頭をおほひて、此瀧に身を敲(うた)しむ。さるもの着ざれば、小石おちたばしりて身もうち、くだけぬべうこゝちせりとなむ。瀧の上へにまた小瀧あり、小瀧の下タに瀧淵あり、その深さはかりもしらず、それを目蓮尊者ノ母の地獄といへり。湯の大瀧の中に石の不動明王をすゑたり、此明王の上へをこえて瀧のおちかゝるさる、ことに見えたり。瀧川の末に甃石とて、松もこと木も生ひたるあり、また施餓鬼堂とて、むかし經よみし地あり。溫泉はいと〳〵低き處にありて浴溫湯、瀧湯など萱葺の小屋ならひたり、見おろすにいぶせきやうなる山陰なり。例の藥師如來を湯ノ神と齋ひ奉る社あり。寒さに人もあらで、萱葺の家もみなこぼちはてゝ一ツ二ツは殘りたれど、さらに人もあらで神さびわたりぬ。かくて同し路おりのぼり皈リ來。屛風石、染屋ノ地獄、ばくろうのぢごくなど、ぢごく〳〵をめくり〳〵て、ぢごくの山中に日もくれたれば、石硫黃制る小屋小屋軒をならべて多かる、そが長(をさ)の住む家(や)に入りて一夜を乞ひ泊りぬ。硫黃はをさ〳〵鷹ノ眼にもたぐひて、肥前國(マヽ)阿蘇ノ山より產るものに劣らざりきやいなや。また光明礬もいと多く出るといへり。なかむかしの事にや、此山硫黃火大に燒て土みな眞白にて、ところ〳〵に五(ひめ)

葉生ひ、こと木も雜り立り。山ノ神ノ社あり、此軒近く御坂の上にませり。暮はつればいと寒く、柴さかし添て爐のもとにあまた居ならひて、おのがいはまほしき事を陸奥音、出羽詞に

雪降る

語會て更行ころ、雪いたくふれり。明日は出たゝむ事おぼつかなし、朝はゆくりかにふしねなど、あるじ、ねもころにいひつゝ、枕上にごほ〳〵はなうちならしぬ。

宿を出て

六日。つとめて外に出れば、さらぬたに雪とひとしきしら山に雪ふりにふりて、そのけぢめこそ見えね、日たけて、やゝ山松の青葉、木々の梢のくれなゐ色見わく斗り、雪もなからはけち行ころ此舍りを出れは、三津川より來つゝある高橋甚太郎が、さきに進みて山の內のあないせり。山の神にぬさとりむけて、彌陀の淨土と名附たる處をよちのぼりて中野津といふ

紅葉に雪

を分ヶ行くに、雪は斑に消へて、紅葉の梢こゝかしこにあらはれたり。綾錦を掛たらむと見わたす中に、劍の山といふ岩峯ぞ見へたる。路の弓手妻手に、鶴ノ背といふものして土をう

大釜の噴火

がちて硫黃堀りぬ。賽ノ川原といへる處もやゝ過て、劍の山のそびらとおぼしくて大釜といふあり。そは雷のおちくべう山もとゞろに鳴とよみ、いとおほらかに火の色しろ〳〵と高くもえあがり雲となり、麓は霧とたちこみて山路くらく、石硫黃火音は霹靂するにことならず、いと〳〵恐きところ也。山おりはてゝ笹森山の麓になりて、あないし來る高橋を別れて

苗代澤

苗代澤といふに分入る。上ハ苗代、下タ苗代といへり、そはみな潛リ水にて、泥湯澤に落る也。

鳴りとよみゆく山川の中のみわたり、淵をつたひ、瀧をわけて行ほど、いと〳〵遠く、からくしてあら川の落會ふ灣に成りぬ。夜經零し雪消けいと深く、笠も衣も木々の雫にぬれそぼち、身重くあゆみわづらひ、行なやみたゞずみ翁をよへば、翁もつかれ休らふさま、裝も笠も紅葉のちりかゝりたり。

いつのまにいろ〳〵衣ぬきかへて紅葉のにしききつるやまかつ。

泥湯の溫泉

かくてわけ〳〵て泥湯山の麓になりぬ。湯のもとに、天狗岩とていと〳〵高き岩嶺に松生ひ、紅葉したるなど、いとおもしろし。此山脚に舊溫泉とて淺く流れたり。新湯は小屋〳〵多く作りて人さはに來集る溫泉也。浴人みな去て小屋〳〵もこぼちはてむと、骨斗りになしたり。湯桁は二ツならびありて、今ひとつの屋上より木の樋に湯を流して、内に瀧とおとしたり。こは病人の頭をうたせ、肩を敲しむる舍也。湯ノ神はさゝやかの御社ながら、いといときよげに齋ひ奉れり。

四周の山々

見ゆる北に天狗嶽、南に泥湯岳、なほ奧深く分ヶ入りては西ノ俣、東ノ俣とて大瀧おちたり。此瀧川の流に湯も落ち添て荒川とはなりぬ。なほ高きにのぼれば南に茶漉の森、巳午に三擧（また三鏡ともいひて役内岳、泥湯岳、稻庭山など三峯の堺なりけり）西に山臥嶽、蟹澤などぞ見えたる。

大日岩

おなし路をいさゝか飯り來て北ざまに入る山路あり。此みちを行けば大日岩とて大なる岩あり、その岩の上に木々生ひ蔓おほいかゝりたり。岩のもとに大日如來の像を祠の内に齋ひまつ

桁倉の沼

すなう

れり、此わたり大樹のみ生ひたちていとくらし。市籠澤、桂澤、與平治澤とて小流れありて、丸木橋かけたり。行〳〵て萱野に出たる。右に祁多久良といふ湖水あり、中に小嶋あり、その小嶋の、水の上へにうきたゞよへるが如く見えたり。此小島の木々皆がら染わたり、なからは落葉梢たちならぶ中より、辨財天ノ祠ぞ見えたる。水廣ク、そを包ミなす四方の山々、岸の梢も影おちて、眺望いとよけくイむ。此桁藏はいかなるよしありていふらんと人にとへば、倉山にて須那宇あり、そこにむかし高野聖か行ひし處といへり。スナウとは栖穴也、栖穴を訛る詞にや。陸奧山賤等は小屋、戸屋を家戸といひ、山家戸などいへり。洞窟などあれば、そは石家戸といへり。こは、此山に窟あれば、家戸倉といふべかりしを、祁多久良とはいふ也。峙て高き岩山をなべて倉とはいふ也。此家戸倉麓なる湖水なれば祁多久良沼といふ。坤に水上といふ澤あり、其水こゝに落入りてかく湖となり、湖の尾は小安今、本ト小安ともはらいへり村に引おとせば、桁倉は川向ノ莊也といへり。きしべの紅葉のいとよきがあれば、これを折て人のもとへ贈らむと、たゝむ紙におしつゝみかきつけたり。

もみち葉に人のことの葉照り添へと夕日の色を折てこそやれ。

小高き處に登り見れば、いふべうもあらずおもしろし。この湖水には二尺斗ノ鮒、黄鰭もいと大なるがすみぬ。またもろ〳〵の小魚、小蝦なども漁れりといへり。北をさして小安に

こけ沼
つぶ沼
潜り水
上新田村
菌の色々

行ク山路あり。西に分れば苺沼とて大なる沼あり、水涸れて草生ひ野原のごとに見ゆるに、ところ〴〵おちくぼなるかたには、水はつか斗ぞ殘りたる。此苔沼も小安にたぐふ地とはいへり。岡ひとつ踰えて坂を下ればまた湖水あり、螺沼といふ。家戸倉の湖よりは、水の廣さいさゝか劣りたるかと見ゆれど、水の色みどりに、深さ、はかりもしらじとなむ。雨雪雫、峙ツ山々よりしたゝりおち入れど、此水さらに流れ行末こそしらね、さればこの螺沼（いと大なる田螺すむよりいふ名なり）は、いづれに屬(たぐ)ふさたかならねば、村々の民山あらがひのみして、山の木ども誰となく伐りしかば、あるとき糠あまた水に浮て試しに、一夜を經て、此糠水底潜て泥湯川に流出たり。泥湯川は高松ノ莊に流れてければ、高松の湖とここそ定たれ。南湖岸に潜り水といふ處あり、其處よりやくゞりぬらむかし。かゝる處を突通(ついとほ)し、また弘法大師の杖通し水とて、斐陀、常陸などに在り、近き霧幡の莊なる役内川にもあり、また津輕の千歳山近きにもあり。此潜水に近く比企田長峯などいふ處あり、松のむら立たる中に、こきうすき紅葉見えみ見へずみ晝にもかゝまほしき處也。日やゝかたふくころ上新田村に至る、本名は兜野新田といひし處となむ。清水か澤といふ地の杉群に山ノ神座り。家はたゞ三戸、こゝかしこに在る山里に暮て、藤原藤八がもとに宿かりてふしぬ。

七日。きのふあゆみこうじて足いたみ、行べうそらもおぼしねば、日たけてや出立むと休

ふ。菌あまた乾たるを見れば箒蕈(はきもたせ)、舞子茸、僊菌(まい)、貫打、級茸(しな)、鳶茸、香蕈(しひ)、崑崙蕈(し、)、纉蕈(しめじ)、滑蕈(なめらこ)、金蕈(きかね)、剝皮蕈(むき)、迦奴加、さもたせ、小楢卜治(しめじ)、すゞめしめじ、鼠しめじなど、そを汁種(しるぐさ)ともし、あはせとし、漬て鮓とし香物とせる。そを朝夕人にすゝむ。かくてけふもこゝにくれたり。

板戸村歸著

八日。ひまうちしらむころ山鴉の鳴ば、御幸鳥(みさき)、田鳥も鳴ぬ。起よ〳〵と老たる聲して、いきたなきわかうどをおこしぬ。兜野をたちてしはし行ば、兜岩山の麓にいたる。本ト小安へ東をさして下ル九曲あり、此山陰に袖野澤(外ノ澤などいふ也)といふ處に家二ツありたりしが、去年 おとゝし野火に燃(やけ)たりし物語をせり。超え處(こさ)といへる山阪に休らへば、東に役内水源朴木臺、坤に山伏森、南に川原毛山、巽に泥湯嶽、荼漉山などぞ見へたる。かくて若畑(畠等ノ荘に在り)村に分ヶ下りて、櫻阪を踰えて板戸村に來て、三浦氏のもとにつきて暮たり。

雄勝郡にて檜山を出て

朴木臺

脚倉山

○駒形日記

葉月十九日。いとはやおき出るに、月は何とかやいふ嵩に殘りてやゝ明たり。手あらふとて袖なむぬれたりしかば、

露ふかき山分衣かたしきてぬる夜は袖にあり明の月。

檜山の高橋がもとを出て、朴ノ木臺といふ萱原（かやはら）を行こと遠し。むかし此あたりはみな陸奥ノ國にて、かの人麿の、「みちのくの栗駒山の朴ノ木の枕はあれど君が手まくら。」とよめる朴ノ木も、こゝよりや産（いで）けむ。栗駒山の麓に、かく朴ノ木臺の名もおひけるものか。ある醫師（くすし）云く、もろこしよりわたせる厚朴に似たる厚皮（くすり）あり、同朴（ほゝのきがしは）木ながら、こと木ことなる朴木（ほゝのき）にて、此駒箇（が）嶽ならで、こと處にはあらざる木也といへり。うべも、いにしへそのよしありて皮を採り藥につかひ、木は枕ともして奉らんかし。脚倉山を右に見なして わけ行。此足倉山を、あなたよりは青岩山、あるは根杉山などいひ、根杉の羽白とて、としふる鷲の栖（すみ）たりし

物語をせり。北が澤とて水とき山川あり。さいたつ人々、あなつめたと、はぎ深くふみ入りてやゝきしにあがりぬれば、露いとふかくわづらはしく、行なやみて、

水寒き朝川渡りあさつゆを袖にはらひて分るおくやま。

假立鳥居

假立鳥居とて、二柱ノ神門に貫なきがごと、世に撞木門といふさまのものを二ッ三ッ野中に立わたし、また、嶋木の鳥居も立たるすぢを西にしばし行て、坂をくだれば赤瀧といふが落たり。

赤瀧明神

赤瀧明神坐り。水上は赤川の流にこそあなれ、しばしは横走して巖にかゝりたり。木々いとふかく、紅葉しておもしろきところ也。

いくちしほ染る紅葉の影おちていとゝいろこき赤瀧のみつ。

蟋蟀坂

此瀧ノ明神の前なる梢に、画馬ひとひらを掛て根子村某と記り。由理ノ郡の矢嶋ノ根子村の人にや、秋田ノ郡阿仁ノ根子村の人にやなど人々見つゝいへり。またおなし路に出來て坂あり、小蟋蟀坂とていとさかし。また大こうろき坂ありて、いと／＼さかしき山みちなり。

蟋蟀考

こは、こうろぎの背に似たる岩山なれば、しかいふとなむ。こゝにこうろぎといふは、夏のころ瓜、蔓苺もて籠に飼ひ養ふ、きりはたりてふ鳴、はた織虫をこそいふなれ。これをこと處にては、きす、きり／＼すなどいふ處もありき。またこゝにて、こうろきを、なへてきりぎりすといふさま、ふりたり。はた織とこゝにいふは、こと處の馬追ひなといふむしの事也。物

山神の花立

類稱呼といふふみに、「蟋蟀、こほろぎ、南部にてきり〴〵す、又、ころ〳〵しと云。江戸にてこをろぎと云、武藏府中邊及信濃、奥州南部にてきり〴〵すと云。越後高田邊にてつゞれさせと云、美作にてきりごといふ。白石翁曰、是古にいふきり〴〵す也。又、いにしへこほろぎといひしは今いふいとゞ也。又いにしへいねつきこまろといひしは、今云いなご也。又、いなごまろといひしは今いふはた〳〵也。又、いにしへはたおりめといひしは今云きりぎりす也、小兒籠にやしなふもの也といへり。」とあり。ところ〳〵にて、ものゝ名かはる事しかり。こうろぎはころ〳〵と鳴、きり〴〵すはきり〳〵いふことにや、いまこうろきとなむ歌にもよめり。こうろき澤といふ處ありて、澤水流たる朽木に、かくそ書付。

河鹿鳴それにはあらてころ〳〵とこほろき澤の水の音して。

山坂のぼり〳〵て休らふに、朽木、あるは木の根なとに山ノ神の手酬、また山ノ神の花立とて木ノ小枝を折て人ことにさしたり。かゝる花立てふもの、小坂の上、山ノ峠ことにそありける。こは手向ノ神のふることは、此あたりの山にこそのこりつれ。

山賤か峯より尾よりおりのほり小柴の手向せぬ坂そなき。

ぬるでの紅葉さしたる處あり、來かゝる男もまた、これに紅葉折てさしそふるを見つゝ、おのれもおなしさまに奉りて、

山はげみ

一杯清水

赤川の石

秋の山ちしほはつしほこきませて染る紅葉のぬさそ手向る。

今枝折さしたるはげみぞ、いづこの渓にかおりしぞと、あない、たゝずみていふ。はげみとは、いかなるわざするものをかいふとゝへば、今しころはしゝたけ、まゆたけなどとるものをいひ、なべて山業（やまかせぎ）するものを山業（やまはけみ）とはいふとなむ。いと〳〵くらき木々のしげ山をわけ〳〵て、やゝ日の光仄に見えたり。笹の中路ふみわくれは、一杯寒泉とて氷るがごとき清水あり。水無月の照りはだゝくころも、一盃飲みて、寒さ身におぼゆるよりいふ名なりとかたる。大谷地のぐて道とてふみ〳〵来れば、木をとり篠を握ておりのぼり、またくだりて赤川といふをわたる。石みな朽葉のごとに黄ばみ、流る水もその色に染たり。此水赤瀧と落るにこそあらめ。陸奥田名郡の海邊にも赤川といふありて、おなじ色に流たるに似たり。岸への山、梢ごとにそめなして、おもしろし。

比良加の美多可

ピルカの轉訛か

平瓮の意か

○平鹿郡

比良加は、舊蝦夷遺語の、比琉迦を訛りもて傳ふるにや。秋田ノ郡井川ノ莊に晝鹿野（蒜香野とも作れり）といふあり。そも〳〵比琉迦は、良といへる夷等が方言也。また、陸奥國ノ津輕ノ五郡の中にも平鹿あり、その津輕の五郡といふは宇麻ノ郡、田舍ノ郡、入馬ノ郡、花輪ノ郡、平鹿ノ郡（平賀とも作れり）也。また、津輕もいにしへの郡也。今そこに五郡といへるは、莊などの似にぞおもはれたる。倭名抄ニ云ク、國府在ニ平鹿郡一（比良加）と見えたり。また考ふに、平鹿は平瓮にして、往古於是に陶者ありて、そを貢たらむ地ゆゑ、しか名に負ものか。書紀神武ノ巻に、平瓮此云ニ毘羅介一と見え、また神道名目抄に、平賀神事（攝州住吉ノ社にあり）毎年二月祈年祭、十一月新嘗ノ祭、兩度此神事あり。春は二月朔日、冬は十一月ノ初子ノ日、住吉ノ神官和州ノ香山の土を取り來て平瓮を

ひらかの鷹
平賀氏あり

造り、祈年、新嘗に大神を祭る。南の神館といふ所にて此事あり、俗に、土餅ノ祭といふ。神功皇后、田裳見ノ宿禰に勅りして、この事をなさしめ給ふ例といへり。田裳見ノ宿禰は津守ノ神主の祖なり。また同書に、按に平賀は今云ｯかはらけ也、其形ノ平ｷゆゑ平賀といふ。手抉とは土をくじり制するの謂なり云々。是等の土器を以て神を祭る事は神武の御宇に始れり。山城國藤ノ森社に由意ありて、その社家此傳を相承す。今深草ノ里の土器、是其縁なり云々、と見へ、また倭訓栞に、ひらか、日本紀ニ平瓮をよめり。かは笥の義成べし。式に或水瓮を訓せり。又手湯瓮もあり。新撰字鏡に瓲をよめど考得ず。鍑ともよめり。和名抄に盆をよめり、瓮に同じ。東韻に瓦器也、と見えたり。今ノ俗、漆器に音をもて盆とよぶものは、其形の似たる成べし、もと槃の属也。○古來、神官、贄土師の居所を宇爾といふ。式に、多氣郡宇爾ノ神社と見ゆ。もと大淀のつゞきなりしが、今は居を南に移せり。里人、此記の故事によりて天ノ平瓮を造りしが、今其形狀をしらず。たゞ、朝夕の御饌調進の土器を造り奉るのみ也。洪水にて、豊受宮正殿の下の天ノ平瓮を漂はせし事は鳥羽院の時にて、百練抄に見えたり。○住吉の神事に預る女子に此稱あり、平瓮より出たる事といへり。○ひらかの鷹は、出羽の平鹿ノ郡より出たる鷹をいふといへり、新六帖によめり。○平賀氏は東鑑に見ゆ。元弘に護良ノ親王に從て十津川に匿る、赤松律師則祐、村上義光、平賀三郎、こを三傑とすと見

平鹿郡創始

え、また古事記傳八十毘良迦(やそびらか)ノ條に、八十は數の多きを云フ、比良迦此毘ノ字を書クは八十より續て濁る故なり云々と見えたり。こは平瓮の義ありや、なしやは、定かにえしもそれとはおもほえねど、平鹿はいと〳〵古キ郡なり。續紀廿二、四十七代淡路ノ廢帝のみまきに、天平三年云々、己丑勅造二陸奥國桃生城出羽國雄勝城一所レ役郡司軍毅鎭兵馬子合八千一百八十人、從二去春月一至二于秋季一既離二鄕土一不レ顧二產業一朕每念レ茲情深矜憫、宜レ免二今年所レ貢人身擧稅一始置二出羽國雄勝平鹿二郡一云々。また卅七、桓武天皇のみまきに、延曆元年六月丙午朔出羽國言、寶龜十一年雄勝平鹿二郡百姓爲二賊所一略、各失二本業一彫弊已甚、更建二郡府一招二集散民一雖レ給二口田一未レ得二休息一因レ茲不レ堪レ備二進調庸一望請蒙二給優復一將レ息二弊民一勅給レ復三年云々、と見え、倭名抄に、平鹿郡、山川、大井、邑知(おほち)、と見え、また同書に國府在二平鹿郡一とあるは、桓武のみまきに、建二郡府一招二集散民一と見えつる、其よしにこそありけめ。また、同郡龜田の子鄕(えだひら)に平鹿村あり。此處なむ、古ヘ郡府など建おかれ給ひし舊地にや。なほ考へつべし。

雪月花の出羽道

〇またこゝにいふ

〇六郡を雪月花に諷(なずらへ)て、山本、秋田の二郡を花ノ出羽道と名附ケ、河ノ邊、仙北の二郡を月ノ伊底波路と名附ケ、平鹿、雄勝の二郡を雪のいではぢと名づけつ。また、そが中にも卷キ〳〵の名あり。

莊と澤と

○巻々に莊と記たるは、此地にいふ澤てふ事也。そは、莊を澤と訛り傳ふにやと考ふまに〳〵、しか錄たる也。秋田方には某澤某澤といひ、津輕には某組某組といへり。組てふ事もものに見えたれど、凡莊にあたれり。また澤といへる方言も他邦聞よからねば、そをなへて莊とは書ぬ。さりけれど、そが中ヵに古への莊あり、そは雄勝ノ郡に駒形ノ莊、秋田ノ郡に奉浦ノ莊のたぐひ也。伊邪宇羅もあら野と成り、今は田畠の字のみとなりて殘れり。

六郡々邑記

○巻中に郡邑記と有るは岡見氏青龍堂ノ老人の編集也。そはみな享保の時世にて、そのむかしとは聊事かはれる處々あり。また此記に、文字、假字のたがひしふし〴〵あれば、なめげなる事ながら是を糺し、古名をさぐりもて書そふるものから、さえ短く、筆のおよひがたきすぢ〴〵甚多からむ。此を見る人、こゝろして見ゆるし給へ。

○雪ノ出羽道

古記に見る出羽國

出羽國、和名抄に國府在二平鹿郡一、行程上四十七日、下二十四日云々。○管十一田一萬六千百九町一段五十一歩、正二十四萬四千三百二十束、公四十萬束、本穎九十一萬七千七百十二束、雜穎二十八萬三千三百九十二束、云々と見えたり。倭訓栞に、「いでは」和名抄に見ゆ、出羽ノ國なり、今、ではと呼り。神名式に田川ノ郡に伊底波ノ神ノ社あり、姓氏錄に出庭ノ臣あり。古へ

出端の意か

鳥の羽に據る名ならん

名鷹、又箭ノ羽を出せるよりの名なるにや。神社は今所謂金峯山にして出羽の地あり。」と見えたり。また諸國名義考上ノ卷に、出羽、和名抄に云々、名義は越の道の尻、また道の奧などよりの出端(いではし)ノ國なるべし。續日本紀、元明天皇、和銅元年九月丙戌越後國言、新建二出羽郡一許之云々、同五年九月己丑大政官議奏曰、建レ國辟レ疆武功所レ貴、設レ官撫レ民文敎所レ崇、其北道蝦狄遠、憑二阻險一實縱二狂心一屢驚二邊境一、自二官軍雷擊凶賊霧消一、狄部晏然皇民無レ擾、誠望便乘二時機一遂置二一國一、式樹二司宰一永鎭二百姓一、奏可レ之於是始置二出羽國一。また、同年十月丁酉朔割二陸奥國最上置賜二郡一隷二出羽國一、とあり。國造本紀に、諾羅朝(ならのみかど)ノ御世和銅五年、割二陸奥越後二國一始置二此國一、とあり。さて或書に引る風土記の文には、上古此地貢二鷲鷹之羽一故曰二出羽一といへるは、字になづみたるがごときこゆ、と見えたり。いではしのくになるべしとは、うべも考たれど、また陸奥國に後谷(しりや)越後ノ國の椎屋も同しかるべし。尻屋、本ト蝦夷語也、シリとは崎の事を云ひ、ヤとは倭人の詞也。夷言にはアイといふ、アイは箭の事也。矢の形してさし出たる崎なしか云ひ訛れゝば、すなはち皇國の語の矢となりぬ。うべも古言の多く夷に殘れり尻勞(しつかり)是も夷語にて同名ありまた扶桑泊リまた九艘泊とも云ひ、浦人こゝを日本のはてゝ常にいへりかゝる處どもは方土(くに)の端にして、みな、さし出たる地也。さる處は、海邊にはいと〱多かるべければ、いかゞあらむ。われ今按るに、國に保呂羽山あり、其山には羽宇志別ノ神ませり、そを天日鷲ノ命とまをす。また羽黒山あり、羽山(はね)あり、羽川あり、羽廣村あり、いづれも鳥の羽に義ありげにきこゆ。また阿倍統の家ノ紋に、檜扇の面に鷹尾羽(はね)うちゝがへのせたる圖

眞人山

は、鷲ノ尾二尻（一尻とは十二羽をいふなり）貢しさまならむとおもはる。また、紅の御鷹とて世にためしなき逸物も産たり、其名馬の産たりし舊地あり。そは其處に委曲に云ひ、また古歌に、みちのくのいはでのおくに養ふ鷲の其羽ばかりは人にしらるゝ。」なンど聞え、また續紀卅六天宗高紹天皇（光仁ノ帝を申奉る也）のみまき、寶龜、天應のころ、みちのくより此出羽ノ國にいたるとて、鷲座、栖座、栖石ノ澤、大菅ノ座、柳澤等の五道をひらき給ふ。そが中の鷲座山を、今々足倉と云ひて雄勝ノ郡に在り。いにしへそこに、褶白の鷲栖たるものがたりあり、そこには今も鷲のかゞ鳴くこゑ絶ずといふ。そはさまれかくまれ、いではは鳥の羽にゆゑよしありて云ひ出し名の、いちしろくぞ聞えたる。しかはあれど、そのおよびがたきふし〴〵あらむ。こを見たまはらむ人々說へもて、此かよわきふみでの力をそへて、つばさともなしたまへと、こひねくのみ。

こゝろあてに雪のいてはぢしるべしてかくもはづかし水くきのあと。

○ひらかのみたか

○出羽ノ國平鹿郡增田といふ里は、平鹿村いと近く、また眞人山といふ山の、そは麓わたりなり。麻當山、窓山、的山、圓山なンど書けり。此まとてふ地は、山の名、澤の名、村の名にも處

武則居城趾

清原武則の事蹟

々に聞えたり。さりけれど、この増田なる眞戸山は眞人山にして、いにしへ七十三代堀河院の御代、嘉保、永長、承徳の歳ならむか、清原武則の居城趾なりと俚人もはら語り、此山をうちあばけば、焼米、陶皿の破なッど出るさいへり。こは諸〱しき物語なり。八澤木の保呂波山の下ﾘ居ノ宮の祠官遠藤氏の家系譜ニ云ク、上祖は鎌足公六世孫藤原俊麿ノ五男遠藤藤九郎次郎勝親を創めとせり九代芳久。吉茂孫號ニ右近正ﾄ、吉茂二男遠藤助太夫茂俊が子也。康和元己卯年當山宮侍芳賀、鈴木、羽多、吉野、宇垣、保太、遠藤、久石、平瀬、佐々木、此十八に佐間、當麻、板井田、小友、上溝、星山、羽貫、星宮、是八人に四澤加勢をして遠藤、大友ノ依レ背ニ下知ノ山中騒動、依レ之清將軍武則公ヨリ和談ニテ鎭ル。大治四年己酉五月十一日行年七十四ニテ死リと見え、また十訓抄中ノ一ノ巻可レ存ニ忠直ノ事さいふ條に、後冷泉院後朱雀院御子の御時、陸奥守源頼義河内守頼信子鎮守府將軍を兼て、貞任、宗任安太夫頼時子を責けるに、永承の末より度々の合戰につかれたりけるが、天喜五年十一月に千三百餘騎の兵を發しておそひよせけるに、貞任等四千餘騎の勢を集めて、しうと金ノ爲行が河堝ノ柵にこもりて是をふせぎたゝかふ時、雪ふり風はげしくて、みかたの兵こゞへつかれたりける。上勢もこよなうおとりたる間、將軍のいくさ大に破れて死者數しらず。兵四方に散滿して殘る所わづかに六騎、長男義家、修理少進藤原景道、清原貞廉、藤原季範、大宅光任、藤原則明等なり。貞任が軍是を見て責寄せ、箭をとばす事雨の如し。然を防戰既に神の如し。若少の齡

にて大なる矢を射る、その矢に中たるもの、たふれふさずといふ事なし、云々。義家、光任等五六騎して命を捨て四方をかくる間、貞任堪ず引退く。爰に佐伯ノ經範といふ者ありけり。軍破れて後將軍の行方をしらず、逃ちりたる歩兵どもに將軍の有リ處を問ふ。貞任にかこまれて、みな遁れかたしといふ。經範天に迎て悲ぶ。はや將軍に仕へて卅餘年を經たり、皮命を失ふ時にのぞみて、我ひとりいくべからずと云て敵の方へかけ入りぬ。郎等ども二三人、同相隨てかけ入り、多くの敵をうち取て遂に打死ぬ。藤原茂頼といふもの有し、將軍の行方を知らず、疑なく敵の中にして死るよしを存じて、皮骨をひろはむと思ふに、男の身にては敵の陣へ入られじと、忽に頭を剃て行く間に將軍に行あひたり。且は悦び且は悲ぶ。將軍のくつばみに取り付て涙を拭ふ。出家いそがはしといへども、忠節の志シ尤感に堪たり、云々。（校訂者附記—天註に陸奥話記を引けり。略之。）貞任をうち得ざりけるほどに、出羽ノ國山北ノ住人淸原武則、一家の輩を引具しすべて一萬騎の兵を以て、康平五年七月將軍に加りける云々、と見えたり。山北（やまきた／せむぼく）は山本（今云ふ仙北郡）平鹿、雄勝の三郡に亘り、古書、山北三郡と書（みえ）たり。さりければ、八澤木の保呂羽山にもいと近きこの眞人山は眞人山にて、其淸原ノ眞人武則の栖家（すまれ）たればこそ、山北ノ住人とは書たらめ。此眞人山の中に舊道のありといふは、康平、治暦のころほひより、元暦、文治の世なンどまでも往復せし地にや。其ころより錢掛櫻、また三貫櫻といふ處あり。其由來

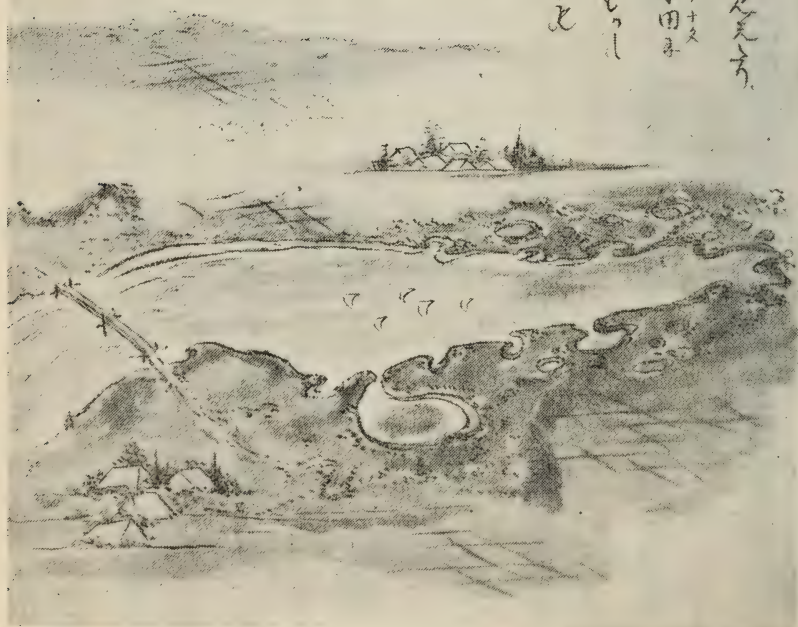
白腑の鷹

御鷹紅

は、判官義經、贋山伏と成りてあまた此處休ひ、櫻を折て、そのおひだみ三貫とられしは、櫻の神靈し事は筆のまに／＼にも載れど、なほ奥にもまた云ふべし。其古道、三貫に續キしといふ。此眞人山にて、白腑の鷹を網懸して貢にせし物語あり。また一條院の御宇、此平鹿、郡より逸物の巣鷹を貢りしかば、やがて其鷹を出羽と呼給ふほどに、その御鷹蒭て、いづこにか去ぬ。たづねもとめさせ給へど、さらに知る人なし。ある夜帝のおほむ夢に、おのが母鷹を鷲に搏られたるをうらみかなしひ、其鷲を捕り咋て、殺し來つると見おどろかせ給ひて、その夜明ルを待て柵養をみそなはし給ふに、雪をあざむくばかり眞白なりし大鷹の、身寄掌前血にまみれて、架居にかゝりてぞありける。帝、靈鳥と叡感のあまりに、身をあけになしていではの鷲をのみ捉るてふ事のためしやはある。」と御製をたまはりて、その鷹の名を、紅と稱給ひしとなも云ひ傳へたる。また、親を捕る鷲をつらさに心あらば鷹や知るらん鳥のおもひ子。」なッどもよめる歌あり。光俊卿の歌に、出羽なる平鹿のみたか立かへりおやのためにはわしもとるなり。」其御鷹ともゝ、此山よりや產出たらむかし。倭訓栞に、たか、云々、蝦夷にてとこぼちかふと云ふ。倭名抄に、黄たか、わかたか、一歳の名也。大なるものを大鷹と稱す、白きものを白鷹と稱す、三歳の名といへり。大鷹、朝鮮より來るとぞ。天武紀に、東國貢二白鷹一と見えたり、萬葉集に、矢形尾の眞白の鷹をやどにすゑかきなで見つゝ飼

くしよしも云々。上古の名鷹は天智天皇の磐手、野守リ、延喜御門の白兄鷹、一條ノ帝の鳩屋、袙、鶚、後一條ノ帝の藤花、韓纆、山家等也。月ノ輪の鷹といふは、愛宕山腹大鷲峯の月輪寺にて網せし也。今下野ノ國宇津ノ宮より出るものに、必逸物ありといへり、云々と見えたり。また木の下狩リといふ書にや唐巒といへる書にや、袙といふ御鷹は、出羽腹の鷹なりしよし見えたり。韓衢といふ名鷹は、兎路にて、から巒を抓もてたちたりしよりの名也。その鷹も出羽の產也ともいへり。なにゝまれ此眞人山は、いと〳〵古く名たゝるところ也。なほ、その舊道も分ヶ登り委曲に尋ね見まほしけれど、身は老ぬ、ことにかくびやうこゝちにて、やゝ此山口を極たり。

○古志陪野ノ沼

○淺舞の里近く、こしべの沼といふあり。五味川邑の卯辰の方に中りて、沼下タ村の東にある也。沼は南を上ミにして上ミの廣サ六七尺、その深サ量り知る人なし。古川の跡也といへり。此沼の長サ一町斗リもあらむか、沼岸に小沼多し。その大サ、あるは五尺、あるは六尺、其の形傘の如く、また馬盥、また匜盤のごとく、さゝやかなるは菅笠のごとく、丸盆のさませり。そは、池の面に荷葉の浮キたるがごとく、ひし〳〵とならびつらなれり。此沼にあやし

白帆の影を見る

き事あり、いつも五月五日の旦白キ水氣一筋たちのぼり、雲のごとく空にて散りぬ。また、白帆の影いづこよりとなくうつりて、其數二ツ三ツ、あるは五ツ六ツもうつる事あり。此帆かけ沼水にうつるを見る人、命長からぬよしをいへり。藍川氏ノ著る譚海に、備中國舟岡山といふ處の田を植る時、田の水へ旭の映るころ、山の形映りて帆掛船の二ツ三ツも映る事あり。今朝は二艘出たり、三艘出しなど、處の者が申ス也云々。」と見えたり。備中ノ國舟岡山は、其水田に舟の映れるよりの名ならむかし。きびの船岡山のいな田も、また出羽ノ國平鹿ノ郡のこしべの沼も、おなじさまなる事もありけるものか。

○錢かけざくら

三貫櫻とも

○此の櫻の事は櫻狩リ、また、筆のまに〳〵といふ書にも誌たれど、いまだ其地をもふみも見ず、たゞ、人のむかし物語リ聞しのみにて、三貫櫻のありし處に田井を堀りて、そを三貫堰といふとしるしたれど、三貫堰は仙北郡もと山本といひて古名山本郡なりに在り。また三貫櫻、また錢掛櫻といふは、此平鹿ノ郡平鹿村の眞人山陰、鍋澤といふ處の寒泉の奧に在り。九郎判官義經假山伏と

義經の密行

やつれて、人々をいざなひ陸奧國にくだりけるとき、此山路にいとよき櫻の咲たりしかば、人みな此花を見やりて、しばし笈をすゑて休らひ見つゝ居るに、めづらしの花やと小童の此

三貫の錢を代償に

花ほしがらせければ、氣ばやき武藏坊辨慶花の本トにのさ〳〵と行キて、大キやかなる櫻の枝を折り來て、いざ行ク〳〵旅の心やりに此花を見なむ、さらばとて、金剛杖を突立て出たつをりしも、櫻の枯枝のまたぶりを杖としすがりて、その齡八十歳ばかりなる翁のよろほひ出來て、こはいかに客僧達よ、主のある櫻を、おのが心のまゝにかくは折りぬすむものか、我が命と朝夕見つる櫻をと、なみだをはら〳〵とこぼして、つき立しまたぶりの杖をうちふりてよゝと泣ければ、居ならぶ人トら、其またぶりの杖もてうたるゝよりもほね身にこたへて、こはすべなうしなしたりと打わぶれど、翁は耳にも聞キいれず云ひはらだちて、さらば償したまへといへば、其時白銀の孔方(たから)を笈の內より一貫(ひとつら)とうだしてやれど、見むきもせで、あな客(きたな)の花盜人よとあざわらへば、また一貫の錢(たから)を副ふれば翁うち見て、かろらかなる泉幣(たから)也。其代員(つくなひ)にてはと、いよ〳〵諾(うく)べうも見えねば今一貫ノ泉をいだして、みなひんぐうの山伏ども也。此償にてゆるしたうべと武藏うちわぶれば、いとかろきおいだみながら、ゆるすべしとて、三貫の錢も、折り來つる櫻の枝も、翁がよはがたにうちかけていにき。翁か家はこの山かげにやと、人々よぢのぼりて見れば、錢もさくらも、その櫻の高枝にかゝりたり。されば翁は、此櫻の神靈(かみ)にこそありつらめと、人々恐(かしこ)み歸りぬといへり。されば錢かけ櫻、三貫櫻の名ありといへり。

○鏡ノ社

出土の古鏡を祭る

○此社は平鹿郡沼館ノ郷家衡か古柵、小野寺統の城跡近き新町といふ處の、鈴木市郎左衞門といへる大工が家の庭中に齋れり。また大日堂ともいへり。其ゆゑよしは、近きとし文化二年乙丑ノ三月のなからばかりの事になん、鈴木ノ巧市郎左衞門、耕のため田の面に出て、並ての名は千苅田といふ田地、そこに、弘法佃といふ字ある處より穿得るといふ。其鏡を神體とはまをし奉るなり。そは、さし亘リ四寸八分の花菱鏡の古鏡也。此鏡の面に九尊の佛形を彫たり、其さま蓮の花の花の內に、上ヘに藥師如來、中に大日如來、下に無量壽如來、そが左右に冠師菩薩、釋迦如來、文殊𦬇、觀音𦬇、彌勒𦬇、普賢𦬇、此九柱みながら、はちすの花びらの容に座り。そのぶちぼさちの軀尺二寸斗り。鏡の背には風鳥二翼を鑄畫、そのめぐりにいと〳〵細字に、『永延三年八月三日　幸以奉始八莖九尊壹院　願主傔丈伴守光女旦主　伴希子願也　佛師天台僧蓮如』とぞゑりたる。文字の細少にしてよみときがたく、いにしへの寺院跡なッどにやあらむか。弘法作りと呼ぶも、空海開基の寺跡に水田あればしかいふか。今も畠の字に某蒔、某蒔、田には、なに作り、くれつくりといふ字ども多し。その時世を考ふるに、六十六代にあたりたまふみかど一條院の御世にて、永延三年己丑のとしは、年號かはり

鏡面に佛像

永延三年の銘

て永祚元年になりぬ。前太平記卅巻將軍出陣のくだりに、去程に諸國の軍勢、皆催促に從て悉ク馳集りける。其着到を算るに、統て三萬六千餘騎とぞ注しける。さらば出陣あるべしとて、寛治三年六月十六日、前後の軍を備へ諸軍の手分を定め將軍御馬に召れけるとき、源氏譜代の郎等大宅ノ太夫光任、年八十二にして腰は二重に成り杖にすがり、從者に手を牽れて罷り出て、御馬の轡に取りつき泪を拭いて申シけるは、年の寄るといふ事は哀しくも侍るものかな。往し九箇年の戰ひには、片時の間も御父子の御馬を放るゝ事なく命を際とこそ契り進せつるに、云々。手を合て將軍を拜み、さては光任は果報の者也。主君二代に仕へ進せ斯ありがたき上意を承る、先立チし人々は浩る勇々敷事をも見たまはず、草の陰よりぞ羨う思はるべし。愚息にて候もの、多くの人の中より撰み出され傔仗に補せらるゝ事、是、併ながら君の厚恩也、云々。光房慥に承れ。そも〳〵傔仗といふ事は、奥州の國司たる人傔仗二人を給はる。重代の武士の中にて、其器量を擇て將軍の判授ゥの官也。然るに二人の傔仗に一人は伴ノ次郎助兼、一人は汝を撰はる。是莫大の御恩ならずや、云々と見えたり。其永延の年より寛治のとしまでは、やをら百年まり經ぬれど、傔仗伴ノ次郎助兼は傔仗伴ノ守光の後胤なッどにや。こと人にや。なほ知れる人にたつねとはまほし。

○觀音寺物語

佐々木氏の夢に

四塚發掘

久安の經筒

○平鹿ノ郡上溝ノ郷晝河村に、佐々木治總兵衞といへる翁あり。民家に栖家(すめれ)ど、むかしはよしある人の後(すゑ)といふ。此翁がある夜の夢に、觀音寺の古跡山に、四塚とて古堆四ッあり。其塚三ッの堆に、鮮(あざらけ)き方頭魚(きみいを)三尾あり。こは、あやしともあやし、山に魚ある事よと思ふをりしも、白髮うちわけたる、さしいと高き老翁の竹杖にすがり來て、此處を掘るべしと、杖もて塚をさしつゝきけると見て夢さめたり。こや、まさしき夢のみさとしにやあらむと、人をいざなひ其山にたづねわけ登り、四ッ塚をもとめて、文化六年己巳ノ七月廿七日、鋤鍬の力まかせに若男等に堀らせければ、一の塚の底は軟岩(あまいは)てふものにして、其甜石を穿(ほり)うがちて見れば、堆の内に紫銅の經筒の如なる器に同形なる蓋ありて、その筒のめぐりを、河原の小石を集(も)てひし／＼とつめて、そが上へに兩刀(ふたふり)の横刀(たち)をよこたへ並べて、平石を蓋て土を堆く埋(かけ)てかくしたるなり。その太刀はくちにくちて、手に取れば、みなからこぼれはてゝ其形としもあらねど、鞘の漆は色も變らず、むかしのまゝに存(つこ)りたり。しかして小石をあばき除(のけ)て、其筒を曳出して土を拂ひ、かくて筒の蓋を去(さ)れば、筒の中に濁醪(にごりさけ)のごとき濁水の七八分に充たり。某水ならむ、ものゝくちて化したるものかと、人みなうち寄りうちのぞき見て、そが

中にある人ひとり、こはいかに、右縄の影の、右にそのまゝうつるなり。○左縄糾て試よとて、傍に生ひたる淺茅、小芒なンど手ごとに刈りて、左に縄索て筒の濁水にうつせば、左索は左にうつりぬ。群れいたりて見る人の衣も右衽にうつれば、水鏡はみなしかる物にやと、小渠の崖、田の面なンどに立臨てうつし見れば、しからず。こは、いかなる水ならむ、此には、きはめて貨なンどの入りて有らむかとあやしみ、水うち盈て見れど、此銅器にことなることなし。銅壺外に『久安五年己巳五月日』としるし、傍に『僧良與』と二重文字に彫たり。其水は何の水にてまれ、右衽の襟にうつり、右索の右にうつれる影こそ、あやしともあやしの物語りなれ。いかなるよしにかあらむ。また一ッの堆をこぼち見よとて、れいの夫等鋤鍬捕りて、たちまち堀り崩てば一ッの瓶あり。瓶の内に前のごとき、いやまして大なる銅器あり。此銅器の内に、朽たる麻衣の形せしものあり。此甕の内の銅壺のめぐりは、塊の如くなるものしてひし〳〵と積たり。横刀は、三ッの塚にみながら埋みたるよし。その影の眞にうつりしは、いかなる水にて、あやしき事もありけるものかと、見し人々の語れり。按に、其水のゆゑよしこそしらね、銅壺はいにしへの經筒ならむ。いにしへは佛經のみならず、書はみながら繰〳〵と巻キし也。さりければ書籍をくると云ひ、くり返スなンどいふ。其經典を竹帙とて竹簀もて巻キ収め、また朝夕によむ佛經を銅筒に差内て、柱などに掛けをきしものと

觀音寺舊跡

定額の觀音寺

おもはれたり。古き寺には經筒存りて有もの也。そを見て好人、今花瓶に摹て、經筒形とて世に花生あり。此塚に埋に、あらたに紫銅の管を製作なしたるにはあらざるべし。久安五年己巳五月日僧良與と刻たる經筒に某容て、觀音寺の僧侶や埋たらむものか。中古の事にや、尾張ノ國甚目寺（いにしへははなめが浦と云ひし處也）のあたりの田の中より、大同某としとか彫たる經筒出しが、みな碎たるに大同の二字存りしを見しと、ある老僧の語に聞えたる事あり。此觀音寺は、五十六代にあたり奉る、清和天皇の御世の觀音寺の舊寺ならむか。此觀音寺の事尋ね知らまく、最上、田川、由理なンどを問ひもとむれど、觀音寺といふ佛刹はいづこにも〳〵新古寺にて、かぞふるいとまあらず。古跡にも、田地田畠の字にも、觀音寺なンど呼ぶ處いと〳〵多し。また秋田ノ郡の妹川ノ邑に、貞和三年の碑文ありし地を觀音寺の跡と云ひ、其邊より祝瓶の古きを堀り出たりしかば、此地ぞ、そのいにしへの觀音寺の跡ならむと、ひたふるおもひ定て、予『雪山踰ェ』といふ一ト卷に記載たりしが、こは、いまだしかりし筆の謬也。かく此度、この平鹿ノ郡上溝郷の觀音寺の古跡こそ、其尋る觀音寺ならめ。三代實錄ノ貞觀六年の條に、以出羽國觀音寺預之定額」と見えたり。また、同八年九月八日庚戌、以出羽國瑜伽寺預之定額とぞ見えたる。そは、おなし秋田ノ郡湯香派といへる溫泉の邊に古寺の跡あり、そこならむかと考得たり。また此觀音寺こそ、まことに貞觀の御世なる古寺ならめ。貞觀の

文化六年己巳七月二十日
甲
乙

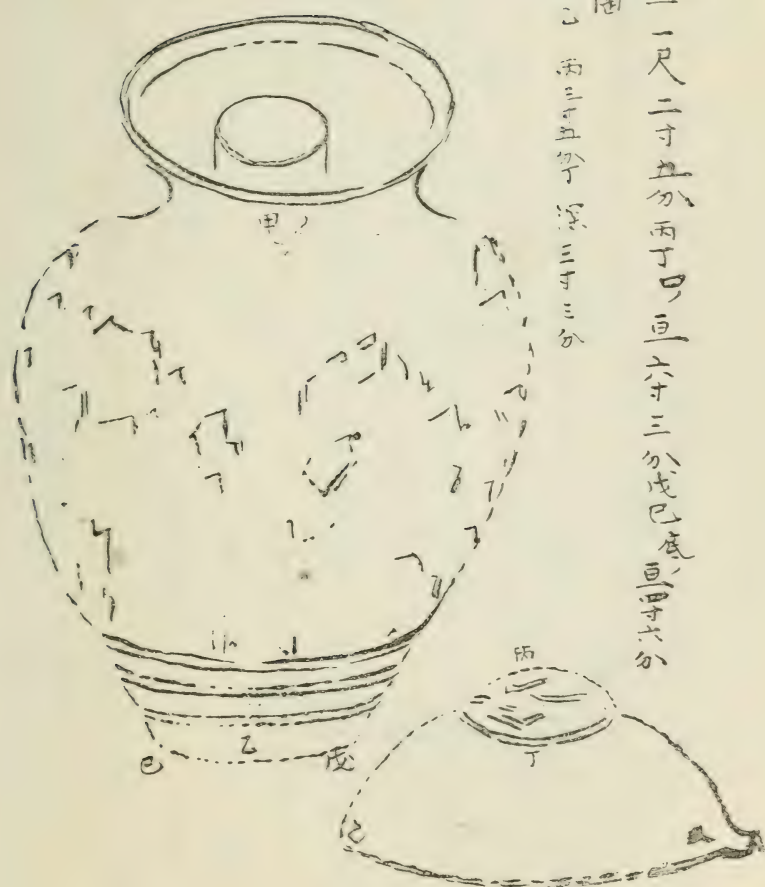
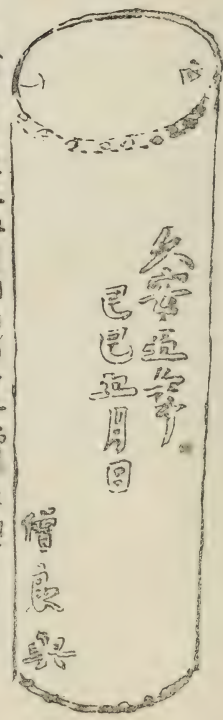
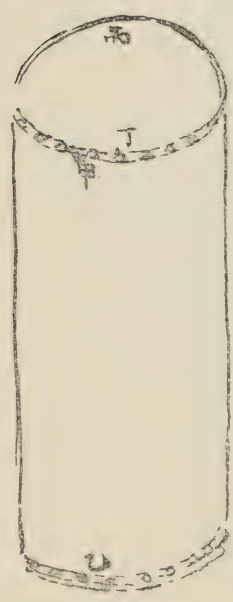
甕高
甲乙ノ亘一尺二寸五分丙丁ノ亘六寸三分戊己ノ底ノ亘四寸六分
蓋片口陶
甲六寸九分乙　丙三寸五分丁　深三寸三分

此紫銅の筒も
鍍金の内より出る
是も筒は文字
あり肉に塊の
ごとき等しきもの
あり

甲乙の径七寸壹分丙丁四寸五分

甲 観音寺村
庚
丙
丁
乙
戊
甲

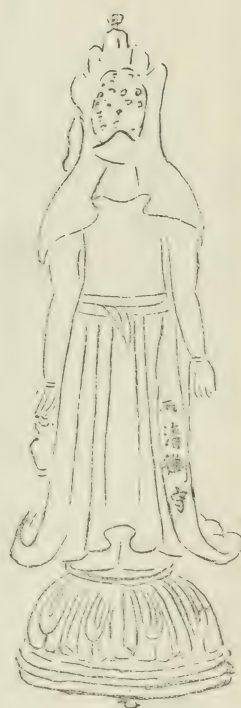
「定額」とは

藤原正衡草創

としより久安のころまでは凡二百八十餘年を經たれど、それをもて是が證(あかし)とせむ。定額の事記錄(しるし)たる書ども多し。徒然草に、諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺と云事延喜式に見えたり。すべて人さだまりて工人の通號にこそ。」と見ゆ。また鐵槌の記文に、僧いくたり、寺いくつと定たる詞なり。」云々。また、女官の下に女孺いくたり、掃除し油さす。」なンど見ゆ。また續日本紀文武天皇ノ大寶元年八月、皇年滿者不レ論レ官不皆入賜レ祿之定額。」また弘仁式文ニ曰、太政官府禁斷京職畿內諸國私作伽藍事、奉釋定額諸寺其數有限。」云々とあり。また十八史略第七卷、元耶律楚材言治定天下賦稅云々、出絲一斤以諸王功臣湯沐之賜鹽每銀一兩四十斤永爲定額。」とあり。いづれも數の定たる事なり。此上溝の觀音寺村に、そのいにしへありし觀音寺も、貞觀の御世に在りては定額に預りて、いとも〳〵重き大寺の數にこそ入りつらめ。また、むかしは此あたりも驛路(うまや)つゞきの鄕ならむ。なほ後の人の考をまたむ。

○大義山正平寺

○大義山正平寺は平鹿郡橫手に在り。此寺はそも〳〵藤原朝臣少館三郎正衡草創、明永山大義寺也(奥洲中尊寺末天台宗也)。今改て大義山とし、正衡の文字を假て、正平を字音によみて正平寺とし、

觀音像由來

禪林となる。此寺に秘佛の十一面觀音あり、紫銅ノ鑄佛なり。其高蓮臺より佛頂まで亘六寸

七分、佛形向背ノ方佛衣ノ左の襞積に、清衡守と三字を彫たり。考に前九年合戰の後、源頼義朝臣武則眞人に、安部貞任が妹なる、亘理權太夫經清が妻に二歳の男子を副て、箕帚の妾とし給へとて武則に賜ひける。此男子やがて成長して、寛治の戰ひのとき義家將軍の幕にぞ召れける。藤原清衡是なり。後に清衡將軍武則に二子あり、武衡、家衡といふ。武衡は山本ノ郡金澤の柵に在り、家衡は平鹿郡沼柵に居館よし。清衡ももと增田ノ清將軍のもとにありしかば、かゝる念持佛もこゝに殘りけるものか。

○同横手上根岸町士家上遠野喜太郎秀英家藏

○八幡太郎義家將軍ノ御鏃　甲乙、此亘一寸二分　丙丁、此亘三寸二分。

此鐵工(かねち)は平安城光永が作(うち)たらむといへり。光永は義家朝臣軍中にいざなひたまひたる鍛工なりといへり。

○

○雪のいではぢ　彌澤柵　山吹枕

及び

○いなぼのまくら

と題する章(「雪の出羽路平鹿郡」の内四巻五巻の巻頭と同文)あり、之れを略す。又

○平鹿郡雪出羽道目錄

あり、之れを省く。完成本に比するに、巻の名を異にし、章の名を異にするあれど、要するにその稿本にて、同じく十四巻になつて居る。(校訂者記)。

○

○増田村　里長　伊太郎

○益田、升田、鱒田、増田、眞洲田なンども書キし事ありつるにや、しか記錄(もの)に見えたり。同名

比良加の美多可

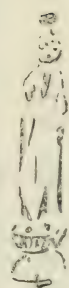
益館あり

豐蓮玉を得

六郡の内にもあり。また、こと國にも飛驒ノ國益田ノ郡に益田あり、近江ノ國淺井ノ郡に益田あり。ひだの國には萬之田と云ひ、あふみの國には末須太と云ふと倭名抄に見ゆ。六帖ノ歌に、戀をのみますだの池のうきぬなはくるにぞものゝみだれとはなれ、とよめり。續紀二十五に、天平寶字八年十一月戊戌、外從五位下益田連繩手、李忌寸元環、並授從五位下、と見え、また同じ紀に天平神護元年に、越前國足羽郡人從五位下益田繩手、賜姓益田連、と見えたり。また、益館といふ舊地ありといへる人あり、其地は近き世、增田ノ城主土肥治郎道近と云ひし人ありし事、天正ノ軍談に見えたり。また增田ノ城主最上義光郎徒長瀞內膳といふ人居城を、そのゝち、前澤筑後入道受取りて今宮攝津守居りとなむ。その增田館や益立などを、しかいへるにかあらむ。續紀卅六十二丁巻ニ云ク、寶龜十一年三月云々、癸巳、以中納言從三位藤原朝臣繼繩爲征東大使、正五位上大伴宿禰益立從五位上紀朝臣古佐美爲判官、主典各四人、と見えたり。また、甲午、以從五位下大伴宿禰眞綱爲陸奥鎭守副軍、從五位上安倍朝臣家麿爲出羽鎭狄將軍、軍監軍曹各二人、以征東副使正五位上大伴宿禰益立爲兼陸奥守、とあり。これなむ、益館の省語をしか云ひ傳へて益田の名はありけるか。また、土肥の地はいと〳〵古き城にこそあらめ。さりけれどその世には土井氏ならむかし。安永七年戊戌ノ秋八月某ノ日の事になむ、古柵の東に封疆ありて、其土堤の上へに神社あり。そは菅原理

定基法師

初に升田か

右衞門が上祖より齋奉る稻荷ノ社なり。この社地のいと迫(せば)ければ、こゝ處にうつし奉らまく
また、此封疆打墾(ならし)て畠ヶともしてむと人々よりて鉏鍬たつるに、いと大なる級木(まだのき)の切株あ
り。まづ是を掘り取らむとて掘りに掘れば、何ならむか鉏にあたるものあり。ほりとれば
紫銅の小佛一軀、土𤬪(つち)ノ玉一顆(ひとつ)出たり。また大硯の形したる石出たり、柔(やはらかに)石して破レたり。
其石面に、「本地彌陀忈(そん)レ奉祈氏神八幡宮土井判官武運長久　別當延祐敬白」と彫り、此石の
背に、豐運玉者、定基法師入宋時、尊像寶玉之一度禮握者、男、開福豐除諸難、令女安產　長和
五年十月日」とぞ刻たる。長和五丙辰年は六十七代の帝三條院の御宇也。定基法師は三河ノ
守三儀太夫大江定基ノ卿也。妾(をむなめ)力壽女死(みまかり)し後薙髮(すけ)して、入宋(もろこしにいり)て飛鉢の法を行ひ、天台
山に登りて石橋を渡り給へり。こは、寂照上人とて謠曲(うたひもの)にも作りて、あまねう世に知れる
人也。また、歲の始の万歲も萬歲樂に准らへ、鳥追の唱歌(きうが)をも國栖歌になずらへて唄はせ給
ふ。万歲も、鳥追のべろ〳〵唄も定基卿の作也。大江家、土井氏にちなみ有ものにやありけ
ん。なほ考ふべし。また此增田村に升田とて、武佐升(むさます)のさまして四方(ましかく)なる小田に、畔を弦の
如に作りて、さながら弦懸升の形したれば、升田の名はこゝぞ創めなるといへり。其蔓掛小
田こぼれたりしかば、今は增田と書るは、前(さき)にはいや增るよしをもて幸(さち)なる名也と、公より
名附たうばりつる物談あり。うべなることから、考ふに南比内に扇田村あり。此里田に、扇

碑石表文
奉地弥陀尊
奉祈氏神八幡宮土井判官蔵運長久
別当田延祐敬白
平鹿郡俵田
○菅原理右衛門家蔵

銘石摺文

豊運玉者寂基法師入宋時
為像宝玉悶之宝玉一度礼握者
男開福豊除諸難令女安産
長和五年十月日

火煉（ワキ名）石の書録砌の志あり石の周巡（メグリ）三寸〇石の長ヶ丁度七寸二分横広さ三寸二分
厚一寸也〇銘石表之ネ〇本地藥師仏と云ふべく尊形古文字存しむ。錦紙金泥の
言経典なども見えず大江定基三河守たりし出家して寂照上人と云
入宋せし人也謡曲（ウタヒ）にも作られし高名高き人にてしてす

田とて扇の形したる小田あり、それに、要代(かなめしろ)とてまた小田一枚ぞ副(そひ)たる。これ、おのづから產(なれ)るより扇田の名におへるか、亦後ﾁ人に作るものか。山本ノ郡檜山に近き處にも扇田村あり、おなじ名もいと〱ありける。

郡邑記々錄

〇享保郡邑記に、增田村家員三百三軒、村始不知。南ノ方古城あり、西東百五十間斗、北南百三十間斗、土居築地跡有リ、土肥相模守道近ノ居城也云々。羽林左中將君遷封ノ時、最上より長瀞内膳城代に居る、前澤筑後入道藝球受取也、漸ク東將監義堅を居しむ。按ニ元和六年諸所ノ要害ノ城破却有ける、此時此城も破却有らむ不審。東は雄勝吉野村境、道は石橋と云處にて境、夫レより大川にて向ふは同郡荻野袋村、熊野淵村と田子内川にて境、山は麻當黑尊佛岩と申處にて、雄勝郡ノ吉野村山と境、と見へ、支郷關ノ口村家員八軒、本田在所、本田堰、下堰と云近處故、關ノ口と唱也。藤左衞門村同三軒、藤左衞門と云者村始故名に唱也。福島村家員八軒、慶長年中古開キ起し始ると見えたり。

增田十文字

十五野の狐

〇增田十文字村、古ト十五野とて大なる原中に、横手、湯澤の驛路、また淺舞、增田ノ郷へ往復の衢にて、十字街道なれば人もはら增田十文字といふ。此野にあやしの狐ありて、十五歳の童草刈りに出しを、いと〱みめよき少女の十三四歳斗なるが出來て、此十五の男の手を引キて大なる家にいざなひ、おのが夫として月日を經るほどに、男ノ子(こゞ)一人もちて、あが佛とおもひつるを、ものにさそはれて行方知れぬと親ごもなきかなしひ、ありとある神にいのりまをせば、其年の

暮に、ふと來て門に立ぬ。親ども夢うつゝかと、よろこびのなみだに袖ぬらしたるとかたれり。その狐なンどを神と齋ひけむ、俵の木明神、喜藏明神、大杉ノ明神とて稻荷の社あり。こゝを十五野原といふゆゑよし、しか〳〵。また旅人の、雪吹に、そこと行方わいだめなうふみ迷ひ、また醉たる人なンどは、あしもしどろにこと路にふみ入りて、こは狐のわざならむと、おのがきつねのさそふもしらぬともがらのために、增田村の通覺寺の閑亭ノ主人天瑞師、巷に石の猩々の形を刻みするゑて、うべも酒に醉ひしれ、また、さならぬとも行くれたどり雪路なンどにふみ迷ふものあれは、その人々にしめしもて、『猩々の左リは湯澤、右横手、後ロは增田、前は淺舞。』といふ戲れ歌を、其石に彫たり。世の恒なる傍示杜と事かはれば、往來人口號もて、そを童まで能知れゝば、猩々に成りつる人も猩々の德をおもふ。さりけれど近き文化十四年丁丑ノ春、伊太郎といふ者此辻に創て家一ッ作りて茶店を營みければ、行くれ、雪吹に迷ふ旅人もやゝ力をうるほどに、かくて文政二年己卯の春吉藏といふが家作り、その年の秋亦金助が家立、また淸介、正七、松之助、久太郎、新太郎なンど家ひし〳〵と立ならべ、家は九戶の村とはなりぬ。

○石像地藏士　基座に寬永五年巳七月廿四日施新ッ古内村彌兵衞、治兵衞、喜左衞門と彫たり。

六月廿四日は祭日にて、廿三夜はことに賑へり。道中記にも、增田十文字地藏權現とそかい

のせたる。

増田の肆坊

○増田ノ肆坊は本町東西通ふなり田町南北に往來す新ン町東西に往復す中カ町南北往復七日町同上四屋小路東西往復上ミ町中町より七日町上町と續て中に小路あり是を七町といふ也。

○市日は古ト三七ノ日たりしが今は二五九に定りて、本町、田町、中町、七日町、上ミ町、此五町ぞ肆ぬ。支郷三ケ村。

○關ノ口村

支郷關口村

○關口は、凡いづこにも關所ノ口をいへれど、此あたりにて關てふ事は、井堰を清濁唱へ雑て、關、堰わかで、堰の文字のむつかしければ關をぞ書クめる。此關ノ口、増田の南に在り、古ト家八軒、今は十戸あり。

○白山姫神社　祭日四月八日、齋主佐々木助之丞。

○平鹿村

支郷平鹿村

○増田の東に在り、家員古ト五戸、今八戸あり。水上は、雄勝郡田子内より落る十六ケ村組合堰也。郡邑記に、享保の頃は藤左衛門村とて、藤左衛門が墾し村あり。そこに藤左衛門を始め、九郎左衛門、清八とて家三戸ありしが、そはみな此平鹿村にうつり住て、藤左衛門村は今は轉退。そも〱平鹿村は平鹿ノ郡の創にして、雄勝ノ村の、後に雄勝ノ郡と成れるが如し。

此郡の考は平鹿ノ郡の最初に記したれど、今はたゞいさゝか此地に云はむ。比良迦は本ト蝦夷詞の比留迦を訛り轉り來りつるを、しか平鹿の字に作なしつるものにこそあらめ。みちのく津輕五郡の内に平鹿あり、秋田ノ郡井川ノ澤に晝鹿野あり。そも比留加はぴるかにて、良といへる蝦夷辭なり。また神武紀に平瓮あり、そは神武の陶也。また虫にも比良迦あり、また田びらかなど云ひ、さならでも、ふみものにひらか木履あり。平鹿、平賀ことなれど、唱ふはおなじさまにてその名多し。平賀氏あり、世にいふ三傑の平賀三郎朝信は、平賀武藏守義信ノ男也といへり。此平鹿村は比流迦の轉語にや、神代の陶笥制作て貢し地か、なほ考ふべし。

支郷福島村

○福　嶋　村

○福島村、增田の北方に在り、古ト家八軒、今九戸あり。享保日記に、慶長年中、古闢起し地に始ると見えたり。福島は清濁によみて、國々處々に多かる名也。越後ノ國蒲原ノ郡に福島潟とて、水ィ原と新發田と葛原などにわたりて、三里に四里の湖ありといへり。

○田　地ノ　字

○枯レ松、いにしへよき松のありしが枯レたりしかば、枯松の名におへり。しか此(以下缺)

月迺遠呂智泥

秋田ノ山
共五冊

寺內村にて

七月十四日
頭陀の腹

この春よりこのあたりをたつねわたりて、「水の面影」といふ冊子に寺內山のふるあとをたどりてかいあつめ、「麻裳の浦風」といふふみには、土埼の湊なるむかしいまの物語をしるして、このふみどもやゝなからなれば、いまだしか寺內に在りつるほどに、七月の十三日土埼の岩谷貞雅(さだのり)、けふ久保田よりの皈さとてこゝに訊(と)ひよりていへるは、那珂通博(みちひろ)のぬしのもとより、來なん十七日は大平山(そろちのたけ)によぢのぼりて、ひと夜居待の月は見なん。十六日は月蝕ありて、ふさはしからねば、月はそこにその日見ずとも、ひるつかたよりこなたをものして、人もいさなひ出たちいなん。かならずともになゝど、ねもごろにことつて聞へたる事の、あなうれしともうれし。去年の秋もその山の麓まではわけきはめ見しかど、そのころは雨の日をふりて、えよぢものぼらざりしことのくやしともくやしければ、ことしはふりはへても分のぼりなんと、心に契りし山のかひあるこゝちせられて、その日を待ほどに、かくて十四日になりぬれば頭陀(ずだ)の腹とて、亡魂靈齋(みたまほかひ)のゆふべより、家(やご)てふやごより贈りおくられもてわた

る、むし飯なゝど、くさ〴〵のものにとりぐしてあくまで喰ひて、あな腹滿（つはし）よ、吾は腹疾（やめり）と誰れも〱いへば、さはあらぬものすら、みな、そらはらやみをしてける事の今はならはしとなりて、けふは朝艸も刈らず、朝駒もひかず、あさ水も汲ず、朝飯も炊ず。誰がやどもいぎたなうみなあさいをして、朝戸明る人しもあらねば、ひるになりて手あらひものくふをりしも、通博の翁のもとよりとて、かの、みたけさうしのことを又もつばらかにふみにいひもて、なにがし、くれがしもいざなひいなん、その日なたがひそ。目長碕にてめぐりも會ひなんとぞかい聞へたる。

大平山へ

かくて十六日になりぬ。さをとゝひより野分めきてあらかりし風も、けふに吹なごみて、空のうちくもりたるは雨やふりこん、いかゞなゝどためらふほどに土崎より貞雅のいで來て、いざたまへ、とまれかくまれ契りし日なれば、いて、そのあたりまではいなんづとて、正家（まさやか）をともなひて旅よそひをしつゝ、人々のもとへ截幣おくりてんとてきざみとゝのへて、その帒にかいつけし。

誰かそてもぬさの追風ふきはらひ身もきよまはり山や越へなん。

旱魃の村々

かくて旭の岡といふ處よりして楢野をわけて、寺内の郷をあとに見さく燈臺松のもとを經て、西に郊埜（かうや）、東に萱岡といふ村あり。この兩の邑の中なる稻田の畝（あぜ）わたりをすれば、五月

山崎村大野氏邸

妙喜庵

の末つかたより雨のさらにふりもこなくて、田の面は剖て、畠ものはみなかれはてぬ。河水をくみてすぎはひ渡る村〳〵郷〳〵は、流れの乏しう行なやみ、夜るひる水のあらがひのみをして、なか〳〵のさはぎなり。いま十日も雨のあらずは命死なん、瓜、茄子、紅豆なンどやうの、おさゆさのあはせすらかれはてて、何をかくひなん。あな雨もがなと、男女、水乞鳥のこゝちに雨を哭きて、みな照る日の空を恨み、あふぎ見、ふしみ、話りつゝ群れ行ぬ。

ふる雨のめくみあらすはたなつものあをひとくさもともにかれなん。

とともにうれへて、鹿野雷電の田つら傳ひに板橋を渡り、寒野の路をたどりて八幡田といふ村にいたりぬ。こゝの村長にて、三浦氏なにかしのもとにしばしとて休らふに、土埼の湊に在る大野氏なにがしといふぬしのありて、ともにかたらひつれて山崎といふ村に來る。この村の大野氏順耿とて、門廣く栖なしたる屋戸あり、かのぬしのゆかりにて、あないして入りぬ。この宿は白坂山の西なる麓にて、鏡の澤水のしたゝりをうつして、はちす花さく庭の池水涼しう風吹かほり、砌の眞萩、とをゝに咲みたれたり。

あき萩のさかりのいろをうつしてはそこもにしきをしくかとそ見る。　正家。

その山碕になすらへて、妙喜庵といふかありし跡をめぐりて、前栽のしりなる小坂をのほれば、いたうたかき岡のありて、四方のながめのいとよけく樂しき處なり。こたびはことさま

に出て、桐生の岨坂（そはひら）のほとりよりたゞにくたる。

やかて又月に來て見ん影ふかくうつすかゝみの秋の澤水。　貞雅。

池めくり見つゝ、はし居しなンど時うつるまでこゝに在りて、

蓮葉のつゆもこほれてふきにほふ池のこゝろの風の涼しさ。

水口村

かくてそ水口（みのくち）村に來る、村なかを行水いと涼しう、うべも水の口の名は流たり。庵ありて、ふるめけるあみだほとけの、みはしらをおけり、そのゆゑよしもありつとか。鍛冶屋敷とてこの庵の上なる岡に跡あり。こは白阪氏の横刀、片刀をうたせたる、かなたくみが家のありし處といへり。此あたりはなにくれといひもて、物語ことくに多し、こはみな「水の俤」といふ、この春の日記に精（くはしく）そのせたる。

白幡の神祭

白幡大神宮とてこゝに在す神の祭りけふありて、しろたへの、ふたむらの布のみはたを高やかにおし立て、この神の御名のいちしろけん。人さはにまうでみちぬ。石階（みはし）をのほればすまひのありて、勝べきや負たりけむ、よゝと聲をあけて叫ぶる事やゝ久し。はた、ばくやうめけるのりものゝわざをしつゝ、手を叩てこゝらの人居ならびたるなンど、にぎはへり。この神の御社のそびらのかたに、船繫の樹とて大榎の一（ト）株ありたりしが、近きさし風に吹折られその根もくちたれば、その名殘ならん、さゝやかのこと木を今植つきてそたてる。

小菅野渡し

小（こ）菅野の渡りといひしもこのあたりとなん。千福（そもの）川の流の

むかしはこゝにて、かち人あなたの岸にたゝずめば川長(かはをさ)こなたよりそれを見やりつゝ、越(こす)かのと聲をあげて問へば、むといふこたへを聞て、舟さし出て渡したるといふ。その越(こす)かのの一言は、その世の渡り守りが癖辭なりしをまね傳ふるのまに〳〵、小菅野の渡りと今の世かけて、しかいふことにこそあンなれと語る。この事は「水の面影」のうちにもいひつれど、ふたゝひこゝにもいひつる也。やゝひろまへにぬさとりて、

まさやかのよめる。

瑞籬にけふよそひたつしらはたのなひくを神の心とや見む。

白阪の館跡

この神山の峠にのほれば、白阪の館といひしがありしむかしの跡あり、白阪右近大夫なにかしの榮へし處となん。山脚(ふもと)なるしら幡の神は、白坂の上祖の、大同のむかし齋ひたりしよしをいへり。むかしは川尻の祝(ほふり)か仕へ奉り、今は久保田のみやつこ、米町の三田梅吾郎が仕

天徳寺詣で

へまつれり。白坂山の南の麓に大寺の見ゆ、天徳寺といふ。いつも、けふごとに御靈社(みたまや)まゐりする日なれば、つねは寺の內の門〳〵いつくしうまもらひつるあたりも、みなゆるし聞へつれば、けふはとて男女、老たる若、みな此寺にむれ入りむれ皈るが、みちもさりあへず往かふを見やるに、南の方保戸野のあたりよりして、千町田の中路をとだへなう行つゞきたり。

鬼越山展望

おりのぼりて白坂館の趾をたどり、峯尾つゞきて鬼越へ山と名さへ恐ろしき嵩(たかね)にのぼれば、左に白駒、黒駒の杜りといふあり、麓の田の面にふせるがごときは二杜、又まぢかきは土埼の

浦輪、遠きは恩荷の嶋山、右に藤倉の山郷、松原山、天岡の柵山、あるは大平山など、なこりなう見へたり。やゝこゝもくだりはてて、

やまの名の鬼のしこ艸ふしなびき涼しくこゆる御代の秋風。

とばかりありて、四方に雲たち雨ふり頻りぬれば、あなうれしの雨よといひつゝ、うれしの雨にぬれ〳〵て道とく行に、茂りたる杜の見ゆるを若宮八幡とて、社もなく石積のみやところにして、馬沓のみをねきことにかくるといふ。八衢の神にや、馬の神にや。雨はつゆのをやみもなうふりぬ。村あり、濁川といふ。この邑よりは西に毘沙門天王の堂あり、それを廣田大明神とそ祭り奉るといへり。河づらをたどる〳〵、ゆく〳〵おもひつゝけたり。

若宮八幡

おりたちてえこそむすはねさゝにごり川瀬の波を渡るむら雨。

添川村に來る。湯澤山乘福寺といふ禪林、山際に見へたり。うぶすなの宮とて正觀音菩薩、如意輪觀世音の二菩薩を神と祭る、そのゆゑよしの多かるとなん。こゝにふるきみやどころのあり、杉生の神とまをして大名持命を齋ふ。いにしへこの神社は艮の方、こゝよりは五六町隔て山際の長田といふ處に在りしを、舊城回といふ地に、今はみやところを遷し奉る也。神垣の内は東西二十間南北五十間にして、天正のむかしまでは廿八石餘の米を寄られたり。今の社は、寶永四年丁亥のとしの夏五月にぞ建たる。そも〳〵副河の神の舊蹟は、い

添川村

杉生の神社

副川神社の蹟か

神主若狹正

つこにも〱、そをありと、あけつらひいひもてわたりて、今は山本の郡花の岳今は鷹岡山いふに、副川の神社とて保食神を齋ふとなん。仙北はもと山本の郡にして、ふるき村の印なンとには山北山本ノ郡ともあるてふ。その郡の神宮寺嶽のほとりに比賣神といふ地ありて、そこなんいにしへの副河の神ンみやどころにして、その跡もさだかに殘りてありとなん。うべなる事から、荘郡なンどは山を壃ひ河を界ふをもて、そのけぢめとも、さだめられたるにこそありつらめ。この添河の邑も、いにしへは山本の郡なりし事ぞつばらかにしられたる。又いつこにも〱古き神趾はあるべけれど、今まさに添川といふ村ありて、そこに齋ふ杉生の神こそ副川の神社にておはしまさめ。この神の神齋は夏祭りとて六月の朔の日、冬祭は霜月の朔の日をさだめて、一とせにふたゝびの神事ぞせりける。をやみなき雨にぬれこし、この神の御前にぬさとりぬかつきて、

零りしきるあめにみかさも副川の神に手酬の波のしらゆふ。

副河の神に仕へまつる神主がとほつおやより、三郎四郎、伊勢ノ守、伊豆ノ太夫、いまの古川若狹正家直にこそあンなれ。このやとにとひよりて湯づけくひ、中やごして休らひ出たつに、あまつゝみやうのものもあらねば、よねだはらの、なからばかりをやりて、かしらさし入れ、笠きたる姿のたれも〱ことなれば、見かはして、はとみな笑ひ、ふたゝびとて出て、湯澤と

仁別河渡る

大伴の坂

つるぎたひ

龍淵山正應寺

いふ村を左に見なして、仁別河を渡りて吹切野といふを行ほどに、　さだのりのよめる。

　ぬるゝともいとはて分むむら雨のつゆもいろある野路の萩原。

ひんかしに森あり、それに月山、羽黒の神を祭るといふ。そのあたりは雨雲たちおほひていとくらし。大伴の坂といふをくだりて、おなじ名の澤水ふかく、ぬなは茂り、うきふたぎたり。山坂の道のぬかりてあゆみもはてず、こしゐのゝぼるやうに、たゞしりにのみしさりて、杖を力に、からくして行に雨は猶ふりぬ。

　あさ露もはらひしものをなか〳〵に沾れて涼しき雨の山越へ。

と正家のよめり。此あたりは戰ひのちまたなりしと、そのむかしをもはら語りつ。劒平といふにのぼり得て、たちやすらひおりくとて、

　をさめます君か御代とてこまつるぎ平て弓づるの音なひもなし。

雨はつゆもはれず野はらを行ほどに、やがて刈りなんわさほなみよる山田のほとりを行に、猿田といふ澤のありき。

　汝れも來てあさるたの實やこきはまんふしこそなひけ雨の八束穗。

馬手に御嶽といふ神の在す森あり、この山路を分出ればおほ道になりぬ、八田村に至る。去年見つる龍淵山正應寺の下〻路を通る。この寺の開山禪師無等良雄の遷化ましし貞治元年

のむかしより、ことし四百五十年の忌にあたりしかば、文化八とせといふとしの冬十月の（マヽ）日、松原の龜象山補陀禪寺の和尙あまたをひいて法の會のありてのち、松原寺より杉の種苗千五百株に、十五貫の錢を添てそたうばりたる。こは此寺の、後にすりを加へられなんの料とかありつるよしを、人のかたれり。獺田の寒泉のあたりもくら〳〵になりて、雨さへいやふりぬれて、たどる〳〵目長崎にやゝ來て、去年よりもことひなつさひたりし嵯峨勝珍のもとにやどつきて、あなひさなどかたらひ、なにごともめやすくこゝろおちゐぬれど、那珂通博の翁は、いまだ音なひもなし。この雨にてや、たかひぬらんかしなど、かたらひつゝふしぬ。

目長崎村

嵯峨氏滯留

艸枕かりぬるやとにすゝむしのふるさとしのふ聲をこそきけ。　まさやか。

雨はいよゝ、ふりもをやます更たり。

十七日。この雨にさはりて、久保田より誰れしも、いまだいでこざりければ、やどのあるじとかたらひをるほどに、きのふのぬれ衣ほしとゝのへなど、人の情のあさからず。

やま〳〵を分こし雨のたひころもけふほしあへる宿のうれしさ。

盆踊り

かくて、くれ行空に雨のいさゝか晴れて月の爪にてれゝば、盆踊すとて白歯、黑歯に、赤きますらをやまじりけん、男女のこゑとよむまで聞へて、「そろた〳〵よ踊子がそろた、あきの

出穂よりよくそろた。しとうたふ。又笛吹、つゞみ、かねをならしつゝ、月更るまでさゝめきありくこゑせり。

月のまとゐ

十八日。きのふの雨もこゝちよげに晴れて、夕附行ころ那珂ノ通博の翁をはじめ、淀川盛品(もりたゞ)東市といふ樋口忠一音藏といふなンどいふ人々をもいざなひて來けり。かくて月のまとゐに更たり。いざねなん、明日はとくものしてんとて、

おもふどち旅寐する夜はくさまくら露もこゝろをおかぬ樂しさ。

月影にさしあててものかく人あり、たぞとゝへば、いはやのさたのり也。川せうようして今皈り來つゝよめりといふ。

めかれせすながめたのしきかは波もさはらて月のきよき小夜中。

といふ折句歌也。人も聞つやいなや、はなうち鳴らす枕多し。

目長崎出立

十九日。つとめて目長崎を七八人して出たつ。空のうちくもりて朝風涼しき、風張といふ處を行とてよめる。

あつかりしきのふにかへてあさとでの袖にすゝしき風のはつ秋。　なか　みちひろ。

名産柿、李

掘リ合ヒ、平ラ形タ、寺中(じちう)を過て寺庭(てらには)になりぬ。この村に柿、李のいと多く、李は今を眞盛りにて苑生(むの)ごとにこきたれ、これを千駄櫃やうのものに入れて男女のおひもて、久保田の市にひさ

くとて、道もさりあへず往たり。その處になれば、女ども木のもとごとにたちて長き棹してなぎおとし、したみこのごときものにひろふ。李は名たゝる柳田の、重三郎が苑にもまさりなん。

菅笠に手やはふるべきみちのへのはやしのすもゝなりそ木たるゝ。

稲荷村

稲荷といふ村に至る。正一位の宮とて、みちのゆみてのかたはらにその神のおましませり。この杜にとしふる櫻、としふる杉のたてり。

まさやか。

あとたれて幾世になりぬ村の名のいなりのもりのふりし神杉。

黒澤

いなりぶちをつたひ、左に幣澤を經て黒澤になりぬ。人の來かゝるに、やよ男、この路は、いつらをいつらへか行とゝへと、耳にもきゝれず鼻に歌唄ひて、あしもとく過行しかば通博見やり、うち戯れて、

事とへどさらにこたへずおのかしゝはらくろさはの人のねたさよ。

といへれは人々わらふ。このあたりは去年見しところなれば、道路のはかせがほにわれさいたちて人にかたらひ、勝手の神垣にぬさとり、貝喰(かひはみ)、一の堰の橋を渡りて皿見内、霜野、逆(サ)川に來て、

みちひろ。

瀬をはやみ西を東と行めぐりいかになかるゝ山川の水。

東光庵にて

ほうたき棒

八重山

山谷村になりぬ。邑長のもとにとふらひ、去年の秋一ト夜舍りし別より事なかりきやなゝど、ことゝひかはしてこゝを出て、土佐野平ノ村、野田ノ村を經て東光庵といふにつきたり。人々沓ぬぎ、あゆひをといて、しはしとて休らへば、あるしの法師水汲來て、これめせなゝどすゝめぬ。こゝは、みたけまうでの人ごもの來舍る庵とて、こゝら積つかねたる木枕のあるをさちなりとてとり、あるは肘を曲て時うつるほどに、嵯峨勝珍のもとよりますら雄三人に飯炊せ、なにくれとりぐして、これを峯までとて持せ來けり。やはら、ものくひはてて出たつ。庵の前に塚あり、この春童の身まかれるをこゝに埋して、ほうたき棒とて粥杖めけるものをさしたるが、彩も雨露に落て、そのさま蝦夷の木幣てふものにつゆことならすして、蝦夷龕靈を祭る、おきつきにひとしかりき。

我も又ともにかたらへ莓清水むすひてすめる身そやすけなる。

と、ほうしの水汲あくるを見つゝ、うらやめる栖家とて通博のよめる也。去年宿りし一本ゝ杉ノ村を右に見やり、洲輪の杜を左に、山河幾瀬か渡りて八重山といふにいたりぬ。近きころまで、こゝに山里のありしよしをいへり。

分そむる雲の八重山ふもとにてこよひはみねに月や見なまし。

右に黒印溪とて杉の林あり、あふぎ見れば、峡によこたふ懸樋あり。此水は過こし土佐野平

中平の鳥居

山神の手向

あま池

一の鳥居跡

に流れて、千町の面にひくとなん。

通博の、

よちのほるみねにこゝろをさきたてていつか彌山の里も過けり。

中平といふ處に鳥居あり、大平山の額は雪花齋國豐といふ人の手也。こゝより乾の方に吉陀美溪、瀰頭君樂、牟通地澤、柯岐山、かゝる四の山は、麓の、はたまりよつ（二十四）なる村より杣たつとなん。ひんがしの岨に堂ありて、千手觀世音の石像を齋ふ。邪玖溪といふ山中に大なる桂の樹あり、此木に、もぎ木の枝をあまた打掛たり、これを山の神の手酬といふ。こは陸奥山にもところ〳〵に在りて、懸想しける人をねんじて、しかうち投て係る、そを鍵掛といふ、それにこそあゝなれ。處によりてそのゆゑよしもかはりけるにや、又けさうしける事をひめかくしていふにや、手向の神のふることもゆかしかりき。大松澤といふを經て油畑といふ名あり、ひんがしのかたに長瀨澤、又杙溪といふあり。このさんけ溪の奥山に、澐池とて大なるうなでのありたりしが、蚒蛇のおほきやかなりしが、ふるひ出て山割て、岩まろびおち、さばかり深かりつる水も今はさらになけんと、そのあたりをうち見やりつゝ語りぬ。むかしの一の鳥居の跡といふ處に來て柴折しきて休らひ、いさ立ねとて小松溪に至る。ひんがしに呉羅臂玖良とて深き山あり、王黎溪といふ處卯辰の方に見へ、坤に牛取溪、寅卯に小兵倉といふ山いと高し。

樋口ノ忠一がよめる。

分のほるみねのしら雲けふはれていとゝこゝろも涼しかりけり。

澤々見過て

乾に吹欠溪（ふかけさわ）といふあり、山谷の村の杣かたとなん。巖峙て木深き谷陰に、わくらはめける丹葉（もみぢ）の、ちしほにそめたるが一トもとあり、あなめづらしとて手ごとに折もて、よぢのほる路のいとさかしう、弓手のいはほ、馬手の木の根につきあてて、みな散りこぼしたるを、しりより來つゝ見る〳〵、

秋あさき山に色こきもみち葉をいかにつれなく風さそふらし。

とぞ正家のよめる。女楯比良といふもやゝ經て、小坂くだりて溪河渡りて、山李の一ト本トあるを枝をたはめ、うちゆりこぼしなッど、これを採り喰ひてのぼるに、いしぶみあり。なにきだみしと見れば、巳待の祭せししるしの塚也。艮に山伏の森、越家溪（をつけざわ）、赤燈臺、輪楯、日陰溪といふあり。又石瀧といふか高うかゝりたるをふりあふけば、雲いとふかし。

あまつ星とみねにたはしる石瀧の隕てはいとゝおとのたかけん。

仙人權現

猶行〳〵、山の彌高く谷いとふかし。こゝに神のおましませる、その神の名は仙人權現とまをすといふ。さいたちし人の、ぬさ手酬ちらしたり。

玄き霜あかき雪ふるひろ前はうへやま人の神の座（おまし）か。

藏王舞臺石

藏王權現の舞臺石といふあり。近き世ならん、こゝにいと大なる蛇の、わたかまりふしてけ

生臭石

るを、松原寺の眠堂和尙といふが經よみ、呪をとなへて退散せ藏王堂をたてりとなん。生臭石とて蔓のいたく生ひかゝりて、その高さ一丈ばかりの岩あり、ゆゑやあらん、あやしき名也けり。舊小舍場といふ處あり、丑に細溪といふ見ゆ、行めての岩の上に阿遮羅明王をするゑたり。

不動の瀧

不動の瀧とて南にむきて、たかき巖の末よりぞ落たる。淀川の句あり。

涼しさはあらたに瀧を柴折かな。

あなおもしろの處と、みな橋の上、あるは岩づらに杖つきたゝずみ、ふりあふぎ、くだしうかゞひて見るに、雲と霧とにたちこみて、水の行末ほのくらし。

銀河おちも來るかも半天の雲より雲にかゝる瀑布なみ。

澤々谷々

覗の溪といふ高岸あり、金の御嶽にも、のぞき、鐘掛なゝといふ行ひの處あり、しか此山にもうつしけるにや、ざわうごんげんの神もこそおはすれ。小屋ノ溪、奴溪、大倉なゝご溪〳〵深し。吉地美溪といふに、こぼれたる坑場あり、靑金掘たるなごりとなん。右に入れば黑瀧といふおもしろき瀧のありき、見べき處也。艮に牛喰溪といふあり、又萬太郞溪といふあり、其山賤落たらん。

寺内が澤の由來 大平山俗說

寺内が溪といふあり、みな親溪也。此寺内が溪てふ名のありけるよしは、明和のとしならん、寺内の村なる平助といふが母、とし老てさがなう、なにゝつけ、くれにつけて、むくつけきふるまひのみしければ、人これを鬼嫗とあだ名してぞいひける。この嫗の

いふ、われ大平山にのぼり、その山に栖る三吉の婦とならん。いざとて、旅よそひもせで、朝茶飲に隣あたりへとひ行やうに、ふと家を出て三四日もその行衞さらにしれねば、寺内の平助が母は大平山の三吉が妻とはなりたる也。嶽まうでの人々の見しかば、はや身を化（かへ）て、兩の角をかざし髪ふりみだれて、そのたけ高き女の、谷、岩群ともいはず鳥なんどの飛やうにはせありきし。あなあさましのありさまや、身の毛もいやだつおそろしの女よなんど、誰れも〳〵見しごとく語れば、平助聞てやすからず、よゝとうちないて、たとへ山鬼神（さんきち）の妻ともなれ鬼ともなれ、もとわが母にこそあなれ。わが命、しなば死てん、いで大平山に分のぼり、たつね出なんものをといふまゝ、一トはせに行を、うらわかきものを、一人太山（みやま）にいかてかやりなん、おほつかなしとて七八人、米、鍋なんどおひ、平助をしたひ山に入りて、ひるはひねもすたづねめぐり、夜になれは松明をふり、かなつゞみをうち貝を吹てたづねありきて日を經れど、さらに母のありかも見へねば、うんじはてて女人堂に休らひ、ものくひなんといふに平助、よき水蕪菜（みづな）生ひし處あり、採り來ん、しばしまちねとて、岩間をつたひ谷深く入りぬ。人々、まちにまてど皈りもこねば、又三吉にさそはれ行て、母も子も鬼とや變（な）りつらんかしと、うち戯れて待ほともすくれば、みなあやしみてこれを尋ねめぐり、聲をからして叫に、たゝ、こたまのこたふるのみにて人のありげもなければ、谷ふかく入りて尙尋るに、平助は、茶吡が

溪といふに近き谷に落て死たり。こは、いかゞせんとあきれて麓にくだり、板戸一ひらをまがなひ持來て、むくろに綱を附て、からくして谷より曳あげ、板戸に伏て、なく〳〵山を下りて寺内にかゝげ來て三七日といふを經たれば、かのうせたる母は羽黑山まゐりしつるとて、平助がもとへ、なにくれど、家つとごもねもごろにとりぐし持來りて、此事を聞て血のなみだをながして、なきくどきしとなん。母のひがことといひしより、もはらその身の鬼となりしと、そらごとながらいひたてられて、あたらわか男ひとりぞころいたる。それよりしてこのたにを寺内が溪(さわ)とは、平助が落たるをもて、いひける名なりとなん。みちのおく山にも處々に多く、糠部、あるは松前の嶼山なゝどにて、誰レおとし、かれおとし、たれころばし、かれころばしといふ名ありしも、こゝの溪〳〵に人の名あるも、みな身をあやまちたりし處となん。このあたりの路のさかしう、あやうくたさる〳〵、女人堂といふ處に來けり。寛政の年のむかしまでも、女のこゝまではのほりまうでんことをゆるして、その堂廣二間、三間たりしとなんのありき。此はじめは新城の莊黑川村の鐵玄法師か、百日のほど粟粥を乏しう喰て、山谷(やまや)を麓と蹈そめたり。山谷村なる新兵衞といふもの鐵玄法師にしたがひ、木を伐り岩を割て山路を作り、梯を渡して往かひもやゝなりて、鐵玄此女人堂を作れり。又山脚の東光庵を開き、鐵玄寂(かく)れてのち新兵衞法師となりて、女人堂のあるし一人とは、新兵衞法師が事也。女のうち群れて來

今の女人堂

舍りぬ。こゝなん山の奥にて、しか山のなからまで女の身をもて、こゝらのぼりしげにやあらんっ雨ふり風吹あれて、みたけさうじのさはりとなれば、一入法師が栖てのち、此堂はあばれしまゝにてさらに作りもはてねば、今は二尺に三尺の堂のみありて、石の無動尊、なにのぼさち、くれのほとけと多く、堂も狭にならべ、秋田の郡養根山想譽上人の作れりとて、六七寸ばかりなる丹土の地藏大士をあまたすゑたり。こは千體といふが、はつかに殘りたり。

清水湧く

又、さゝやかの堂のうちに石藥師の像とてあり。此堂どもの西にいとよき寒泉の涌つるを、みな寄り集ひて飮み、やすらひて飯くふもありき。この水のもとに在りて、淀川のいへり。

あらそふて秋を味ふ清水かな。

人々に遲れて正家ののほり來て、あな暑しとて清水いくむすびかして、ふつくろの紙をおしひらいて、道〳〵人の散らし、もちなやみわひ來つる紅葉をひろひ、その葉の大なる紅の上に、

わけ過し道の柴折りと友どちのこゝろのいろをこほすもみち葉。

劒が峯

とぞ書付たる。遠方は南にて和田、戸嶋の川つらぞ見やられたる。雨のいたくふり來るに、薄衣の袖ぬれ〳〵て登る。劒が峯といふあり、劒箇峯大權現といふ神のましませり。四方は雲霧のふかくて、みね〳〵は、いたゞきのみぞはつかに見へたる。

をろち山霧に三段(みきだ)のすがたして尾よりあらはれ出る劒峯(つるぎね)。

左に支山(えだ)路あり、右に珠祁伐委美地(すけはいみち)とて炭竈への通路あり。優婆御前といふ、神の御名をなすらへていふ石あり。この南を親溪平(むきわたひ)といふ。かくて寶藏が嶽にのぼるに、岩そびへ立て路はる〳〵と遠う高し。

山嶮し轉けとまらぬ露の玉。　淀川。

遠近のなかめはしらず、強力のさいたつをしるべに、いやへたつ雲の中を手をつき足をつまだてて、人にすがりて登ること遠し。人々聲をあげて叫ぶを、しるべとわけたゝずみて、通博のよめる。

雲霧のふかきか上にあらはれて山またやまの道そさかしき。

行〳〵て雲のうちに、くしずゝじてけるはみちひろの翁也。尙雲ふかきあたりに、句を作りとなふ人あり、淀川盛品なり。その句なん、

峯高しつらぬき登る秋の雲。

とそいふめる。からうじて此みねになりぬ。ちいさき堂のならびたり、此堂の內にさびたる鏡の御像あり、寶藏菩薩なゝとにや、さだかにはしらじ。麓より、西の國の寺うちめくるやうに一番にはじめて、ところ〳〵にその石を建てけるが、はや三十三番にてこゝに止めり。

正家。

吹わたる風こそなけれいやたかきみねより峯の雲のかけ橋。

鶴か峯

しまらくはたゝにくだりて、又のぼる。弓手の谷のふかきこと、はかりもしらず。前岳といふも弓手にやあらん、遠う雲の中にかくれたり。めての雨雲のうちに、見へみ見へずみ鶴が峯といふあり。こは富士の布雪耕夫、栗駒山の馬形(こまがた)、岩木峯の龍像、釜臥か嶽の牡丹、小田山の蟹の鋏(はさみ)なンどのごとく、この嶺の雪もけち行ころは、鶴のすがたのあらはれける、それをもて鶴箇峯とはいふとなん。こゝろあてに、そことは見やりつゝ、

つるがねはそこともしらしあまつとふ雲のつはさのいや高くして。

弟子歸り

かくて日もくら〳〵に、弟子皈リといふ嶺つたひをせり。いつのころにや、此山に、師の籠り行ふを弟子のたつね來りつれど、しか、この坂のさかしくのぼり得んことあたはで、坂中ヵより皈りいにき。それよりして、こゝを弟子歸とはいふとなん。人にたすけられて、いとくらき雨雲の中をたどる〳〵行に、篠、柴なンどおほひふたぎたる巖に、三尋ばかりの鍋(つかり)をさげて、これを力とみなとりすがりのぼるに、此音の、鈴なとふるやうに谷にひゞき聞へて、ものさびし。

神の鳥居木

路の左右より、おなし二タ本トの樹の枝さしおほふあり、神の鷄栖木(とりゐぎ)といふ。何の木にてかとゝへば強力こたへて、こと處にてはなにとか申にやしりさふらはねども、この山に

大平山權現堂

大蛇山ともいふ

山の開闢以來

神體と棟札

ては太地良といふ木なりとまをす、いづらの木をいふ方言にや。大峯に、からうじてよぢつきたり、堂二間四方、高一丈五寸、向東のあるにぬさとりぬ。籠舍も堂の隣に在れど、別當の僧北雲食をたちて七日の齋をし居り、こと人も多くこもりぬれば、すべなう此堂に入り、持せ來つる、もたひの水を飮み餉をくひ、手あらひ燈を照しぬかつく。左右に大なる五色のみてぐらを立たり。かんざねは少彥名命ながら、藥師佛をもて大平山大權現と唱ふ。此山の形の蟠龍に似たれば大蛇山ともいへり、頭は大峯の嶺になずらへ七峯に蟠りて、その尾にたとへし處を蛇尾の原といひしが蛇野といひ轉り、野崎も尾埼といふが昔なりといへり。此山は、平城天皇のあめのしたしろしめしし大同のとし神を山頭に鎭座めて、五十年はかりは杣、山賤もたへて通はず、木々生ひ茂りてまうで登る人もなかりしかど、淸和天皇の御代貞觀のとし、道を蛇野より分ケそめて推古山にかゝり、天栖山のひんがしの麓を通り吹切野を經て、羽黑の杜、月山の杜の神達を拜み、木曾石の奧より前嶽にのぼりこの大峯に分入りまうで、中古には八田の村よりして二布の澤をへて木曾石なンどいふ處を行て、前岳を傳ひに峯入リぞしたりける。そののち、鐵玄法師が山谷を麓と蹈そめて人も安げにおりのぼり、皈さは仁別に分くだる事にこそあンなれ。この堂の裡に祠あり、祠の內に紫銅して鑄なしたる鏡の像あり。又おなじかねもて鑄たる八寸ばかりなる、密跡金剛神のごとなる姿したる像あり、十二神將なンどの

うせて、このひとはしらのみや殘りつらんか、又聖無動尊を祭る也。棟箇(むなふだ)は近き世のものにて、寛保元年、延享二年、寶暦二年、おなしとしの十二年、安永、寛政にこそあンなれ。この大峯の神に仕へまつる優婆塞は、大平山長福寺大壽院北雲といへり。この北雲は北揚翁の末にや。箕山堂隱士北揚の、享保のとし識せる、からぶみを見れば、「筮相於秋田中埜之大岡、築城爲敷治之鎭矣」　大平峙于城之正東、崢嶸高峻、確乎礎立、兩郡之源而爲首、激析大河二分而爲尾、一尾水名凿見河、崖斷泉泝、四時往來自船而渉、至秋瀨湍毎卷白浪、鮎魚多粱入貢、次尾水名大平河。」なンとぞいへる。箕山堂隱士は、よく世に人の知れり。この神の神祀は(マヽ)

箕山堂北揚

さばかり狹き堂の內に七八人、亦あないの人とらまでも入りこみて、雨にぬれたる薄ス衣をかたしきて、かしこけれどこのひろ前に肘を曲て、こゝろおちゐぬれど、いねもつかれず。外にたちつれば、やゝ晴て月仄に照りて、七のみね／＼をはじめさだかに見ゆるといへは、人も出て、金の御嶽にもしか似たり。峯に篠(すゞ)の生ひてなンどかたらふを聞つゝ、ふるき歌おもひ出て、

項上の月光

かくはかりすゞふく風の身にしみてよしのゝたけも月や見るらむ。

小夜中とおぼしくて、小雨のそぼふる音してやゝ晴れたるにや、堂のひまもる影を見つゝふたゝび起つれば人も起出て、谷ふかくたどる人あり、しとするけにやあらむ。月のくもりぬ

れば、　まさやかのよめり。

見るほどもなか空たかくさきのまに雲たちかくす夜半の月かけ。

こと人々のなかめしもありつべけれど、聞ざればもらしたり。

七月二十日

堂のひましら／＼となりて明たり。待わひたりけむ、人々みなさく枕をあげて、いさゝか殘りし水もて手あらひ、ぬかづき、ものくひぬ。通博、つかみじかの筆して、堂の戸に句詩かいつけり。このぬしの處／＼にしゐんふし聞へたれど、みちゆきぶりにかきつけなんも、筆のえをよびもはてねば、のちに聞なして記（しるし）もしてむとてやみぬ。まさやか、堂の柱に書付ぬ。

いはかねのこりしくやまのさゝまくらおきふし袖に露そこほるゝ。

鬼神三吉

この山に三吉といふ神鬼あり、をりさして見し人ありなンどもはらいふ。山鬼神（さんきぢん）てふことをもやいふらんかし、樹神（こたま）、魑魅（やまびこ）のたぐひにてや。南のくにべのいづらの山々にても天狗あるてふ事を、それにくさ／＼のそらもの語りもたぐへていひ、又出羽、陸奥の國には大人（おほひと）、山人といふものゝことのみもはらかたりて、天狗のことさらにかたらず。三吉はありやなしや。一とせ仙北の郡なる外大伴の村の、すまふとりして世を渡るわか雄、酒三升を手樽に入れて二升の粢を持て此山にまうでのぼり來て、神にぬかづき籠舍の人にとふ、われはしか／＼の處より來る也。こたび、はれのすまひとりつがひて負まじと、この山に在る三吉殿に力を得

遠近四方の眺望

まくおもひて、それをたのみて來つる也。いづれの谿か三吉殿の住る處ならんやとゝへば、みな人あきれて、神仙なればいづこともさだめがたし。そことおもはんあたりに、居て飯るべしといへばこの男、さあらばとて弟子返り、寶藏が嶽のほとりの、さかしう人ののぼりくまじき岩の迫に投やりて飯りぬ。三四日を經て法藏が嶽の道のなからに、空樽のころけてありつるよしを人のいへり。かの男はそのすまひのとき、大なる力士をふり投て譽られしよしを、聞傳へて人の話りきとなん、あやしのことなり。四方八方の雲晴れたり。辰にあたりて弟子飯りの見へ、そのしたつかたに籠瀧、六花、襟、菅生山、寅に貝倉、御衣杜、天ノ鼓、酉に苧瀧の溪、鬼の郷など嶺〳〵溪〳〵瀧〳〵もいと多かれど、きのふは、いたうこうじてくるしう、雨ふり日さへ暮て遠き山路をたどる〳〵登り來つれば、記しもらしたる處多し。籠瀧は大峯のなから斗にあるとし聞ど、くだることを得ざれば、見ざることのねたし。堂の前に櫻の枝さしたれてたてり、花はいかならんなど、みなたゞずみたり。ひんがしの雲の中に雄子骨山（今はいふひんがしの鳥海山也）午に鳥海の嶽、未に寶藏の嶽、坤に恩荷の浦〳〵、酉に久保田の柵戸、百三段の浦回、戌に近きは前嶽、遠きは土埼、亥に八森の浦、森山、高岡、亥子に陸奥の岩樹が嶽、子丑に馬場岳、艮に芽子生の嶽、杜良の嶽、寅に貝倉、龍か森なり。寅卯に横手の御嶽鹽湯彦ノ神の座そ見やられたる。それが中に、萩生山の事は「秋田の刈寢」といふ書に記したれど、ふた

たびこゝにもつはらかにいふべし。豊嶋の郡今はいふ河邊郡岩見川の源の嶽、秋田の郡小阿仁川の源に在る山を萩生(なり)とて、としふる萩の大樹のあり。七月末八月のはしめにはかならず花發(さき)て、藤、合歡の花の及べうもあらず。こき紫の雲とかゝりたるを、谿を隔て見やるに尙ゆかしければ、その處に分くだりて、その咲つる萩やいづらともとむるに、さらにしらじとなん。

そのはらや、ふせやに生ふる帚木のものかたりに似たり。五十年のむかしならん、ふん月のはしめ、山賤めける男の、手桶、椀、おしき、小鼓やうのものをおひもて山深く入るを、樵夫あやしう見つゝ、それが後にたちて行ことはる／＼經て、山の中にいと大なる家あり。あるしの婦は、さだ過し姿して三人の子あり、太郞はをとなしう、次郞はやまうごにやふしたり、末の子は女子也。この次郞は蛭子(ひるこ)にて身に骨もなく、莚に額をのみすりあててかゞまり居れり。これを抱とりて飯なん喰せぬ。樵夫の來るをいぶかるさまなれば、道を蹈迷ひ、すべなう畑をしるべに人のあらんと思ひて來るといへば、あるし、よき事也。木伐に出らば此處に來て舍(やど)りねなゞど、ねもごろにいへれば飯りて後、又この山館に至れば七葉樹子(とちのこ)糕(もち)、鬼臼莖(こちな)漬なゞどいふもの出して進めぬ。しか、なづさひて、をり／＼來やどりてとしへたり。ある年の春この一舍(ひとつや)に火のかゝりて、不具なる次郞はやかれて死たり。こゝにあやしの事のありき。その末の女、死し次郞がごとき身となりて足も手も腰弱(たゝず)で、偃臥(のへふし)て居る病したり。いか

木萩の大樹

なるすくせにやと親ごもなきぬ。諺にいふ、山鬼の來て人の骨を拔てふ事のあり、さることなゝとにやと話ぬ。あるじの上祖は誰にて、いつの世の亂をこゝに避れて、かくろひたりけん人の末にやあらん、今も尙ありきとなん。その山館よりは近き奥山に沼のありて、雨零り風の吹なんときは、龍馬の出てはせありく事あり、山賤これを見て、日和のうらひとせり。隨軍茶生は、芽子の大樹の林をなしつるよしをもいへり。その波藝はいはゆる木萩にて、大なる春臼となるべき木もありけり。駿河の國には布士の鶴柴山のほとりに御殿場といふ村に、そのいにしへ右大將賴朝ノ卿の牧の狩したまひしとき、おほんしつらひありし假館とて人にたうはりしを、今にそれが末の胤の住なしつ。そのみかり家の二本の柱は、いと大なる萩の材木なるよし。陸奥の津刈應安寺（今云大鰐）村の大日堂の前なる道の傍に、芽子桂とてあり、むかしは花のいたく咲たるよしをつたふ。今は木のなから朽はてて、槻の寄生枝さしおほひたり。又この秋田の郡小阿仁の莊羽根山といふ處の、社の前に大なる波藝の木ありしが、近きとし風に吹折られて枯れたり。あるは躑躅の樑、萩の柱もて作る千歳ふる家の、ところ〱に、まれ〱に在るよしの話あり。木芽子の事は「水の面影」にもしるし、ことふみにものせたれど、いさゝかことのよしもいひそへて尙もいふなり。あなおもしろの處なゝと遠近を見やりて、

樋口忠一。

山の草木

あきたらぬなかめにこゝろおくやまの露わけころもいつかきて見ん。

そばたつ巖に白松老て枝をたれ、血柏生ひたち、山居、剔牙松、回回醋、蘭天竹生ひまじり、交讓木、槁正樹しげり、喬木の皮を剝ぎ枝を折て牙筯とせり。この木を肉桂と方言いふは、廣心、猪心のたぐひにや。艸のかくばしきものは鈴子香、霍菜、文無、地新子、その外の藥は馬蹄莘、玉蕃縷、多きものは紫參、白苑檱皮藜蘆、支連、紫金牛、巖下珊瑚、青珊瑚、實をむすひたるは獼猴桃、雲母柀、いづらも秋の太山の色ばみてぞ見へたる。

皈るさのおもひあらすはいつまてかありてなかめの樂しからまし。　忠一。

こけの實

莓の實といふものあり、陸奥の岩樹か嶽、釜臥か嶽、臼か嶽、涌山、太田山なゝどの山々に多かれど、その品のひとしからざるなり。莖葉の濱松といふものにたぐふあり、又さゝやかにして茶の葉のごときものあり、映山紅の葉に似たるものあり。實の色は、深紅なるも粉紅なるも淺黑なるもあり、いづらをや定めてむ、みな苔の子とて採り喰らふ。味ひは、なへて山枇杷菜にやゝ似て異也。紅なるを蝦夷人に問へば、要奴美姑圖牟といらへたる也。

山を下る

行〳〵採藥一身香とずゝじ、路の左に筒井あり、水澁ゐて淺く淸からず。又、なにの料にかあらん石積し處あり、おりのぼりて、ゆみで、めてにたつ梢にすがりてよちぬ。　淀川たゝずみて、

取付てうら見る路の眞葛かな。

となん句そ作りたる。倚けはしき山坂に、石のみ多かる處を空瀧といふ、雨ふれば峯より水の漲りて此路を流れ、つねはつゆも水なきをもて、から瀧の名におへりとなん。そぼふる小雨の晴れなくて直にくだる。

から瀧

山高み道の九折の青つゞらとれはこすゑの露そこほるゝ。

路傍の淸水

かくてはる〳〵とくたりぬれば、路のかたはらに寒泉のあり、いさ、むすひてんとてくめば、たぶさの凍りて、十二月ばかり、氷の中の水に手をひちたるこゝちせり。此水に、うんなんさうといふものすみぬと、あないのいふ。こは鹽龍なッどにや、なべて鯢魚といふものの類にこそあなれ。みな此淸水のもとに居ならび、むすぶ。

掬ふ手も氷るおもひにあな凉し淸きか上への淨き眞淸水。　通博のよめる。

と、むすひ捨てたちぬ。蹈元よりや建はしめけん、こゝぞ卅三のつかひして、あらたにきだみし碑のたてり。倚水のもとのなこりとて

むすひては神やうくらむたれもさはいのるしるしをみたらしの水。　正家。

あやめ阪

又山のうちに木隱れの池あり、それをも、みたらしといふといへり。分くたれば姫鷲尾といふ艸の多かる處あり、こゝにては姫あやめといひ、坂をあやめ阪といふとか。

雨雲のふりかさなればあやめ阪あやめもわかて越へ過にけり。

とそ貞雅のよめる。山河のほとりに來る、南は母溪とて弟子反りの溪より流れ、ふりかへりむかふ左は旭灣の溪より出來る水曲の落會にて、あら波たてり。水の清ければ、岩の上に在りて餉そくふめる。かついたれば、薪の埒とて左右の岸べより坡を築上、川瀨の迫り流れたり。此墕の上に、はひのぼりて越へたり。乾に赤倉といふあり、籠溪といふあり、冷水溪といふ川の丸木橋を渡る。めてのかたに、大木のなから斗にくさ〳〵の寄生あり、弊委美溪といへり。北に大荒溪といふあり、そこに石塔とて、おもしろく見べき處のあるてふ。小あら澤あり、大杉澤といふに、いさ〳〵大なる杉の一ト本、右のかたはらに在りき。なへてこのあたりは、いとふるき椙の木どものたてり。杉澤といふに來る。處〳〵に、たきちなかるゝ細き山川の大河におち添て、とよみ波たつ淵湍の上へに丸木の大橋を係わたし、あるは、かたふちの片岨には梯のありき。

うらやまし木こり炭やき身をやすく世をすき澤の橋や渡らん。

と通博のよめり。今しば〳〵とてしば〳〵休らひ、高橋もふみ過れば九曲あり。淵にのぞみて穴杉とて、大キなる杉の木のもとに穴あり、その竅の中に、河の向なる木々ともの見へたるを、ことにぞ見つる。路の傍に、十間餘に土もて段を高築たり、何の料にてかと人にとへば、炭荷おひ來連れて山賤らが休らひ、しりうたけせる場となん。午のかたに加利澤といふ

山の神澤

逆木

名のありとし聞て、

汝れもとくこゝに來てなけおとたてて南にわたる雁澤の水。

卯に中ㇼて弊具理溪といふあり。行〱小川わたりて、こゝを弓手にとりて遠からず瀧の見へたるに、

まさやか、見やりたゝすみて、

やかて又木々のにしきをやまひめのそめて織るらし瀧のしらいと。

その瀧のもとに分入らまく、流にさかのほり小雨にそほぬれて岩の上によちて、「雨ふれは瀧つ山河石に觸れきみが摧かむこゝろはもたじ。」と、ずㇱじつゝぞ見やる。こゝを高敷といふとか。

ふりあふき見るもたかしき岩かねにくたけてかゝる風の瀧なみ。

いよゝ風吹雨もふりぬ。山の神溪といふを分〱いたれば、うべも大山祇の社ぞあㇱなる。廣前に數の鳥居のあるごとに、木の枝の杈をひし〱と投掛たり。又、大なるくろ木を三尺はかりにきりて斧して皮うち立て、これをあまた社の塝におしたてたり、とへばいらへて逆樹と唱ふ。蝦夷の木幣を略に造ㇼなしたるにひとし、榊のこゝろもやありていへらんか。祠の内には、斧、鉈、劔なㇳごを木に作りて、いくらともなう手酬たり。こや、山賤らが山の神に、もと末をまゐらするのゆゑをもて、逆木をもや直く立て奉らんかし。おなし道を水とと

もにくだりて出たり。もとこしみちになりて人々に會ひかたらふ。何ならんか袖のうつり香せりと人のいへば、

露ふかきやま分ころもかほるなりかならすくすり採るとしあらねと。

四方のやま／＼のしげき梢ごとに、「日くらしのこゑもいとなく聞ゆなり秋のゆふべになれば也けり。」と、すゞじて路いそぎぬ。西に栖倉といふを見やり長坂といふも越へて、左に大平へ行路あり、右を行とならば仁別の山館にいづとなん。

蛇喰の炭役所

蛇喰といふ野邊に來れば炭役所とて、山賤らがこゝにもてはこぶ野小屋の二三ならびたてり。尙行て石平といへる野に來る、うべも大石の艸の中に多かる。右に高野澤、又馬路あり、左にかちをしそ行みちのありける。このみちの石の上に、萩の一もと生ふるを見つゝ行／＼、　みちひろのよめる。

こと艸にましりもやらてうちまろふ石にもつゆの小萩咲けり。

あらぬかたにふみあやまち入りて、こや、いづこは行べきすちならんかとためらふ野中に、女倍子の多かれは　　正家うち見て、

野をひろみまよひしみちを女郎花名にめてこしと人や見るらん。

小鷹瀧

岨つたひ來れは、さと水の音せり、小鷹瀧とて、右の谷を隔て、高からぬ梢の中よりおつる。巖の末に鴉の飛來て宿りたるなゞど、ここに見ゆ。

木曾石澤

山からすなれてこすゑにおとろかすおつも小鷹の瀧のひゝきは。

南をさして木曾石の溪といふに分下る、似手ノ股、矢櫃溪なンど溪〳〵の多し。いと高き篠原の中をかい分て、越平といふ野なかに出れば、日もくら〳〵になりて、鈴虫のこゑ、くさむらごとにしげし。

小芒のほのかにみちも見へぬまてくれてこし野に鈴むしのなく。

大同の瀧

左に小黑澤といふあり、その奥には大同の瀧といひて、いと面白きがあり。又、なにの瀧、くれの瀧とて、瀧〳〵の數そ多かるよしを語る。栗の木平といふをたどる〳〵、左に山田のあるあたりの原は鈴虫多く、

露ふかくくるゝ野原のみち遠みたとりもあかぬ鈴虫のこゑ。

さだのり。

ふたゝびみちもふみまよひなんかし、そこともわかぬすちをおぼつかなう、虫のいとあはれげに聞つゝ、

行なやむ旅のこゝろをなくさめて雨ふる小野にすゝむしの鳴く。

まさやかのよめる。

級野澤

級野澤といふになりて、つひまつともしてさいたてば筋のあか〳〵と照りて、もゝくさの花までも見へたり。ふたゝび

艸のはら露さへ見へてともし火の影をしるへにたとる細路。

まさやかの、

さいだつ人のひざつきて、松明（まつ）のほぐしを、ぬかりにつき入れてけちたり。あなくら、いづらを行てかと星さへ見へぬ雨空に、尙たどる〳〵分れば、いまたこゝかしこに殘る螢の光して、左は田面ぞ、右は小川ぞと、つねにふみなりたるものはさきにたちて、めしゐを引やうに夕やみの路たど〳〵しう。

ほたるとふ影をしるべと露すかるくさのはつかに見ゆるかよひち。　さだのり。

かくて行〳〵猶螢の多かるを、

くさむらにすたく螢の秋かけてのこるひかりもふかき澤水。

あないはふみなれしあたりとて、こゝは何、こゝはなにとて話りもて、ゆけざ〳〵はてしもなう、たゝくらき山澤のみちをたどる〳〵分〳〵て、右に僊鶴のふる柵（しろ）山、左に、やはたの神在す山を、そことこゝろあてに見やり、あなうれし、見し處もやゝ近よりぬと、いふほともあらで、川原村と元町との村さかひに出て大道になりぬれば、踊くづれしわかき男女、これを見なんとて乳兒なッどおひ、童をたづさへて、ひとつにむれ皈るが持る火影に、道もあか〳〵としるく、川瀬におりて、おもきわらぐつぬきやり、こひちにまみれたる、はぎまきをあらひて嵯峨のもとにつきて、人々こぞりて、つらかりし雨の夜みちの物語をして、やゝ人心地おぼへとて笑ひ、寒食（かんそく）の行ひも、やはらはてしそかしとて又笑ふ事かぎりなし。かくてものくひ

はつれば、夜くだちてふしぬ。

廿一日。よべのこうじにや朝寐して、たれも、とみにはおきもやらず、日たけて手あらひ、けふひと日かたらひ休らひて、夕附行ころ目長埼をたち出て來るに、雨のふり來んとあふぎ見るほどもなう、さとふりしきりぬれば、せんすべなう、來かゝる柳田の村なる、長のもとに雨やどりしつゝあれど、晴行空も見へねば那珂通博をはじめ、人々を、なからはこゝに別たり。雨はいやまし、氷をこほすがごとにふりぬ。

柳田村鎌田氏

誰か袖もほすひまやなきたひ衣きのふもけふも秋雨の空。

と、うちながめられて、いかゞせんといへば、やとのあるじ、こよひはこゝに在りてひと夜はあかしてなゝど、なさけ〳〵しういへれば、さちなりとて三人は此村にやどりなん、さらばとて、あゆひときぬればくれたり。

まさやか、ふしざまに、

おもはすよ飯る家路のくさまくら露のやどりをからんものとは。

さたのりの歌ありつやいなや、聞もしらず。

廿二日。この宿の垣の外に大なる柳の生ひたてるは、しかすかに、邑の名もしるき田づらの一郷にこそ。

末茂るやとのむかしのさし柳田面のちまちおほふはかりに。

柳田を出て

天栖山眺望

庭の松のなへてならす、おもしろきすかたしてたてるを、うち見つゝよめる。

かまたのまさやか。

すゑさかふほともしられて此やとのみきりの松のみとりふかけん。

夜經(よべ)より、たのもしかりつるよろこびいひて、この鎌田藤右衛門といふかもとを出るとて、

いはやのさだのり。

八束穂にいつもしなひて民やすくすめる門田もひろきひと村。

なへて此すぢとも、「勝手の雄弓」に語りつれば、こたみは、つはらかにいはず。けふは雨もやみたれば、こゝちもことにはれて、里の中橋を渡りて山かたつきてゆけば、糠塚といふ處に丐兒(かたゐ)の一家あり。外にたてる翁に路をとひて分行、北べに稲乾場(いなしは)山といふ見ゆ。かくて、貫束(ねかつか)山にのぼる。粃堆(ねかつか)といふ處の名は出羽、陸奥にいと多し、もと蝦夷婦(メノコ)の酒造(カル)しなすよりおこれり、此事は「蝦夷國風俗(ゑぞのてぶり)」につはらにのせたり。猶分て推古山の麓をめぐり、手形山といふによぢて、艸刈る童ともにとひて天栖(あまたて)といふ山にのぼりたり。そのむかし、天岡相模守なにかしのすめりし處といへり。子に杉生(すきのふ)山、丑に平(たひ)の上の松林、なにくれ〳〵の祉、寅に仁別、藤倉、松原なッとの山里あり。卯に羽黒の杜リ、大平の嶽、木曾石の山、辰に近きは大平の溪(さわ)〳〵、遠きは神宮寺岳、巳に北出の澤、遠きは保呂羽の嶽、午に櫻村、遠きは鳥海の嶽、女(め)

米木山、未に久保田、百三段、申に天德寺山、勝平山、矢橋、寺内の里、酉に鬼越ェ、神田村、土埼の浦、戌に濁川、飯嶋なゝど、あるは雄鹿の浦山、亥に添川、岩城の柵山なゝどを見渡し、艮に中て大伴の柵山といふあり。それなん安彥山ともいへり。その麓に安彥の沼とて大池あり、その池に浮島のありき。此事は春の日記「千枝の櫻」といふふみに、画ものせつなゝど見やりつゝ人とかたらひ、芝生にやゝひさしう休らひなかめて、(以下缺)

月迺遠呂智泥

月迺遠呂智泥

月酒遠呂智泥

月廼遠呂智泥

月迺達呂智泥

月迺達呂智泥

月迺遠呂智泥

月迺遠呂智泥

寶蔵筍嶽の小祠のうちに
圓光ある面に佛像三軀
を鋳なせる蔵たり

其一

其 二
鐵の圓光のくちたる佛
寶月智嚴音自

其　三

紫銅の圓鏡の裡に佛を
鑄るはそのまゝ合掌して
寶性地藏に似たり
いふならば破勝地藏まてや

其、四

月迺遠呂智泥

月迺遠呂智泥

月迺遠呂智泥

月迺遠呂智泥

月酒遠呂智泥

臨寫粉本

雪能袁呂智泥

大蛇峯　鬼踰山　中埜目

杉生杜　天楯山　藏王臺

鍋倉山　石　峯　雌雄瀧

愛染山　錢形阪　笹崗山

其七
鍋倉山より
大平嶽
甲 前嶽

勝手能雄弓

勝手神社へ

やゝそめ渡る木々の葉月の十日はかり、飽田の郡淤保陀斐良といふ奥山に、をたてやま山跡の國べ、なくはし吉野のみたけなる、花かつみ加都氏のおほみ神を遷しまつるみやところのあるてふ、かねてきゝ、かねてまうてまく、けふになん契りて那珂通博のぬしにいさなはれて、つとめてうちくもりたれと、秋の空のならはしにやなとかたりもて、江田純玉、廣瀨有利といふ相しれる人々と友に、

手形を過ぐ

手形といへるところを經て田の中の路を行ほと、椨山の里のそひらなんいさま近うこそ見やられて、眞葛のはひまつはり多かるすちをたとる。

葛の葉のかゝるためしをなら山のならの葉かしはうらや見すらん。

寺々望みて

弓手に、柯良美傳武といふ處の見ゆ。そこには、國のかみのおほん別業（なりどころ）のあるよし。見やる田上（たつら）の末の山本に經來山白馬寺、廣澤山正洞院なと木々深き中にたちならひ、こなたの杉むら喬う大澤山闡信寺なと、しか、この三の禪林甍をならへて建り。大澤の村をへて蛇野（へびの）といへる處あり、野埼といふ處を過るほと、西行軒といふ佛室（いほ）なん左の山に在りき。手形山本

源太法師像

野崎

赤沼の飲山亭

念寺といふ淨土あり、此寺の砌に、阿仁の山郷荒瀨川のほとりなる、佛名山源太庵といふに棲たりし法師が石の像あり。その法師はもと名山源太左衞門といひしすまひにて、人に逾たる力士なりしか、世をはかなきものにおもひとりて家をいでて、ひたふるに、なもあみたほとけを唱へつゝ、こゝにをはりをとれり。己れ世に在りしころ石の工をよひて、こゝをきれ、かしこをきれなといひて作らせたるとなん。物あらがひにかたまく、のりものにうちまけじといふ身の願ひある人は、一升の蕃椒を褁に手酬てまうづるといへり。辛きもの好きたる、すもをさにてやありつらんかし。又こゝにも野崎といふ名の聞へたり。むかしやこのあたりの驛路にて、野前のはこもや、もてはこびたりけん、吾妻路ならでもと、うちたはれて過る。女郎山の麓に解脫林といふ禪室のありき、こは、萬固山天德寺に栖る僧侶の閑居地に作れりとなん。村より弓手のかたに、いさゝかさしのぼりて見れば、まはにの岡のありて、そこに繩曳はへたるよしをとへば、近きころまで飮山亭とて、くにのかみの雪見殿のありつる蹟となん。さばかり廣き沼水の水艸隱れに、見へみ見へずみ、まはにの色のところ〳〵にあらはれたれば、うへも赤沼の名こそ聞へつれ。こゝに臨てたてられつる、そのやとの見やりいかならん、面白の處也。

遠近の山のはつしほ野の千種さそな雪見のありし眞木の屋。

谷内佐渡村

谷内佐渡といふ村のありき、樋口といふ處も有りつとなん。田の面は、はや刈しほとふしなひきたるを、見つゝしありく童あり。通博うち見て、

告はやないさとく行て里人の刈らなん小田の色付にけり。

と聞へたるを聞つゝ行〳〵、おなしさまなる折句歌を作りてうたふ。

やゝ秋のなから經ぬれといとはやもさよねのみのるときは來にけり。

川向は河邊郡

この、さかのほり行太平河のながれ〳〵ては、牛嶋の村にめぐるとなん。柳茂うおほひかゝりたる橋あり、繪にかき渡る青柳の橋にさまことならず、風情ことに見へたり。此橋ふみていなば、郡は河邊にいたるといふ。川のあなたに森あり、内外のおほんかん社、又、くゝりひめの神垣あるてふ。こなたの川のべの杜は、ゆするきの神なりといへり。かくて村あり、柳田とていとなが〳〵し、春の日ならばといふ戯もおかし。通博の、

重りし雲ものこらすあさ風にちるや葉月の柳田の里。

推古山由來

となんありき。西山とて秣刈る野山あり、今は杉なんそこにひし〳〵と種わたる處あり、又の名を須以巨山といふ。いつのむかしにやあらん、君ひとところこゝにさすらへおはして、いかなるよしにか豊御炊屋比咩の御陵をこの山にうつして、推古天皇のみたまを齋ひ祭りしといへり。つばらなる事こそ、えしりはさふらはね、近きころまで七月七日ことにはとこ

龍淵山松應寺

開山無等良雄和尚

藤原藤房卿

ろ人の集りて、御陵の前にてすまふとりて、すめろぎの、みたまふりしきその祭りせしかど、いつとなう、此ことも今は絕へはて侍ると語る。そのゆゑこそしらね、めつらしのことも聞つるものか。路に不動の森あり、としたかき槻の木生ふるは、舊りたるところとおぼゆ。はた、御嶽といふ神を齋ふ麓に至る。尉石、嫗石などいふ二ッの岩あり、春は藤の面白處也と語る。八田といふ村に來る。龍淵山松應禪寺といふあり、岩の頭に、さゝやかの地藏菩薩堂を居（すゑ）たり。路のべに池あり、昔は太平河こゝを流れて、此池なんその淵たりし跡となん。秋さひたる蓮のうき葉に、村雨の名殘の露寒くうち見つゝ坂のぼりぬ。この寺の開山は、松原寺の二祖無等良雄和尚也。吾れ傳へきく、無等良雄は萬里小路中納言藤原藤房卿ならんと。この卿、それのとしの三月の十一日に八幡山の行幸のくふして、わきてはなやかによそひたち、その日に不二房といふ僧を戒の師とたのみて、みそかにいゑでして岩倉に入しらずかくろひ居ッ給ふを、君、聞おどろかせたまひて、父の宣房の卿に仰られてとく〳〵ともとめたまひしかど、そのあしたいつこにか行たまひけん、庵のやれたるさうじに、「栖みはつる山をうき世の人とはゝあらしや庭の松にこたへん。」とかい聞へ、はた　棄恩入無爲眞實報恩者といふことをかいて、そがしたに、白頭望斷萬重山、曠却恩波盡底乾、不是胸中藏五逆、出家端的報恩難。」なと、かいのこし給ひ、又、越の鷹の巣山にて石の床におなうらをむすび、苔の

授翁和尙とは勸請か

衣にやつれたる人あるを、新田義助といふもの吉野の都に至りて語る。さりければ、畑六郎左衛門時義を遣して是を見せしめ給ふに、人あり、又のちにとへば石の面に、「こゝも又うき世の人のとひ來れは空行雲に屋戶もとめてん。」と、しかいふ、ひとくさをかいのこしぬるその手ぶり、藤房の卿に、つゆたかはさりきとなん。あとしらぬひの筑紫にやおはしたまひてん、ありか、さらにしるちふ人もなけん。まさにいふ、うちひさす都路の、正法山妙心寺の二世にあたれるの尊師にして、授翁宗弼和尙といふこそ万里小路中納言なれと、ふみにも、つたへにもかい聞へつれど、遠き越の國の奥山をすら、爰も又うき世の人のとひ來れはと、いとひたまふのこゝろをもて、なじかは都のほとりにすみたまひてん。おもふに、又なき忠(まめ)信(ひと)とて世に名たかけん君たれは、たれもしたひ奉りて、いつこにも〳〵開山とし二祖とたとめるは、その君の行衛しれさるをさちに、その靈魂を齋るにこそあらめ。國朝諫諍錄の本行に、萬里小路中納言藤原藤房卿の事をいへる羅山文集（天註――萬里小路中納言藤原藤房者後醍醐帝之賢臣也帝已重祚軍功之賞多不中矣藤房諫之欲新作大内裏藤房諫之雲州獻龍馬帝以爲嘉瑞藤房反以爲妖孽且大諫之語皆詳于本傳然其昌言未嘗見納一焉藤房遂去。羅山文集。）をひいて、そのことをもはらとあけたることばに、竊按、易所謂、豐二其蔀一、日中見斗者、其藤房之謂乎、時當成豐明當立功、唯六五之柔暗不正、不足賓之則獨明、不能成豐猶如二日中見斗一、可二勝歎一哉、三諫十論、都不見納、義當去焉、於是視棄二其美官重祿一、猶如敝蹤而遁、歌西山于嗟之詩、傷南土汨徂之情、可謂義之盡也、讀耕

月泉和尙に從ひて

補陀寺を退き此地を求む

林氏曰、藤房遯去之亦所二以諫一之也、猶庶三幾帝之驚而省而驚而改二之、蓋其或然、或問世人傳稱、藤房嘉遯之後、爲二浮屠一、妙心禪寺第二祖、授翁宗弼是也、非三翅稱二諸口一也、爲二扶桑隱逸傳一者、公然著二之于篇一、未知然否、曰、不然、避世晦迹之高士、豈可下主二張於官寺一、而禱二寶祚一、接檀越、訓中導大衆上哉、且藏嘗、按二吉野拾遺記一、新田義助、自二越前國一、朝二于吉野一、語二諸卿一曰、越州有山名二鷹巢山一、山上宜レ構二城壘一、故遣二畑六郎左衞門時義者一、歷二視山中一、其幽邃處、有二一道人一、端二坐樹下石上一、貌似二藤房一、時義還告二諸我一、我卽往、視至則無人、石上唯留二倭歌一首一、藤房之眞蹟也、其倭歌曰、爰毛又浮世乃人乃問來禮波空行雲爾宿求天牟、後又遊二海西一云、其非二授翁一明矣。」とそかい聞へたる。（天註——扶桑隱逸傳曰藤房爲僧嗣關山之法授翁宗弼是也年八十五卒。贊曰藤房進則忠於君矣退則忠於佛矣皆所以陶斯民也祇知二忠之間也存其人焉。）

火内の郡といひしむかし、長走りの岡に近き松原村に天台寺ありき。その寺の廢れてければ藤倉の山のほとりにうつして、それを龜象山補陀禪寺といふ。さりけれと、在りつる處の名を今も捨ず、松原といふ事しかく〳〵。遠きその世はしらず、なかむかしの寺の開闢こそ月泉良印和尙也けめ。この法の師の德の世にいちしろけんを、陸奥すぎやうなどのころよりやこゝにしたひ、月泉和尙の後に補陀寺にあるしたらんか。やゝ老て、山陰の閑ならん地もかなと、そこにもとめて小林山西來院を建て行ひ、倘しつかなるかたもあらばとこの寺も亦住みすてて、かゝる深き山中にや分入り給ひけん。うべも、そのころなん此あたりは太山木ふ

かう茂り立て、柚、山賤すら通ふこともまれに、岩うつ谷水の淸う流れ、梢ふくあらし、餌の實はむ群鳥、あさるましらならで、あけくれ音なふものもなかりきや。水に龍あれば靈おのつからあるてふこゝろをもて、龍淵をしかこの山におふせ、又おもふに、そも〳〵君がいゑでのむかし、「すみすつる山をうき世の人とはゝ嵐や庭の松にこたへん。」となんながめたまひしことなとを思ひ出て、松に應(こたへ)んの文字をもて、かく寺の號とはなしたまひてんものかと、ふと、ひがおもひにそおもひたる。松應寺のしりなる園生(そのふ)に、三尺はかりのおのつからなる石の山際に立たり。むかしは彫たるにやあらん、磨滅(けち)て文字の見へされば、たゞ開山大和尙とむげにつたなう、去年ことし、あらたにきだみなしたりとおぼへて、石の面の苔をうがちて、蹟しろ〳〵と見へたり。是をおもふに、貞治元年の遷化より手を折れば、ことし四百五十年を歷たまふ。そのあとゝふらはんに墓堆(おきつき)のさたかなるしるしも見へねば、しかなんしたりけるものか。あるじの僧になにくれとゝへば、寺の燒亡(やかへ)ふるき調度、まいて、かいのこしたるゆゑはつゆもつたはらず。今は寺の名もかい改て、正應の文字に、やうかはりはてぬと聞へたり。

苔衣きよきむかしのあとゝへは人はあらしの松に應ふる。

と、そのほとりの石にかい附る。この山のとかげには木曾石といへる村あり、二布(にぶ)てふ山の

奥也。むかしは三部の澤といひしか、一部長左衞門と名のりし人の出て、二部てふ名のみ殘れり。その一部氏、この正應寺のなからあばれたるを、ふたゝひ興し建きとなん。一部長左衞門、一部權兵衞などその名よひたりし末の子、梅津氏の家士となれりとなん。この正應寺の延命地藏大士は、寺のほとりの沼水より出ませりといふ。此堂を居(すゑ)たる巖の苺とのみ見へたりしは、みな壁生草にして、ことくさはさらになけん。

たのめたゝいつまてくさのいつまても命を延るみほとけや是。

古道の跡

こゝにいふ、いすのかみふるき通ひ路は、二布の澤を分ヶ入り羽黒山といふ麓を經て、推古山にかゝり泉川をつたひて、八柳(やつやなぎ)を過て土避(つちざき)の沙山、今はいふ湊の山館のほとりへ出しとなんいへり。うべならん、往復の側堠(みちしるべ)のあとおほしきもところ〳〵に殘り、はた、いと近き世のものから、山屋布のわたりに榎の一株ありつなともかたらひて、此寺を出たり。

獺田の古坂

獺田(をそ)といふ村あり、山に古柵あり、鎌田なにがし、嵯峨なにかしとて、むかしはそこに住めりしものかたりあり。そのひとりの末を鎌田五郎七といふ宿あり、それが門の外にいとよき寒泉の涌なかれたり。家に、むかしの調度も、ひめもたるともいふ人ありき。めてには舊町(ふるまち)といふ村の見へて、

目長崎村

元町といふ村に來けり、まほの名は目長埼といふとなん。風張なといふ田面の村あり、五輪淵てふ、誰かしるしの五倫石たらん、そのあたりもあせて、あら田となりぬとい

ふ。村の艮に中て高からぬ山のあり、これなん舞鶴箇館とて柵戸のふる跡也。右大將賴朝の世におほん賞として、大江家にしかこの太平の城をたうばりて、永井廣忠まで六代をへたり。太平は大江平ちふことを訛りいふにや。永井家と秋田家とのなかむつびなう、修理大夫廣忠は城介實季を討なんと、實季も又廣忠をうちてんとたかひにためらひ、廣忠せちに平鹿の郡横手なる小野寺義通のもとに軍を丐ふ。實季ゆくりなういくさをいだして、たゝちにせめられて大江廣忠とみにうちまけ、廣忠の男千鶴麿といふは虜となりて城介實季の館に在りしが、のちにはともに宍戸にいたり、又三春にいたれりといふ。その戰ひの場を陣の河原とて、川の邊の森となりてあり。矢ぶすまつくりて戰ひし處は矢中とて、左右のとが箭の落東ねたるあたりを田の字に呼こそ、天正のむかしもの語也けれ。不動山昌泉院といふ寺あり。太平山元正寺、今はいふ源正寺といふあり、むかし大江元正の建られし寺にして、遠きその世には四天王寺といひて、治國、增長、廣目、多門の四像を圓仁の作りて安置給ひしといふ處也。聖觀世音は大佛師定長の作れるよし、それに七間四面の佛閣を大江元正の建りといふも、火のためになこりなう失て、今は元正寺の號さへむなしう、源正の文字さまにかいなしたるもねたし。はた、眞觀山福命寺元廣院といひて新義の眞言あり、此寺のやまのいなだきは舞鶴山の岨にして、圓仁の作りたまひしといふ不動尊の、その堂にも在りつと。嵯

舞鶴箇館址

永井氏と秋田氏

太平山源正寺

若宮八幡宮

正德寺

髮長堂

峨理右衞門利珍といふ人のもとに、しばしとて中やとして休らひ、こゝを出たち寺中堀内てふ、ふたつの村名をおしなべてひとつによぶ所に至る。大なる鷄栖たち、石階いと高きみやところあり。こや應永のむかし、馬草刈る鎌倉山に齋ひまつる廣幡のやはたの神を、こゝに遷しかしこみ若宮とぞ唱る。そのころ鶴箇岡の神ぬしのたまものとて、運慶が作る獅子頭を神室にひめたり。五月の五日八月の十五日は神樂を奉る、八月十五日の神事には、この村なる柳田與衞門、目長崎の嵯峨利衞門、かゝる二の家より蒸飯、豐御酒を奉ためし也。柳田氏はまちうどとなりてとぼしければ、村の人これに代りて奉となん。柳田も嵯峨も、その世は君に仕へたりしとぞしられたる。二澤山正德寺とて、元正寺の流くむ寺あり、松たかく風情ことに見へたり。むかしの村長にて與三郎が家に、平元茂助正直の手にて、「時を得て高き梢にのほるとも身を省りみて本をわするな。」といふ、なかめ殘りぬ。平形(ひらかた)といふ古柵、路の左に在り、みちのへの地藏ほさちの清水いときよけく、手あらひむすひて過ぬ。熊埜山林淸寺といふに、天明國師大空老大和尙と唱へて、有髮の僧の木像を大に作れり。さりければさこそ人、なへて髮長堂とよぶ。近き世までさゝやかの庵にして、林淸庵といひたりしよし。

太平山
赤沼
女郎山

秋田郡八田村
龍淵山
蓮池
古河の流
八田の地蔵
羽黒の神

勝手能雄弓

秋田郡太平庄
本町目長崎村
西城戸
東柵戸
内外社
福命寺
不動明王堂
風張村
河辺村
若宮八幡社
井堰澤
馬場目嶽
太平山
同村昌泉寺
古井天
大平川

勝手能雄弓

甲
七尺
丙
五尺五寸

乙

六尺八寸

甲
弓長七尺五寸 上弭長三寸半 末弭長四五寸

丁　二七　無銘

勝手能雄弓

丙
甲

勝手能雄弓

丙 岩谷山
丁 金倉山
三内村
同村の八幡の社
三内の土淵村
丙
乙
甲
辛

勝手能雄弓

勝手能雄弓

甲
甲

甲

勝手能雄弓

花の眞寒泉

花の眞寒泉

高清水
桂清水
みたらし清水
淨眼しみづ
櫻清水
小和清水
鷹ノ羽清水
こがねのしみづ
旗吹清水
殿清水
大杉清水
比良清水

御返事清水
小町清水
太郎八寒泉
石神しみづ
洞ラ貝清水
安波布久寒泉
じやうまち清水
富田の清水

ひとゝせの春のなからばかり、みすゞかる科野のくに東間ノ郡松本近きわたりに在りて、清水の里をたつねいたる。をりしまれ、櫻のひし〳〵と咲たる井花水をくむとて、

むすぶ手に花の雫も花の香もこぼれてふかき花のまし水。」

とよみし事あり。こたひ、櫻がり」てふ一まきを書をへつる筆のまに〳〵、ところ〳〵にてむすび試みし寒泉どもを書キ集めたるを、見む人、こは清水狩ならんか、清水にくるふかといへらんもはぢす、やがて此ふみを、花の眞清水」となも名つけゝる。

菅　江ノ　眞　澄

花の眞寒泉

菅江眞澄誌

高清水

秋田郡寺裡山

宥月法師の口碑

續紀十一ノ卷に、天平五年二月己未、出羽ノ柵ヲ遷置ニ秋田ノ村高清水ノ岡ニ、又於テ雄勝ノ村ニ建テ郡居シム民ヲ焉、云々と見えたり。此秋田ノ村と云へる地ハ、今いふ秋田ノ郡率浦倭名抄に見ゆ。今は、いざ野といふ莊寺裡山に在り、其とき秋田ノ村をも雄勝ノ村と共に郡となし給ひつるものか。此事、「水の面影」といふ記にもつはらかに考へのせたり。此高泉の又の名を行人清水ともいへり。そのよしは、下野ノ國太田原の城主澁谷淡路守重虎とて、金王麿の後胤にして七萬五千斛を給はりしが、天正のころ出家して宥月法師とよび、おのが心のまに〳〵國々にさそらへありき、出羽ノ國に至り羽黑、湯殿の嶽にも分のぼり、また此秋田路に來りて古四王にまうで、高清水にこりして身をきよまはりしより行人清水の名あり。宥月法師一夜勝平山の麓の里に泊たる

夢に、山に不動尊ませり。空海の、こゝろこめて作らせ給ふ尊像也と靈夢(みさとし)あれば、鷄の初聲を待て此山に登て、明王の像(みかた)を得奉りて寺内ノ村に庵をむすび、處に櫻井といふ里あり。そこにも、櫻の井とて水清き井あり。いづれかまことならむ。

桂清水

南比内前田村
桂清水多し

出羽ノ國秋田ノ郡南比内庄前田村(阿仁の前田をはしめ同名いと〳〵多し)の坤の方に杜あり、其森の内に觀世音をすゑまつる。また桂のうつほ木あり。此うつほ木のうちに、板屋楓樹(かへで)の大なるが生ひ出たる、そのもとより涌づる也。此桂清水といふ、陸奥國の浄法寺の桂清水の外にも、此前田村に近き笹館にも桂清水あり。また、みちのく南部田名部ノ縣に近く桂清水あり。そこに唄ふ田うゑうたあり、そのうたに、「桂清水は戀の水四十男が若くなる。」

みたらし清水

おなじ南比内、大子内(おほしない)村の八幡ノ社の大杉のもとに在り。此水御社をめぐりて大池となり、その末二筋に分れて、みな田の面に流れたり。

大阿仁莊上杉村久保田定水寺由來

三河の櫻清水

淨眼清水

おなじ大阿仁ノ莊上ミ杉村に古城跡あり、秋田城介實季ノ家士上杉半左衞門武信とて、永慶軍記ノ比内せめのくだりに見えたり。また、上(かみ)杉野といふありて朝夕古四王にまうで奉るに、國ノ守社參のとき石階(みはし)のもとに蹲る。いかなるものかと問ひ給へば、しか〳〵のよしをまをすを、人々を始め君聞おどろかせ給ひて、寺を建立(いとなみ)給ひて宥月法師に給はりしとなん。其寺、久保田の鐵炮町に在る勝形山定水寺行福院これなり。「本尊勝平山出現の不動明王、佛尺一尺六寸六分。「天照皇太神ノ御神形、澁谷ノ金王麿ノ鎭守一尺七分、春日が作也。「大黑天、御尺五寸、運慶が作なり。釋迦如來ノ像一軀、聖德太子ノ御作、重虎ノ母堂ノ念持佛也。胎藏界、大日如來、こは、國守義隆公ノ御臺所御寄附のよし。其外寶物舊器等多かりしが、今は寺もあばれ、そのたからどももうせたりといへり。

櫻清水

櫻しみづのまたの名をさくら井といふ。いにしへ三河ノ國に金高、眞高(さねたか)、眞福(さねふく)とて三人リの長者ありし、その眞福の菩提寺を眞福寺といふ。此寺に櫻井、またさくら清水とて、さゝやか

上閑清水

の古井あり。弘法大師の歌とて、「散れば浮ひちらねば花の影さしていづれもたえぬさくらゐの水。」また、ことか、そは今いふ大野平（たひ）の古名也。此上杉野に上閑清水といふあり、むかし比内ノ大館の城主佐竹大和某君ノ隱居、淨眼翁鷹狩のとき、此水を、になうめでて、めされしよりその名ありといへり。

五十目小和杉

波岡鎗

小和清水

おなし秋田郡五十ノ目、森山の麓みちのかたはらに大杉生ひたり。二またのさまに分れたり。いにしへ、空海上人の箸をさし給ふが生ひたるよしを語る。是を小和杉といひ、此杉の根より涌もて出るを強（こは）清水といふ。小和清水はこゝと處にも聞えたり羽黒山にも、古き名處にも強清水ありといふ。また津輕の浪岡に、むかし小和清水桂林といふ鐵工（かぬち）ありて、多く鎗をうちぬ。今是を波岡鎗とて家々の寶器（たから）とせり。そが中に袋鎗あり、わきて出來よろしきもの也。

陸奥金成驛

鷹ノ羽清水

みちのく金田ノ里、今いふ金成（かんなり）の驛（うまや）の近に在り。岩のさま鷹の羽の形して、その羽莖の中より流れ出るなり。水いとゝ清く、世にめづらしき清水也。夏の始めこゝに來て、「鷹の羽

三河國矢作

雄勝郡宇留院内山

のしみづの柳伏し柳身よりになびく風の涼しさ。」

こがねのしみづ

三河ノ國矢作に、金高長者とて福德自在る館在りし。そのむかし金賣橘治にいざなはり、除夜に泊て女どもの樂を聞て、御曹司牛若君横笛を吹き合せ給ひし事などは、あまねう世に人しれり。此長者が宿を建とき、大なる清水ありしを砂金をもて是を埋む。その埋み殘れる井より水くみたるよしを語り傳へて、こがねしみづの名あり。其長者の跡は今の矢作の十王堂、柳堂のあたりなりけるよし。

はたふくしみづ

出羽ノ國雄勝ノ郡宇留院内山マに、幡吹寒泉とてよき水あり。とし毎に九月九日は東鳥海の餅祭りなれば、人群れまうづれば、此清水のもとに茶店を營て餅、酒を售る也。幡福といふ名はいかなるよしにや、幢福、畠吹なンども書キて、同國秋田ノ郡奉浦ノ庄濁河村の字地の名にもあり。又仙北ノ郡横手ノ郷にも畠福の名あり、又酸川が嶽の藤沼の一名も波多布久といひ、また、その外ところ／＼に多かる名なり。

雄勝郡須川
澁谷氏家藏
朱舜水

殿清水

同國雄勝ノ郡須川村（古酸川村なり）に在り。むかし此國ノ守めし給ひしより、しかいへり。また、杉の根より涌キづれば杉清水ともいへる人あり。此村の染物師澁谷ノ善左衛門といふ家あり、國ノ守大江戸に往來の御中カ宿の館也。此澁谷が家藏に、「冷泉爲祐卿ノ自筆の大和物語上下二冊」、また其卿ノ眞筆の「卅六歌仙の色紙形」、また清人舜水ノ眞筆一ト卷キに、「江亭餘興　明徵舜水云々、また陶淵明桃花源記評云々　舜水」と見えたり。また「一休様　大石内藏之助」といふ文通一枚、また「薪三把受取申候、爲念如此御座候　元祿貳年三月五日　乙五郎殿　寺坂吉右衛門」と見えたり。そが中に舜水の書いと〱長ければ、こゝに省きのせつ。舜水の事「諸家人物誌」に云、「舜水、姓ハ朱氏、名ハ之瑜、字ハ魯璵、魯ヲ楚ト作ルハ非ナリ（印章訛テ楚璵ト刻ス、遂ニ攺ス、後ノ人或ハ楚ト稱ス）舜水ハ號ナリ。明ノ浙江餘姚ノ人、其先邾ニ封ゼラル。秦楚ノ頃邑ヲ去テ朱トナス。父ノ諱ハ正、字ハ存之、定寰ト號ス。明朝ノ官人ナリ。先生九歳ニシテ父ヲ喪ス。長スルニ及テ明季傾廢ノ時ニ遇ヒ、薙髮シテ虜ニ從フコトヲ甘ンゼズ、中興ノ志アリテ安南國ヘ渡リ、日本ニ來ル。此時、明朝ニテ忠ヲ抱テ兵ヲ擁スルモノ委ク節ニ死シ、胡清ニ一統セラルト聞テ、快復ノ時ヲ得ザルヲ歎ズ。安藤省菴其德望ヲ欽ンテ師トシ仕ヘ、强テ日本ニ留ランコトヲ

請フニヨッテ、踏海ノ節ヲ全(マヽ)　水府西山公、遙學殖ヲ聞禮節ヲ重ンジ、待スルニ師友ノ禮ヲ以テス、コレニヨッテ水府ニ客タリ。卒スル年八十三、文恭先生ト謚ス。朱子談綺、舜水文集ヲ著ス。」と見えたり。

大杉清水

同郡松岡ノ郷万福院の後に在り。此杉は七回(なゝかへ)の空木也、この木の内に白蛇すむといふ、さるよしにや鳥の巣作る事なし。是を松岡の七奇(なゝふしぎ)の一ツとせり。

比夏寒泉

雄勝郡桑箇崎村　古名多し

同郡桑箇埼ノ枝村小比内の澤に在り、いにしへは家ども多かりし處にや、此山澤に古名多し。千把澤の山陰に山ノ神座(ませ)り。立石ノ澤、七窪(なゝくぼ)ノ澤、兩俣(ふたまた)ノ澤、橋本ノ澤、不動平(たひ)、こは、養老元年ノ棟札のありし不動明王堂ありしが、天明三年の野火のかゝりて燒ケたり。桑木、緞子(どんす)ノ澤、松ノ比良、比良清水、橡(こち)ガ澤、一把澤、二把澤、三把澤、隱(かくれ)ノ宮ノ平ヒなンど、よしありげなる處多し。

立石の澤

そが中に立石の澤てふ名處(なところ)あり。此立石の名もいとく多かれど、近きに大室ノ驛なンどの古跡の殘るをもて考へ思へば、續紀卅六卷ニ、寶龜十一年云々、庚子征東使奏曰、蠢茲蝦夷勇寔

繁有レ従、或巧レ言連レ誅或窺レ隙肆レ毒、是以遣二二千兵一經二略鷲座、楯座、楯石澤、大菅屋、柳澤等五道一、斬レ木塞レ徑除レ溝作レ險、以斷二逆賊首寶之要害一者、於レ是勅曰、如聞出羽國大室柴等亦是賊之要害也、毎伺二間隙一頻來寇掠、宜下仰二將軍及國司一視二量地勢一防中禦非常上。」云々と見えたり。鷲座は今云ふ足倉山にて、小安ノ溫泉の奧ク山ヽ、畠等ノ莊の鄉界のあら山の岩嶺也。楯座は館ノ倉といふ山のあるよし山賤の云へり。楯石ノ澤は此立石ノ澤ならむか。大菅ノ屋は杉ノ谷地といふ處ありといへり。柳澤は、此桑ケ崎の西ノ俣の古名に大柳澤あり、古柳の朽根ありしものがたりあり。そは、いにしへの五道の古地ならむか、なほ尋ぬべし。また倭漢三才圖會ニ云ク、寶珠山立石寺在最上中野天台、寺領千四百二十石、開基慈覺大師、本堂藥師、寺舍十二坊、堂塔多寶物數多、堂後有二清泉一即大師所二修出一、八町上有二奧院一と見えたり。若クは其立石寺ある處、いにしへひらけし五道の内なる、立石ノ澤ならんか。立石といふ名跡いと〱多ければ、そを能ク考ひ定めてなほ記し殘すべし。

雄勝郡御返事

御返事清水

御返事は本ト蝦夷辭の保牟蹩都（またポムベチともいへり）といふ言の訛りたる也。保武幣知とは少川にて小河を云ふ也。いにしへよき寒泉ありし也、そこを淸水ノ前とて田畠の字となれり。此處も雄

勝ノ郡也。奥羽永慶軍記に、角館の領主戸澤治部少輔盛安關箇原にて討死の後、小野寺遠江守義道世の空言を誠と聞なし、盛安が妻子をま先討捕らむとはからひしかば、盛安が子太郎なりける右京ノ介政盛、繼母もろとも角館を落行ク道のくだりに、關口、合河、御返事ノ里など歙の領内をもからくして忍び過て、小野小町の古塚を弓手になして横堀の橋を渡り、八口内(やくない)に日も沒(いり)ぬ。」など見えたり。此八口内といふも蝦夷語也。夷地にも同名あり、そは、夏澤(シヤクナイ)といふ事にて夏よき澤てふ辭也。そのあたりの古名に鹿子(かのこ)橋、都ノ町、雪の澤、白雪ノ澤なンど聞えたり。いにしへは都人の栖居(すめり)し處とて、雅言多し。

小町の清水

山本ノ郡いにしへの山本ノ郡は今いふ仙北ノ郡也。今の山本ノ郡は川北にして、野代あたりをいふ也上岩河ノ莊に小町村あり。其岩川の河岸に寒泉あり、小町の清水といふ。いにしへ小野小町としいとく老て、雄勝の郡小野の八十嶋に在りて、河北の渟代の南の奥か奥なる、日高山に連(つらゝ)ぐ坊場(ばんじやう)の大日如來をまうでまく此處までは來れど、老て身のくるしければ、こゝに手あらひ身もきよまはりて、ふしをかみけるとなん語り傳ふ。

雄勝郡塔が澤

太郎八病

藤枝ノ驛

秋田郡鵜崎

太郎八清水

此あたりの事は、雪の出羽路の「やをとめの卷」につばらか也。またおなじ雄勝ノ郡床舞ノ郷の內、塔箇澤村は家二三戸ならびたてる山中也。いにしへ此處に、駒形庄松岡の金峯山神宮寺萬福院法相の塔建しより、塔ヶ澤の名ありけるよしを云り。此山澤に太郎八清水といふあり、太郎八といふ者のむすびし井にやとおもふに、さはなくて、脚の太キに腫る病を多呂波知といふ。此寒泉は毒水にて、此水飲ものはみな太郎八びやうすといへり。是を考ふに、駿河ノ國藤枝ノ驛の近き村に、麻畑といふ處に脚腫れの病あり、そを肥足といへり、片足いと大なるもの其村に多し。世にいふ象脚巾てふものを、ぱつちといふも肥足よりいへるにや。また蝦夷人、身の腫る病をタツピといふ、また津輕に龍飛達飛の浦あり、また達毘の沼といふあり。タツピとは、むく／＼と水の涌キづるを、腫れ上るさまに見て名附たる病になん。

石神清水

秋田ノ郡神足ノ莊鵜崎村の、善助といふ家の砌の寒泉の本にある石を、清水神とも石シ神ミともまをす。又石神清水ともいへり。身に瘡出たる人は笹舟とて、篠のひろはもて舟形のもの

を作り、それに焙豆を盈て此石神に手酬れば、その瘡いゆといへり。

法螺貝清水

同神足の下刈の山王ノ舊社地に、むかし大キなる齋杉ありし。その木の枯れ株より梭尾螺のぬけ出て靈水の涌出しが、今は辻井のごとく人みな汲ぬ。此事、杜の下陰につはらか也。

粟吹しみづ

山本ノ郡粕毛村の奥山に妙美井あり。そこに金棣棠の花いと〳〵多かるを、柴人のいたく折り來れば丁女の見て、その山振はいづくにか在る、山清水の澤にある也。女、みちしらば己も折りに行ンものをといへり。山吹をあはぶくと云ひ、寒泉をしづと方言ならはし也。万葉集二巻、「やまぶきのたちよそひたる山清水くみにゆかめど道のしらなく。」といふ歌あり。此うた、このこゝろに能クかなへり。粕毛の嶽に雪消る時、その雪にて駒形のあはる也、鹿素成こゝろならんか。峯に代赭石産、また窄の不動などいひて、おもしろき山河のさま也。

山本郡粕毛村

粟吹は山吹

じやうまち清水

久保田城町

舟木氏

大仙坊物語

秋田ノ城下久保田の城町(じやうまち)は、元和、寛永のころ寺内ノ村よりうつり來て、一町の人みな古四王宮を本居(うぶすな)ノ神として朝夕に釋藥毘文(しやくやくびもむ)を稱(とな)へて、正月の精齋(いもゐ)も寺内ノ七日の忌宮(いみや)ごもりにひとしかりしが、今は世におしうつりて三日三夜の齋(ミ)ぞせりける。寺内うつりの家も多くは絶て、渡邊仁左衛門、板垣理右衛門、五十嵐久左衛門、野上嘉兵衛、舟木多吉郎などぞ殘りたる。此舟木が上祖は、土埼の湊なる沖ノ口屋（沖ノ口屋舟木氏也）ハと本ト兄弟の家也、こなたの舟木氏は靱負とて、みな、よしある人の末なるよしをいへり。その靱負の末の家に小甕あり、そはむかし、四拾間堀（今は町となりて四十間堀町といふ也）の内より掘り得しめでたき陶(もの)とて、ふかく珍藏(ひめおけり)といふ。また、此町に正一位稻荷ノ社あり、此御神は、紀伊ノ國屋善左衛門が家にいつきまつる。そは寛保の始め、紀伊國の大仙坊が後(すゑ)にて、それも同シ名大仙坊と云ひて雄勝ノ郡院内ノ銀山に在りしが、其法師久保田に來りてふしたる夜の夢に、我は院内山の稻荷也、汝が行方(ゆくへ)を尋ねてこゝまではしたひ來しぞと、のたまひしと見奉りて、あなかしこしと、夢のみがたを拜(ゐや)びぬかづきて、此處に齋(まつ)り奉れる社也といへり。かくてその後大仙坊は、善左衛門が甥の宗助に己が家をゆづりて、いづこにか行たりけむ、その行末をしらずといへり。かの大仙坊が行ひし處にや、

元は原中の清水

院内山に大仙といふ高岨あり。その稲荷ノ御神といふは、院内の鷹巣山の麓南澤といふあたりにも、正一位ノ稲荷ノ神社あり。また正樂寺といふ眞言の佛舍舊跡にも飯形ノ御神座り。そは、いづれの御神をか此坊に遷し齋たらむか。此町いまた成らさるときは野原にて、その原中によき好井ありしが、人住栖、地震にゆり埋れて跡かたもなかりしが、其寒泉ありつる跡に、四ッ屋權右衞門とて家あり。そのぬし家とみて、湊にうつり住ぬ。やゝとし經て、今は蠟燭肆にて中嶋宅左衞門すめり。此中嶋が家に、文政二年の秋ならむ井を掘りしかば、いと〳〵好き水のいたく涌出たり。こは、いにしへありつる清水に掘り中しものならむといへり。

富田の清水

津刈の弘前

みちのくの津輕にあり。津刈の弘前は水好キ處なれど、わきてこの清水は、こと處にまされり。いにしへ飛玉といひし妙美井也ともいへり。

『枝下紀行』

世の人のかゝみとや見むうす氷ふむあしかものあつきこゝろを。

かりまたにて

かりまたてふところにかゝれは、かり人、火矢つゝに火なはさしそへて、みねよりくたる。

ますらおかをのへのましはかりまたにふすゐのとこやふしうかるらん。

また、たはれたるうたひとつ書つぐ。

かりまたにふみつけたりし細道をとひつゝくれはそふ川のさと。

三河國下加茂郡

ある日枝下てふところにまかる。おかしきみちなりけり。みねたかく谷ふかくして、ものすさまし。遠方に見へたる村は御舟となんきこへたり。

やまなみのうちへたつれは遠方にみふねのむらのまほならすして。

枝下に至る

やゝその里にさしかゝれは、山川のおとかまひすしくきこへて、ものさひしき山里のすま居なりけり。このさとに、としふりたる松のあまたありけれは、

やま鳥の尾上に生るまつかえもしたりのさとにちよやへぬらん。

こよひ、この里のなにかしかもとにやとる。めおうな、さしつとひて、ほたさしくへて、いとなみす。よなへするかたてには、むかしいまのものかたりするなかに、ちかきころ此里に、しのひ〳〵かよふ男女ありけり。男、すみうくやおもひけん、ある夜女をともなひ、此とこ

恋の男女水に溺れし物語

ろをしのひいてゝ舟にのる。おとこ、なりたるかほにさほとりさしいてゝ、やゝなかはにこきいてたるに、なみあらく舟にうちあてゝ手もたゆく、めくるめき、さほうちはなちてけれは、ふねはなゝめになりて、あまたのいはかとに、うちあてゝやふれたりけれは、男は中嶋てふ處のしら洲にあかり、からきいのちをたすかりぬ。女ははひあかるちからなく、みなそこに入ぬ。しかはあれといのちありて、こなたかなたの岩かとをたよりに、やう〳〵きしにあかりて、あたりちかきところのやもめをたのみて、しか〳〵のことかたれは、このおうな、なさけあるものにて、ひるさへ戸おしたてゝ、この女を人ぬよきて、ぬれたる衣ほしなとして二三日かくしをけり。いかゝしけん舟のあるし見いたして、やもめを、あるましきよしをいひてせむれは、やもめ、女のものあはれなれは、二三日とゝめつるのみに侍るといへは、やものしんせちをおもひて、えせめす。女はいらへなく、たゝなきふしたり。かゝるおりからに、ありつる男、此女はしにうせたるや、また、いのちあるやと舟つくきしのほとりにきたりけれは、舟はむかふのきしにあれは、えよはふこともせて、かへらんとするに人々見つけて、

其男女に代りて詠む

ふなとまてきて、なにわさもせて歸らんとする人こそ、かのぬす人ならめとおもひて人あまたよひかけたれは、かへり見もせて、そは道にかけのほれは、人々おひつきてつれ來れは、堤のかたはらにうつくまりさしうつむきて、いらへもなくて居たれは、女はしり出て男に居よりて、うちなみたくみて云やう、御身はいかにしてのかれ給ひけん、われも、あやうきいのちをたすかりぬ。さはりとも、ふねおしいたす時、われ、むさしの國にてのりつるおほへありとのたまひしかと、余所よりは水あらし、とゝまりて、山路行たまへとすゝめつるものをと、おろ〳〵となきける。人々、この女のみめかたちいみしく、ゆうなるにめてゝ、ふねのわりたることとも、いはてさりぬ。あとにてはあるしのおとこら、此舟はあまたのこかねをいたしてつくりたるものを、かねいさゝかもとらてやりつるなと、いひしらふほとに、おとこのおや、やかて、さけさかなとゝのへきたりて、たゝ、わりなくしなしたるよしをいひて、まけてゆるしたまへといへは、人々、ことはすくなくいらへてやみぬ。あるし、わかまへにきたりて、今きゝたまひしものかたりのこゝろをよめといへは、かの男女のこゝろを、おもひいてゝよめる。

中しまにあかりつる男。

鳥ならはともにや飛むなかしまにつはさしほれてをるかひそなき。

きしにあかりたる女。

いかゝせんかたはれふねのかた〳〵はきしによるともかひなかりけり。

あくるあした、かへるさに川つらを見れは、ゐかたしあまた居たれば、

筏士もこゝろして行みなれ棹なれにしわさもさすかあやうし。

委寧能中路

廿三冊
信濃
信濃

天明三年癸卯のやよひより、しなのゝ國をわけて、もとせばとふ里に在て、月は、しはすに至るまてをのす。その頃の中秋姨捨やまにのほり、月見しみちゆきふりは「わかこゝろ」と名つけて一冊とし、あか波々、身まかり給ひて三とせのなきたまつりしことを、「手酬草」といひて、いさゝかのなかめともあれと、こゝにはもらしぬ。はた、ひとゝせのことをのこりなう記して、「易保努波流安貴」てふ冊子あれは、四のときのをり〳〵もこと〳〵にかゝす、そのあらましをのするのみ。此日記は伊奈の郡よりはしめたれは、「いなのなかみち」と名つけたり。

天明三年二月故郷を出て

このひのもとにありとある、いそのかみふるきかんみやしろををかみめくり、ぬさたいまつらはやと、あめの光よもにあきらけき御世の、おほんめくみあまねくみつといふとし、長閑き春もきさらきの末つかた、たひころもおもひたち父母にわかれて、春雨のふる里を袖ぬれていて、玉匣ふたむら山をよそに三河路を離て、雨にきる三野のなかやまをかなたに、みすすかる科埜の國に入つるまての日記は、しら波にうちとられたれはすへなし。

信濃國飯田驛にて

おなしやよひの半に飯田のうまやにつきぬ。應永の頃ならん、尹良親王、このあたりより三河の國におもむかせ給ふおほんたひの餘波、しかすかにおほしひかれ給ひ硯めして、「さすらへの身にしありなは住もはてんとまりさためぬうきたひの空。」となかめ給ひて、千野伊豆守にたうはりたりけるとなん。

浪谷の亘翁權現緣起

かくて、ゆきよしのみこは、此國の浪谷といふ山里のあらき瀧河の邊にて、「おもひきやいくせのふちをのかれ來てこの波あひにしつむへしとは。」とて、やかてかくれおましましとか。そのみたまを、其里のしりなるたか山のすゑに神と祭りて、

友を尋ねて

風越山の麓

處の人、良翁權現とあかめ齋ひ奉れり。われあけまきのむかし、更級や姨捨山の月見んとて、その麓にたひねしたるあした、まうて奉りしことあり。そのころ、ふたゝひとひことかたらひし友かきの、此いひ田のうまやにもあれは、そこゝと尋ねとふに、此月の朔ころ、軒つゝくやは、みな灰となりて、ありつる栖家もしられす。人にとへは、老たるは世になう、世に在るは、おもきやまひしてなとかたり聞ゆれは、こはいかにとためらふ。旅やとの前をゆき過るは、ふた歌を手ならふはしめより、あさゆふなりむつひたる、中根なにかしといふものなり也。とし月をへてあひみしかとも、しかすかにおもはすれねは、なにかしにあらすやと呼ふに、手をうちて、こはゆくりなう、いかにそや。あな久しう經て相見つることとて、さいたつなみたをかくして、かくや侍らん、まさに夜邊は夢の圓居しつるなと、ことなきふしをよろこひ、こし方のもの語よろついひて、かた時のまに、老となり行うれへわするゝくさつみてん。いさ給へ。近きほとりにあないしてんとて、こゝをしはし行て風越山の禁なる、くくりひめをまつり奉る、ちいさきほくらのありけるみまへより、嶺の雲、尾上の雪とまはゆきまて、こゝらの櫻いま盛なるに、こゝろうかれて、芝生のうへに居て、夕日うら／＼とかけろふまて見つゝありて、

風越の山は名のみそをさまれる御代の春とて花の靜さ。

つれなう、たかねおろしさとふき來て、雪をこほすかことくちる櫻あり。うへ西行上人の、「風越のみねのつゝきに咲花はいつ盛ともなくて散らん。」となかめられたる、いにしへの春のあはれもしられたり。遠の麓の梅は、いつちり過にけん、苹の雲のそこに鳴也と時鳥をきゝ、雲井に見ゆると望月の駒をおもひ、裾野の薄、ほにいつるを手酬にと聞へ、しろたへの雪ふきおろす峯の月かけのなと、殘りたるふることをすしてかへり見かちに、

心して峯吹かよへ風越のふもとのさくらちりなんもうし。

此ふもとをさきていてくれは、前にさか壺すへて、ものあきなふやの、かやふける軒に、大なる櫻の今まさかりなるを、行かふ人々とゝまりて、又たくふかたのあらし。此花のもとにとて、あくらによりのほりて酒のみあふくは、心なきにしもあらしかし。

人ことになかるゝ霞たちさらて花のかけくむ春の盞。

伊奈郡十三庄

（天註――「書神といふは、もと蒸嚙よりおこりてこのところは狛場のうちたりしな、今はさけたるといふ。そのほとりに山王權現とまつるは思兼命なり(社領十石)。此邊のなかれな味河といへり。阿智神社も此御坐にやあらん。」「根羽といふ處はむかし三河の國なりしか、安助の郷のたゝかひのころ甲斐信玄うちかちて、しなのゝ國にとりおはしませりとか。」「科野の國伊奈郡にある十三庄の名、「路原庄、小野のあたりないふ。「笠原庄、高遠のほとりないふ。「入野谷庄 山田、小原、勝間、みな此あたりないふ。「春近庄、上穗のあたりないふ。「箕輪庄、木下、松島なとないふ。「郊戸庄、いひ田のほとりなもはらいへり。「伊賀良庄、山村、北村の邊ないふ。「下條庄、あち川なかきり、あちはらの塘よりおこり、南は三河なさかふ、ひんかしは天流川、西は三野路まてわたりぬ。「南山庄、天流川のひんかしなり。「伴野庄、小川、宮田なり。宮田はむかし稻田といひしとなん。「遠山庄、和田、上村、木澤なとないへり。「知久庄、ちくだむら、南原なと也。「大河原庄、かしほのほとり也。」）

龍阪の櫻

十八日。ある人にいさなはれ花見ありけは、龍阪といふをおりくとて、櫻あまた立ならひたるを右に見、左に見つゝ、やをら麓になれは、松とも多く生ひたてる中より、いみしう咲たるは、山かせもへたててよそにふきつへけれと、

吹來るはいとふものから櫻花かせの宿の松としらすて。

嶺より花のちりくる夕榮、ものにたとへつへうなけん。

春霞よきてよしはしたつ坂に盛まはゆき花のあたりは。

天流河

十九日。天流河の河原に行たりしかは、岸波ゆすりてたかうたち、みなはわきかへるあら瀬の浪に、筏たゝみ入てうきしつみ、よねつみてとくくたるは、遠つあふみに行とか。

水上の花のさかりのことゝはんやよまてしはしくたすいかたし。

洲輪の海の氷の橋も、神やわたり給ひけんかし。みかさいたくまさりて、ふちせもしらすたか浪のうつに、

諏方の海汀にむすふひもかゝみとくなかれ行あめの中川。

山村詩境

廿一日。ふたゝひ風越の山きは近くゆけは、柴おひたる、をきなのわけ來るは、「風越のみねよりくたるしつの雄か岐岨のあさきぬまくりてにして。」といふ歌のこゝろにも似て、いとおかしうおもふに、櫻あらぬそかひより、をこへ〳〵にわけ行もねたう見やり、

咲花にそむく心はあさ衣の袖はにほはん風越のやま。

となかめてければ、柴人の見たゝすむもあやしく、此翁にかはりて、

したつ枝はさはらんもうしとまくり手に花を分こし木曾の麻衣。

廿四日。あたこ坂をくたりくとて、城山のはなさかり、なに水のなかるゝなと、よしあるさまにおほへて見る〳〵行は、おなしところに、けふもくれかたになりぬれは、あやなうなかめたり。

あくかれてなかき春日もくれなゐのうす花櫻色見へぬまて。

雨、花

廿八日。きのふ見しはあなたのかけみち、けふはこなたよりとて、松河といふ水をわたらんといたれは、雨のゆくりもなうふり出てものうきに、人あまた、ぬるとも花のと、行もはてす。細きみちに、ねりとまるしりにたちて櫻のありける邊にて、

春雨にあすはうつらんさくら花いさ木のもとにぬれつゝも見ん。

原町の池上氏にて

卯月一日はかり市田てふところにゆくに、いとおほきなる松の朶ことに藤のまつはりて、こきむらさきに咲たり。

くれて行春をとゝめて松か枝にかゝるはうれし花の藤波。

かくてそのところになりて、原町といふ里にすむ池上なにかしかもとに、人のいさなひてと

飯田城主脇坂淡路守

池上の由來

鹿鹽と大河原

ふらふ。やのぬしの云、元和三年のころならん、飯田のいなきのあるし、脇坂淡路守從五位下藤原安元と聞へ給ふきみありて、此君、おほやけのことにたつさはりて、みやこに行給ふに、いましか藤原は南家にや北家にやと、かしこきおほんみことのりありけるに、「きた南それともしらぬ紫のゆかりはかりのすゑのふちはら。」とよみて奉り給ふを、そのころ、もはら世中のものかたりと、人ことにいひき。おなしころ、むさしの國池上なる根本寺の日樹上人、不受不施といふ一ののりをたてて、いさゝかのことに、おほやけの、みけしきことに此國にさすらへ、市の瀨村に、しるへ斗庵むすひて身まかりてけり。その上人、むさしよりこゝに至給ふのとき、蔦木てふところにて名もおかしう、秋の日かけうつろふに、「名にしおふ蔦木のかつらこゝろあらはしからみとめよなかれ行身を。」とそ、なかめられたるとなん。その庵のほとりを、のち池上といへは、わか家の池上も、そかあたりよりつきしにや、しらしなと、おほめかし。又その飯田の城は、長姫とて、この伊奈の郡のなかは也。ひんかしの山おくに鹿鹽、大河原の庄とて、賴朝のおほん日記にも、しるしたまふたる處あり。鹿鹽の東は甲斐の國鰍澤也。山中よりいつる水をくみて、これをやきて、しほとしてつねにくらふ。行水をしほ川といふ。その枝村は柳島、市場、から山、梨原。又大河原の枝邑はいちは、たき澤、かまさは、おけや、むらさき、和會、中尾なと、手ををり〳〵かうかへて、なにくれのこと

かたりて、あな寒む、世はみな更衣ならんにといへれは、おもひつゝけたり。

いくはくの日數を旅にふるさとのなこりも夏にうつるころも手。

この池上かやに、日をへてけり。

十二日。山賤めける男とも山より歸る。夕近う里に入來て、けふは空冴へ雪のふり來て、あし手しみわたり、斧うつに、手、もきり行こゝちして、いくたひもうちおとして、木ははつか斗とりきつる。あの瀧山の雪見てましといふをあふけは、いとしろうふりたる雪のね、きのふみさるかたに、あまたつらなりぬ。

うの花の咲とし見れは夏山の梢もたはにふれるしら雪。

四月の雪

十三日。手を折れは、いと久しうおもへれは、

かそへうる日數もしらしけふいくか市田の里にあかしくらして。

十四日。人々と友に、ものうき旅の心やりに花をりありけは、ちいさき杜に、山振の、こかねの山なすやうに咲たるを、何神のおましませるにやと人にとへは、あら神と申て、原町のいはひてんにて侍る。そのゆへは、むかし、いさゝかのをかしある女をうちて、こゝに、しかはねを埋みけるか、世に在けるときも、そのせしぬしをひたにうらみて、身まかりても、あらふるこゝろとゝまらす、たゝりをなんなしたりけれは、をそりたふさみて、神とはあかめ奉る

荒神の來由

也とかたる。山吹のおかしけれは、しはし見たゝすみて、

山吹の花の盛は又たくひ世にあら神のもりのしたかけ。

十五日。このいけかみかやをたちて、こゝろの猶ひくかたにとゆけは、山吹といふ里あり。名におふ花の咲たるかきねもあらす、とくうつろふにやあらん。田つらを行みちに、蛙のもろ聲になくもあはれに、

山吹村

花はみなちりはてぬとも山振の里の名めてて蛙鳴らし。

こしに、ちいさき、かたまのこときものつけたる女あまた、野山のかたに、うちむれていきけり。こは桑の木の林に入て、みづといひて、わか葉のめくみたる花のやうなるものを採て、くは子やしなひたつるといふ。みつは水葉にやあらん。此くはこのたねは、みちのおくのあき人よりかひとり、かく、桑の木の芽いつる時まては、くはこの、とく出こぬ寒きところにこめおき、又こゝに在る山寺といふ庵の、いと寒き處の法師にあつけてひめおかせて、卯月の八日、さかふちのをこなひに此みねに人さはにのほりて、くは子のかひつきたる紙を手ことに持歸り、埋火のもとにおき、あるはそひらにおひて、よるひるあたゝめられては、いさゝかの春をえたるおもひやしけん、けしなとのもゆるやうになり出るを、きゝすの羽して撫るとて、はらひおとして、みづのふゝみをくはせ、やしなふとか。樫原といふところにきて、

蠶飼ふ里

かたきり驛
妖獸くだ
驗者の祈り

遠近の山分衣たゝひとりたつはわひしきかしはらの里。

こゝにもはた、松川といへるか流たるを渡て、賢錐のうまやになりて、みち行人のかたるを聞は、この伊那の郡には久陀といふものありて人につき、ものゝけとなりてくるはせける。そのなやめるはしめは、つねのゐやみのことく、あたたかさは、身におきのゐたるかことく、みるめさへおそろし。此くだてふけたものは、いみしう人をなやませる、あやしきしちはありて、神のことく人のめには見へねと、をりとしては、いぬ、猫にとりくはるゝことあり。そか形は、りし、むさゝひに似ていろ黒う、毛は長く生ひたれて、つめは針をうへたるかことく、身はさゝやかなから、むくつけきものなり。これを日にほして、ものゝけならんとおもふやまうとに、はつかはかりくはすれは、たちまちまなこは血をさし入て、かしらうちふり、けしきこゝ地ことに、たけきふるまひをなし、くちとくものいひ、ものゝけのしるしをここあらはしけれ。まほのゐやみする人は、くひても、たゝ、しははやき味ひを、舌の上にそれとおもふのみ、ことなれることはあらしかし。このころ近隣の女に、くだきつねのつきて、あれは、そのよりの女子、左右に持たる、しらにきてをさゝけ、不動そんの生るかことききみかたふきみ、ふしみ、聲かるるはかりなき叫ふを、けんさをよひて、よりましをたてていのりいのしろを、うちまもりてをるか、みときやうの聲たかう、法螺ふきたて、れいうちふり、すす

りのりて、やい串のこときものを女のめくりにひし〳〵とさして、みさか斗のつるきをぬきかさし、この女を今やきりてんやうに、うはそくのいかりのゝしれは、よりまし、なみたをほろ〳〵とこほしてうちふしぬ。こはいかにと、ひまより見るに、やをらおきあがり、長きくろかみをかひなにかけて、たかわらひして、やまうとのうへ、のこりなう、水の行やうにとくかたるは、身の毛もいよたつ、おそろしきめをみたり。此なにかしのあさりのとこは、世にならふけんさはあらしかし。此ものゝけ、日をへすしていにきとかたるを、しりにつきて聞つゝゆくに、又此くたに似たるもの、つくしとやらんにもありなといへり。

　これも又きつにはめなてくたかけの身につけ渡るためしさへうき。

七窪のさん女

七窪の里に入たり。此里に十とせはかりむかしならん、さんといふ賤女の、あやしうよろつにこゝろさしふかゝりけるか、身は茶亭にいとなく、ひるは、ひねもす行かふ人にものくはせ、酒うりて、世中をわたるたつきとし、よるは結跏趺坐とて、女の身もてはきをむすひ、手をさけくみて心のほとけをみてんと、をこなるまねひして、くうつきたりけるとなん。又月花になかめては、おかしき、ことの葉ともそ多かりける。いつのころならん諏訪郡龍雲寺の僧、名はたれとか、かの女のやに休らひて、女の臼ひくを見て、これなん聞つる女にこそあらめと、ちかつきて、さる人にてや侍らん、おもしろのなかめもあらは、きかまくなと、ひたに

とへれど、そのいらへもなう、たゞ、うすのみひきまはしけるつれなさに、このほうし、たゞう紙に、「人つてにその名をきくの花ならんなとくちなしの色に匂へる。」とかいて、したかふわらはして女のもとにやりければ、さん子、うすを引とゞめてとりあへす、その紙のはしに、「霜かれの草もにほはぬみちのへの花もありやと人のとふらん。」とかいて、此童に返しつかはして、ねもころに、ものかたりしとなん。さん女、としやゝ老てけるころ、尾はりのくにより道樹上人このしなのゝ國に入給ふに、かの女のをきなまみへしかは、上人まつこゝろみに、趙州布襀のこゝろをいかにと、とはせ給ふこたへに、さん子、たはれたる歌つくる。「おさんらはほさんはもたす木綿よきうちかけきれは重きしちきん。」と、いらへたりけると、上人つねにかたり給ひき。このみたりの人々もこの世にあらて、むかしものかたりとなれは、おもひ出て、行〳〵袖かつ濡たり。此七窪は、なゝくりのいて湯にや、いかゝ。しりたらん人にとはまほし。こゝにをる三石三春といふくすしは、あかふる郷に來てしりつる人なれは、そのやとをとふに、あるしあきれて、こはいかに、あなめつらしや。此國にとく來給ひしと聞しかと、そこにては、えも侍らしかしとおもへと、誰れにてもと待わひしと、心のおくなう、たれは、かれはなと、ふる郷の人のうへかたらひてくれたり。かくて、こゝに十日斗をへて、ふたゝひとて、

三石氏再會

五月五日。みはるかやとをひるより出たつ。ひとおき、ふたおき、ふななといひて、里は、こかひのわさに露のいとまなみ、桑のさえた折もてありき、やの中は、ところせく、かふこのこたなかけならべ、とは、田殖る料に、苅しきとて、柞ならの葉なとの、わか葉の梢かりつかね、馬につけて野山より田つらに、女にてもあれ、おとこにてもあれ引行を、まねぐりとて、日にもゝたひ、ちたひも行かひをせり。それを田面にしきて馬いくつも引入て、獨か手に綱をとり、うたひぬ。これを、ふませとなんいひける。男女あけくれのいとなさに、けふのせくも、軒にあやめ、しるしはかりにさしていはひたり。此苅敷てふことを、歌にも作り侍るへきかと人のいへは、

あやめ草露もひとつにかりしきてこよひいつこに夢やむすはん。

よたぎりといふ、石はしるはや川を女の三人連て、いとやすけに、こしの國と、すか笠に書付たるを着て、こなたに渡りく。

越へ安き淺瀬しら波をしへてよたきりなかるゝ山河の水。

飯嶋とて、よき里に出くるほとなう雨ふり來て、すへなう、ある木の下によりて、しはし笠やとりのまにはれたり。

家に在らは袖はぬらさしふる雨も椎の葉にもる飯島のさと。

福岡にて

なかたぎりの川わたり福岡に至る。光前寺といふ寺あるに、甲斐のかみたりし、信玄のもたまひし驛路の鈴とてあり。伊奈の郡雲彩寺の、權五郎景政の、ふるきてうとてありたるを見しにひとしかりけると、此鈴をもいへり。景政は、いなの郡にて身まかれりけるにや、雲彩寺のかたはらに、しるしの五輪苺むしてあり。しつくら、かねよきつるきなともありつるを、今は、うせたるなと、いふにてもしりぬ。上穂といふ里の田ことに、早苗とり植わたせるを、

　こゝにいまうふるわかなへ見てそしる秋のうはほのみのるためしを。

大たぎり

たぎり〱七たきりあるわたりの中に、おそろしき川のおほだきりといふに至り、岸にたちて、うかかへは水いとふかう、水そこの石たかう、箭よりも早うなかるゝ音の、なりとよみてけるを、からくしてさしわたる。此川やすく渡りうることのかたければ、よきあないを、さきにたててわたるへきわたりなり。人ことに、かはかりの川よと、をこのふるまひをして、なかれしにたるものの、かすをしらす。まいて雨いさゝかふりても、みかさ、たかうまさりて、わたらんことかたし。今年も旅人ふたり、ところの女もなかれうせたるなとかたる。

天流川土橋

みちしはし行て、右に、天流河なかるゝに土橋かけわたせり。この橋より外嶋（とのしま）村に行て、むらのをさ、飯島なにかしとかやかやに此夜泊りてと、人のいさなふにまかせて行。あなあやう

の橋や、此あら川にといへは、さにてさふらふ、此三日よか前なる日、まねくりする十あまりのわらは、子引つれたる馬にのりてかへりくる夕くれつかた、馬の子の、ちふさ、さかしもとめんと、母うまのはらにくひさし入て行〳〵、おやうまの、おとり〳〵てあしなんふみおとし、橋の半にして、うま人ともに、さはかりはやきあら瀬の浪におちて、はる〳〵となかれ〳〵て行を、おくれ來るまねぐりの女、遠めに見て、わか馬はのり捨て、いそき來しかとすへなう、聲をかきりに叫ひたりけれは人々來集りてけるほとに、馬は遠方の瀬より高きしにとひあかりつれと、童ははやせの浪にいさなはれて、いつこにかまきれうせたり。はかなきことおもひやるへし。人あまた來て、水そこを尋ね〳〵わたれとあらさりけれは、遠つあふみのしほせになかれ入て、鰐にやくはれなんと、母はせ來てふしまろひ、河原の石の上に、からうちあててなけけと、いふかひなう、きのふしからみにかゝりしとて、筏もりの見つけて、ほね斗なるをとり來しなとかたる。

　のる駒のせもはや川に遠近のあはときへ行水のみとりこ。

六日。こゝなる光久寺にすめる、棠庵上人にまみへんとてゆけは上人、隱元せしのもたまひし如意とて、つねに見しとは形もことに、さゝやかに鐵を空しくつくりて、いろ〳〵のかねをもてくさ〳〵の繪をまきたるを、とうたして見せ給ふとき、

見てもしれ世の人ことになをからぬ心のこときつのうつはを。(マヽ)

七日。出たゝんといふを、あるし、此五月雨に川水いとたかうなかれ、行末も猶わつらはしからん。はるゝまてはこゝに在てとゝめぬ。

田植の男女

十二日。垣のとは、みな田面にて、男女うちましりて、「一夜におちよ瀧の水、おちてこそ、にこりもすみも見へれか。」と、ちまちのをもに、聲あまたしてうたふ。まことや、いさゝかの晴まもあらて、いかはかり、ぬれてものうき、こゝろやりにやうたふらんと、さうしおし明れは、ゐさらゐのこときの小川も波いやたちあふれ、庭の小草も見へす、さゝら波立たり。

をとめこか心もすます落たきつ行水くらき五月雨の空。

さなへとり〳〵うふる中に、手をそきうへてをは、あなにすとて、手はやのうへてあまたに、うへまはされて、いつへきかたのなけれは、たゝ、たちに立てけるを、こゝらの男女、ゆひさし笑ひたり。

田植の俗習

十五日。空はれたれは、近き邊の田歌唄ふを、さきかんと、やのあるしと友に出ありけは、はつよめ、はつむこも田植のいはひとて、つねには、そのことにゆめたつさはらぬも、おりましりて、うふるならひなれは、おなしさまにおり立て、うふなるを、とねといひて、田うちならしたひらくる男も、あまたの早乙女も、このむこ、よめを心にかけて、くはやといへは、こひ

ちの水を手ことにすくひかけ、すくひかけ、にけ行は追めくり、田のあせ、くろみちをふみしたきおひ行は、おせとなりの小田よりも、あまたむれ來て、そのむことらへよ、よめやるなとうちかけ〳〵かけられて、笠も衣も、ひちりこにぬれて、さゝやかのやににけ入り、笠のしたにて、よゝとなきて、今よりは、なゝ田うへしと、まか〳〵しういふ。むこかねは木の朶をたくり廩のうへにのほり、いのちしなん、ゆるしてよ、はやいはひ、これにをへなんといふを、なき居るよめのあふき見たるを、此女にかはりて、

五月雨のはれまはあれとほすまなみつらきこひちにぬるゝたもとは。

これなん、さとのならはしとて、ひとよのうちにひとたひ、かくなん、からきめを見けるためしにこそ。

廿三日。ていけ、よけれは、外島をいつ。このころの雨にや河水いやまさり、橋々おちなかれうせ、天流川は、あら海なとのやうに浪うちあくる。岸まて人々をくり來て、むかふ岸に居る舟よはふ。舟ははる〳〵と、きしつたひさしのほり〳〵て、後なん浪にうちまかせて、とふやうにくるを、こなたの人々、まくり手をして待居たるに近つけば、川長、ともつなを高岸になけあくるを、もろ力にたぐり、舟ひき寄るにのりて、

舟をさのやすけも浪のはやきせに日をふり渡るあめなかれ河。

からきこゝちにわたりつきて、ほとなう殿村といふ處ありけり。ゐせきのほとりに、ふたもと、みもと咲たるを、花あやめといふ。

花あやめけふを盛とさき草のみつ葉よつ葉のその村やこれ。

驟雨に男女

ふと麥かる男あまた、ことしはなりはひもいとよけん。いつこも、ゆたかならんなとかたりもて、酒のむやに、われも沓かはんとてさし入は、空かきくれ、はやちふき、神うちしきり、光まなこにさへきり、雨はゐにゐてふるに、ものにまうてたる女にやあらん、ひち笠にぬれて、裾にひとしきふり袖を左右の手にとり、あるは帶に挿てゆくは、此軒に、ひとりかさやとりしたる女に、雨にふりこめられたる男もたちて、此女にけさうして、しのひやかにかたらひ、雨の晴たるもねたけに、たち去らす居るに、戯うた。

ひく方にまかせて雨のふり袖もぬれてひたちのをひにかけけり。

忍び夜妻

晴たれは、やをいつるに、かの男女うちましりて、いまのかんたちのおくかなさよ、いつこにかおちてんと語あひ、「忍ひ夜づまとかんたち雨は、さゞらさめけどのがとけぬ。」と、うたへは、今ひとり、まことにむかしの人は、よくまてに作りしぞかしと、ほゝゑみてかたり行くは、此あたりの下摺女ある家には、たれとなう夜半にうちむれおし入て、契らぬ人にも物いふは、大原の雜混寢にひとしけれは、それをかくは、うたふとなんいへり。子規の鳴たるに、

宮木の宿

小野邑最林寺十二世

憑の神の宮

潮尻を過ぐ

桔梗か原

ほとゝきす友にかたらへ我も又雲のいつこにこよひたひねん。

松嶋てふうまやにいたる、里のはしやけたり。行〳〵此ゆふべ、宮木のすくにやとかる。

みちのくの名もなつかしき松嶋や夏のこはきをみやきのゝ原。

廿四日。みちはる〳〵來て小野邑に至る。最林寺の上人は、むかし逢見たる人なれはとふに、三とせなるさきの年、せんくゑし給ふと今の上人のいへれは、つかはらにとふらへは、此寺の十二世とかいたるそとはも、くちかゝりて立り。みちしはしへて、いかめしきものあり。むかしまうて奉りし、「しなのなる伊奈の郡とおもふにはたれかたのめのさとといふらん。」となかめある、此里におましませる、憑の神のおほんみつかきなりけり。

誰もさそたのむの神のみしめ繩かけてくちせぬちかひなるらん。

としことの葉月朔の日は、たのも祭とてかんわさのありて、なりはひをいのるみやしろなれは、神をたのめとも頼むとも、里の名もしかいへり。かくて潮尻につきてひるのなかやとして、阿禮の社にぬさたいまつりて、馬にてとく〳〵とのり過て、すきこしかたをかへり見つゝ、

こやいつこ駒の足なみはやけれはみつるも遠し汐しりの里。

いとひろき野なかに出たり。これなん名たゝる桔梗か原となん。そのかみ、善光寺に般若

經をさめ給ふ何かしの君の牛、ちからつきて、この野原にふしたり。そのころは、原の名も來〻經とかいて、ききやう原とはいひき。又此野邊に、きちかうも多く咲は、しかいひ、その牛伏といふ寺もありなと、このうまひく男のいふ。やのふたつあるに、こかねもちとて粟のもちいひうるを、馬そひたうひて、あなうまの此こかねもちといふに、かれにかはりて、うちたはれたる歌。

春夜の花にもかへしよく搗てちゝのこかねの餅のうまさは。

木曾川

木曾川といふあり。岐岨山なかに見しとはことなれと、おなしやまの、はさまよりなかれ出れは、これもしか岐蘇川といひ、わたせるはしを琵琶橋といふ。

はしの名のひはのしらへにひきかへて行かふ人のふみならすらし。

元洗馬の里

洞月上人

洗馬のうまやを左に、もとせはといふ里にいつ。大池邑なる宗福寺の洞月上人に、むかしねもころにものしたれは、いて、その上人のもとにといへは、ある人聞て、その洞月上人のことにて侍る。小見といふ山里に、しるへはかりの庵しめて、みつわさす老のたのしきほゐと、あけくれうき世の外なる栖にとし月おはしたるを、人々山田のひたとせめいさなひて、今はこの青松山長興寺にふたゝひ出給ふといへは、さちなるかなとて、この杉村に駒つなきて門に入は、上人は小坂てふところに出行給ひぬ、とみにかへりおはさんと、小法師のさし出て、

青松山長興寺

開山禪師像

あないするにまかせて入れは、相しりたる老人ありて、こは久しき人見しかなと、なみたおしのこひかたらふまに、はや、あるしの上人かへりおはしたりとつくるに、まみへたり。

廿五日。とらひとつより、あまたの僧侶おきいつるけはひして、かね、つゝみうちましへたる音に、ありと見し、ふる郷の夢もおとろかされ、みときやうの聲にこゝろもしめるおもひして、手あらひあたり見ありけは、此みてらひらき給ひたるせしの、みかたしろとて、大に作りてすへたる。ぬかのわきのさゝやかにやふれたるは、此せし、世に在すころ、かく、ぬかに疵なんありけるか、をのつからあらはれたり。これを佛のたくみ、くへなをしても、ほとふれは又あらはるゝなと、大とこのむかしをかたる。方丈のむろのうしろは、けはしき山のさし出たるより、とく／＼としたゝりおつる水を、かけ樋にとりて、耳も涼しき音せり。人あまた、おもねるこはつかひしたるは、田うふるもをへて二三日、里こそりてあそふとて、世のわさもとゝめて、過つる五日のせくにひとしう、ゐやしありきぬ。上人、むかしをかたり出給ふ。

寂好法師の臨終

むさしなる寂好ほうしも、むかしのすかたにたちかへり、ふたゝひみちのおく見んとその國にいたりつれと、えしほかまに至りつかて、風おもりかにおこりて、今は死へうと、「身はとてもたひに消なはしほかまの浦のとまやのけふりともなれ。」と、かいはつれは、きのをたへたると、甲斐の國の人のもとよりしらせ來けるなと、ほろ／＼としてかたり給ひ、

又むかしにたかはて、

　十とせあまりあはて過こしうらみさへけふは晴ぬる五月雨の空。

となんありけるに、返し。

　けふこゝに袖こそほさめ客衣うらみ晴たる五月雨の空。

廿七日。この里の人々とふらひ來て、すむは八橋の近きにや、今もみつゆく河やなかるゝ、燕子花の咲るやなととひもて、熊谷直堅のかいつけける。

　けふよりは心へたつなかきつはた咲紫のいろもかはらて。

とよめる返し。

　いかに又こゝろへたてん垣津幡はなの言葉の匂ふいろかに。

くすし義親の、

　音にのみいまた三河のかきつはたふかき色香をあせすかたらへ。

かくなんありけるに、返し。

　垣つはた生ふさはすれと川水の淺き心はいかゝかたらん。

廿八日。くすし可兒永通のやにとふらへは、あるしとりもあへす、れいの、すきたるすちとて、

五月雨のふりくらしたるこの宿にとひ來る月のかけもはつかし。

とかいて、老のひかこと、これ見てとてさし出しけるに返し。

さみたれのふるきをしたふ宿なれはさしてとひよるかけもはつかし。

水無月七日。岩垂といふところに人にいさなはれて行に、不盡塚といふ森あり。此やつかにのほれは、ふしのみゆといふめる。

岩垂の不盡塚

はるかなるなかめをこゝにするかなるふしのたかねのゆきゝとゝめて。

しりにたちくるすきやう者、不二は見へねと、しかいふ、たゝ此塚の名なりとて、その邑に近く、山河たきちなかれたり。

末はかく淵とよとめと荅つたふ雫いはたる水のみなかみ。

岩垂氏にて

この村の岩垂なにかしといふかやをとふに、ゐくはまゆのいと多く、まゆこもりして宿はいふせきと、やのとうめのいへるは、「たらちねの親のかふこのまゆこもりいふせくもあるか妹にあはすて。」といふ、なかめのこゝろにもかなへり。まことに筺の數多ありけり。

夏引のいとなむわさやしけからんとるてあまたのまゆ作りして。

雨のふり來れは、こよひは、いふせくとも一夜とまりてと、なさけなさけしう、あるし。

雨ふれは淋しき宿にとゝめてもあけなは行むもとせはのさと。

歌はをさなけれと、まことはいとふかし。此返し。

こよひふる雨ははれてもあけは又ぬれてわかれん袖やうからん。

十日。「もとせはの里の夏」てふことを、沓冠によめと人のいへは、

もりにけさとさし近しと蟬の聲の葉末もれてな軒に鳴たつ。

折句歌三首

又、青松山のすゝみといふことを、おなしさまに、

あかすのみをのへをてらすまちも見すつきの葉分のやへの重やま。

ある人、牡丹の葉折もて、これをもよみてなとありけるに、「ふかみ草ちりしのち」てふことを、

ふりひたちかすみし山のみねもなしくさのみ茂りさくる通ひち。

長興寺にて

十二日。青松山のみてらにまうつれは、大智禪師、瑩山禪師のみたまをまつり給ふに、「蓮華臺上舍那身、天上人間稱獨尊、七佛以前通血脈、釋迦彌勒是兒孫。」といふことを、

はちすさく　花のうてなに　すめる身は

あまつ空より　よのなかに　獨たふとき

君よかく　なゝつのほとけ　あらはれぬ

其さきつ世に　つたへにし　ちすちの法と

聞からに　　　　さかもみろくも　　　こやむまこかも。」

いにしへの雪のやま人いまたよに出こぬ月のさきにこそすめ。

牡丹と瞿麥

十四日。熊谷氏の閑居しける庵の、庭もせに、牡丹を殖たりけるなかに、葉ひろく生ひ立る、姿ことなるあり。これなん、實うへしてはしめて咲つるか、花のめてたかりしよしをいへれば、

見ぬ色のいとゆかしきことしよりさくもはつかの花のおもかけ。

あるし、おかしとやおもふ、あまたたひすしぬ。やをら隆喜かやに、瞿麥多くうへたりけると聞て見に行しかは、今盛なる花に、けのこりたるあさ露おもけに、風情ことなり。

いろ〱の玉とし見へて白露の光涼しき床夏の花。

此里の祭典

十五日。此里の祭なりとて、近き村々の人さはに立あつまり、やかて引わたしぬ、しら布によそひたる馬に、にきてさしてひき、神の御名しるしたる幡おしたて〱行は、たいめいのみちゆきふりをまねひ、鈴の音こゝしう馬曳行男、御世のためしを、ちよ万代とうたひ、つゝみ、笛とよめきたるに獅子頭をかさし、あるは車おし促に、わさおきまひのたはれせり。此、ねるしりにたちて御祠にまうつれは、御前に弓箭、とりものかさり立て、ほうり、まうづる人のかしらを、五色のぬさもて、きよかれとうちはらふに、神子は、ゆにはにおりたちて竹の葉

ふりかさし、「君か代はにこりもあらし高倉や麓にすめる小潮井の水。」と、祝、あまたの聲にうたふをきゝつゝ、

いか斗神やうくらん君か代はちよもとよみうたふみやつこ。

又ひろまへに人々うた奉りけれは、われも、

廣前の玉串の葉の夕榮て入日にみかく影そ涼しき。

幾世へん榮をこゝにみやしろのにきはふけふをいのる里の子。　永通

石清水きよきなかれの末遠みこゝにもうつすかけそかしこき。　直堅

十六日。熊谷直堅のやにさふらひしかは、「春雪に心そゝきて出行は猶神風の身にやしみなん。」又「神路山いはね小坂もふみこへていさみて歸れ駒のあしなみ。」此ふたくさは、三溝隆喜の子いせまうてしけるをりしも、わかよみて、をくりしたりけるを、そのかへさに都にのほり、あき人の家にしるへありて、やのうへの宿りして、なにくれと旅の調度ともつゝみ、てうしけるほとに、この歌かいたる紙を風の吹ちらし、人の、ものかたらひをる前におちゐたるを、此男うち見て、ふところにしてもてかへり、あかつかへ奉る、今城何かしの君と

三溝氏の京土産とて

かやに御らんせさす。君おかしとやおほしたまひけん、よからぬふしはかいけち、おかしくふでそへ、おほん手つから淸らにかいあらためて此男にたはひたるを、かの男ふたゝひあき人か家に來て、しか〳〵のこと也。是なん、そのたひ人に見せてとて、さみぞたかよしが子の、都のつとにとて、ゆくりなうわれにくれたりけるは、身にあまりぬる、かしこきおほん惠にあひつると、こよなうよろこほひてけれは、

雲井まて誘ふ言葉の花の香を吹返す風の例やはある。

十八日。永通かやに洞月上人とふらひたまひて、砌に、としふる柿の樹の下の、風涼しう吹かたにむしろしいて、上人の、

いにしへをこゝにうつして柿の本聖のをしへあふくかしこさ。

かくなんありて、われにもひたにいへれは、

露斗惠もかかれ柿本するゑ葉にたとる身をもあはれと。

この夕、螢あまた紙の帒にいれて、窓におきたるを、

おこたりの身をもおもへとおこたらす照す螢の窓の光は。

十九日。つとめて月の涼しう殘たるに、うす雲のひきなかれたるは、床尾といふ山也。

夏夜の床尾の嶺はいとはやも明てかすかに有明の月。

高嶺の雪殘りて

二十日。朝開のまゝに、ひとりうちむかふ。此里は、こと國よりもいと涼しく、あしたゆふへは、いまたあつ衣のみ重ねきて、やゝふと麥苅をさめ、まゆ引くわさすれと、蕎麥畑は今青みわたり、草木の花は、春のも夏のもその野山に咲ましりて、卯花、そり、しらになとは五月雨にうつろひ、みな月のもちに、布士ならぬ雪のたかねたかねをあふき、氷室は軒はのやまにやあらんと、ひとりこちたるに、たけめせとて、くさひらもてありくあき人の衣、さと吹返す風は袖寒きまて吹通ふに、

見るたひに涼しかりけり夏そともいさ白雪の消ぬたかねは。

歌の應答

廿五日。松本の郷のくすし澤邊何かしは、十とせのむかし、その里の小松有隣、吉員なと、月のむしろにかたらひし人なれは、ふみかいて、けふ、その處の祭見に行人にたくへて、

月にとひ花にとはんと思ひこしあたに十とせも過し春秋。

といふ歌つかはしたる。夕つかた、返しもて來ぬ。

十とせあまりわすれやはする花にめて月に遊ひし春秋のそら。　雲夢。

廿七日。永通かやに人々あつまりて、うたよみくれて、いさかへらんと出たつに、いましはしと、あるしのとゝめしときうちたはれて、くすしよしちかのいはく、

話りあふ言の葉草も水無月やあきの來ぬまにいさ歸りなん。

庭のなてしこを見て、さみぞたかよし。

やかて來る秋とはしれと此宿にとこなつかしくかたりこそすれ。

となんありけるに、あるしにかはりておなしう。

秋のくるおもひはさらに夏の田のいねとはいまた穗にもいたさし。

窟に入りて

廿八日。熊谷かやの、しりにありける窟に入ぬ。しはし小坂くたれは、內ひろく、ほのくらく、風ひやゝかに吹たり。

夏とえもいはやのうちの涼しさはうき世にしらぬ風通らし。

あるしの云、このいはやとは、六十のとし過しむかしに、ふと見つけたりけるか、いかなるわさに、ほりしともおもほへすと。

廿九日。「船納涼といふことを、　隆喜の句に、

舟に聞く涼しき聲やまつのかせ。

とありけるに、　みの毛ふかれて眠る白鷺。

と和句せり。このゆふへ　「夏秡を、

心まて涼しかりけり御秡河あつさも波のよそにはらひて。

山上の展望

ふん月の朔。ものにまうてんとて軒端の山にのほれは、ようへの雨にや木々の雫ふかう、空

もまたうちくもり風涼しう。遠かたを見やれは、きちかうか原は青海原のことく、みとりのむしろしきつかこ。うすうもみちぬとも、又枯生とも見やらるゝは、苅殘したる麥はたけにや。犀河の流は北南に、龍のわたかまるかたにひとし。黑き森に白き幡の吹なひくは、みてらにや。うちそむけは、靑松山の止靜堂の中まて見入たり。まつ、みやしろのあるにぬさとりぬ。このみねは、そのかみ、なにかしの守のすみたまひけるころ、城おとしてんと、谷々に兵あまたをふしかくして、水のとほしきことをやはかりてん、よもやもをかくみたれは、水にうへて、のこりなうしにほろひなんと、まち〳〵てけるほとに、城の邊には、こゝらの馬引いてて高嶺にならへて、よねもて水のやうに、ひたあらひにあらひしかは、兵等あふき見て、こは、わく泉やあらん、なせめそとて、かくみ、ときたりけるとなん。さりけれは其ときよりそ、ところの名をも馬あらふとかいて、せんはとはよみ、今はたゝ洗馬（せば）といふめるなと語ぬ。

洗馬の由來

雲の中より嶺遠くあらはれたるは、有明の山なり。「夏ふかきみねのまつか枝風越へて月影涼しあり明の山、といふ歌も、こゝにいふなかめとも、「花の色は三月の空にうつろひて月そつれなきあり明の山とは、越にありとも、此山ともいふなりけり。見るかうちに、なこりなう雲おほひて、

有明山遠望

心あらは秋風さそへ村雲の中にへたててあり明のやま。

見るかけはそこともえこそ白雲にたちかくろひて有明の山。

八幡社參詣

かくて此たかねをめてにくたりて、やはたのみやしろにぬさ奉れは、うなひめの袖に、すゝの實こき入て來るを、このとしもいたくなりしか、こはいかゝせん。此竹の實の多くなるとしは、世のなりはひの、よからぬなといふもうたてくて、

ひろまへの風になひきてなるすゝや豊年のくるしるしなるらし。

この歸さ觀世音にぬかつくほと、雨なんふりこんとて、いそき行く野路に、女郎花の、木の下に一二本咲たるあり。

誰にかくうしろめたしとをみなへし草葉かくれの色や見すらん。

洞月上人

二日。洞月上人の方丈のむろにとふらへは、上人、こゝもまだうき世也けり。此三とせのほとは、古見てふかた山里に、しるべはかりの草ふける庵に在て、月花のたよりもいとよかりければ、さなから心の月も、ひとりすみ渡るおもひしたるを、こゝらの人をみちひきて、青松山にすみねと人々のせちに聞へつれは、いなひかたく、ふたゝひ世に出て此寺になとありければ、

洞の中によしかくるともあらはれん世に明らけき月の光は。

淺間山爆發

夕くれちかう、ものの音いたくひゝきたりけるに、ふみよみたるもとゝめて人々かうかへ、

又かんたち（なる神をいへり）かといへは、さなん空のけしきともなし。近きとなりの板しきに、臼やひきてんとてやみぬ。又とひ來る人のいはく、今の音聞しか又なりぬ。こはさきつ日より、淺間か嵩いたくやけあかる音なりと、今通りし旅人に聞しなといへり。

三日。はし居の軒に、夕月の光ほのかにてれり。

　書月の三日の月影見てしより葉月の望そよみまたれぬる。

五日。ある人の、回文の歌よめといひしとき、

　草花はさく野邊の生よしなの野の名しよふのへのくさはなはさく。

又神祇のこゝろを、

　むへそかやよゝのよみかき音にかに遠き神代の世々やかそへむ。

七夕の宵

七日。あしたの空うちくもり、軒の梢に蜩の集く。

　たなはたのうれしからましあしたよりいのり日くらしちろ聲にして。

ふたつ星にたいまつるふみ。　「秋風やゝふいて、けふは、ふん月七日にそなりぬ。われも此里にたひころもきなれて、あひ見ぬ星合の空をあふかんことは、銀河に通ふ、うき木の龜にもたとへつへう。あくるを待て、うなひら、ちいさきかたしろのかしらに糸つけて軒にひきはへ、くれ行空をまつに、身のけそう、きよらによそひたちて、めのわらは、あまたむれつ

とひ、さゝらすりもてうたひこち、こよひや、ほしをいさめ奉るならん。ねくらにかへる、むらからすも聲うちそへて、くれ行空にはねをならへて、橋をやつくる、とく〱といそきわたりぬ。遠かたの高嶺の、餘波なう暮初て、星ひとつ見ゆるやさおもふを、山口に、あまの河波いまやたちわたりなん。もみちのはしのかゝるうれしさと、世中のおもひにたとへて、あまつ空までおもひやりぬ。こよひやこゝろ安河の、浪しつかに立かよひ、へたてぬなかや淵ならん。五百機のをり〱あらぬ逢瀬は、神代のむかしにや、つらくも契りおきけん、せちなるためしにこそあらめ。これや手酬の琴の音つれたに、ゆるしたまはぬ一とせのつらさ、ぬる夜の數やすくなかるらんなと、あまたゝひすして人々空のみあふき、こよひの手向にとて、から歌、やまとうたのこゝろをつくして、此月のけふのこよひのいまや、世中の人、をそりみかしこみ、ふたつ星ををかみたいまつるならしさ、あまの河なみ、ひんかしにたちなかるゝ空まて、まとゐしたり。

「いたくもみちしたる、はしの枝を、人のたふけしとき、

天の河わたらん星に手向くさ是やもみちのはしの一もと。

歌あまたあれと、しつたまき數にもあらぬ、あかのは、みなもらしつ。こよひ、人のなかめしをのせ、あか歌一くさのせたり。」

たなはたのまれに逢夜も更行は又こん秋や契おくらし。　直昇

天の川空にあふせを棚機の幾秋かけつ波のうきはし。　政員

たなはたのたかはぬ中の契とてかけてむかしも今もかはらし。　吉女

逢夜半の空なつかしみたなはたの契れる中や樂しかるらん。　富女

七夕風

折にあひて松吹風も星合の手向の琴に通ふ涼しさ。　直堅

七夕雲

たなはたのつもる思の言の葉やかたり殘らんよこ雲の空。　永通

七夕霧

立のほるあまの河霧秋風に晴てこよひはほし合のそら。　備勝

七夕月

秀雄

再び淺間山爆發

だつま菊

幾千代の秋の契と銀河月すみ渡るかさゝきのはし。

八日。夜半より、れいの音ひゞくに起出てその方をのそめは、きのふよりもまさり、はたへの山を越へて、五月斗の雲のいや高ふ涌出るかことく、画かくとも筆の及ふものかはと、人ことにになうめてて見やれと、そのほとりには小石、おほ岩を、はるけきみそらにとばし、風につれて四方にふらしむるにうたれ、やは、ほねものこりなうくだかれ、あるは埋れ、にけ出る人いのちうせたるは、いくそはくとも、はかりしらさるなと、よりくる人は、此ことのみそいひあへる。淺間か嵩の煙は、不二にならびて、いひはやすならひなれと、こたひは、又なきためしといひさはきぬ。ひるつかたよりいよゝまさりて、なる神のことく、なへのふるかと山谷ひゝきわたり、棚のへいち、小ばち、ゆりおち、かべくづれ、戸さうし、うちはつれ、やも、かたふく里もありけるとか。このあたりはいと高き山里なれは、なりとよむ音も、うときやうなれと、ひきき國ほど、わきて音高うひゞきたるにや。國々のつかさ〳〵より、あゆみとうする馬して、この音はいつこにやと、岐岨の御坂のあたりまて尋ね〳〵至り給ふは、日ことに、くしのはをひくよりもしけしとなん。

九日。三溝隆喜にいさなはれて、二子といふ処にゆく。野良は、もゝくさのひもときわたしたるに、陀都麻といふ草花いと多く、月草の色に咲みちたるは、たとへつへうもあらす、はな

たのむしろしけるかことし。はみものとほしきとしは、このくさをつみて、かてとしてくらふ。だつま菊は、吾妻菊ならんかし。たかよし何となう、「花のいろはうつりにけりないたつらにと、すして、此歌ほと、にもんしの多かりけるはあらしといひ出るに、うちたはれかてら、折句のうちに、四の、にもしをおきてなかめたり。

たねはいかにつきせす野へにまかなくにくる秋ことにさきとさくらん。

榊木坂

榊木坂といふあり。嫁入の女、この坂こゆることいみて、こと みちを行となん。いかなるゆへにや。雨のふり出れは、大なるその樹のもとに休らひてんとて、

神の在すかけにやとらん柏木の葉もりの雨によしぬるゝとも。

赤綿

山賤、狩人のかうふりにつくり、寒さしのく赤綿といふ草の、いま花盛なるを折て、これに歌よめといへれは、もと末の上と下とにおいて、ふたくさを、

あき風の吹にし日より身に寒く賴みし草を人もかりしか。

わか袖のあさな夕くれさむけれはかりてねなまし野邊に今はた。

似雲法師の歌

小俣といふ村につきぬ。大和なにかしかやの屛風におして、似雲法師の手にて、「岡萩「行かへり露もおかへに咲萩の花すり衣家つとにせん。「泊衛　「身にしみてわすれんものか浪まくらあかしの浦に千鳥なくなり。」この法師、むかし此あたりを通られけるにや、お

かしきなかめともの、こころ〳〵にかい殘たり。神戸村なる丸山たれかやは、いつこならん。あらぬかたにみちふみしといへは、かたまに岩魚、鰍なととり入たる女、われもこのいをうりに、そのあたりまてゆけはとて、さいたちてゆくをあないにまかせつゝ、此もて行、いをの名ともを戲れ歌に作る。

　さして行みちこそしらねしるへしてそこといはなん何かしかやと。

かくて、其やとにしはしかたらひて、やをら二子村にいたる。軒の林ことに、くつ〳〵ほうしいと多く鳴たり。こゝには、つく〳〵ほうしといふ。歌に、「をみなへしなまめき立る姿をやうつくしよしと蟬の鳴らん。」といふも、このことにこそ。この夜、因信かやにいねたり。

十日。夜あけはつれと、くらき空は、こしあめのふれは也けり。

　雨つたふ軒はの露の玉くしけふたこの里は明るともなし。

日たけて當特かもとより、この雨さう〳〵しからん、晴間もとめて、とひこなと、ふみにいひをこせけれは、さちにをやみたるに、あるしをはしめいさなひて、そのやとに至る。庭の萩眞盛なれは、

　われもしかこひてやしたふけふこゝに色なる萩の宿をたつねて。

あるしまさひとり、返しせり。

　咲みちて匂ふその香は萩よりも君か詞の花にそありける。

十一日。因信かやをつとめていつるに、あるし、又來りてよ、二日三日もとまりがてら、かならす待侍るなといへるとき、

　又いつと契て末を松の葉のふたこの里に三夜とまりなん。

けふも小雨そほふるに、あまつゝみして出たつ。みちのかたはらの家の軒に、男女のかたしろ風にふかれたるは、七日の星に手向しを、そのまゝに、とりもをさめさりけり。慶林寺と

慶林寺文的

いふに入て文的上人にまみゆ。上人、むかしよみける歌とて、あまたかいたる册子を見せ給ふに、

　法の師かかくる衣のそれならてひろふ詞の玉の數〳〵。

夕くれちかう、もとせはの鄉に歸りきぬ。

精靈祭り

十三日。くれなんころほひ、めのわらはは、七日のゆふへにひとしうよそひたち、「おほ輪にござれ、丸輪にござれ、十五夜さんまのわのごとく。」とうたひ、さゝらすり、むれありく。手ことに、まつ持出て門火たく。はた、五尺斗の竹のうれに、たへまつもやしたるけふり、むら〳〵とたちむすひあひて、空くらし。やに入り、たままつりする、あか棚にむかへは、世にな

き母弟の俤も、しらぬ國まてたちそひたまふやと、すゝろになみたおちて、水かけ草をとりてなかめたり。

この夕ありとおもへははゝき木やそのはらからの俤にたつ。

長興寺施餓鬼會

十四日。青松山長興寺に、施餓鬼會をこなひありけるにまうてぬ。門の左右なる柱に、入甚原門頓解無生之妙理、登正覺地倶圓實相之眞如。」といへりけるは、もろこしの心越せしの、めてたく書給ふ也。みほとけの前には、廣開甘露門轉無上法輪。」の幡をはしめ、なゝの佛のいろ〳〵はたに、つらやかれたる鬼の朱なるも、みな秋風にふかれ、みまへの接竿の、雨にぬれてひるかへるもたふとけに、汝等鬼神衆、我今施汝供此食徧十方一切鬼共と、みすきやう聞へ、かねうちならすをまちて、さしたる小幡われとらんと、老たるわかき、あらかひひこしろひ、みなやり、もとどりはなち、こひちのかゝりたるかほの、あせぬくひぬ。やをら尊師ひとりすゝみ立て、さゝけものゝりうごうを、よもに投けたまふをまち〳〵て、まくり手に小供等ひろふ。南無薩怛佗も、やゝよみはつれは、みないにき。存者福樂壽無窮といへることを、

世にすむはさちたのしみになからへてのふるいのちの限やはある。

亡者離苦生安養といふこゝろを、

なき人はくるしき海をこき出て安きみなとに舟とむるらし。

附近逍遙

十五日。殘るあつさにえたへす、近きほとりまて夕すゝみしてんとて、足にまかせて、ひははしも過ぬ。今しはしとてゆけは、床尾の嵩いとくらう、雨雲たちおほふ。そのあたりは雷を齋ひまつるといふ。

むら雲のへたてにくらき遠方は又もや雨になる神のみね。

桔梗か原まていたれは、こかねもちくひねとて、れいの粟のもちひ、おしきにのせていたしぬ。此もちを折句に、

この宿にかりてやいく夜ねもしなんもゝ草ちくさちらぬ限は。

まつほとに、月のさらにもれ出る光も見へねは、いさ、かへりこんとふりあふけは、なる神のみねにまつの火見へたるは、雲間の星とあやまつへう見つゝ歸れは、ようへのことく、小供おとりの聲さはに、とよみ聞へたり。

蘆田の鏡石

十六日。蘆田村のおく山に、鏡石とてありけるを見に行しかは、その高さ、いつさか斗の黒きいは、かへのことく、谷なかにつきさし出たり。石のつらは、うるしぬりたらんかことに、近つけは人のかたち、木々のすかたも、あらはにうつりたるもあやし。（天註―山城國金閣寺の北、紙屋河の邊り鏡石あり石面は水晶のやうにて、影を遷すこと、まことのかゝみのことし。）

牛伏寺詣で

桔梗が原

いら〳〵嶽

うこきなき例とや見んかゝみ石くもらぬ御代の光うつして。

鏡石てふことを折句歌に、

かく斗かけもさたかに見つるかないくはく露やしもにみかきて。

二十日。牛伏寺にまうてんとて、犀川をあさとく渡て、

秋もまた朝河わたり衣手のぬれて涼しく野山ゆかなん。

桔梗原にいつれは、名にしおふききちかう、をみなへしの盛、おかしう見つゝ分れは、此野には石弩あり。家つとにひろはんなといひもて、傘松と名いふか、野中にひともとたてり。これなん、みちふみまよふ人の道しるへとせりけるなと、行友のかたりけれは、

里遠きひろ野にまよふ旅人のかさてふ松やさしてたのまん。

遠近の山は、もゝへの濤のよりくるかと、たちへたつる中に、いとするとく、鉾なとふりたてたらんかことさを、いら〳〵が嶽といふ。此たけは、高さ、はかりもしらす、ゆめのほりえし人なく、麓は、ちよふる木々そひへたちて、世にたとへつへうかたなしとなん。雪しろう見ゆるに、戯れてよめる。

白雪のけたすちよふる山伏のすゝのいら〳〵高くこそ見れ。

露いと多く、行そてにこほれかゝれは、

誰か袖も萩か花すりぬれてけふ露分衣きちかうかはら。

熊の井といふ泉、わきなかるゝところあり。

よな〳〵は淸き流にをのか身の月やうつさん里のくまの井。

食齋堂

内田村のさし入に、食齋堂とて建るに、あみたほとけのおましませり。こゝにしはしやすらひ、御前に在てひち枕に眠り、松風さとふくに夢もいさなはれて、

はかりなき齡をとへは御佛のみまへにこたふ松風の聲。

虫の聲したるとき、いさなひし可臨の句あり。

石佛のうしろに鳴やきり〳〵す。

金峯山

荒河を渡り金峯山にのほる。前に水すますつねになかるゝは、山たから岸くつれゆけは、河水、すめらんことあたはしとなん。牛伏寺のこなた風天雷天をかたにうつしたるに、赤うし黑うしふしたるかたちを、木にて作りたる堂あり。此うしのもてはこひし大般若經は、こさやくからふねのつみ來るを、いつれの御世にかをさめ給ふとなん。あるはいふ、紺のそめ紙にこかねの文字なるか、いさゝか斗殘たるともいへり。（天註――御法のこと、前にしるしたれは、こゝにはくはしからし。）牛伏

佛に手向く

寺の觀音菩薩にたむけ奉る。

たくひなき佛の法のたふとさに立もとをらて牛やふしけん。

うしふしのよし河なみはにごるともくまなく水の月やすむらん。

牛と共にわれもふさはや萩の原　可臨

ちる柳御堂の軒にまひにけり　同

あるあけまき、金色の石ひろひ來けり。此河上よりなかれ來なと、これなん山色てふものにて、かねほりのわさしける人、こかね、しろかねなと、それ〳〵に見るならひありけるといへり。此水上に、こかね產るゝ山やあらん、さりければ金峯山の名もありけるものか。此かへさは、きちかうかはらにくれたり。

風の祭り

廿四日。けふは、風の祭あるといふ。「科野なる木曾路の櫻咲にけりかせのはふりにすきまあらすな。」となん俊賴のなかめ給ふも、此こゝろにや。須羽のみやつこに風ノ祝、雨ノ祝なとありけり。けふのかんわさは、五のたなつもの、ことなう、みのらんをむねとして、ところ〳〵の村にて、としことにせりける、ためし也けるといふ。

いつくさのほの上の露もこほさしとけふやいのらん風の祝子。

松本に行く

廿五日。けふは松本の邊にいかんとて、熊谷直堅とともにいてゆくに、とをき空には雨やふりなん、風はけしう吹て、野中の路にかゝれは今やふりこんと、とく〳〵と人遠近に行たり。

をちかたは村雨すらし風はやみ袖ふかれ行野路の旅人。

松本のうまやに到て、くすし澤邊のやをとへと、たかひつれはあはて、相しりたる忠雄の家をとはんとて、瀬畔といふ處をへて埴原村になりぬ。いはゆる殖原牧これなり。ゆくみちほそく、眞葛おほひふたきぬ。

葛かつら茂りにけりなはひはらの牧のあら駒かけ見へぬまて。

かくて忠雄か宿をとへは、砌の柴垣のとより、さゝやかにおち來るを手枕の瀧といひなかして、又おかしきなかめともありけるを見つゝ、

たのしさよちとせの友と手枕に松風誘ふ庭の瀧なみ。

あるし、硯さしいたして歌もとむ。

初秋月　　直堅

はつ秋の風に晴行山の端に見るまほとなき月の入方。

風前薄　　秀雄

かせふけはこほれてそれとあらはるゝ尾花か袖の露の白玉。

寄玉戀　　忠雄

つれなさの人の心の秋風に袖はなみたの玉そみたるゝ。

ともしひとりて、ふたゝひ、

はひはら牧

萩映水　　　　秀雄

咲萩のした行河の色ふかみ錦なかるゝ水のひとむら。

尋虫聲　　　　直堅

ふみわけて尋ねそわひぬ鈴虫の聲は來し野の草に鳴なる。

閑中燈　　　　忠雄

うき世をはよそにへたててすむかけの庵幽なる窓の灯。

廿六日。つとめて、白姫といふ處あり。むかしは村もありたりけるか、牛伏の川水いやまさりしとしなかれうせて、今はかくなん河原となれりとか。見し、にこれるなかれのほとりに

これも又にこれはさすか水かはて引かへしけんうしふしの河。

百瀬村

白頭翁露白

百瀬村にふるつかのあり。これなん世のしつかならさるころ、わか、いさおしをみせんと、きりたる頸の耳のみきりもてきて、こゝに埋しと人のかたる。かくて、桔梗かはらに出たり。白頭翁（それかとし八十に越たり）かすむ江原の里は、あの森のなかなりとうちむかふ。きのふ、かれかいほりを尋ねて、われ、

聞見れは桔梗か原の露白し。

とて、とより入しかは、五尺庵のあるし白頭翁露白、

あるかなきかの身に月のかけ。

となん和句せり。

釣魚圖に

葉月朔。ちかとなりの直堅かやにいきて、なにくれかたらふに、鱸魚の鉤に釣りたる画のありけるに此やのぬし、「行河の水のまに〳〵なかしつる糸にかゝれるいをゝこそまて。」となかめて、われにもと、ひたにいへは、

水にちをまかせてときを松の江にすむてふ魚のかゝる樂しさ。

今井の郷

七日。今井の郷にいたる。この里は、今井四郎兼平こゝに生れてける、其ところにほくら建て、かねひら明神とあかめ奉る。このかん司梶原景富のぬしに、はしめてまみへたりけるに

波のもくす寄るもはつかしみかきえし玉ある磯のわかの友鶴。

かくてこのぬしの家に、やまとふみ、かんよのまきをよめるを聞て、此くにゝ、いくはくの月日をへなん。

姨捨山月見

十三日。姨捨山の月見に、おもふとち、いさなひ行てんとてたひたちぬ。此日記は「わかこゝろ」と名つけて、外にひとまきとしたり。

人々往來

廿一日。恒德のやにあそひて物かたらふに、軒のまつかせ吹すさひ、つくれる庭のやまきはに、こゝら鳴むしの聲も、いとしめやかなる夕なりけり。

おもふこちあかぬまとゐに淋しさの秋も樂しとむかふ夕くれ。

なか月三日。今井の郷に、斐陀の國なる梶原家熊(梶原景富の父なり)のうし、とをたあふみのかみになり從五位下たうはりて、都より歸給ひ、其國の一宮につかへまつり給ふか、こたひ、ふる里の父のみたまに、ぬさとりむけんとて來給ふに贈る。

つかへます神の惠に位山のほりえし身の今はやすけん。

九日。常陸の國宗淳か、みやこに行とて、この國にしはしありける。けふなん別るとて、

又いつと契しおけとしら菊のあかぬいろ香にたちへたてなん。

かんな月八日。家熊のうし、飛太の國に歸り給ふける、その餘波に歌作りておくる。

きのふけふ　峯の紅葉の　いろそへて
錦の袖の　たひころも　たちへたてなん
おもひこそ　猶いかはり　つらからめ
あしたにきゝし　みちしはの　露のよすかも
かれ／＼の　柳の枝を　折わかね
春は榮へん　いろや見ん　契しことを
たのみにて　秋の山田の　それならて

鹽尻阿禮社

ひたてふ國に　在といふ　位のやまの
くらからぬ　光をそへて　すみのほる
月の行衛も　しら雲の　八重にかさなる
やま〳〵を　越路の雪を　右に見て
行らん方を　たくへやる　こゝろにつらく
かきくれて　今朝は別の　袖そしくるる。

わかれては山田のひたのひたすらにかけてたのまん音信もかな。

十一日。鹽尻のうまやに近う、阿禮ノ神社のありけるに、けふなんまうてんとて、ひるつかたまうてしかは、かう〳〵しく御籬の狗のむくつけけに、すさましう冬のけしきたつ風に、あられいさなはれて、みてくらの社の軒うつ音、杉の青葉にこほれかゝりて、にきてはら〳〵と音せり。

霜やたひおけともさらに杉の葉の色もかはらてあれのみやしろ。

奉るぬさとちりにし梔葉のつもれはやかてはらふ山かせ。

湖尻のあなたに、以の字山といふいたゝきも見へす、雲のいたくかゝりて、くらかりけれは、

はつ雪やふりこんといふ。

伊の字山みねも梺もかきくれてかゝれる雲や雪氣なるらん。

紅葉がり

十二日。山の紅葉さかりにそめたるを、ひとり、ふたりして見にゆきしかは、幽なる山中に、をのうつ音して、又うち枝なとあまたとりて、おひ出たる翁あり。

柴人はおしむ心のいろもなくつま木に手折みねのもみち葉。

十三日。紅葉かりありくに、ほうし車をとこめてと、からうたのこゝろはへをいひて、これなんみほとけに奉らはやとて、いとよくもみつる、はち、かへてなと、折かへる法の師にかはりて、

からにしき一むらおらんきさらきの花よりも猶峯のもみち葉。

十四日。夜邊、長興寺の前なる杉むらを行ほとに、そら冷しく風吹おこり、さと、うちしくゝ音すれと、もりもこさりけれはあふきて、

行ほとは袖こそぬれね小夜しくれ一村風に杉の下路。

十五日。麓の田とていと近き村にある寺の、緑櫻とて世にめてたき木の、このころの風に吹折しなと人のかたるに、

山かせのつらくも折しいと櫻くるとも春のおもひたへなん。

三の宮柱立

廿一日。砂田いさごたとよみて式内の御神なりのかん社は松本のほとりに在り。此日御柱のかんわさありける

に、まうてんとていつる。このをこなひは諏訪のみやしろをはしめ奉り、いつれのかん社にても七とせにひとたひ、卯日、酉日にさためたるかんわさにして、こと國に聞へぬためし也とか。けふは卯の日にひとりて、此三ノ宮（砂田の社を、さんの宮といふ）の御柱は立ける也。行みちの木草は夜な／＼の霜にくち、ちりのこりたる柞原、山かせにむら／＼と吹いさなはれて、みちふりかくせと、こゝらまうつる人のむれ行をあないに分れは、つかりにたくふ名の小河ありけれは、たはれたる例のなかめを、

しからみにかけつなかれてくさり河うかふ木の葉にさひ渡ぬる。

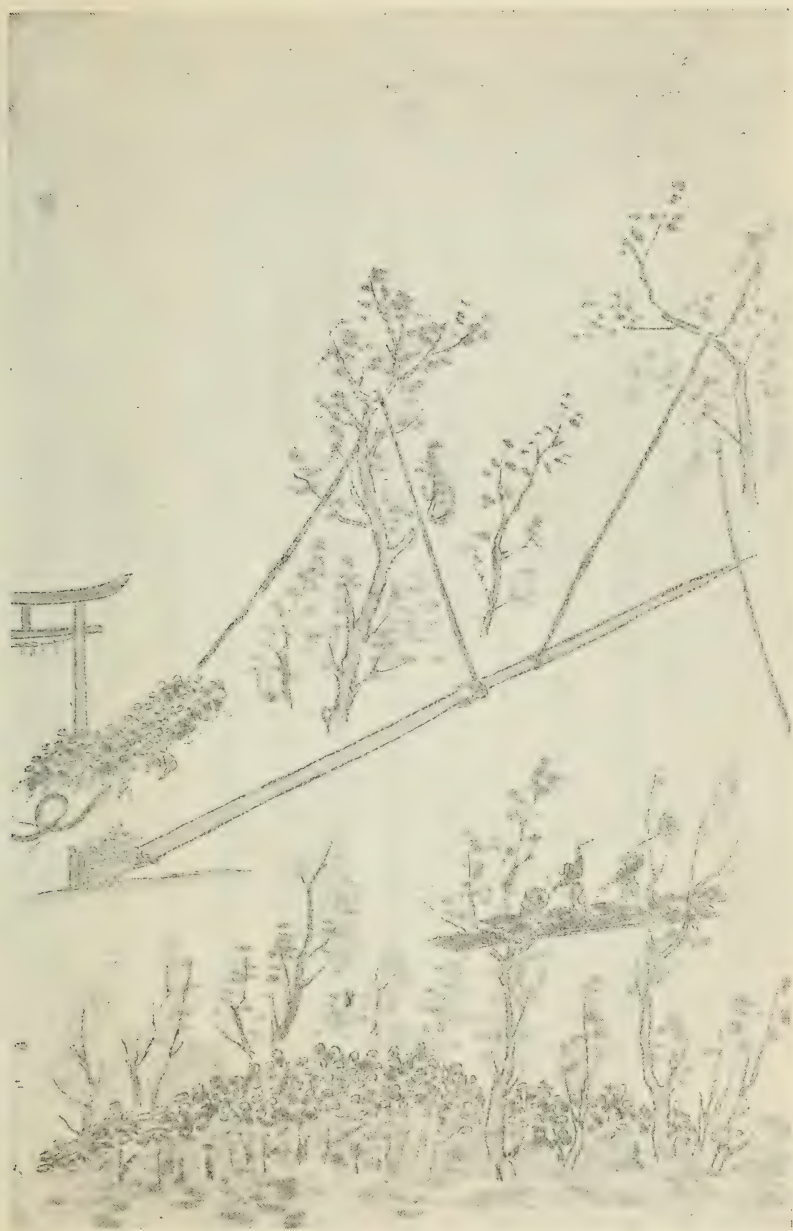
有明山時雨

雪のふりつもりたるたかねに、雲のきほひかゝりたるやま／＼時雨来て、はれみはれすみ、ふきもてゆく空に虹の引わたるかたは、とりはなちかたけとて、つねに鶏のすめれはしかいへど、まことの名は有明山といふとなん。このたけもやかて時雨ぬへう見へたるこそ、「かたしきの衣手寒く時雨つゝ有明山にかゝるしらくも。」と、後鳥羽院の御なかめに聞へ給ひ、「科野なる有明山を西に見てこゝろ細野の路を行かなとは、西行法師のなかめありけりなと人のかたり行に、返しとへは、其の山の麓、細野てふ村より来りけるものとこたふ。やをら

其の御柱木

ひろ前にいつれは、かの、おし立る柱のたけは五丈七尺にたれるに、大綱、小つな四とところに付て、其綱ともを高き木のうれことにひきかけて、引あけんもふけをしたり。まつ此木を伐

らんとては、七とせのさきつとしより願ひかねとて、釘、かすがひやうのものをうちおきて、みはしらの料とさためて、杣やまかつらもをのうちもらし、こたひそ伐て太山をは曳いたしける。かくてそなへ奉るに、たくみひとり出て、てをのところ〳〵にほと〳〵とあてて、うちきよめてさりぬ。かしこの木のまたには、あなゝゐたかくゆひあけて、男ふたり、みたり、紅のたのこひをよこはちまきとし、さいはひふり、ほうしとり、この聲をはかりつゝみにあはし、綱よつなからあまたしてひけは、したよりは、さすてふものしてさゝけあくるに、さへわたるかんな月の空に、身にあせしておしたつるを、見る人、そのむかしは、ひくつなきれて人あまた身をあやまち、身まかれるもありたりし。木の枝やさけん綱やきれなん、いさあなたにうつりいなんと、ことかたにひきはなれむれたつをも見て、いな、さることはつゆあらし。いちのつなには神ののりておましませは、身のさうしよからぬ人こそしられね、うちとのきよらなるこゝろしては、いさゝかのとかめあらんかはとて、みしろきもせて、ひとり御柱のよこたふしたにふりあふきたるは、しれものかなと人ことにゆひさし、男女、をさなき童をかゝへて、とくにけさりて、こと處に集ふ。ほとなうおし立てけれは、又ひとつの柱もひきあけて、みつなから、ゆめことなうたてたるとき、みなしそきてけり。かくて神のみまへに、

うなひめかひろふ落穂も山となる榮を祈れいさごだのみや。

委寧能中路

をちのみやとて神の御坐ありけるに、松の殖しを見て戯歌。

ちよかけてはくゝみ給へをちのみや植し小松のをひさきも見ん。

こよひは和田といふ村にやとかりぬ。やのぬしのいはく、こたひのおんはしらは、よつなから、ことなうたちぬ。あるとしの御柱は人あやまち侍るゆへ、こんとしにて七とせにあたれと、これをことしそし侍るは、さるためしよからねは也と、かたらひて更ぬ。夜さともに林のおち葉、霰うちましり、板ひさしうつ音、風さく、木の枝もをれぬへう聞へたる音に、ねさめしてきけは、あられいよゝをやみもやらぬに、

不慮の事もありき

霰降り雪ふる

山かせのあられさそへはたまくらの夢もくたけて明ぬこの夜は。

つとめてこゝをいつるに、水代といふ村の河邊のみちを行に、

うすらひのしたをくゝりて水しろの河瀬の浪の行なやみぬる。

雪ふり來て、さしてん行末も見へす、道もまとひつへし。

雪景色に

かれ／＼にあるかなきかのみち芝の色もかくろふ今朝のはつ雪。

霜ふり月朔日。永通かやのちか隣に、けさの雪のなかめせんとて、人々まとゐしけるときけと、こゝちそこなひて、えしもいかて、ふしなからいひやる。

あさつけて見まくそほしきあしかきのあなたにつもる雪のことの葉。

二日の旦。甲斐、信濃のあはひにありける八箇嶽とて、雪いとしろう見やらるゝをかぞへ立て、戯れうた。

雪つもるたかねはいくつ八かたけこゝに見やるもとをきさかひに。

四日。あさとく、田つらのみちに在りて、

苅あけしおくてのくちねうすらひのとつるおちほにつもるあさしも。

十二月十日。よねつかん料に、車やをいとなみつくりけるを見つゝ、なかめたり。

山河の音はさゆれといとまなみ水車弁の露もこほらぬ。

蘆の田村若宮八幡

十五日。雪いたくふりたりけるあした、ほとちかき、あしの田村なる、わかみや八幡のおほん神にまうてぬ。このおほん神は、石の雄元をひめて、かくなんまつりたてまつると人のいへは、をはしかたてふことを句ことのかしらにおきて、

おましさへはつかに埋むしら雪はかみのみまへのたむけなるらん。

わかこゝろ

信濃
廿三冊
信濃

元洗馬より
姨捨山に

天明三のとしの春より、科埜の國つかまの郡に在て、この秋、更級や姨捨山の月見てんと、おもふとちうちものかたらひて、葉月の十三日、いまた明はてぬより旅よそひして、もとせんはの里を出て野はらになれは、

さらしなの月おもふとてしるへなきやみにそたとる野邊のなかみち。

ある人、むしも、あかつきは聲うちよはるかなと聞つゝいふに、

夜とともにてる月影を霜と見て虫の音なつむ明くらの空。

桔梗が原

山の端ひき離るゝよこ雲のけしき、面白さ、ものに似す。萩薄かいわけ、あさ露にぬれて、ききかうか原をゆく。

身におはぬ色とや見なん秋萩のにしきにましる旅の衣手。

それよりも、かれよりもなと、花折、ものいひかはして、

さらしなの月のことのみかたりもてゆけは心のくまものこらす。

鉢伏山

ひんかしの高き山を鉢伏といふに、雲のかゝりたれは、たはれて、

ほかはみな吹はらひても秋風に雲そ集る蜂ふせの山。

とく、野村といふところにつきぬ。あさいする男女、戸をおし明てさしのそき、あるは水くみありく。

軒近きのへのむら萩露深くおき出て見んやこと〳〵に。

あなたに茂りあひたる森のあなたは、村居といふとなん。

秋風の吹もさそはて山かけに雲のむらゐの里そなみたつ。

不二橋を渡りて

ちいさき河に渡したるを不二橋といへり、此あたりより不盡の見へけるにや、いかゝ。けふは雲ふかけれは、

はしの名のふしこそ見へねくもる日はそことも心をかけて渡りぬ。

平田をさくれは、塘のうへに、大なる柳いくもとも立るか風にちりくを、ちる柳の風情ことにおかしと、人のたゝすみぬ。

秋風のさそへる露の玉柳ちるもしつけし御世のひかりに。

うるし桶、になふたる男あまた行けり。

時もいま世のあき人のはこふらし市にうるしのところせきまて。

松本の里

松本の里になりて、

いつの世に植てちとせを松本の榮へ久しき色をこそみれ。

行ほとなう雞栖のありけるは、岡田のかんやしろとてあり。こは、式內のおほん神と申たいまつれは、

賢木葉にむすひし玉と見てしかな露を岡田の神のみつかき。

こゝの關屋をこゆとて、

夜な〳〵の月のうさきはとゝめえす御世を守りの關のくいぬき。

あた坂

あたさかをのほれは身にあせし、暑さにえたへて、

嶺遠み桊をたとる旅人の身にあた阪そあゆみくるしき。

みちは、たぐなはのやうにめくり〳〵て、おりのほりて、はる〳〵と行すゑなかし。ふかき谷をへたてて、いかめしきいはほのたてるを、猿飛の岩といへり。けにやあらん、むれさるの木のみにあさり、梢をつたふ。

そひへたついはほの末をとふといふ馴しましらの身さへあやうき。

苅谷原

苅谷原といふところに鴈の鳴けれと、つらは見へされは、

聲斗そこともしらぬはつかりやはらはて霧の中に行らん。

わかこゝろ

桐光寺といへる寺の前に、たか札さしたるを見れは、くにはいつこの、たれともしらぬ、とし
は三十あまりなりける女の、この葉月の四日 草の上にふし死にしたるを、こゝに埋みおき
ぬ。五六にてやあらん、ちこ、ひとり殘したりとかいつけたるをよんて、なみた、なかさゝる
人はなかりけり。

ふる里の草にはおかてたつきたにしらぬ山路の露と消へぬる。

いさなひ來つる直堅のよめる。

うき旅に消る其身のなみたをやつかの草葉の露とおくらん。

會田の驛

會田のうまやに至りて、ゆふへ近けれは宿つきたり。

願がけの松

十四日。よへより雨ふれは、つとめて、あまつゝみしていてたつ。みちのかたはらに、とし
ふりたる松の四本ふし立るに、紙ひきむすひたるは、いかなるゆへかあらんとゝへは、これ
なん高埜大師の手かけ松に侍れは、身にねがひある人は、かく、紙さきむすひて行侍ると、里
の子のいらへにしりぬ。

觀音堂にて

左に堂のありけれは、坂のほりて觀世音を拜み奉るに、ひろさいく
はく、たかさ、はたひろ斗の巖に藤正木のかつらの、いと長くかゝりて、ふりあふくもあやう
けにのそめは、堂のかたはらの窓より法師のさしのそきて、そかうへより此大岩のまろひお
ちて、此下に御堂もたふれ、あまたのふち、ほさちの、くたかれ埋りておましましき。見たま

へ、かゝる石の御佛をとて、みくし、みかたちもやふれ奉るを、とうたして、をかませていはく、のほりおはしたりつる坂の中より、ほりおこし奉たり。むかしも岩のこほれ落たる頃、埋れたまふならんとて入ぬ。坂をくたりて、さしのほらんを太刀峠とて、いや高し。雨はをやめと、霧なんふかく麓よりみねをこめて、いつこともわきかたかりけれと、旅人のかたらひわけのほる聲は、そこそともなく聞へたり。

朝霧のうちにたとりてたちたふけ聲のみ越る秋の旅人。

あふき見れは八重霧のひまより、こゝらよちのほり行人の、みの、笠あらはれたるに、みねとそしられぬ。

わけゆかんほともしられてはるかなる霧のたへまにみねのたひ人。

又直堅もふりあふき、いはく、

起出て旅のやとりをたち峠行すゑ遠くみねのしら雲。

やをらのほりいたりて、來りし方を見れは、雲と霧と、いやたちにたちてける中より、松風はそう音して、うすく消へわたるに、峯ふたつみつ、かそへ出たるは、雲のうへに、松をむらむらとゑかきたらんやうにて、

わけ捨し禁はそことしら雲のあとたち埋む谷のかよひち。

北、ひんかしのやま〳〵は蕎はたけにて、花のましろに咲たるは、みねも麓も、雪のふれるかと見つゝくたりて、みだれはしもなかば過きくとて、

　袖にちる露のみたれはしの薄こや此風の吹わたるらし。

赤豆阪

赤豆阪をこゆるとて、

　秋なから袖にあせして身にあつきさかまくいきのむねにくるしき。

法橋といふめる邑に、みほとけのおましませは、をかみ奉りて、

　舟ならて佛の法のはし柱人わたすとて名たておきけん。

苅屋澤邑のやかたを行野邊に、とがまをふりかざし男の行か、うたのみひたにうたふ。

　ますらおかうまくさかりや澤の邊の薄高かやふみしたき行。

青柳の宿

青柳といふすくにつきぬ。あまたの家居軒をつらねて、とみうどぞ多かりける。

　風にちる例もしらて青柳の里の榮へは春ならすとも。

いはほをきりわけて、名を、きりとをしとて人を通しぬ。あざか河を渡りて、あたらしう家作るを下井堀といふといへは、

　民草の宿やさかへんこゝにしも井ほり田うへて人のすめれは。

大なる石室

岨のはたなかに、大なる槻の一本生ひたてるふる塚のあり。此したつかたは、石をたゝみあ

麻積の里

けたる、大なるやのごとき洞也。世のしつかならさる頃、寳かくし入たる石室といひ、又、氷の雨のふりこんを、しのかん料に作りたりけりとも、家居いまたたても初めさる、あかりたる世のすまゐとも世にいひ、國々に在る、かくれかの、いとひろきなり。むかふかたに、やのおほく見へたりけるは矢倉村といふとか。麻積の里に休らひて、女の、はたをれるを見つゝなかめたり。

しつはたのをりぬふわさのいとなさやこゝにをうみの里のわさとて。

猿がばん場

あけなは、やはた村なるみやしろに、かんわさありて、けふなん試樂のみかくらあれは、里々村々のあき人、山賤のまうてける男女うちむれ、聲とよみ、みちもさりあへす。いちの河渡り猿がばん場にのほる。山路にかゝりて雨のいたくふり出て、田のこひちをわたるかことにぬかり、山阪のふみもとゝまらす、はきもよこさまに行てたふれ、あるは、つまつきひさまついて、心はとくおもへと、あしのまかせねは、やすらひ〳〵あゆみこうして、老たるもわかきも細き杖をちからに、からうしてくたりはてて、

更科の月にこゝろのいそかれてさるかうまはもあしとくそすく。

更級の里

と、たふれ口すさひて、日高う中原といふ處に至り宿をさたむ。こゝはさらしなの郡更級の里なれは、あらしを分て出る月も見てん、なくさめかねて鳴鹿の聲もきかまく、くれ行をま

てと霧ふかくたちおほひて、こよひの月見んことのかたからんはねたしと、旅のまとゐにかたらひて、

あらしたに分出るものを霧のなかはらはて月をまつよひの空。

いつまても月はいてこし、いさいねてあれなと、ひち折わさして直堅。

こよひしも此中原にかりねして草の枕のゆめやむすはん。

姨捨山の麓

とてふしぬ。月のほのかにはれ行うれしさに、みなおき出て、とにのそみて、「これや此月見ることにおもひやる姨捨山の麓也けり。「更科やをはすて山の柴の戸にしはしも秋の月はくもらす」とすして、槙の板戸半明て居れは、花火見しそ、燈籠くらへの見ものありきなと見てかへるか、枕上のそともに夜もすから休らひ、あるは、ふしあかしぬらん。みなこうこうと、はなうちならしてける音、たへす聞へたり。

宿を出て

十五日。雨雲の餘波なう晴て、あさひらけ行空に、月の山口をよろこひうちいひて、宿を出て桑原といふ名のあれは、

草枕かりねの露もおなしくははらはて袖に月やとさなん。

おなしところのなかめを、なをかた。

里の子かかふこのまゆのいとなひもほとへて淋し秋の桑原。

嶺村
姨捨山登り
東西の眺め
雲井の橋
田毎の月

嶺村といふあり。こをのほれは姨捨山なりけれは、

　出るより入まて月をみね村にすむてふ人やたのしかるらん。

杉村も山のなかはに在て人すみぬ。此そひらより峯にのふりて、草の庵し堂のありけるに、觀世音をおき奉るにぬかつきて、

　むかひ見る千曲のくまも殘りなくてらさせ給へ水の月かけ。

われ、あけまきの昔、此庵に二夜こもりて月見しところなれは、猶むかしのしのひ出られて、ところ〳〵見ありくに、「秋をは捨の山櫻と、なかめおき給ひしその梢とも、はつしほちしほにもみちたり。高き桂の一もと立るに、うつきの葉きはみかれたり。やまは、ちくまの岸をふもとにみねたちのほり、いかめしう高き巖あり。ひんかしに見へたるはあり明のみね、冠着やま、西に名あるは一重山、いまさらに更級川のなかれてもと、よみ給ふ水は細くなかれて、やはたの村におちぬ。そのあたりにかけ渡したるを、雲井の橋とやらんいふめる。あかしの松とやらんは、わけ來しかりやはらにかれて、名のみたてり。底にのみこそ忍ひわたらめと、いひわたりたる筑摩川の流は、とはすともしりなん。いつのころより、たれいひ初しともなう、田毎に月のうつれるはおかしなと、四十八町の小田は山のなかはに重れと、月のころは、いつも八束のいなほ露ふかうしなひて、水をふたきて、月のうつる例もあらしや。

俊頼の書給ふ物語に聞へし、むかしの名はかふり山といひしとか。又、宇治の大納言のたまひし册子なと聞へ、やまと物語には、「しなのゝ國、さらしなといふところに男すみけり。わかき時におやはしにけれは、をはなんおやのことくに、わかくよりあひそひてあるに、このめの心、いとこゝろうきことおほくて、このしうとめの、をひかゝまりゐたるをつねににくみつゝ、おとこにも、このをはのみ、心のさかなくあしきことをいひきかせけれは、むかしのことにもあらす、おろかなることおほく、此をはのためになり行けり。このをは、いといたうをひて、ふたへにてゐたり。これを猶此よめ、ところせかりて、いまゝてしなぬことゝ思ひて、よからぬことをいひつゝもていまして、ふかき山にすてたうひよとのみせめけれは、せめられわひて、さすてむとおもふ也。月のいとあかき夜、をうなとも、いさたまへ、寺にたうときわさすなる、見せ奉らんといひけれは、かきりなくよろこひておはれにけり。たかき山の麓に栖けれは、そのやまにはる／＼といりて、たかき山のみねの、おりくへくもあらぬにおきて、にけてきぬ。やゝといへと、いらへもせて家にきて、おもひをるに、いひはらたてけるをり、はらたちてかくしつれと、としころ、おやのことやしなひつゝあひそひにけれは、いとかなしくおほへけり。此山のかみより、月もいと、かきりなくあかくて出たるをなかめて、夜ひとよ、いもねられす、かなしくおほへけれは、かくよみたりける。「わか心な

くさめかねつさらしなやをは捨山にてる月を見て。」と、よみてなん又いきて、むかへもてきにける。それよりのちなん、をはすてやまといひける。なくさめかたしとは、これかよしになんありける。」といふよりぞ、月もあはれの名たかく、澄のほるにこそあらめ。されはにや其むかし捨られし伯母にたくへてけん、祖母石、姪石、小俗石、甥石など侍るど、あないも、ほゝゑみてをしへたり。くれなはふたゝひのほりこん、いさ麓のかんわさにまうてんと更科の郷にくたり、やはたといふ處に至るに、曳つらなれる軒ことに、いろ〳〵の火ともしをかけ、人多くむれたつ中に、かたゐら、錢もらふとて、谷水の樋のことく落かゝるに、あかはたかのうはそく、こりめせ、こりのかはり〳〵と、左右の手に小笹つかね持てうちふり、路のかたはらにかたしろ作たるは、夜邊の花火のはてふるひたる也けり。むつのね、きよくきよしと乙(おつ)の聲にとなへ、さく杖ふり、鐸ふりならして、ものもらひのけんさの、をこなひの聲とよみ聞へたるにまさりて、艶葉は、こかれてのみも見へわたりけると聞へし、淺間のたけ、やけほろひたるにさはかれし、つくり画めせとうりありき、里の童うちむれて、きぼうし〳〵と杓もてよはひありくは、いぼたむし身にありける人は、ひろまへの御橋の護朽を、流くみあけてあらひ、なひもちかいたまへとて、ちいさき、ちまきのやうなるものを、わらもて作りたるを持ありき、とりかひたまへと、めとり、おとり、あまたかゝへありく。この雞の、くひ

を人のたもとにひきかけ、つはさも袖におしやられて、ううと、めをしはたゝいてうめく。かく、とりはなてるこゝろは、いけるをはなつ、此日のためしをやまねひたりけん。からくして人おし分て、おほん前に至れは、放生會といふ額を、ひともしにして高くかけたり。はふりあまた、かりきぬをまくり手につゝみうち、笛ふき、青龍すさくのみはたを、秋風に吹なひかいて、いたゝきまつるに、ぬさとりたいまつるとて、

いはひてはいく世になりぬしらにきてなひくやはたの神のみつかき。

めいし

このみやしろのしりへにめくれは、彌陀八幡とかいて、まうつる人のまきけん、うちまき、みゆきのふれるかとつもりぬ。立石の中より、ちいさき石なこ、とこころ〳〵星のことくにうみ出たるを、めいしとて、この石をなてては、まなこひたふるにすりぬれは、めのやまうのいゆるとて、神ほとけよりも、たうとめるも又あやし。こゝは筑摩川のきし邊にて、小供らおりたちて、いしふしやとりてん、玉をやひろふならん。姨棄のやまをもめてしと、小舟さし出てあそふもありけり。

ちくま河そこのさゝれや拾ふらんたもとひたして遊ふうなひ子。

月待つ人々

此里に旅のなか宿してんと、あるやにひるねのまくらとる。ほとなう、誹諧の連歌する人おほく國々よりいさなひ来て、此山にのほらんとうち物かたらふほとに、日もやゝかたふけは

月顯れて

姨捨山に、さのほりてんとて、田つらの細きいふせきみちを、おほくの人々、おのかいはまほしきことをのみいひとよみ、むれ至りて、御堂にぬかさけて、萩薄かい分て夕露にぬれて、姨石の上にのほれは、日のくれかゝりたるに、もゝ斗の人居ならひ在て、月のいてなんをねんして待たるに、澤水の音もしつかに、こゝら鳴松虫の聲あはれなるゆふへなれは、人のこゝろもことにすみ渡りて、なにくれと口のうちにすし、けふりふきいて、あるは、かしらをふせて箕居し、ものかけはさしのそきて、からうたやあらん、やまとうたやあらん、よき句やいて給ならんと、しのひやかにかたらひ、かくやいかゝ、こはおかし、其ことよりもこのこゝろはへや増らん、あなおもしろなと、あるはあふき、あるはひさの上にぬかさしあて、老ならぬ人も、みつわさしてうそふき、みしかきつかの筆をかたにあけてねふり、又、猫垣のむしろしいて、さゝへ、かれゐこをひらき盞とれるは、月見んこともわすれて、此うたけにのみこゝろを入て月のあはれもおもほへす、そむき〳〵、ひさげとらせたるもあやし。此したつかたのたいらかなる岩のつらに、香くゆらし、男女集て月を待て、なもあみたふちと、ねんすり、ひたふるにとなへつゝ、月を拜みたいまつれるこそまめやかに聞へたるは、いかに秀たる言の葉になかめたりとも、此男女の、ひたみちに月をおもふこゝろには、えも、をよふへうも露あらし。 宵うち過るころより、やをら月は、うちむかふ鏡臺山といへるや、遠山の頂の、雲のな

かをほの〳〵ともれ出るに、殘るくまなくてりわたり、千曲河のなかれは、しろかねをしきなかすかと見やられて、こよなう、世にたとへつへうもあらしかし。捨られしは、かゝる山路そかしと、いにしへのうきこともさらにおもはて、月になくさむも、になくたのしとおもふに更て、丑過る頃ほひならむ、雲くらくたちおほひて月のかくろへれは、ほゐなう、みなたちしそけは、やはたにくたり來て、あまたの人とともに、ひる宿しやに入て圓居し、つたなうなかめたる歌とものありけるを、こゝにかいつけぬ。

旅衣おもひたつより姨捨の月に心をかけて來にけり。

すみのほる光ありやとをは捨の山口しるき月の夕かけ。

よそに見しみねも尾上もおしなへて月のなかなる姨捨のやま。

あきらけき御世の光もさしそへて今はなくさむをはすての月。

野路山路分こし露の袖の上に宿してあかぬもち月のかけ。

さしふともおもひし山のかひありて今をは捨の月をこそ見れ。

ふる里にかはる野山もうきたひもわすれてむかふ更級の月。

千曲川そこのさゝれもあらはれて月に數見る空のさやけさ。

すむ方になくさめかねて更科や姨捨山の月をこそ見れ。

月にいまなくさめかねて都人しのひやすらん姨捨のやま。
影たかく月こそかゝれ姨捨の麓の霧はたちものほらて。
てる月に雲のいつこもあらはれておもひのこさぬ姨捨のやま。
鈴虫の聲のくまさへ半天の月のこよひとふり出てなく。
筑摩川つなひく舟の行かひもくり返し見んもち月のかけ。
いくはくの道しへたては此山に見さりし秋の月かけはおし。
こゝろあらは風吹さそへ姨捨の山路くもらぬ月にあかさん。
友まねく袖かと見れは月こよひ挙の薄あき風そふく。
又や見んかた山岸の苺むしろこよひの月にしくかけそなき。
草枕夢もむすはて夜とゝもにこの姨捨の月に明なむ。

「わかこゝろなくさめかねつ更級や姨捨山にてる月を見て。」といへるふるき歌を、哥ひとつのかしらにおいて、みそちひとくさをよめる。

和　分入し山のかひあるこよひかなあくまて月を見んとおもへは。

可　かたふかは秋の半も過ぬとや月におしみし俤そたつ。

胡　此夕まちこし空の月影のはれて心のくまものこらす。

古　こし方の雪のしらねもあきらけく光をかはす月のこよひは。

路　露花しろく誰かたもとにもおくふかく月やとすらんをはすての山。

南　なかそらにこの姨捨の月見てそ月もあはれを分るとはしる。

具　くれはつる空ともしらて麓寺月におとろくいりあひのかね。

左　さしのほるほともしられて草も木も露あらはるゝ月の夕かけ。

迷　めつるまに雲こそかゝれ月にさへ世のつれなさはあり明のみね。

加　かく斗さやけき夜半の月影に月のみやこもおもひのこさす。

禰　ねやのとの霜としまよふ月かけをおき出て見んさらしなのさと。

都　つけ渡るとりもこよひはいかになくあくともしらぬもち月のかけ。

佐　さらしなの松の梢をふく風にさやかにてらすをはすての月。

良　らちの内にくらふるものにひきかへて雲井にかける望月のこま。

之　しつはたの音なふむしのをやみなく月のむしろににしきをるらし。

那　名殘ありや秋の半も月かけも山のはちかくあけかたのそら。

夜　やまのはのおもひははれてなか空の月にまちかく過る村雲。

乎　をみなへし一夜をくねる色もなし月にはなひくはなの袖。

波　はるかなる波のすかたにみねいくへよるともわかぬ月のさやけさ。

數　すみのほる月になかれてやま河の岩こす浪もかけはへたてし。

天　てる月のかけはいつこもかはらねとこの姨捨の山そことなる。

也　八重おける露のをす〻きわけ行はたもとに月のかけそこほる〻。

末　まつ風の聲の時雨にたちならふ月の桂の色そはへある。

耳　にしになる影さへつらし月こよひ山のはちかくすくるむら雲。

泥　てもすまにうつや衣の音までも月にかさなるさらしなのさと。

流　るりの色におきにし苺の露までも玉かと見へてやとる月かけ。

都　つらしともこよひはしらしたひ衣月にかたしく姨捨のやま。

起　聞もうし峯にしくる〻松風は月にいやますひかりありとも。

遠　をのへはふくすのかつらのうらみさへはれてそ見ゆる月のさやけさ。

美　みね近く見るさへうけれこのよはの月のいとはやいらんとおもへは。

旦　てらせ猶ちとせの秋も末かけて月にちきらん姨捨の山。

こは、おもてふせにつ〻ましけれと、た〻、めのまへにありつるさまを、おもふにまかせてかいつくれは、雞は鳴出るに、山にて聞もらし、かいもらしたる句ともやあらんと、灯火とらせ

毫と紙とを持て、こよひのなかめあらは聞せてたうひよ、あはれ玉の聲ある言の葉もかな、國はいつこ、名は何とかありつなとしるしありくは、此里の、はいかいのほうし也。

神宮寺にて

十六日。つとめて神宮寺といふ寺にまうづ。このみてらのふみにいはく、彦火々出見尊の妹姫、おほんこゝろ世にさかなうおましましかは、此かふり山に捨られ奉りしより、山は姨捨の名におへりとか。此こと、いつれのふみにかありけん、「わか心つきはてぬとや庵さす姨捨山の入相の空。」と、慈鎭大とこのよみ給ひしも、此ふる寺なとのことにやあらんか。

善光寺へ

雛川清歳と語る

善光寺にまうてんとて、そのすちをわくる。行すりの、うちつけにものかたらふは雛川清歳とて、もゝふねのはつる、つしまのくにより來ける、よへ見し人なり。をさなきより朝鮮に渡り、ことさやくことの葉をまねひ、ことかよふをわさとせりけれと、身に、いさゝかあやまりおかして、かくさすらへありく。路の邊に休らひ、諺文して、なにくれと、ことやうにかいなし、その國のこと葉もて、かれはかく、これはかくそいふめるなと、ときかたらひてけるに、淺茅山の梢しくれん色も、うへかたのやしほにそむるも、名も竹敷の浦間のもみち、われ行て見まほし、いかになとこととひかはして、

たかしきの浦の艳葉よる波にちらすなゆめとたちや出けん。

鹽崎

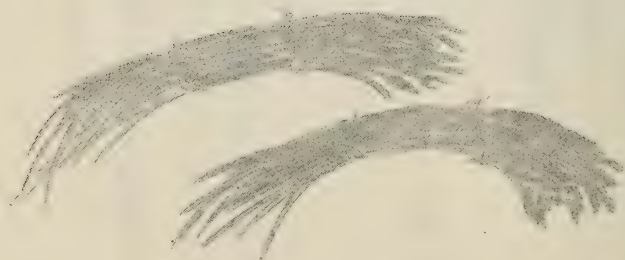
とてやれは、此きよとし、越のくににまかるとて、わかれたり。飯形やまといふ村をへて、鹽

崎といふやかたに、よねたはらおふ男あまた身にあせしてゆきかふに、弓のことくおし曲たる篠を、國の名にはへいちことて、うしにつかねつけて行は、戸隱山よりとり來れるさゝ竹なれは、太雪にふして、かくなんまかれりとか。此うしひきも、よねおひ集ひたる子らも、あないきくるし、水ひとつとて、やの門にこひのみぬ。

　余所めさへみつるはくるししほさきやからきうき世を渡る里の子。

こたひの雨に水いやたかくあふれて、塘なとところ〳〵やふれたれは、丹波嶋を左に入て、ひろき河原に出たり。うはそくひとり酒にゑひて、あらぬふしいひて過るあり。又、かれか唄ふを聞は、「姨捨山にてるかゝみ姪子(まいご)にこゝろゆるすな。」と、聲もしとろに行くは、をは捨山の觀音ほさちのかたはらに在て、月見てんさのほりく人ことに、せにこひとりて、鈴ふりたる、かたゐのけんさ也。たふれたる一ふしなから、此姨捨山の、いにしへよりの諺ならんとおかし。小松原といふところに出て、綱引ふねにひきわたされて、小市といふなる村につき、鈴花河になりてふな渡あるも、れいのつなひく舟なり。行〳〵て善光寺のみてらに至りぬ。まうつる人多く、にきはへるさまは、むかし見しにことかはらす。しはしみまへに在て、せむかうしといふことを句ことの上において、

　せきあへすむせふなみたにかきくれぬうき身のつみをしれる心に。

元洗馬への帰途

見まほしきかたも、とはまほしきこともあれと、とく〳〵かへりなんといさなへる人のいへれは、ふたゝひさいひて、みてらのかとわきのやとりにつきぬ。ひるより空うちくもりて、月見んことこそかたからめとかたりつゝ、

　月や見ん河中嶋に雲のなみたちなへたてそいさよひのそら。

鈴花河

十七日。あしたよりくもりて、やかてふり出たり。雨つゝみしてすゝはなの川に來つれと、川長もあらて、いかゝせんと人々來とゝまりてためらひ、こはいと淺し、われまつ瀬ふみてんと、さきたてる人のあるにつれて、さ渡りてんとてみな水にさし入て、おもふことにあさけれは、たふれうた。

　いさとくもあさ河わたれすゝ花のさかりにふらは水はまさらん。

いくはくの里はあれと、きのふ來しすちなれは、みなかいもらしつ。ふたつ柳に來り、野中に、おほきさ、うしのかくろへる槻のもとに、人あまた居たり。

　心ある人やあふきてたちまちのつきの木かけにいつるをやまつ。

屁[illegible]の村

しほさきよりはこなたにある里の名は、なにとかいひしと、門にさしのそく女のあれはとふに、いらへ、さらにせてにけ入たり。何にくるふ女ならんとおもへは、しりよりくる男、この村の名を、わかき女なとははちらひて、ことところの人には、えこたへ侍らす。こは、いかに

ひめてかといへは、いな、屁窪と申かおかしとてわらふ。けにや、こたへさりけりと、人おとかひをはなちてかたらひ過て、いなり山になりて、古丁といふくすしをとふらひ、しはしといへと行さきいそけは、やかて、さるかはんはも雨ふりてのほり、見し姨捨はあなた、一重山はこなた、千曲河を見やり、わけて青柳のすくに來けり。わかき女二人、雨にぬれしと麻衣をかつき、うたうたひ過るに、和泉式部の物語おもひ出て、

青柳の宿

これも又いなりの山の近けれはあをやきぬらん里の乙女子。

此ところに宿つきたり。

十八日。太刀峠よりのそめは、左のたかねより太谷の底まて、まくたりに糸引くたしたるやうに細みちのあるは、あらしといひて、柴かりつかねて、みねより落す、そのすちなれは木草の生ふことなけん。其音の聞へたり。

あらし

山賤か嶺よりおとす柴車あらしのみちや音のをやまぬ。

みな見たるすちなれは、かいもらしぬ。こよひは淺間のいてゆにとまりてんとて、其みちをわけて至る。犬飼のをとゝとかや、さすらへ給ひしころ、おく山に、湯けふりのたつをはる〳〵と見やり給ひて、ゆあみ給ひしをはしめにて、人ことにこゝを、いぬかひの御湯と、その名たかう世に聞へ渡りぬ。拾遺集物名の歌にいはく、「鳥の子はまたひなからたちてい

淺間溫泉

ぬかひの見ゆるやすもりなるらん。」とあるも、いぬかひのみゆを、よみたりけるにこそあらめ。湯もりかやかた、自庵といふにとまりたり。このゆふへ、

みねの庵雲なさとしそこよひまたこゝにゐまちの月やなかめん。

直堅のいはく、月いつるまて、さねてんとて、

旅衣かたしきまては月もやゝ出て野はらの露にやとれる。

いて湯にいきてんとて至りて、

出るゆのふかきめくみを身にそしるいかにあさまの名になかれけん。

十九日。つとめて淺間をたつ。このあたりをさして、「淺羽野にたつ水輪小菅ねかくれてたれゆへにかはわか戀さらん、」と聞へ給ふる。この朝葉をあやまりて淺間といへるにや。

鈴虫のふり出てなかめ紅のあさはの野良やいさわけて見ん。

松本を過き村居をへて芝生に休らふほとに、きのくに牟婁郡田邊の里なる訓殷といふ人、姨捨山に在て一夜かたらひて、相しれるか通りけるを、こはいかに、なれ見し月の友かきよと、うちものかたらひてくる。この訓殷は香風とて、はいかいの連歌にこゝろさし淺からす、さりけれは、こたひの月にもさすらへ來て、姨捨山のなかめに、「捨られはかゝる野山やけふの月。」香風は、田邊のなにかしの里のをさにて、「世を旅にやとをかり田のほとりかなと、

松本を過ぐ
俳諧師香風

宗祇法師、文明のころ句ありたりけるをもて、庵つくりて、いますめりけるとか。此友は、こよひ宣甫かやに、われは可兒永通か家につきて、ふたゝひとてくれたるまとゐに、香風衣つゝみのうちより、十府の菅、宮城野の萩なと、ふるさとのつとに折もて行とて、とうたして見せけるに、

色深きこと葉の花も折ませて萩の錦をみやきのゝ原。

あるしの宣甫にかはりて、

菅こものなゝふに宿しわかれなはたへすも人をみふにしのはん。

二十日。香風にわかるゝあしたになりて、

わかれてもおなしかりねの草枕むすひてあはんよな〳〵の夢。

その夜、姨捨山によみたりける歌の冊子に、ものかいてと人のいへは、いなひかたくて、

「ひさかたの天のひかり四方に明らけく、あまねく世にみつのとし、そめわたる木々の葉月、もちのこよひを、手を折〳〵の空にむかひ、水の面にてる月なみをかそへて、おもふかきりうちむれて、旅衣おもひたちぬるに、われもおなしう、みすゝから科埜のくににありて、いさいきねと人のさそふにうれしう、心あはたゝしく、此夜をは捨山にのほりて、いかめしきはほの上なる、苺のむしろにまとゐして、いまた夕くれはたぬよりまちまたれて、見もしら

ぬ高根のあたりにこゝろをやりて、むなしく見やりたるほともなう、やをらさしのほるかたは、山のいくへも波のやうに見やられ、ふもと行水のしろかねをなかせるかと、千曲の川なみよるともわかす、つな舟も、月にひかれてなかしやしてむ。わけのほる人のけはひの、こゝかしこにあらはれて、虫のこゑ〳〵風のたゝすまひ、木草の露も、よしある月のこよひなりけりと、こゝらの人の、なかめたる心のくまもあらて、世中はみな、此月の中にこもりてやあらん。かゝるたくひなき大空の光にや、なくさめかねし男のこゝろまておもひ出られて、猶いにしへの人にものいふこゝちすれは、いかにおもふとも、いとゝいへはえに、こゝろくるしくて、あふきたる人々のこりなう、心こと葉のをよふへきかはと、たゝ聲をのむに、さなんめりとて、はちらひてやみぬ。されはとて、人わらはれなる一ふしもかなと、より集ひて、旅なる硯まかなひいたして、人のなかめたるに、われも、かたくななるひとくさをとてしるしぬ。世に見ん人のめにはつゝましけれと、此月のにほひに、あくかれ來れるしるしとも見ん、人のこゝろのそこまて清らかにすめれは、言の葉のみちのまことひもなう世にてりかゝやかし、ひかりまされるこそ、こよひの月のほゐならめかも。」

いくとせかこゝろにかけて姨捨のやまにこよひそ見つる月かけ　僧洞月

あくかれてをはすて山にみる月のくまなきかけやよもにめつらん　永通

名にたかき姨捨山にこよひみん月のむしろにまとゐあかして　啓基

をは捨の山のまとゐに見る月のさやけきそらにかたるいにしへ　富女

うちむかふこゝろのくまもなかりけりをはすて山の月のひかりに　義親

こよひ見るをはすて山にてる月のふけゆくまゝにしのふいにしへ　直堅

くまなさよなくさめかねしむかしさへ月にそしるき姨捨のやま　秀雄

いとゝ猶あらしの音も身にしみて姨すてやまに月そすみぬる　僧藍水

余所よりも月のなかめのいや高きこよひ名たゝるをはすての山　備勝

いく秋も光かはらてをはすての山にさやけき月やなかめん　勝女

影清く光を見てしをはすてのやまのはいつるあきの夜の月　當特

名に高き姨捨山の秋の月さやけき影は世にたくひなき　静有

さやけさはたくひあらしな名にたかき姨捨山の秋のよの月　景富

月出山

あらはれてみねのいくへのやまかつらあかつきかけて出る月かけ　秀雄

うき雲はよそに盡してふく風のきよき高根をいつる月かけ　直堅

うちむかふ更級やまの高ねよりくまなくいつる夜半の月かけ　永通
おほ空の星の光もいろきへてや丶さしいつる山のはの月　洞月
庭の面にふりしく雪と見るほとに山のは晴ていつる月かけ　藍水
待つけて山のはいつる月かけにすそ野のす丶きつゆことにみゆ　備勝
いくゆふへこよひの空をまちつけて山のはいつる月のくまなさ　義親
名にたかき姨捨山をいつるより空すみはる丶あきのよの月　静有
かけはかりほのめく空にいろ見せてや丶さしのほるやまのはの月　當特
山たかみ木末をはらふ夕風にさそはれいつる月のさやけさ　景富

山月明

さしのほる空にさやけき月かけの光にしるし遠のやま／＼　永通
夜とともにまつかひありてやまのはの月そさやかにすみのほりぬる　洞月
なかめやる遠山鳥のをのへよりみねもふもとも月にさやけき　秀雄
てりのほるこよひの月の影すみて光も清きさらしなのやま　直堅
村雨のはれ行あとの雲間よりもれてさやけきやまのはの月　藍水
月もや丶山のは出てめに近きちくまのなかれ光てりそふ　備勝

幾秋をふる露霜にさらしなやさやかに木々もみねの月かけ　義親

名にたかき姨捨山にてる月はわきてさやけきあきの夜の月　景富

秋風に空吹はれてやまのはをさやかに見せていつる月かけ　靜有

月前風

秋風にみねのうき雲ふきはれて空すみのほる月のさやけさ　景富

久堅の空ふきはらふあき風に光さやけき月をこそ見れ　當特

ひさかたの空はかはらぬ風ふきていとゝてりそふ秋のよの月　靜有

やま風にそら行雲のかけきへてさやかに更るあきのよの月　直堅

うしやこよひ月にふりくる時雨かとまかふいほりの軒のまつ風　洞月

いてぬまも聲あらはれて月影にかせのやとりのまつをこそ見れ　秀雄

吹風にむら雲たにもかけ消へていとゝさやけきあきのよの月　永通

萩か枝のした葉の露も月澄て玉吹こほす野邊の秋風　藍水

更科のみねの秋風吹はれていてぬる月の光さやけき　備勝

吹はらふ風のたよりを松か枝の葉するゑをもるゝ月のさやけさ　義親

月前戀

またしとはおもひ捨てもまたれぬる月にことゝふならひある世は　永通
うき人もこよひの月にあくかれてしたふこゝろは空にへたてし　直堅
人くやと契らぬ宵もねやの戸の月のなかめのこゝろまよひに　秀雄
更級や姨捨山の月見ても猶したはるゝ人のをもかけ　洞月
うかりける人をまちわひうちむかふ月もなかはの空をすきぬる　藍水
姨捨の月のこよひそあはれけふ猶戀しきはふるさとのそら　備勝
契ても此夕くれはいかゝせんさやけきつきにうしろめたさは　義親
まちわひし夜半こそふくれいましはしさやけき月になくさみぬとも　當特
こぬ人をまつもかひなきこよひかなそらにふけ行月もうらめし　靜有
まちわひし袖のなみたの露なからうつるもつらし夜半の月かけ　景富

寄月祝

幾世々を姨捨山にてるかけは猶ひさかたの月そえならぬ　洞月
いくちよの秋もつきせしたのしみもなかはにあらぬもち月のかけ　秀雄
言の葉にむすへる露の玉鉾の道あきらけきみよの月かけ　直堅
神世よりかはらぬ空の月かけは猶行すゑのかきりしられぬ　永通

くもりなき秋の最中の月かけやよろつ代うつすかゝみなるらん　藍　水

いくとせもかきりしられし姨捨のやまの名てらす秋のよの月　備　勝

くもりなき御世のためしそ久かたのそらにかゝれる月のひかりは　義　親

かしこしなくもりなき世はいとゝ猶月にちとせの秋そまたるゝ　靜　有

あふけたゝかしこきみよのあきらけき月のめくみの空につきせし　當　特

かきりなくてらすこよひの月かけはくもらぬ御世のしるしなるらし　景　富

洲輪の海

信濃國にて

汐尻の御柱

睦月十五日。諏訪のみやしろの、筒粥の御かんわさにまうてんとて、丑のくたちにおきて出行。かくて汐尻に來けり。大なる木の高きを、ゆきゝのなかにおし立たり。そかうれには、いろ／＼の紙もて、してきりかけて、しろ、くれないの、はちしやう紙に、小帋そへてつけたり。そのなかはよりは、しりくへなはを蛛のゐのことく引たり。こは御柱とて、十三日のあした、はつのむこかねにこのつちほらせて、ゐくひさゝせなとするためしといへり。町／＼ところ／＼にたてたるは、月のひかりにをかしく見へたり。こゝをかき澤といふ。

長居坂

咲梅のいろをも香をもふりうつむ雪にへたつるかきさはの里。

けふなん春のたちけれは、長居坂にかゝりて、つららふみわきて、

とけ初る岩間のつららなかゐさかこへ來る春のあとをこそみれ。

犬飼のしみつにのそみて、

おしみにし年はきのふにいぬかひの清水の氷とくはるは來ぬ。

月の影かと見れは、誰袖もましろに霜おきわたりて、あして、しみわたりぬ。

うちつとひかさなる袖にふるしもをはらへと月の影にさへ行。

諏訪に到る

鳥追ひ

峠にのほりえて遠かたを望めは、月は雪のとやまにおつるに、からすの二聲三こゑ音信てすきける方は、むらさきたちたる空のおかしきに、不二は、こと山にまよふかたなく、ひとりそひへて、しろかねしきたらんやうなる、みつうみの氷を、きりわかちていてぬとおはふ。やかて其郷にいたるに、いまた明はてぬそらに小供らあまた聲して、ほくしをもやし、おしきうちたゝき、けふはたれか鳥追、太郎殿の鳥おひか、二郎殿のとりおひか、おらもちとおつてやろ、ほんからほと、山谷とよみて、田つらや、くろをうたひめくるは、こゝろからしまけたる里に、さちなきためしにこそ。ふしは、いよゝ俤けしきさたかに見へたり。春宮にぬさ奉るとて

あふけたゝ今朝はかすみのたつかゆみ春てふみやのはるのめくみを。

諏訪社神事

農作物の占

みやしろのこなたかなたに、ほたたきて人あつまりて、わらくつの氷、たもとの霜とかしてあたりぬ。御社のかたへには柱四ッ立たる中に、かなへすへて、けふの筒粥にるめる。御神樂のこゑをきゝつゝ待ゐたるに、やかてちいさやかなる戶おしひらきぬれは、われさきにとくゝりいるに、わきさしのつはにかしらうたれ、袖なとを、かしこの釘に引かけて、これをなてつゝあと見かへりて、いそきて御やしろのしたにかゝまりつとひて、われもわれもとおし

合ゐよりて、やたてにいきしかけて、いまやいまよと待ぬれは、はふり、あけ、くろ、しろのたもとゆたかに、きたはしにのほりて、かしは手はた〳〵と聞へて後、やゝありて、しろきたとのはふり、つゝをやふりて、なりはひのよしあしをよはふ。人々、手毎に、つかみしかのふてにて、ふところ紙にかいつく。こは、よね、むきよかりつるよ、ことしは世中よかるへし。此占のたふとさよ。御かゆは子のはしめより、御はしに日あたるまてにやし奉ることは、年ことのためしなりけるなと聲高に語るに、かんわさはてぬれは、みなかへりぬ。

けさ春の霞の衣うらとひてそのいつくさのうや(ママ)しるらん。

雪ふみわきて、秋の御社にまうてゝよみし歌に、

したもゆる尾はなか袖の俤を雪にそみつる秋のみやしろ。

海へたにのそみて御渡のあとをみれは、三さかよさか氷たちやふれて、にしひんかしに青みなかれたり。此氷のうへを、かち木はきて人々わたれり。

諏方の海神のわたりしあとゝめてあやうけもなく通ふもろ人。

此かへるさも、ふしのねはほのかすみて、雲のしろくなかれたるけしきの、氷のうへにうつりたるを、たかねより見たる。世にたくひなし。

たくひなきなかめをこゝにすはの海の氷のうへにうつるふしのね。

また、

　をしかものみなれうなれしあとたへて見るめもなみのこほるうみつら。

けふも、ひねもす雪ふみわきてかへりぬ。あくる夜夢のうちに、此はるみやのまへより、ふしを見やりて、

　すはの海かすめるふしのうつるかな衣かさきに春やたつらん。

今井の法輪寺にて

廿二日。今井の郷なる法輪寺にまかりて、尊應法印をとふらひ奉りて、夜もすから歌よみ物語して、あくる朝、はなふさかかきける、立田やまに芳野をましへてうつしたるは、まことにさもとおもふ。谷の柴橋なとを、つま木折こして山人のゆきかふさま、花の雪とふり來るか折そへたるとやいはん。雲と見、にしきとおもふ立田山は、遠き秋と、霞にへたてゝはるけし。あなめてたの、人のうつせる筆のあとや。

　名は四方にたつたの山の花もみちこはよしのよくみつくきのあと。

松本近傍

松本に行に、かまたといふ處にて、

　野邊見れは霞に木のめうちけふりかま田の野へに萌るわか艸。

ある宿にたひねして、又の日、澤邊雲夢のぬしをとへと、あらさりけれはまたといひて、林邑廣澤寺に行て、吉員の墳にとふらはむとていてぬ。埋橋といふ處の雪間もとめてありくに、

江原村の白頭翁

枯れし野も今もへかゝるうつはしやうつみもはてす雪のむらきへ。

薄河の面は氷みちふたかりて、人々此うへをふみもて渡る。

水の音も氷にかれしすゝき河もへわたるへき春は來にけり。

野も山もうららかにかすみて、梢の雪も花とあさむくころにこそ。こゝを、つかまといふ郷なれは、

うつすともいかゝをよはんとる筆のつかまのさとのかすむ遠近。

其御寺にまうてゝ見れは、土高き處に文山幽雅といふ、そとはさしたり。こは、よしかすのなりけり。

ものいはぬ石にむかしの春とへはかすむなみたに俤そたつ。

又同道を出て束間をさしてかへる。有隣のつかは、ゑかうゐんにあり、まうてゝ見れは德嵒有隣と石ふみに記して見へたり。

たへすたゝ落るなみたにありとある石のもしさへよみもとかれす。

やかて其郷をたちぬ。江原村にある白頭翁か門をたゝけは、あるし句はせて、

春もまたあさき野末をふみわけてとひきし人のこゝろふかさよ。

返しを、

来て見れは人のことはのふかみとり野邊はもゆともしらぬ雪間に。

かへにおしたるを見れは、

神祇道ハ我國ノ大祖ナレハ糸竹ノ直ナランコトムネニタエナカラン

駒カ嶽スソ野、森ニ來テ見レハ

小町カ家ニハヤスナ、草　西行

かくと記したるは、上穂の里の神司のやに持つたへたる、西行上人の筆なるを、うつし來りしとかたりぬ。いかなるこゝろかありけんか。(天註――小町谷常陸ト云フ神司、美女ノ宮ノ也。)

いほの春秋

山家記

われ志那能の國に來りて、かなたこなたをみんとて、しみつなかるゝ柳かけしはしと思ふまゝ、ほとゝきすを聞、紅葉を折、雪を見、梅をかさすまて、おもへは一とせあまりになりぬ。ある日、可摩永といふ岡のひとつ家にあそひてけふをくらしぬれは、やま住のこゝ地してけれは、いさ此さま、見しこと聞しことを、このいほりにたくへて、たゝう紙にしるしぬ。

天明四年辰春

筑摩郡捧庄舊洗馬乃里仁天

白井秀雄 […]

夏來にけり

やまさとの垣ねや春をへたつらん、をりしりかほの卯の花に、こよみなき山のおくも、夏とはしりて衣ぬきかふるころなれは、たか身も木曾の麻きぬになりたるは、つらつき、いとすゝしけにものしたり。むかつをに藤の咲みちたるか、松にも、ゆたけくかゝりたり。青葉をわくるはなのしら雲は、たつねすともありなんや。初音よりをちかへり鳴郭公のこゑは、山住の身のせにこそ侍らめ、まして五月雨のふりくらしたるゆふへは、むかしおもふ袖は、いかはかりかはありけん、もるにたもとはぬれぬ。ふみわくる人しなけれは、おのかしゝはひしける夏艸に、ありとなきかくれ水を、よるは、ほたるの尋ねて、あつめたらんやう也。さすとなき柴の戸は、いつも水鷄のたゝきすてゝあけぬれと、日の光やまにへたゝりて、をそけれはくらし。水無月のあつさたへかたさに、ある木のもとにわらふたしきて箕居すれは、みんみつくくしと、蟬日くらしの鳴か梢にしけく、かまひすしくて、ひねもす、なにとなふて日數過けり。

田の面風景

きのふけふうふるを見しに、乙女ら田面に艸とり渡りて、うへ田はほさつ田の

神と、聲もしとろにうたひ〳〵て、笠の軒もて、いな葉おしわく。稲葉そよめく風はしやと、いへるほとなく空かきくれて、なる神の音もしきりになりひらめきて、あめは、さちくをなかすかことくに、遠の山は、すみかきなかせり。男女ところすねをあらはれて、あなおそろし、いのちこそあれとて、里をさしてにけちりぬ。ほとなふやみて稲葉のつゆもましろに、涼しき夕なとまたなきなかめなれは、かしこくもおもひ入たるものかなと、ひとりこゝろほこりて月のさし入たるを、さもこそあれとおもふ。きちかうのいとはや咲ぬるに、秋やちかからん、夏やつきぬらん、麻の立枝のうちそよくに、なこしのはらへ、いまや世中にをこなはりけんと覺ゆ。秋やきぬらん、荻薄のうちそよく音なひ、なへてならす聞へても、みしにたかはぬとこ夏の色に、殘暑身にたへしのひかたくて、はし居したり。けふは文月七日なれは、ゆふへの空をあふきて二星ををかみ奉るに、稲葉の露をいのちに、きりはたりてふ鳴虫あり。そゝや、こよひのをりにあひけんもおかし。きのふけふ、いつしかに野邊の百艸もひもときほころひて、住つるむしのかきり聲うちあらはれてあはれなるに、ましてをしかの妻とふ暮は、山のおくにもとひとりこたれて世のありさまをおもふ。さゝやかなるやとりなれは、月ものこるくまなく、こゝろよけにさし入て、このきよき光を見るにも、霜の故郷をおもひ出てこゝろくるしきに、いとゝ耳にしのひかたききぬたの音も、さと風にさそひ來て、老なら

秋となりて

山訪ふ入々

秋ふかみて

猨出でゝ

ぬ身にも、ねさめかちにて明ぬ。ひるは人のとひよることこそなけれ、落栗ひろはんとて、木ふかきかくれみちに童の行かよふ聲のみ聞ゆ。くさひらかりにとて男女のそこゝとたつねめくりて、高き岩のうへにをりて酒のむ。ふもと軒端をうたひわきて、われこそしえたり、あまた見たまへよ、このすゝの中にはさ、薄高かや、ふみしたきありく。はた、通ひなりたる柴人なとは行袴といふものをきて、あちかもゆら〳〵と取いれて、はな聲にうたひてくたる。あれたる垣ねは、かゝみ、吹あけ、むまのぶす、あらゆる艸かつらのみ生ひかゝれは、そことわけ入る人もなし。長月のはしめより木すえもけしきはみて、露時雨、日かそふることに峯もふもとも紅葉して、からにしきかけたらんやうなり。花の木、ぬるて、わきて槻のこゝしく立たるなと、いとおかしくこそ侍れ。そは、田のつらにおしねかりもて馬人におふせて、つくりやそへん、いねのくらまち、くろゆつる世にあひけんこゝちす。としふる松かねにやせたる菊の咲そひたるは、かのもろこしのなにかしか、見しこゝろにおとろきたりしやうに、さらに人ある庵のさまとも見へじ。朝夕の霧には遠近の里のあやめもわかて、うちむくまさの、うたふしくてくれぬ。夜ふけ人さたまりて木艸の聲もしつかなるころ、犬のいたくほへありくは、おほかみ里に出て、ゐの子とりくらふを、おやいぬの、にけをそれけるいとみ聲にこそ。人なともゆくりなふ行あひて、おくられける事のありて、こゝろたゆるこゝちす

と、里人のいへり。はや、人めも艸も枯はてゝ、庭のあさちも霜のしたにや朽ぬらん、神無月のはしめになりぬ。冬になりゆくまゝに、河つらのすまゐ、いとゝこゝろほそさまさりてと書殘しけんもおもひ出られて、ひとり、木葉のおつるをきゝこもりをりて、朝とく出れは、かりに行かふ三のみち、あとかたなくうつもりうせて、おもひしより、けにまさりたる朽葉のつかやと帚もてかいやりぬ。秋のいろは、一葉のくまものこりなき木末に、山のすかたあらはに見なして、ふすゐのとこも、そことしられや待らん。さすほとなき板ひさしに時雨うちして、軒端の松風の音信もさむく、ふくろうのしはぶき聲もさう〳〵しきに、きつねの山彥にひゝきて、かなたこなたと啼めくる夜は、月もいとすさましく、曉かけて霜やおくらん、板戶のひまこす風も身にしみ通れは、ほたさしくべて、あし手あたゝむ。夢のこゝちにおほゆるきり〳〵すの聲は、祖父祖母つゝれさせ、さむさ時はきたにといへる、わらはへの諺もあはれ也。氷とちて、いしまの水の行なやむころ、まして、はつかなる谷河のなかるゝ音も、かけひの水もかよひかれぬ。夕さりつかた、火のたかくもへあかりてはら〳〵となるは、ちかとなりなる里にて、いやし火といふものをたくか、河桐なとの、かれ枝の中よりあかくかゝやきたるを、見ならはぬめにはおとろきいつれは、狸ならんや、いとものすこき聲にてうかゞひありく。晝はひねもす、めしろ、日から、むれ來りてあそふ梢に、がちといふ鳥もろ〳〵

のとりをまねて、ひとりゑみせられておかし。羽おと高くむら雀のたちぬれは、かならす雪のふりくとなん。しみこほりて嵐はけしくて明たる朝、つま木とらんとてやまうちめくれは、霜はしらたかくわらくつふみ入て、つめきりはなち行こゝちす。雪の日、松かしは、ましろにふりかゝりて路もやかてうつみはてゝ、更に梢なき山を見つゝくらして、きのふけふ明ぬれと、きへ行けちめも見へて冬や過なんとおほへつ。たゝふゝきかちにて、つらさし出つへくもあらす、埋火はなれかたく、ひち枕にまくはり、さかしのたかね、めつらしの岳の雪かなと、め、しはらくもすてすなかめたるに、けふりほそく立のほりたるか山風になひきて、しろきをのちのけしきなるは、炭やきのいとなみにこそ。あくるあさけなとに、狩人は、しゝ、うさきうたんとて火矢つゝをかたけて、かち木といふものはきて、あないみし、根雪にやなりなんと、かたりすくる。小供ら、さき足にのほりて、此はあてにおそりてにけ行、あしとりせはしなくてさりぬ。いよゝつよく吹て、山谷もひとつにけふり立あかりたるやうに、遠方も見へさりけり。

としのくれちかくなりけれは、お松たてん料に、くゐせたつるか、つちのしみたるにちからなけれは、火たきとかせて土くれをうかつ音、かなたこなたに聞へぬ。やことの軒には、つららかゝりたるを、こゝに、す氷といふめるか、やつまひさしに瀧のおつるかことし。つちよりのきにつゝきたらんは、とよとし來ぬるさとしにやいひ傳ふ。はやし

年返る日

正月十三日

はすのはし(マヽ)めにそなりぬ。世中みな、としこゆるいとなみにとて、かひかふものもていそきありく。みそかの夕ちかつくころは、みたまにゐひ奉るとて手毎にはしもてさしつかねて、あか棚にそなふ。よさりになりて、よくたちて、桃の弓蘆の矢もて射給ふらんころに、ことしの名殘と大空をあふきて、をのつからおかみせられて、なかれてはやき月日なりけりとすゝれは、としも、こよひもはてとそあけぬ。けふは、む月朔、まことや年立かへるあしたのそらのけしき、名殘なくくもらぬうららかけさは、數ならぬ垣ねのうちたに雪間の草わかやかにいろつきそめ、いつしかと、けしきたつ霞に木のめうちけふり、をのつから人のこゝろも、のひらかにみゆるかし、と書けん筆のあとも、時にあひておかしく、やま住の庵はいとしつけく、松と竹との相生に、うちひくしめなはに、はちじやう紙のひるかへりたるも、さまことなりと見ゆ。郷の子まれ〳〵に、ことふき祝ひとひ來けり。あたりの里なとにては、めおうな、としの始によろこひをとなへくれは、おしきに鹽もり、いり豆いたして、なめくらふことを年のためしにそしける。けふは子日なれは、都の野邊に、小松ひきもていはひ給なんとおもひやりぬ。わかなつむころも、あひそめ河の根芹つみもて市路にはうるめれと、こゝは谷陰なれは雪ふかく埋て、そこともとめん方なし。わらはあつまりて、とろなはをひきて往來の人をやらしとゝむるを、せに一ッ二ッとらせて行ける。此せにをあつめて紙にかへて、

十四日慣例

十五十六十七日

してにつくりて、十三日の夕よりお松つかねて、そかうへにさして、小供あまたして火つけて、あの山からくる鳥も、この山からくる鳥も、おんどりめん鳥つんはくら、羽ねは十六身はひとつ、藤治郎と申せは、いちの子にのこ、さんに櫻のしんでの木、五葉松柳やなきのうらに、なに〳〵つるいたと、あらぬ、かくれところのことをのみいひ、はた人々の名をあらはし、ゆきゝをめさしてわゝとはやしける。十四日のあした門ことにやなきたてけり、はた、うつはりの下にも柳のさえたにまゆ玉とて、かうこの糸作たるやうに、もちゐつくりてさしたり。出入戸口には、ずほう花ほんだれ也ケツリカケ也かけけり。栫の林なとには男ら、まさかり、木のもとにうちあてて、此としなるかならぬか、ならすはきりはたしてんといへは、かたはらなるもの、こはゆるしたまへ、なりさふらはんといへはとゝめつ。十四日よりかゆ杖もて、はつのめうたんとて、わらはあまたうかゝひありく。人わろき女なとはわれさきにうたん、このつえのほそきとて、せちぶにしたる十二がきのわさきかさして、内外にのゝしる。家毎には万物作といふ事をかきて、かへにおしける。昔はあはほなとを木にてきたみ、こやしの上にさしけるか、いまは、かくし侍るとなん。いにしへ、かにを串にさしやぢりて、やにさすわさも侍りしか、いまはたへたると、ふるき人のかたりぬ。十五日のかゆは、ふる郷に同し、夕さりつかたは例のさえの神わらふ。十六日のあしたまゆねりとて、かのまゆかたちのもちをにて、たま

棚にそなへぬ。けふは、うしふし寺にまうてゝ、身のさはりあるとしのものは、ふくで（そなへもちといふなり）かりきて、又のとし、かそへそへてかへすといひて人々まかりぬ。十七日柳の枝にて弓矢つくりて、山の神に奉るとて、山はやしの木なとにかけ捧て、飯をそなへて祭りけるは、としこのためしにこそ。廿日、ふくておろしたるをいかゝしてけるか、ゑの子のくはへてわし

春雪つもる

るを、しこつめ、うちはたしてんと雪ふみわけておひめくるに、雪はいよゝふりぬ。二月の木のまたさけ、三月のくねかくしとて、春雪いたくつもりぬ。ゑちごぢ近き里なとは、行かふ人雪棹といふものを手毎にもてありきて、道いたくうづみはてゝ、そこともゆきゝもならねは、かのさほ立て、そのうれに手のこひ、うはをびなとむすひ置て、此雪にうつまれて、はるゝをまつこゝろのうち、いかゝあらん。二日三日ありて、見あたる人々ほり起てとらせぬれ

花咲く頃

は、蘇たるおもひして、まゝいつることあれと、いのち、つゝかなかりき。垣ねの山吹やゝ咲ぬれは、軒はの松の藤の梢も、すこしけしきはみてそ見ゆるかし、此山陰は花いとおそく、あへておくれたるにはあらし。梅さくらも、やよひのなかは過る比より咲て、世中青葉になり行ころ、山のかひ、松にへたゝりたるなとは、ひとしほ見ところありておかし。野に生るさ

小供の遊び

ゝぎ艸つまんとて、めおうなうちつとひて、うたひなくさみて行く。わらは、またみしかき蕗の葉とりて、たんは草のかれぐさ、かれてもかれてもたんば艸と、ひたものそらにうちあけ

ぬ。こは五月のせくにすへきを、おもひ出てあそひぬ。その莖とりて、くさつむ女のくびにさし入けれは、こはなにそといへば信濃太郎なりといふ。やれおそろし、とりすてゝよとくひさしのぶれは、しりなる子、五月のころ栗の木にすたく虫の、いかにしていましころあらんとわらへは、童、このふきのくきなりと、つらさきにさい付れは、いまはゆるさしと追めくるたもとより、ない葉、まひのめこほしたる。われおふたるむくひにこそあなれと、手うち叩てわらひあへり。みねなるあらしよりは柴舟といふものにのり、たゝちにおちぬ。かゝる小供あそひの聲とよみて、けふもくれぬ。海こそなけれ、雲にかりかねの鳴わたる曙、えもいはんかたなし。よる〳〵の月の朧も、かゝる山里のなかめ、世中の人につけまくおもふ。

田植を待つ

けふはなにかしのさとに、たうときことありとて、ゆきゝのもの〻聲かまひすし。やとこ付たるちこを女のいたかいて、あなおその子なり、あかかしらの毛のこらしさいへは、しりなるおうな、はや、日ましのことに、ちつき侍らんといへは、さにや、ことしは、くるみ桶にもをらて、手しはらくはなたれじ。うちすて、しはしそへちなめるに、われもいぬれは、火しろのあたりをはいめくり侍るなと、ちりかゝる花のもとに、けふりうち吹かたりぬ。かくて春はくれぬ。うなひあまたつとひて艸あつめて、さ此くさまひれと、草合してあそひたるも、おかしきためしにこそ。かひ子ひとつおきたる時は、かりしきとて、木々のわかはかりもて田

嬰兒の成長早し

つらにうつみ、馬に人にうちふませて、早苗とりうふるまて、こゝにありてくれぬ。

來目路乃橋

信濃
信濃

天明四とせの甲辰の夏、六月三十日舊洗馬村をたちて、越のうしろ洲に行とて「清水の里「桐原のまき「つかまのみゆ　なとを見めくりて、水内の郡に到りて曲橋（この橋を久米路乃橋といへり伊奈の郡にも同名聞へたり）を渡りて、この册子の名を　來目路濃橋といふ。

信濃國元洗馬村にて

ふるきところ〳〵のかんみやしろに、ぬさむけたいまつらまく、はた、名たゝるくま〳〵も
分見はやと、このも、かのもにはせめくり、去年の夏五月雨のはれなん頃ほひ、此科埜の國な
る東間の郡に來て、むかしかたらひし友かきをとへは、世をはやうさりてなきか多かりけれ
は、ありつるひとりふたりにこととひかはし、いさ、ことかたにとおもふ折しも、可兒永通て
ふくすしの、あかやとに、たひころもうらふれやすめよなと、夏野の草のねもころにいへれ
は、いさ、ひと日ふつかもありなんと思ふほとに、木襲の麻きぬ淺からす、須羽の海のふかき
なさけに、なにくれと、ひくあみのめやすうなりむつひ、こゝらの友とちの圓居に、かたらひ
なつさひて、たひの空のくもらはしきこゝろもなう、月日のうつるもしらぬに、ふる里のか
たしきりに偲はれて、また見ぬかたにとこゝろひけと、この里の餘波はさらにもいはす、を
さなきわらはへ、砌にあさるくたかけ、門にはふ狗すらも、朝夕めなりかほに、もりとかめさ
りけれは、しかすかに、わかれんことのいとと心くるしう、むねつとふたかるに、老たるとち

は、又逢事は片山里の太山木、やかてくちなん身は、いふかひなけんなと、せちに聞へたるいらへさへ、夏引の絲のいとこゝろほそくも、水無月のつこもりの日、蒙騰西播の郷を出なんとほりするに、いましはと止めて此里の人々、うまのはなむけして、とり〳〵に歌なかめてわれに贈ける。屋戸のぬし　かになかみち。

行旅をめくりも歸れこの里の馴しわかやを栖家とはして。

となんありける歌の返し。

たひ衣たち別てや行ほともなれにし宿にとく歸りこん。

今井の村よりふみにこめて來るを見れは、あか國の道の友とかたらひしほともなう、けふの別は夢うつつともおもほへぬなとありて、　梶原景富。

いかかせんみち尋ね來てかたりあふ友にわかるゝけさの餘波を。

十かへりの例もあれなかはらすよ又逢ふことを松に契らん。

かくなん、ふたくさのありける返し。

別てもあしたにききしみち芝の露もわすれし君か情は。

尋ねこん心の色もかはらしとつゝむにあまる松のことの葉。

青松山禪林長興寺　僧洞月。

一とせは夢てふものをけふしはや別にそそく袖のむら雨。
ひとり行旅路の空はうかりともなかめにあかしちまつ島やま。
初秋のおく露わけてみやきのゝ名たゝる萩の花や見るらん。

みちのおくに、かねていなんとこゝろさせは、かくなん三くさの歌もて贈り給ふ也けり。此返し。

一とせは夢うつつともなくはかりおそふる袖に村雨そふる。
わかれ行空こそうけれなかめあれと人やしのはんちまつ島山。
分まよふ袖や朽なん露なみた君をしのひてみやきのゝ原。

くまかへなをかたか、

あすよりは誰と語てなくさまんわか友かきはけふに別て。

とある返し。

こよひより艸の枕の夢ならてなり見し人といかてかたらん。

備勝の翁か、

なれ〳〵て別はつらし來ぬ秋の時雨ぬ空も袖そしくるゝ。

かくなんありける返し。

人にけふ別おもへはこぬ秋の袖の時雨はなみた也けり。

くすし義親。

琵琶橋木曾路にあられと、源の岐岨山なれはにや、の名は犀河といへり。それにわたす橋なり又の邊に在る

涼風頻到琵琶橋邊　唱送離歌楊柳篇　願是鮫人爲一涙

一珠日夜照岨川。

わすれすよひはてふ橋のかけて人音信てまし木曾の山川。

といふ、しゐんをくれける。このくしの川てふ文字を歌の末において、返しのこゝろを、

ふたゝひ、よしちか。

青柳の縒そみたるゝ別路のたひ行人にいかゝ手折らん。

となんありけるに、返し。

折わふる柳の糸のいとと猶みたれてものをおもふわかれち。

ほふり吉重。

葦の田にすめる

圓居せし花や紅葉を別ては見るにしのはん春秋の空。

とありけるに返し。

花紅葉なかめむたひに春と秋わきて別し人や偲はん。

まつ高志の洲にいなんといふを聞て、このよしあつ、けふの別猶せちにおもふのあまり、ふ

たゝひ。

おもはすよ君かこしちの浦波の見送る袖にかゝるへしとは。

君か行こしの浦浪へたつともわきて尋ん八重の隈路を。

かゝる二くさの歌つくりける、返し。

いとつらき別に越の浦波のかゝらぬ袖もけふ沾にけり。

高志の波よし隔つとも君かかたに立歸りこん八重のくまちを。

政員。

あさゆふ、ことゝひむつひたる

別ては雲路はるかにへたつとも雁の往來のたよりをそまつ。

政員かやにとへは、あるしの母なん、みつわさしたる姿して出たちけるに、ふたたひとひ侍らんといへは又とのたまへれと、わか身すてに老たり、かく、ほけ〳〵しうなりては、ゆふへの露ともたのむへき命なれは、けふをかきりの別にこそあらめと涙をさきたてて、長き旅路をはやめくりて、父ははにまみへてあれ、われたに、ひとりうき旅にと思へは、さそやおほしてんと涙にしはふきませて、わか子をおもふかことにいひけるに、「わかははの袖もち撫て我からに哭しこゝろをわすれえぬかも。」とすして、いよよおやます國の戀しう、いかなるすくせにや、かく人のおやの心の、やみにおもひたまへらんと、なみたをとゝめて、

いかなれは老のなみたのわか袖にかゝるなさけをえやはわすれん。

まさかず、とりあへす母にかはりて此歌の返しをす。

老の波いや高砂の松のことかはらす見せよいくちとせまて。

可見なかみちかやに、かい殘しおくふたくさ。

ふる郷にいそくならひもたひ衣きなれし宿はたちうかりけり。

それとえもいはて心のやまノ＼をへたても行か雲のちさとに。

やをら首途せるに、政員も旅よそひして、追ついて來けり。こは、いつこにといふに、近きさかひまては、ひと日ふつかも、かたらひ送りしてんといさなへるもうれしく、いさなひ、桔梗か原に出て、

桔梗が原を過ぐ

秋ちかうなるもしられて旅衣ひもとく花を分てきにけり。

清水の里

松本につきたり。牛楯といふ處に、おもしろき瀧のありと聞て、見にいかんとて清水村を通る。こゝは、「夏來れはふせやかしたに休らひて清水の里に栖つきにけり。」とは、いにしへ人もなかめ給ひし名ところ也。（天註――またしらぬ人を戀せは科野なる清水の里に袖そ沾ける、とも聞へたり。又おなし名播磨にもありといふ。）此處に、柴かきゆひめくらしたるなかに、きよけにわきかへる水あり。かゝる泉をさして、うへ、里の名の清水とも、なかれたらんにやあらんか。

たひ衣むすはぬ袖も涼しきは清水の里にきたる也けり。　政員。

しはし見ととまりて

立よりて聞も涼しき里の名の清水のもとに過る袂は。　まさかす。

かくてゆく〳〵、又

友にけふ千里も行む思ひしておもひこそやれあすの別を。

となんなかめけるに返し。

こぬ秋も袖そ露けき旅衣あすの別をけふにおもへは。

寶輪寺におはしける尊翁法印、此月はかり、佐久郡のなにかしの寺に行てんとかねて聞へ給ひしかは、人傳にやる。

おもひやるあつさはいかにあらかねのつちさへさくの水無月の空。

兎川寺てふ寺の南に、春見たる薄河はなかれたり。

行袖に秋風まねく薄河ほの聞渡る音の涼しさ。

となかめてすくれは、　政員。

岸邊なるかけもうつりて薄河波を尾花のよるとこそ見れ。

みちしはし來れは、「逢阪やしみつにうつる影も見す關路へたつる霧原の駒。」となかめし

ところにて、今は牧こそあらね、桐原の名のみにたちたる里あり。やに入て休らへは、荷鞍おきたる馬いくらもひきくるは、貢のよねもてはこふといふ。

治れる御世にひかれて霧原の駒もみつきを奉るらし。

けふなん諏方のみやしろに、水無月はらひのかんわさありけるにまうつとて、人さはにゆきたり。

けふといへはみそきを須羽の海つらに秡やすらん風の祝子。

牛館の雄瀧

やゝ牛館村になりて瀧あらんかたもしらねは、みち行翁にものとはせけれは、みちさきに立て、腰なる鎌に、たかくさうちはらひ、うちはらひ、雄瀧といふかおちくるにあふきたり。上なる處にちいさきかん社あり、なにの神とかとへは、あまつ水をこひたいまつる御祠といふめる。まそて、いと寒きまてたゝすみて、

涼しさは冬ともいはん岩かねに時雨て落る山のたきつせ。

まそのことく時雨のあめにことならす、霧ははるゝ日もなけんと、けふりうち吹てかたる。政員のなかめ聞へたれと、わすれたれはかゝす。遠かたに王箇鼻とて、さかしき山見ゆ。こゝをしそきて、わきつるみちのかたはらの麻生のほとりに、細く水の行に、一葉をとりて手あらひて、あめつちの神に奉る。

たひ人の麻葉折て行水に流すやけふのみそきなるらん。

日くれて湯の原といふ處に宿つきぬ、いはゆる筑摩の御湯となん。「わきかへりもへてそおもふうき人は束間のみゆか降士のけふりか。」と、般富門院のなかめ給ひしを、修理太夫惟正このくにのかみにて侍りけるとき、ともにまかりて源重之。「出る溫泉のわくにかゝれるしら糸はくる人たへぬものにそありける。」と、後拾遺に見へたりける此歌をはしめに、今はもはら白絲の湯と、世の中にいひなかして名におへり。

しらいとの名にひきなかす言の葉に見ぬ世をみゆのもとにこそしれ。

まさかす湯桁にありて、

世のわさもしはしはこゝにしらいとのかゝる湯あひにわすれやはせぬ。

ふん月朔の日。けふはこゝにとゝまりて、ひねもす湯あひす。溫濤の瀧とおちくるかたには、こゝらのやまうと集ひたる中に、法師ひとり、さしましらひおはしけるに、いつこよりかとゝへは、吉備の穴の海の邊とのみいらへ給ふてけり。かりねの宿に歸り來てとひしかは、玉嶋の里なる圓通寺に住給ふなる、國仙和尙にこそありけれ。こはいかに、わか叔父なりけるせしの、のりのこのかみにて、つねに聞をよひて、世中に名たゝる人に、ゆくりなう今まみへしもうれしく、なにくれとかたらひて、

いや高きみねこそ見つれたひ衣きひの中山よしわけすとも。

せしのふせやも近う、すんさの僧達あまたの聲にて、みす經聞へて、やをら、はつるころとふらひて、なにくれの物語をす。此せしの云、近きとし、君につかうまつりし士の、いかゝしたりけん、うつゝなう心みたれてとしころありつる人に、われつたなう、「捨し身は心もひろしおほ空の雨と風とにまかせはててき。」と、なかめて見せしかは、これを三たひ、すし返し〳〵て、やかて氣も心も凉しうなりて、ふたゝひ君につかへしことありなと聞へしに、この歌の末の、きもしを、はといひかへて、

すてし身は心もひろし大空の雨と風とにまかせはてては。

として、その人の返しやし侍らんといへは、せし、おとかひをはなちてわらひたまへは、近くまとゐしたる僧もほゝゑみたり。

政員と別る

二日。けふなん政員、もとせはに歸るといへる。別、いとものうくて、

いとつらき別をやせん玉ほこの道のちまたのこのもかのもに。　まさかす。

此返しとはあらて、

別路のちまたに殘る言の葉を又逢ときにかくとかたらん。

薄大明神

三日。夜あけなんとしける頃手あらひ、近きさかひにおましましける薄大明神にまうてん

とて、朝開のみちをゆき〳〵て、その里になりて神籬を見奉れは、みやしろの左に、軒とひとしう高き、はたすゝきをあまた殖たりけるを、あない、みたまへ、この芒はもろつまの須須支とて、ことすゝきとはかはれりなとおしへたり。うへと、ひろまへ近うよりてぬさたいまつるとて、

ぬさとれは薄のみやのほの〳〵とあけの玉籬風の涼しさ。

奉る薄のみやの神垣にかこふ尾花か袖のしらゆふ。

素盞嗚尊を祭る

この神のことも、とはまほしくて、神司上條權頭なにかしといふ人のもとに尋ねてけれは、あるし、しはしのほとに、とより歸り來てかたりて云、そのいにしへに廐戸皇子、このやまをめてのほり分おましませしに、ひとりの山賤の翁出來りて、くま〳〵殘なくおしへ奉るを、いましはいかなるものか、かくそつはらにしりて、みちひきはせりけるとのたまひ、はた、名はたれとか。翁の云、「出雲路や八雲八重垣たちけちてそのうら薄いまは穂屋野に。」となかめたりけり。こはと、かんつみやのひつきのみこ聞おとろき給ひて、此やまにおましませる神にてやあらん。すさのおのみことにてわたらせ給ふらんと、翁にむかひ、ぬかつき給ふとき、おちは、面影かいけちて、行衞しらさりけるとなん。薄の社たて初しは、慧日高照山兎川靈端寺とおなしき年に作りき。はた太子殿といへる處もあり、その趾は、此神司か居るあ

薄社、薄町、薄河

たりをいふ。うまやとの君、みつからの姿を、かたにうつし給ふあり、それは、すりやうのくらに、ひめおき給ふとやらん聞つたへ侍る。此里を薄町とよひ、薄河は雄瀧の末の流來て、つかまの社のこなたにゆく水也。こゝをも穂屋野といへと、まことは内田村とか。この處を今薄町といふも穂家野といふよりつきて、おまします神のみなも、薄とやいふならんなと語るを聞て、ふたゝひ山邊の湯あひとのに歸り來て、國仙せしに贈る。

別ても吉備の中山かひあらは細谷河の音信てまし。

わかあるかたにも、かならすとひ來てなとありて、此せし。

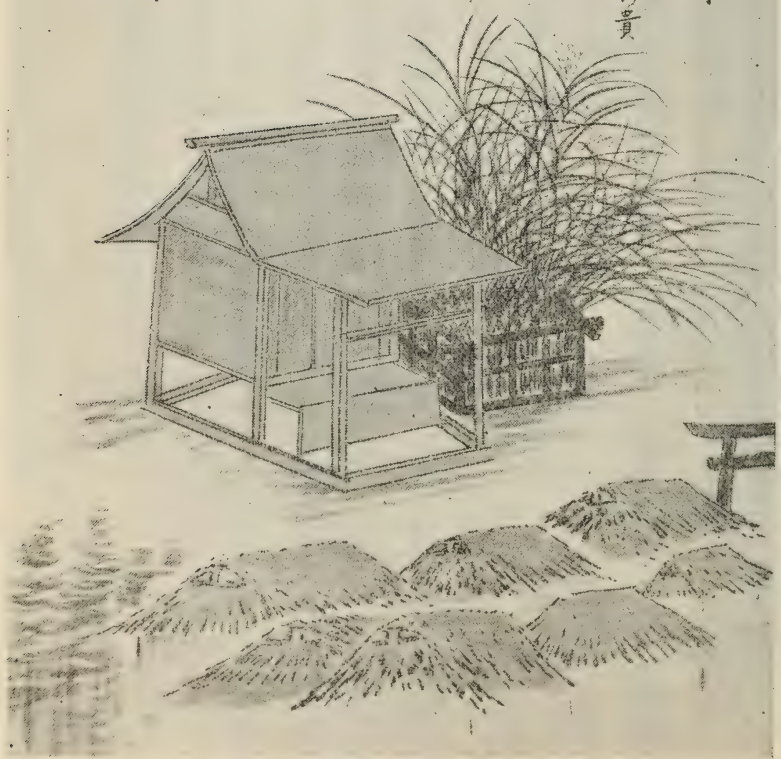
旅衣いつたち出てきひの山菅の莚をはらひまたなん。

御射山

ひるつかたこゝを出づ。此處よりは丑寅にあたりて、山おくに御射山といふあり。この國に、此名ところ〳〵に聞へたるかなかに、須羽の湖の南に、神戸といふ村よりはひんかし、八筒嶽のあたりの原を穂屋野といひて、七月廿七日、すはの御神みかりしたまひたるかん世のふりをまねひ、さゝやかの家を造りて、それを薄もてそふきけるとなん。そのかりやつくる處を御射山とも、ほや野ともいふ。「科野なる穂家の芒もうちなひきみかりの野邊を別るもろ人。」なと聞へたり。かくて、松本の里に出て峨月坊か宿をとふらへは、藏六といふ額をかけたり。こは、龜の六ををさむてふこゝろにやあらんとうち見て、

松本にて

茂呂通満乃須秀貴

薄明神

かくるとも人やしるらん龜の尾のうき世にひかぬ心きよさを。

といへは、あるしの返しあり。

かくすとは名のみ斗そ龜の尾の引もひかぬも六十ふる身は。

城主入國

五日。つとめて、此城の御主、むさしよりのほりおましますとて、おほんむかへの人々さはに、あけはてぬよりよそひたつに、ところせきまて、その君をかみ奉らんと、村々里々の男女いりみちて、君のいさおしをよろこひあへり。かくて君いなきに入せ給ふの後、はやちふき神なりて、雨のいたくふりぬ。あなめてた、日ころ、あまつ水いのりもとめしかと、其しるしもふらさりけるを、けふ、との入せ給ふをまちて雨ふれるこそ、ひとへに、君のおほんとこにこそあらめやと、みな、ぬかをむしろにすりてよろこひあへり。

かしこしなめくみになてし民草の榮は君をあふくにそしる。

高燈籠掲ぐ

海月上人、儀辨上人、定儀、吉尋、吉遐なとゝふらはれて、歌よみてくれぬ。儀辨上人のすめる寶榮寺は、そのかみ、あか國碧海郡苅屋てふ里より、水野なにかしのかみにつかへ奉りて、この科埜の國に來る。亦定儀も、むかし三河路よりきける遠つおやの、いにしへを語る。くるれは、にゐみたま祭る家には、高燈籠をいと長き竹、あるは柱をたてて、うれことにひきあけたるは、星のはやしと見あさむく斗也。

七夕祭り

七日。おなし宿にけふも暮なんとす。女童、竹のさえたに糸引はへて、さゝやかなる男女のかたしろをつくりて、いくらともなうかけならへたるに、秋風、さと吹なひかいてけり。

なゆたけの葉風に男女郎花なひくやけふの手酬なるらん。

このこと、さきの日記にもせしかと、ふたゝひ其かたを左にあらはす

あひにあひて、こよひ庚申にあたれは、

まれに逢夜もぬることは樒の葉のうらみて明ん星合の空。

あるしのほうし　峨月。

さはりある夜をかこちつつたなはたの逢もかたみに丸ねなるらん。

女鳥羽河

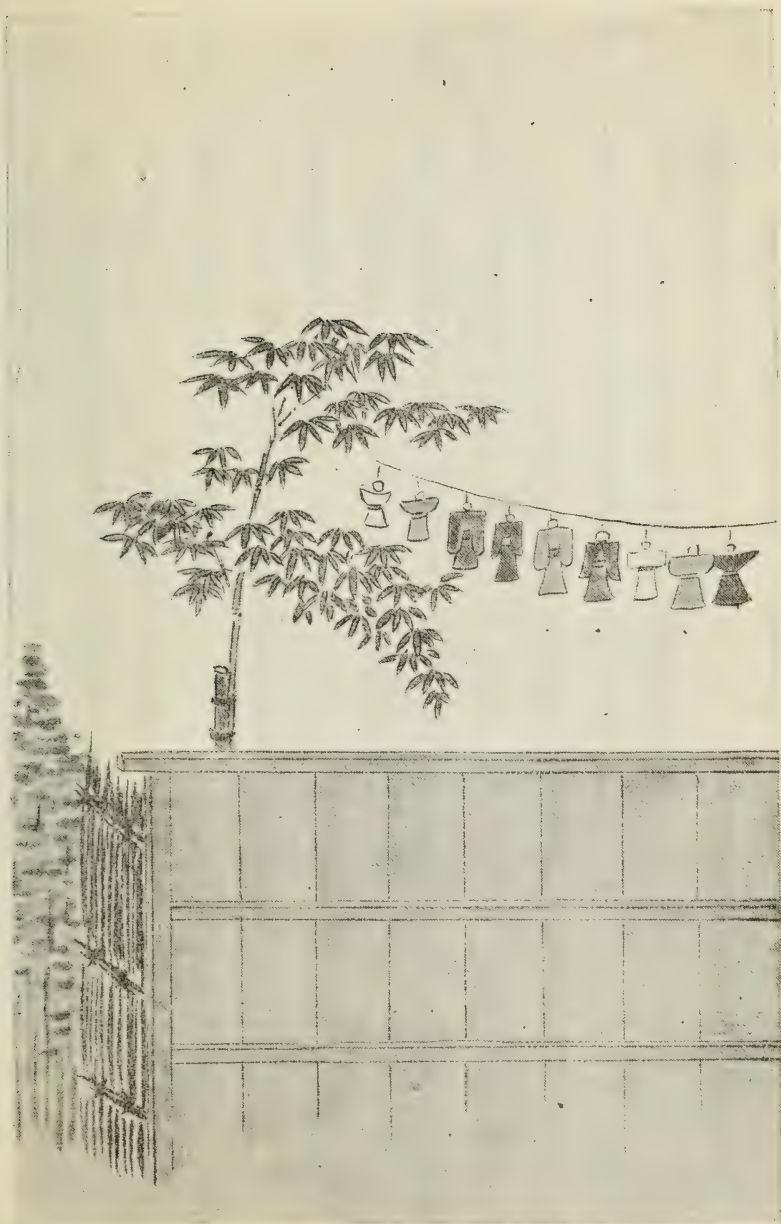
八日。定儀かすめる秀亭てふ庵にとふらふに、おかしうかこひなせるあし垣のとは、女鳥羽河とて、さかしき山あひよりなかれて、いと涼し。

問よれはむすはぬ袖もぬるるかと水の音聞宿の涼しさ。

いつまてもこゝにあれ、又、砌の竹になかめてなとありしとき、

へたてなく話るも嬉し秀たる宿の呉竹直き友かき。

大昌寺

女鳥羽川を渉て、大昌寺といふか、むかしやけたるとて、こたひあらため造るを見るとて、てをのうちたる柱に書つく。

築行法のためとて幾度も造かへぬる里のおほ寺。

淺間溫泉

九日。この松本の里に近き淺間といふ湯泉に、人々といさなはれて、つとめて小柳てふやに到て出湯のもとにうち集ひける中に、廣惠てふ人、

出る湯のくみてこそしれ語あふ人の言葉の花の色香を。

といふことをむくひけるに、返し。

花ならぬ言葉を花といつゝ湯の深き心をそふるうれしさ。

詩友贈答

十日。藏六亭に在る廣惠。

故鄉を戀る夜每に八橋をわたりやすらん旅の夢路は。

かくなんありける返し。

夢うつつおもひそ渡る八橋にかかる嬉しき人の言の葉。

十一日。倉科琴詩のもとへとへは、眞砂亭といふ額あり。亦鶴の画のありけるに、

齡をはここにゆつるのふみならす眞砂のやとや幾ちとせへん。

くるるより月いとおもしろし。

いにしへの人にものいふおもひして見る文月の月のさやけさ。

田澤村まで

十二日。よきみちつれのあれは、あはたたしう松本を出たつ。犬飼といふ村に到る。「鳥

の子はまたひなながら立ていぬかひのみゆるやすもりなるらん。」の歌は、東間（つかま）にちかき淺間の溫泉をもはらいふなれど、はた、ここにもありけり。犀川の流は梓河におち入て水いとふかし。この國より、むかし、弓おほく造りいたせるより梓てふ名も聞へ、「みすずかる信濃の眞弓われひかはうま人さひていなといはんかも。」とは、久米禪師もよみ給ふとか。かくて田澤村になりて、このむらをさ翟好かやをとへは、きりかきのめくりに萩の盛なるを見つゝ、あるし。

　　嬉しさよとひよる人のなさけをや待えて咲し萩の初花。

といへるに返し。

　　秋はきの初花よりも珍しな人の言葉の露の情は。

犀川の贄鮭

十三日。けふは、あるじのとどめければ、おなじ宿にあり。あるじの物語に、木曾河、阿都佐川、ひとつに落ながれあひては名を犀川といひけるを、今は木曾路川をも犀川とよひ侍る。むかしはこの犀川にて初鮭のいを三尾とりて、島館（しまたち）の宮に一尾（天註——志摩多智てふ處は、いさごだの神社にて、いま三のみやといふ。むかしはそこまで鮭ののほり來りしとか。さけのみやてふ名も聞へたり、いにしへは鮭のいと多かりけるにや。延喜式にも楚割鮭一百二十隻」とそありける。）、此田澤の祠に一尾、穂高の社に一尾を贄にたいまつりてのちは、くにのかみにも奉りしなどかたらふをりしも、時習庵の主とひ來けり。はいかいの連歌にその名聞へたる山海といひて、むかしの去來法師の、つる

近くの名所

の、むまごなりけりとか。去年の秋の頃姨捨山に友に月見しとき、相やどりしてしりたる人なれは、かたらひむつひて云、見へき處はこのおく山の藤橋、渡蟻落、水内瀧、はた執田光の山里によひ火して、いつこにてもうかかへば、流よりも火もへつるところあり。あふらの

精靈祭り

泉もあるかたありなど話るに、夕くるれは、庭の面に白椛といふ木の皮を、いくらもまつにたきて、男女、をさなき童まて居ならひ、ずゞすりならして遠つおやよりはしめ、なきたまをかそへ〳〵てをかみ、彌陀のねんぶちをとなふるほど、火もけちぬれは童手を叩て、なもさか如來、なもさかによらひ。」と唱へて、おどりそせりける。

うなひ子かなきたまよはひふみしたく庭のちくさの露けかりけり。

穂高社詣で

十四日。ともよしか宿をたつに、光といふ處の舟も、此とし水にやふれてわたさしといへは、熊村といふ處まて路しはし返りて、細萱村をへて、穂高のみやしろにぬさとりたいまつる。このみたまは、瓊々杵尊をあかめまつり奉るといふ。木たちたかきみやところにて、四方は田面の穂なみ八束にしなひて、豊に見やらるる。みてくらのやの軒に、旅人の休らひて話るを聞は、夏のころまては、ひとますのよねを、もものあしに、いそちあまりそへてかひたるを、いまは、ななそちに、ひとますをそかふなる。又、たのみ、かくみのらは、猶世中いか斗よからん。あなうれしともうれしとうたひ連れ、けふり吹たてていぬ。

民草のいのるしるしをみしめ繩なひく穗高の田つらにそしる。

里さくれは穗高河あり。いくせもわたり〳〵くるは高瀨河とて、つねは波いと高けれと、此ころはあせきなと人のいへり。

岩そそく水音斗たかせ河あせて渡もやすくこそあれ。

かたらひ來つれし友に、細野といふ村にてわかるるとき、

是も又綵によるてふものならて心細野の別路そうき。

川會神社

川會神社は、高瀨河のひんかしの、ささやかなる杜に鷄栖の見へたるをいへと、むかし、十日市場といひける村に此おましはありたりけるを、水のためにほくらおしなかされて、いまはここにそのままますへて、あかめまつるといふ。鷄放か嶽とて、いや高き山みゆ、是なん有明山といふめる。此山のあなたは中房とて、よき溫泉わきつるあり。はた久會の湯とて、高瀨河の水上にもありといふ。（天註――「久會の湯は葛の湯にやあらん。俚人、葛かつらをさしてクゾかつらといふ。はた萬葉集に、「葛英の木にはひおほとれる屎かつらたゆることなくみやつかへせん」ともあれは、いかかやさためん。」）

有明山

「やよやなけあり明山の時鳥聲おしむへき月のかけかは、と、行家のなかめ給ひし。又姨捨の山の近きに、あり明の峯てふ名も聞へ、「科埜なる有明山を西に見てこゝろ細野の路を行かなとは、西行上人のよみ給ふとも、亦上杉憲實の、かんつけより、越のうしろ國におもむかせける頃、細野にての歌也ともいへり。（天註――「憲清と憲實とあやまれるにや。憲實、安房守に任して上野、越後、伊豆の

國を領し持氏の臣たりしか、持氏の京都にそむくをりしも、よしのりの下知にて、のりされた大将として持氏をほろぼし臣として君をうちしつみのかれかたしとて、出家して長棟と名のり、すきやうし、西行のこと、國々見めくりし人とか。」）

安曇郡の有明山に、むかし遊行上人よみ給ひし歌のありけるより、ためしとなりて、世々かはる／＼松本のうまやにいたりたまへは、まつ、此山に歌ありけるよしを人のいへり。ときの間に雲ふかうかかりて、鳥はなちかたけ見へす。

又も見んほとはいつともしら雲の月にさはらん有明の山。

池田の村

池田といふ郷に夕くれて宿つきぬ。鷄鳴頃、さと風の音して夢もやふれて、枕かみの板戸おしあくれは、鳥放かたけ、なこりなう、あか月の光におかしう見へたり。

はなちたる鷄はなけとも月影もまた有明の山そ夜ふかき。

相道寺村の山里

十五日。あないをたのみて、度安里於登志見に行とて、相道寺(あいどうじ)村といふにきけり。近きころ美濃の國より來けりとて、陶つくりかやともありけるをへて、山路に入て遠近を見れは、さかしき山のみ十重廿重にかくみたり。何の梢ならん、いとはや、もみつる山かけより、しら雲のたちのほるところあり、そのあたり栖家やあらん、夕飯のけふり、いくすちもむすひぬ。

とあり落し

やをら刀冥離淤等斯に到て見れは、ふかさ、いくそはくそや、はかりもしらぬ太谷にのそんて、西ひんかしに、雲あらぬに龍のわたかまれるかことき橋を、二ッまてかけわたしたり。ひとあしふみ見んもあやうけに、たましゐ身にそはぬこゝちして、渡えんことのかたけれは、

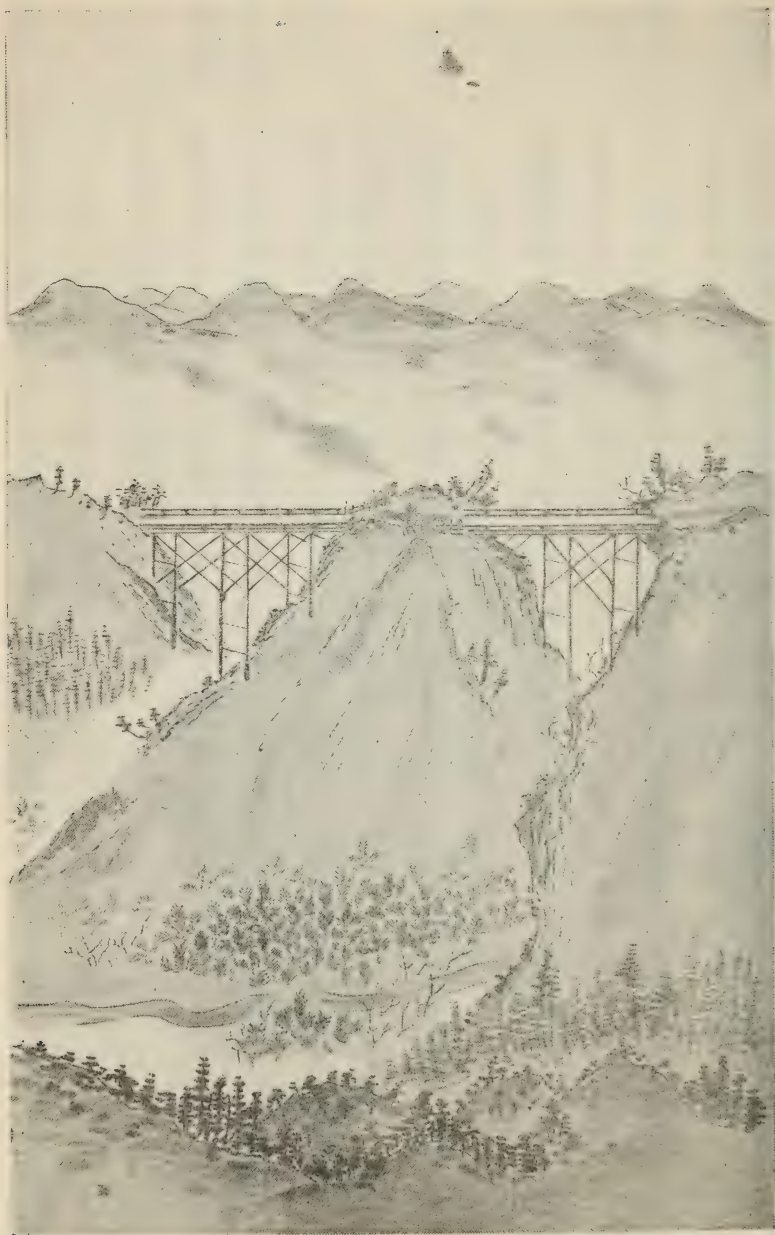
せめて、なからはかりにも行て見まほしくて、あないの翁にたすけられて身にあせし、半ふみ見て返りく。ここにいひつたふる歌に、「信濃なるとありの谷に來て見れは雲井を渉る天のうきはし。」世にかかる處も、又ものかたゝすみ見やりつゝ、

おもはすよふみて木曾路の外に又とありの橋のかかるへしとは。

渡えんかたはそことも白雲の虹かあらぬか谷の板はし。

苦婭利とは、おもひもの二人もつことをいへり。此鄕にうたふ石臼うたに、「とあり同志でうすひけば臼はまはらてやりうすに。」ある男、女ふたりかもとへ通ひたるに、此登阿里とも、つねは男をあらかへるこゝろも、とには見へさりけれと、ねたしとや思けん、此橋に友なひ到りうち休らひ、あなし涼し、しはしまちぬ、身にたすく蚤さらんと、あかすそうち返しけるを、いまひとりの女、そのこゝろをやしりたりけん、髪にさしたる針の糸して、此女のうち返したる衣の右つまと、わか左のつまを縫あはして立るを、蚤かる女、たてる女の背にたをれしふりしてうちあたり、谷に、ささつき落しけれは、衣のつまにひかれて、さはかりふかき溪そこに、ともにおち入て二人なから身まかれり。そのなきたま、頭ふたつある蛇となりて今もすむか、雨風にあるる日は、出ありくを見し人ありなと、あないのかたるを聞つつ、

うき人はよしとありともかゝりともあたに二人の身をやなすへき。

來日路乃橋

風穴あり

あない、あしこのそかひこそ、かざしほとをしゆれ、風吹いつる穴のありけるよし。（天註——「風入へかざしほ」にや、風し尾にや。おかしき名なり。）もろこしにも風井ありて、夏は風の吹出て、冬は風の吹入るといふも此たぐひならん。かくて池田に歸る。

不動尊祭事

宮本の神明

廿六日。けふは有明山の麓のあたりに、そのかみ阪上田村丸の鬼うち給ひし處に、不動明王をすへたる堂に、つとめて、里人まうつるとてうちむれて行ぬ。ここを立て宮本といふ村につく。木立としふる社あり、これなん白鳳二といふ年、五瀬の州より外宮をうつしまつり奉るときけは、かけまくもあやにかしこう天御中主尊をいはひ、はた、天津彥火瓊々杵尊、天太玉命をも、あはしまつり奉ならんかしと、かしこまりて、（天註——「宮本のみやしろは式内にあらす。）

　世々ふりて今もみけつの神籬に末さかふへき杉のいくむら。

曾根原の橋よりこちは矢原庄、おちを仁科といふなり。ゆく〳〵、村雨一とをり過たる夕榮の空おかし。ここを閏田といふといへは、

　ゆたかなる秋や見すらんふる雨に猶うるふ田の里のとみくさ。

大町に來て

けふは齋日なり、ものたはせよ〳〵と、すきやう者、かたゐのゆきかひにみちもさりあへす。大町といふ處につきたり。とみうと多く、にきはゝしき里なり。伊藤なにかしか家にとまる。やのしりに、仁科なにかしのかみの城あとあり。いにしへ、西行上人さすらへありき給

精靈祭り

盆踊り

更級郡に入る

ひしころ、二人の法師秋の草に歌よみかいつけて、をはりをとりける處は、ここよりみち六里はかりをへて、山奥に佐野といふところあり、そこに二僧庵といふ名のみ殘りぬ。又淺間かたけの麓にも、ふたりの僧の身まかれりしあことて、ありけるともいふと、あるしの話を聞つつくれたり。門ことに、まつ火たいて、又、市中をいとはやうなかるる小河あるに、わらをおほ東につかねて火をかけて、これを、なかし火とて、なかすやあり。こは、水におほれて身まかる人の、むかしにても、いまにてもあれは、そのたままつるとて、としことにすといふ。ねよとのかねもうちすくるころより、男は女にすかたをまねひ、女は男のふりによそひたち、すか笠を着、あるは於古曾てふものに顏おしつつみて、おとりせりける。そのさうかこそはしらね、聲うちとよみて夜はあけたり。

十七日。この里をたちて峠にのほる。ここを女犬原(めいぬはら)といふ、左右(さう)むらを過て安曇郡のをはりなり。不動坂をおりて、向かたの巖より麻苧の糸のみたれかゝるかことく落くる水を、すなはち不動の瀧とそいふめる。橋木といへるところにて、かれゐけひらいて、うちやすらひて、

闇渡る里の橋木の風のみか河瀨の波の音の涼しき。

ここは更級郡なり。たた左爲川のへたをつたひて、おなしこほり日名村に來けり。この村

の茅原といふところにおましますは日置神社にこそ。

　出る嶺入山のはもくもりなく照す日おきの神のかしこさ。

歌道村人麿明神

牛越坂をこゆれは歌道村といふあり。ここにある神籬を人麿大明神と申奉り、はた、みやしろのかたはらにあるを人麿の池といひならはせり。いにしへ、かんつけにおもむき給ひしことあれは、柿本のもふちきみ、このあたりを通り給ふにや、里の子の物語にいへり。

　數ならぬ言葉の手向露斗みそなひたまへ人まろの神。

皇足穂神社

大原村をへき、猿倉てふ處よりは水内郡をさかふとかや。穂苅といふ村の宮澤てふ森に、皇足穂神社をあかめまつるにまうてぬ。むかしは法師もつかへまつれり、その寺正蓮寺とてすたれたるを、いまおこし建んと、いとなみせり。かんつかさは鹽入なにかしといふとか。

　やすらけくそのやい鎌のとかまもて神のほかりの秡ますらん。

　栖民の猶さかゆかん秋の田のなひきたるほの神の惠に。

新町にて

新町といふ里に宿かる。いまた日たかけれは、とに出てあたり見ありく。綱曳舟わたし河のむかふ岸邊は、むかし馬場美濃守のこもれる、琵琶城といふ其あと殘りぬといふとき、「ひはのしろ」てふことを句の下におきて、

　そことさひあと尋れはいにしへのさまとも見へし苔のさむしろ。

十八日。あるし、ひとひ、ふつかはここにありねと、ひたふるにとゝめぬれは、おなし宿に居るに、上條村にすめるといふ、かの、しほいり氏といふ人とふらひ來りて、小川神社は小根山村におましある神とかたりけるを聞て、

をね山の木々のした露ちりつもりなかれ小河の神やますらん。

十九日。けふは此郷の市とて、なにくれといろ〳〵のものを、やの前にならへて、かふ人さはに立ぬ。くすし義傳といふ人とひ來て、

良耳の香やててらか袖にとめかねつ。

といふ句をつくり贈りける、返し。

たのしさや夕かほたちは秋なから。

ふしたるまくらかみのさうしに何ならんと見れは、「白浪のより來る糸をたてぬきに風やをるらん布引の瀧。」といふ、うたをかいたる也。こは、此家のあるしのおや義道とて、いみしき歌よみの侍りしか、このとしの春のころ、身まかれりけるか手なりといふもあはれに、またたく灯火をかかけて、

布引の瀧のしらいとくりかへし見るに袂の沾れもこそすれ。

二十日。しんまちをたち上條村を過て水内村に到る。みたにのそこ行水は木曾路川、梓川、

犀川

筏の瀧落し

久米路の橋

白猿橋とも

高瀬河、みな此犀川一筋に流れ入て、さかしき岩山にせまり、たきり落くる水は、はなたをまとふかことし。其ときこと箭のことく、みなは、さかまき落しきる處を彌太郎か瀧とも、みのちか瀧ともいふ。さはかり大なる川々ひとつにおち入たる水の、ふかさ、いくそはくそやあらんに、筏ふたたたみ、のりくたすか、しはしは棹もとらて力繩といふものを頸よりかけて、筏を瀧より、まくたしにくたし、みなそこに落入りかくろひぬ。やをら、こと淵にうき出たるを見るさへ身の毛もいよたつに、なりたるわさとて、やすけにのりくたしたるは、世にたくひなき高名の筏士なりけりと、見る人手をうちて、ややとあきれたり。猶行するゑを見やりつつ、

雨にきるみのちの瀧の早きせにふらても濡てくたすいかたし。

この水内のたひらといふ處に、健南方富彦神別神社のおましますとなん。けふはそのかんかきの、かんわさなりとて、よさり奉る火ともしのうつは、手ことにもてまうつる人多し。かの犀川の岸つたひ棧ありて、いと大なる立岩をめくりて曲橋をふみぬ。この橋は西よりひんかしに渡り、又おし曲て南をさして渉し、そのかたちは、たくみ等か曲尺(まかりかね)てふものにことならす。此名、久米路のはしともこれをいふとか。(天註――「此はしは東西五丈四尺、南北十丈五尺、廣一丈四尺」)むかし白きましら、おのか腰に藤かつらをひきまとひ、高きしよりつと水をとひ、それをたつきに、よりよ

り渡りしをはしめにて、くたらのはし作りか造りしとなん。さりければ、こゝさへくから歌の家には、白猿橋と、くしにも作りけるとなん。水きは、しはしありて、岩つらに棚のことく貫かきして、それにのりて鯉鱒とるといふ。又秋より末は、まち網といふものをさけて鮭すくふといふところを、はるかに見くたし、うかゝへは、きたみなみの高岸の岩に、橋はしらを、いくらともなう、ななめに立て造りぬ。此橋のなかはにたちて見返れは、高やかなる巖のうへに、ささやかなる鷄栖、木のなかにあり。これなん飯繩の神の祠ありといふ。かくてはしわたり得て、右の岩のうへより河の面に、細く落來る水を不動か瀧とて、涼しく音し、四方のやまくしけりあひたる木々のたたすまひ、この山河の水のありさま、橋のことなるおもしろさ、いかはかりつくり繪に工なる人のうつしなすとも、をよふへきかは。「たよりある岸の岩間にかけとめてすくにわたさぬやま河のはし。」と、嘉元百首のうちに爲相卿よみ給ひしも、此橋と人のいふ。はた「埋木は中むしはむといふなれは來目路の橋はこころしてゆけ。」とも聞へたり。又伊奈郡に、久米といふ處に行きはしあり、いつれをさためてんかし。このはしのもとにやすらへは、旅人も、きましりいこひて、不動瀧の水むすひあけて、時のうつるまてここにあそひて、いさといふころ、みちのかたはらの石にかいつけしうた。

むしはむと聞こそ渡れことこともなくふみて久米路橋は來にけり。

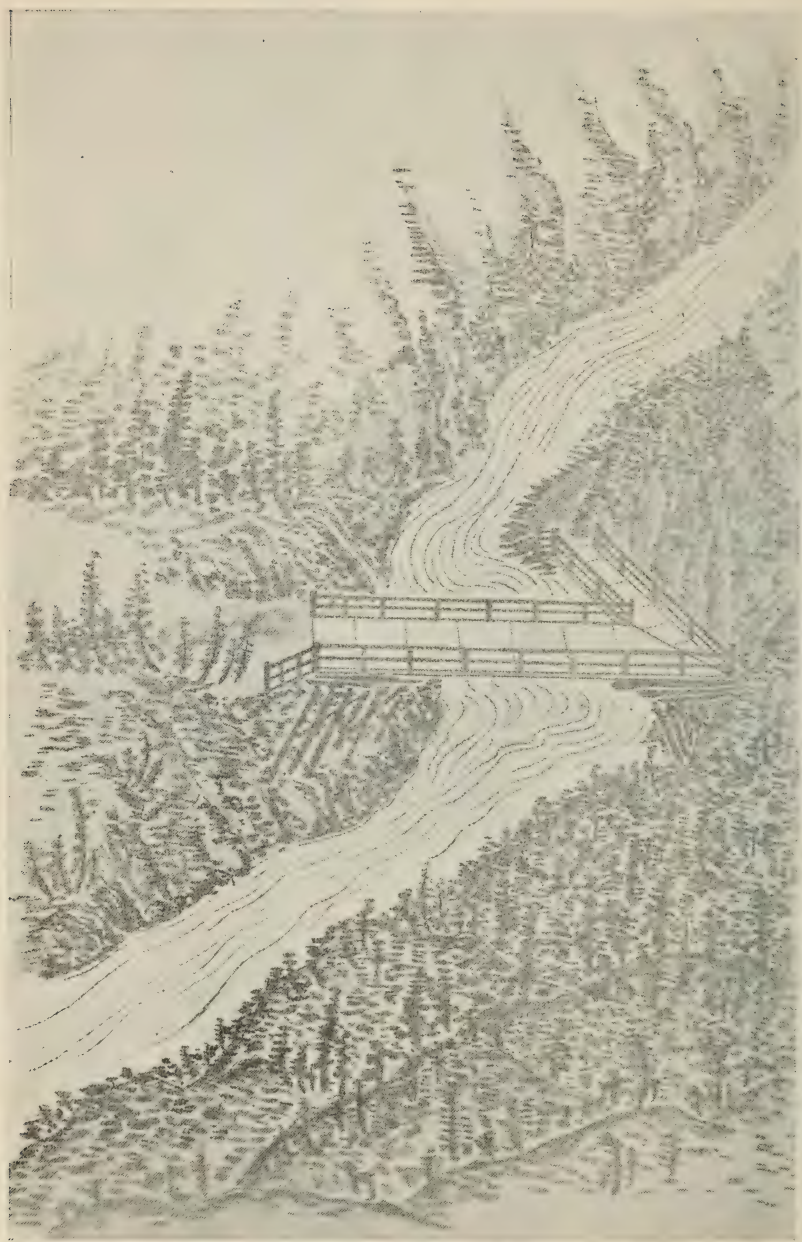
來目路乃橋

長谷村

近くの神々

姨捨山を望む

下戸倉村

鏡臺山に對して

工等か水のすみなは長きもていかに曲れる山河のはし。

こよひは、田野口といふ村に宿かる。

廿一日。鳥坂、深山なといふ處をへて、長谷村にいづ。ここなる觀世音の堂は、いにしへは長谷ノ神社にこそありけれ。治田神社は稲荷山村の本町てふ處に、いま下の洲輪をうつし奉り、桑原といふ村にも亦治田のやしろにして上の須羽をまつり奉るといひ、八幡村なるは武水別の神社也。若宮村のかんかきは更級神社にこそあなれ。千本柳、戸熊なといふ處をへて、河邊つたひに姨棄山を見やり、去歳のほりし處なれは猶ゆかしう、いと近けれは、めもはなたす舟にのる。ここは埴科郡也。

くれぬ間をなくさめかねつ更級や姨捨山の月おもふとて。

しも戸倉といふ村にとまりて、この曉の月の、ひまもりたるを見んとて窓の戸おし明て、鏡臺山を見つつおもひつつけたり。（天註──「鏡臺山は紀のいも山、せやまのやうに、ふたつならひたり。それに月の出て、山と山とのあはひにあれは、猶、鏡かけにかかみのあるかことなれは、山の名におへり。）

乙女子かむかふかかみのうてな山すかたあらはに嶺の月かけ。

おき出んといふとき月うちくもりてけれは、相やどり人、枕もたけて、夜はまたふかけん、およれとてふしぬ。

見し夢はとりの鳴音にさそへとも閨のとくらくあけぬあきのよ。

千曲川べり

廿二日。つとめて千曲川のへたをつたひ、「科野なる知具麻能川の左射禮しも君しふみては玉とひろはん。」とすして、ゆく〳〵見れは、ここかしこに、つな引ふね多けれは、

千曲河波のよる〳〵すむ月をもる綱舟にひかれてや見ん。

埴科郡五社

上戸倉、苅屋原をへて坂木といふ處にいたる。阪城神社にまうつ。里のしりのはたけなかに、いと大なる榊の枯たるか一もと立り。しかるゆへにや、かん籬の御名も、處の名も樌木とはいふなり。

手向には生ふる榊葉折とらて神のまに〳〵奉るらし。

ふたたひ下戸倉に歸り來て、中村神社はいつこならんと尋れは、寂寞(じやくまく)村（天註──「寂寞、いま寂蒔と書とか。」）とて木綿襷(ゆふたすき)のやうなるものを軒にかけてうる里の南に、向八幡村とも中村ともいふ處におましませり。矢代といふところに來けり。此處のあわざといへる處に、かん垣の有ける。粟狹神社にぬさとりたいまつりてここをいて來れは、ある宮ところを須須岐水の神と申奉る。こは、雨のみやしろとおなし神におましまして、卯月酉の日にそ、おほんかんわさのありける。

松代の里

土村(ぎむら)、岩野をへて松代の里に入て、池田の宮に、玉依比咩をまつり奉るにぬかつきて、市のちまたのかたはらなる、祝神社にぬさとりぬ。ここにまつる神は、諏訪をあかめて建南方

富彦命となん。太皷の聲したるに、

つつみ打て神のほふりのひろ前につかふみやつこ御世祈るらし。

埴科郡の五のかんみやしろも、けふに拜みをはりぬ。

廿三日。松代のやとりをたつ。里はつれは、芝村といふに堂ひとつあるは、むかし林彦四郎といふ士、親鸞上人のうつし給ふあみたほとけを持つたふるを、うはんとて、もののふたり、つるき太刀をふりかさし追來れは、せんすへなう、たかかやの生ひ茂りたる、ひろ野のありけるにかくろひぬ。此もののふら、この野良に入てのかれんかたはあらし、いさやけとて、火をはなちてやきしかは、山かせにふかれて、見るかうちに灰となれと、人ありけなるくまもあらねは、こは、いつこにかにけのひぬらんかしとて、もののふたりは、しそきぬ。なまよみの甲斐のくにをさ信玄のうし、みすすかる科野路にいくさいたして、ここに到り給ふに、燒のこりたる一群薄の生ひしけれるなかに、虫の鳴やうに、いきのしたにて、みたのねんふちをとなふる聲の聞へたるは、たそそ見てこと、のたまふまま、はた薄かいわけて兵入て、やかて歸り來てしかしかのよしをけいす。其彦四郎をめして、しはしものかたらひはてて、たたかひをはりてのち、ひとつの庵を建て此みほとけをおき奉り、彦四郎も、すけしけるとなん。うちむかふかたによこほれるを、布引山といふ、この名佐久郡にも聞へたり。此郷に

芝村の堂の由來

布引山

氷鉋村

吹上村

芋井の郷

今見るは、岩のいくむらも、しらののを引たるやうにそありける。此山、望月の牧の北にむかふにやあらん、「もち月のみまきの駒は寒からしのゝひき山をきたとおもへは。」といふ歌も、北と著たとをいひ通はせり。はた、千曲川のつなふねにのる。こなたは埴科、あなたは更科也けり。やかて寺尾てふ村を過て氷鉋(ひがの)村に到て、氷鉋斗賣(ひかのとめ)神社にぬさとりたいまつり、

うち祓ふ露もひかのの神籬に百草なひくぬさの追かせ。

ここなる善導寺にすめる、等阿みた佛をとふらひ、ことかたりて時うつりぬ。

旦より秋のひかのの里にけふかたふくまてにかたらひにけり。

あるしの上人返し。

言の葉の花の光にてらされて袂の露のひかのとそなる。

丹波嶋に來て犀川を渉れは、吹上といふ村になりぬ。ここにものくひ、涼しけなれはうち休らひて、

こや風に吹上の里のあしすたれかかる涼しき宿もありけり。

政子の前のまもり佛、かるかや堂になとをかみすきて、いもゐの里になりて、くすし山本晴愼のもとにとふらへは、いと久しなと、むかし相見しものかたりせり。

廿四日。御堂にまうでぬ。（天註「善光寺本堂向南、南北廣二十九間二尺餘、東西廣十七間、高九丈八尺餘」）ここは水内郡柳原庄芋井郷。善光寺は天智天皇三年甲子に建て、本堂に四の名あり、定額山善光寺、南命山無量寺、不捨山淨土寺、北空山雲上寺也。しはしくまく〵をかみめくれは、來迎の松といふあり。ここに刈萱道心の庵して、むらさきの雲のむかへをまたれしといひ、かるかや堂は、石堂丸すけして、をこなへる處といふ。堂の軒に集る人のいふ、きのふはおほんせかきの會のありて、なりはひやはしきころ飢死たるもののなきたまとふらひ、この月の朔より十日まて、かりやたてて、ものくはせ給ふ。そのかたゐらの數二千餘人といひき。あつさにえたへて身まかれるものら、六十斗もありきなと、みほとけの前に蹲りて、すすつまくる人とかたりあひぬ。長押に、「善光寺の月見ることよひかな。」といふ、宗祇ほうしの句あり。かたはらの壁に、たか杖をさしたる板のおもてに云、「あか母、此みほとけにまうてんことをとしころねかねひあれと、むなしう身まかれりし、なとかいて、はた、「たらちめのはきをたすけしつえなれはあゆみ來りしこころともなれ。」安永四乙未歳八月中旬　難波なる無染尼つつしみて拜むとありけるを見て、あなたうときこころさしかな、われもおなしくにうどなりとて、なみたおとし、なもあみたふちと、たなこころをあはする老法師のあれは、

浪速人あしとはいはて善光の寺のみまへにぬかつきにけり。

芋井郷滞在

かくて日くるれは、みてらみてらのともし火をてらし、あるは高燈籠の光に、みにはの面は蟻のゆきかひもかそへつへし。さゝやかのみてらまて、夜るの行ひのぬかのこゑ〱、御堂に入たつ人のとなふ、なもあみたふのこゑは、鯨のほゆるかことし。護摩の行ひある寺には大なるつつみ、とう〱鉦にうちませて、町々には、めのわらは、をとなひたるもおとりましりて、ほうしとり、こゑたかうぅたふも、ひとつにひひきとよみて、山谷もこたふ斗也。さかふちのおましあゑ、堂の火かけに見へたる板に、四十七番釋迦堂世尊院、「聞名不退願。」「こと木そこ見るはあやしや花にさき實をむすへるもおなし根さしを。」とそありける。山本かやに歸りてけり。やの人々は、天神嶋てふ處に、あま神のかんわさあるにまうてしとて、あるしのみ有てかたりぬ。

廿五日。圓乘寺におはしける悲[illegible]上人をとふらへは、みすきやうをとゝめて、いとたうとけに、ねんすつまくり出むかへるに、れいのよしなしことに、みときやうとゝめたまひなんもこころうけれは、ふたたひといひてこの寺を出て、ちかとなりなる寺の、香玄上人のもとにかいおく。

をこなひにすます心の月そともいさしら雲のかかるまそうき。

又、あるしの上人にまひらする歌。

言の葉の光もさそなあさ夕にみかく心の月もてれらは。

といふを聞て、香玄上人とりもあへす、

淺茅生の露にうつるもはつかしな君か心の月の光に。

やをら馬禪長といふ、手かく人とかたらひて暮たり。

戸隱山詣で

廿六日。戸隱山にのほりてんとて善光寺のしりよりわけて、野行山路に入て御歳宮（八幡をまつる）を右に見て、湯福（諏方の神を祭る）の社といふに鳥居あり。汝澤といふ處の山、なからはかりのほれは、いかめしく造れる四阿のありけるは、野遊の人々圓居して「いにしへの七賢き人とらもほりするものはさ、酒のみける所となん。路のかたはらに家二三あるしりより、いと冷やかなる湯のわきつるところあり。加都良山の麓をゆくに、朝露いとふかし。

風ならてうらみる葛のかつら山分る袂にかかる白露。

安樂夜珠といふ處に休らひてよもやもを見れは、遠のやま〳〵、波か鱗とかさなれり。大窪といふ處の館に水こひてのみて、いとよけんといへは、やのあるしも童も口をそろへて、この山は水いとよし。芋井の里はすこしぬるけれと、鳴子清水の外よき水はあらしかし。またものみね、とすすむ。

中院

中院にまうてぬ、ここにあかめて思兼命を祭る。このみまへを左にのほれは、比丘尼石、觀音ほさちの堂あり。麓より女、この堂を限にまうてててそ、みな歸りい

にける。はた寶永の頃、長明といふすけの入にし火定のあとゝて、石ふみにゑりたる。兒塚といへるところも過て、

奥院

奥院にまうてんとてみさかのほれは、いや高きいはほに大なる御社を造そへて、ひろ前に淸らをつくしたるは、かしこくも手力雄命のおましますに、龜のすかたの文ある、玉たれのをすのひまこそ見へね、ぬかつきて奉る。

かくれます天の岩戸をひき明し光世にしる神や此神。

拜殿

みほくらの左のしたつかたに、あゆみとのゝごとく、いはやの上におほひて、うちは、ひめとさしたる、をかみとのあり。こは九頭龍權現とて、かうべ九ある、たかをかみを祭る。いはやといふに下りてまうてぬ。齒の病ある人は、一期のうち、梨子をくはさるのちかひしていのれは、かならす其驗のありといふ。

餘五將軍の鬼退治

ふりあふき見る高嶺を、荒倉といふ。そこに栖し赤葉(もみち)といふ妖鬼(おに)に餘五將軍平維茂卿むかはせ、もみちたるおもしろき林に幕うちめくらし、ちりつみし紅葉をかい集め、さすなべにみきあたため、いみしうきようをさかせけるとき、かの妖鬼、はかられ出て、附子(ごく)かみしなしたる、みきに醉ふしたるを、うかかひ斬たひらけ給ひしところを、いま附子(ぶす)野とてあり。竈段(かまのだん)、幕入(まくのいり)なといふ名の殘り、又志垣村といふ處あり。紅葉狩のうたひもの語にも、「志離の路のさかしきに落來る鹿の聲すなり。」とそつくり聞へける。（天註— 夫木集、仲正、山賤かれらふしかきやしけからんゐまちの月の出よさりする。）妖鬼むけたひらけ給ひては民やすけん、今は鬼

荒倉山又紅葉山霧見嶽

紅葉會

七月の柱祭

涌の池

なけんと悦ひ、そこの名を鬼無里(きなさ)とて、紙漉く村の近となりにならひたり。荒倉山の名を紅葉山とも、又霧見か嶽ともいひて、千代ふる木々、枝をたれ茂りあひてけれと、杣、山賤らか攀踰るへうこともたはねは、木々は友すれに朽かれ、うち見やるたにいやくらく、雲霧つねにたへす嶺をおほへは、霧見てふ名の、うへもありけるにやあらん。此山のあたりをも園原といひて木賊いと多く、はた柳草といふもの多し。岐岨の山のねつつきなれは、しかいへるにや。維茂の卿むかし鬼むけたひらけ給ひし日は、七月(マヽ)七日八日九日、此三日なれは、今もなか月のその日、顯光寺にて紅葉會とて、千入にもみつる楓の葉をかい集て、たかつき、くほつきやうのものにもりて三日のうち、その鬼のなきたまをとふらひ給ひ、この行ひはつれは手向し紅葉殘りなう作花につつみ、くづりうのいはやとにをさむれは、その赤葉一夜のまに、越のうしろくに、尾埼といふあら磯に、いつるといひつたふる也。このふん月七日のかんわさは柱祭とて、いと高き柱を三もと立て、この柱に、三のかんやしろのみなをたくへて、立たる、はしらのうれことに柴をつかねて、火をさとはなちてとくしそき、これをあふき見て、すみやかに火のうつり柴のもへあかるは、いつれの神のおほん柱そと見て、其年の田のみ、よしあしの、うらひをなんせりける。このとしは手力雄命のおほんはしらに、火はやうかかりてかちたまへは、此としのたなつものやよけん。見たまはは、又此裏山に涌(わく)の池とい

ふありて、其ほとりにたちてわく〳〵と呼は、朽木の水底にしつみあるか、うこもち、ゆらゆらと涌出る處もあり、あなひといきね。此みかしぎやの南にあたりて、晴たる日は不盡のいとよく見ゆるなと、九頭龍の窟に、日ことに、もの供したひまつる老法師、わらはをいさなひ歸り來て、此山のあらましを語り聞へたり。かくて中院にまかり歸りて勸修院に入て、あるしのたいとこをとふらひてんと門に音なひて、

たひ衣立こそとまれ言の葉にみかける玉の光見んとて。

此ことけいし奉らんかなれとて、たいとこにかはりて、

尋ねこし玉の光も難波江の藻に埋るる賤の言の葉。　普達。

といふ歌を、光忠といふ士の作りける。かくて大とこの返しありけり。

旅衣はる〳〵來ても足曳の山のかひある言の葉もなし。　光忠。

ふたたひおくりける

たひころも木曾河越へて見る影もなみ〳〵ならぬ玉の言のは。

比叡の山より來て此寺にすめる亮觀といふすけ。

千嶂銜煙雨　秋陰帶暮陽　投來衣裏璧　別傍明月光。

といふ、しるんつくりて又、

雨を待つ

ことの葉のひかりならすはいかにして藻くすを玉と人にしられん。

と、ふたくさをむくはれたり。かくて、此寺に近き家に宿つきぬ。女の童雨ふれ〳〵といふに、いろはにやあらん、かまけるな、こよひはふりなん、雲のたたすまゐいとよし。ことかたはをり〳〵ふりけれと、此山は水無月十日斗にふりたるまま、小雨たにそほふらて、ものみなかれうせなんとに立ていへは、わらは、わかうへたる山櫻草、玉すだれもかれ行ぬとて、ちいさき岩のあはひにあるに、水もてそそきありく。

いく世々といはねに生る玉簾かけて久しき根さしなるらむ。

くれ行は、あるしの翁、くろ木のをまくらとり持ち投出して、そへれといへは、ふしたり。

御射山祭り

廿七日。つとめておき出れは、高根のしら雲ふかうかかりて、ひま〳〵に、岩群のもりあらはれたるは風情こと也。

日の光四方に見つらし明らけくあけ初にけり戸隠の山。

鎌隼又贄鷹

けふは御射山祭のいはひとて、紅豆の飯を家ことにたきて、青箸とて薄、あるは、かやの折はしにてものくひ、神のみまへ、阿伽棚にも尾花をり手向たるは、此國のならはし也。やを出て、ひのみこのふた櫻とて二本ある櫻あり。この樹、春ことにも花さかねと、としふり名ある木也とて、人のあなひしてをしゆ。この祠には栲幡千千姫をいはひ、寶光院の祠には表睛

命をまつり奉るとなん。鷹ひとつ鳥をかけ落し、よこきる羽音すさまし。こや、けふにあへるは、「苅て肯く穂やの薄の美作山にかまはやふさや御鷹なるらん。」と、なかめありける歌の如く、鎌鷹といふものにてやあらん。かまはやふさは、翅の羽すゑに鎌のことなるところありて、鳥の頸かいきるとも、又はやふさの爪の、やいかまの、とかまのやうにて、よく鳥をかき切ける。そのはやふさを、けふのみさやまに、むかしはかならす出て諏訪の神の贄になれは、この名を贄鷹ともいひ、手向丸ともいひて、かならす逸物のいてくもの也と世にいひつたふる、それにてやあらん。

　鷹の名のかまはやふさは刈てふくほやのめくりにけふや出らん。

熊に遭ふ

飯縄山（ゐつなやま）の麓の原に雨ふり出て、たとる〳〵そほぬれて、みちふみ迷ひほそちに入れは、子ひとつ連たるあら熊の、高草をけたてて、あか行前をよこきれてはしり過る。おそろしさ、たましゐ身を離れたるここちなから、猶その行かたを見やりつつ、

　月の輪のかけ見るほともあら熊のさし入かたは山ふかくして。

軍陀利村

軍陀利村をいつれは、谷ふかう、おかしく落くる瀧あり。揚屋村をへて、櫻といふところあり。

　村の名のさくら麻苧を糸によりていとなく衣をらん乙女子。

妻科神社

芋井郷を出て

雨いたくふれは、日たかく越こいふ里に宿とる。ぬれたる袖をほしねと人のいへは、

このままにかたしきてねん露雫雨に沾れこしたひの衣手。

廿八日。山本晴愼のやをあしたにとふらひ、あるしとしはしものかたらひて、妻科神社にぬさとり奉らんとて出ぬ。此かん籬を里人は、妻梨子ともはらいひき。路のかたはらの井は、戸隱山にて人の語たる、鳴子清水にこそ。

夜なく〳〵は月やすむらんやかて又秋も半になるこ井の水。

海なきくになから、此とは井の水みな鹹しといふ。社の邊に立たる石を、いやし、をかむ人あり。いかなる神にてかとさへは、いらへて、こは北むきの道陸神とて、ひのもとに、たた三のおましある其ひとつなりとか。いはくらになりて、

いもとせの中まもりませと行末を祈やすらん妻科の神。

さきの宿に歸りてくれ行ころ、毘義といふ人もとふらひ來て、夜ひとよ歌よんてあけたり。

廿九日。ここを出たつに、

越の海の波路行とも更級の月の頃には立かへり見よ。

となん、あるし晴愼のいへる返し。

こしの海浪へたつとも立歸り來て更科の月は見なまし。

かくて此處を出て風間神社を尋れは、かさま村におましあり。神代といふ村あり、ここのかんかきこそ伊豆神社なりけれ。相之木といふ處の南の森に、鳥居の三ッ立たりける、そこを三輪村とよふ。すなはち美和神社にて、粟野神社は横山の郷に近し。揚ヶ松といふ處の山中に到れは、石腦油の涌づるをくむ井、川をへたてて二までならびたり。このあぶらは、越後路の臭水に凡似たりけるよしをいへり。かた岨のいと高き處に、不落堂とて、斐陀のたくみらか、一夜のまに柱一もとにて建たるに、藥師ふちをおき奉るといふ。伺去といふ村に來てやに入てうちやすらふに、二ッ子のわかもとにはひよりくれは、ものとらせんとすれは、あとさりにさりてなき出ぬ。母かかへて、わにたるか、死たる兄とはたかひて人めせり。いまは是ひとり力草とて、めてくつかへりぬ。名は何といふとへは、砌に小松の生たるを手さしして、それにて侍るといふは、松といふ名にこそ。戲れて、

（石腦油出づ）（わにる人め）

　門のとの松にたくへん里の名のしさりてあそふちこの行末。

（西條の雁田神社）

押田村をへて西條といふ處に至る、ここに雁田の神とて譽田尊をあかめまつる。ほくらのうちに石のおばしがた造り、いくつもならへたり。（天註――本洗馬村のあしの田といふ處の、わかみや八幡もおなし雄元の祠也。みちのくにはいと多しといへ）かへりまうしにかけ奉る、つくり画なとも、めおのはしめ、みとのまくはひのかたありけり。あやしく見れは、腰よりしたつかたなるやまふをいのれは、すみやかにその驗そあり

けるとて、ふた布、あるは前たれやうのものかけ、男は褌をなん奉りける。身のやまうのことを記して、みてくらにひきむすひてありける、ふみをよみをはりて、

おもふことゝ書つらねてや玉つさをかけてかり田の神いのるらん。

ひろまへしはししそきて、いと涼しけれは松か根に肘つき休らひつつ、ふとひるねして松風に吹おとろかされて、

又いつかわけこしここに草枕しはしかり田の神のみまへに。

田子の村

此あたりにも霧原の名の聞へたり。筑間郡に在とは、いつれかさためん。田中村を過れは、田子てふところあり。

袖ぬれし田中の田子の功をみのる八束の穗波にそしる。

淺間山見て

やに入て、うちやすらひて淺間かたけを見やる。あるしの云、去年のいましころは、あなる山やけて、いたたきに雷や落るかとひひき、やけあかる石は、ここらの火の玉となり、火矢はなちくかことく、おほそらにとひ、四方にちりて、近きわたりは、やも人もうちくたかれぬ。此あたりよりのそむも、命あるここちはせて、神と佛とをいのりしかと、ことなく、あか里はのかれきなと、うち語りぬ。霧うすくはれて、山のなからはかりよく見やれたり。

秋風に麓の霧はあさき山なひくは嶺の煙なるらし。

髻山城址

石船地藏とて、石のふねかたちしたるに立たまへり。吉村(よしむら)、梶窪村を行に、みちの左に見へたるを髻山とて、上杉輝虎ここにもいなきし、こもりおはして、狼煙あけたりしところ、そのめくりの堀の址、駒かへりなといふ名のみ殘ると、のりたる馬おふ男の、ひかへ〳〵語る。

また霜の俤見へすこまかへりとはに老せぬもとゝりの山。

新麻を神に

過こし里、又このあたりの人、そのとし麻刈て、にゐ苧(そ)をこきされは、初尾花二もと三もと折て、麻苧はつかはかりむすひそへて、まつ、かんやしろに奉るためしあり。

神もうけん手向尾花の袖の露むすふ麻苧の淺からしとは。

平出(ひらいて)の村の左に、親鸞上人の、九の文字の、佛のみなかい給ふけるを持傳ふる明光堂といふに、けんさすめりと。牟禮(むれ)、小玉、落陰(おちかけ)、古間といへる處に雨宿して、

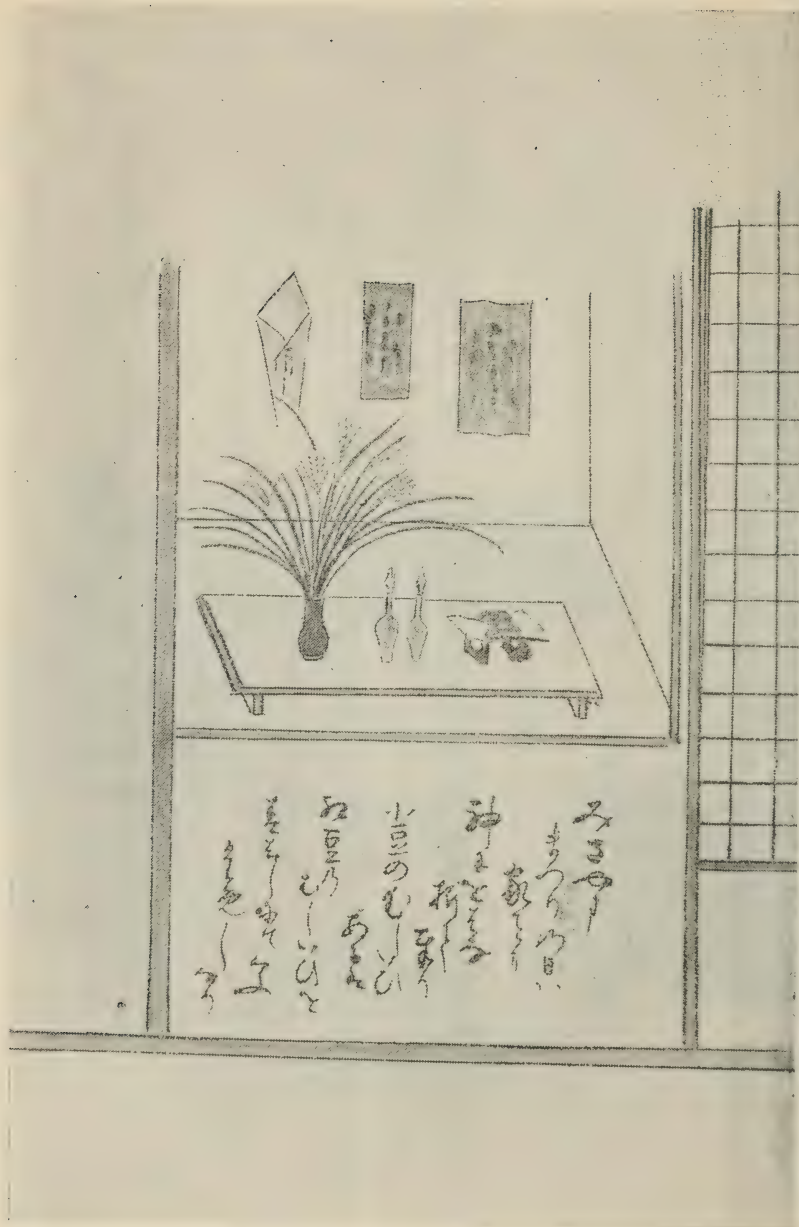
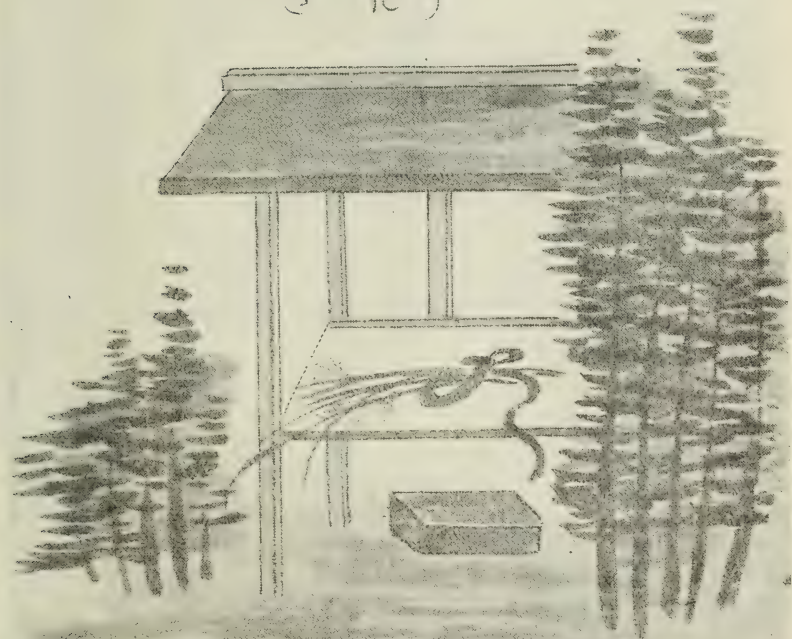
柏原を過ぎ

旅衣袖はぬらさし村雨のしはしふるまの笠やとりして。

中麻奈の古戦場

柏原のやかたを出て野尻のうまやに入ぬ、この里のひんかしに湖水あり。むかし、謙信の從弟、長尾四郎越前守義景といふ人ありしを、宇佐美駿河守定行、あまたの武士をみそかにかたらひ、野尻河をわたすとき、ふなそこに、かねてはかり造たる栓をぬいて、たはかりころせし。その子上杉景勝、のちにやすからす、軍をひいて、たたかひのところはあしこ、かしこなりと、さき立て行人の手をさしてをしゆ。「中麻奈に浮居る舟のこきてなは逢事かたしけ

熊坂長範の遺蹟

越後に入る

ふにしあらすは。」とよめるは、このあたりにや。はた、いつこともしらす、とひわひつつ、

尋ねても其名はそことなかまなに浮をる舟と聞渡るのみ。

ここに泊りたる夕、はいかいする名を湖光てふ人とひ來て、

月に鳴むしの音くらし草のなか。

といふ句せりけるに、こたふ。

秋の花野をつくす言の葉。

三十日。このやかたを出て、ささやかのやひとつある處に至れは、野尻の湖なこりなう見へたり。わけのほる處を長範坂といひ、山の名もしかいふ。むかし、ぬす人のをさ熊坂かこの山にこもりて、近き里わたりの馬をぬすみて、月毛は栗毛に染め、栗毛は烏黑に色をぬりかへて市にうりき。其そめとのの跡とて礎も殘りぬ。このあたりのことわさに、三ッ子のよこぞうりといふ諺あり。熊坂、三のとし伯母の擂枝をぬすみ、わかふみものにふみかくし、よこふみにさしふんて、にけさりしとなん、行つるる友のかたりぬ。赤河といひ關川といふ流あり、此水露斗も飲たるものは盜せるきさし出るとは、長範かくみたるゆへにいふにや。はた、もろこしの盜泉のたくひにや。かかる水をさかふて、あなたはこしのくに、こなたは科野のくに也けり。橋のなかはにたちて、

信濃路に別て越のなかに行へたて物うき關河の水。

ふたたひ、うちたはれて、

赤川と人はいへとも白波の名に立渡る水そものうき。

熊坂村

關のあら垣に入は、越吳のくに赤河の里也。渡來し河のあなたに熊坂村といふあり。長範のぬす人の魁は、この村に生れしといふは、ことにて侍ると、ものしりかほなるおほちひとり、斧さしたるか、われにかたりつつ氣破必左加といふにのほり、石のうへにたち休らひかへり見れは、かのふるおほぢ、見たまへ、高き山はしなのの飯縄山、戸隱山、此國の妙光山也。こや、妙光山は有明のみねといふといへと、科野路にも其名聞へたり。此たくひは、姨棄山の外に、芋井の鄕の近き邊にも更級といふ處あり、山を、さらしなの山とも更級崎ともいひて、月の田といふか四十まり八まちありといふ。その更科の里のかんわさに、荒雄等の太鼓うちて、「名所さま〳〵あるなかに、さらしなの里さらしなの里。」と、うたひありくといふ。かかることあらかへるは、世中のならひ也けり。しかはあれと、いつれをか、しかまのあなかちにさためてんと、おほちに別れて久呂比咩山を見あふきて、

信濃を顧て

くろ姫の山の面影名にも似ぬみねは眞白の雲の絶せぬ。

片貝に來て

小田切、二俣、大田切なといふ、信濃のくににもある名の、ここにも聞へたり。斧澤、關山、稻

新井の宿にて

荷山、福崎なといふ村々を過れは、片貝てふ名あり。こは古き名處にして、「かたかひの河の瀬清く行水のたゆることなくあるかよひ見ん。」とよめり。はた、「にゐ川の其たち山にとこ夏に雪ふりしきてをはせる、かたかひ川の清きせに。」ともあれは、立山のほとりにや。片加比河を越中といふ人もあれと、むかしは、國の三こしちとわからさるにや。伊夜彦山も越中の國としるして、家持の詠たまふ歌あり、今は越後のくぬちとか。戸隱山の法師と、おなしやとにしはしかたらひて、わかるるとき、

別ては逢てふこともかたかひの河瀬の水のおもひ渡らん。

市屋、松埼、二本木、坂本、三家(みつや)、藤澤、板橋、御出雲をへて、新井といふ處に宿かりてふしたるに、いまた信濃の國を行めくりありつと見おとろきて、かけろとよりの鳴づるころ、

高志なから夢は山路をみすす刈る科野の眞弓心ひかれて。

蝦夷迺天布利

共四冊
松前

松前國福山に在り

ひんかしのゑみしらかすむ、うなのあら磯に、臼のみたけとて、人のたふとめるいや高き山なんありと聞て、まゐりのほらまくおもひたちて、この夜明なば出たゝむ。其近き浦回まて、ゑひすめ刈るとて、これをとしごとのわさにいて行舟の、此福山のみなとべより、すぐめくりして灘こきいきなんといふ。これにたよりもとめて乘いなんと、友垣の圓居にこの事語りいつれば、とみなることにこそ、しばしは別れならめなと、うちものかたらふほとに、雨の頻にふりきて日は暮ぬ。文子の御方よりとて、

暫の別れと

旅衣たつをとめてやこのゆふへこゝろありける雨の音なひ。

となん聞へ給ふるを見つゝ、

たひころもたちもぬらさて此ゆふべ雨の音きく屋戸のたのしさ。

下國季豐のぬし。

わかれちの袖ほしあへぬ五月雨のそらをかことに人をとゝめん。

とそ、なかめ聞へたる返し。

さらぬたにわかれはぬらす旅ころもたゝはやくちん五月雨の空。

かくて、さつきの末の四日はかり首途せりけるほとに、ふたゝひ季豐のいへらく、

契りてしこそたかはすは皈り來て見し海やまのものかたりせよ。

とそありつる歌の返し。

海山のなかめありともとく皈り來てうみやまのむつかたりせむ。

飯形のかみぬし佐左木一貫の、

おしまるゝ餘波なりけり皈り來んほとはしはしのわかれなからも。

となんありし返し。

別行袖そつゆけきみち芝のしはし旅ゆくなこりなからも。

皈りこば、ほとなうこの福山いて行なんとけいしたれは、綾子の御方より、

ふる郷に皈るなこりやいかならんひと日ふつかも惜むならひに。

かくなん給りし返し。

ふるさとにたつ露けさそしられぬるひとひ二日の袖のわかれに。

季豐のぬし。

五月廿四日出發

海士のかる磯のなかめのつな手繩こゝろひかれすくるよしもかな。

此歌の返し。

友ふねにこゝろひかれて綱手繩くりかへしこんなかめありとも。

安良町出て

衣祁布の磯べより舟なんいづといへは、朝びらけゆく安良町の宿をたちぬ。國見山の尾峯ともいはず薄雲の立おほふひまに、月の殘りたるなと風情いふへうもあらぬに、麓より峠まで、野がひするここらの馬ともの、うちむれてあさるが、犬なと居たらんかと、いとちいさう見る〳〵行ほとに、さゝ、朝あらしの吹てたちかくろへは、すへなう、雲のいつこにとあふきて、

夏の夜の月毛の駒もはなちかひあそふも雲に入るかとそ見る。

衣祁布乘船

やはら磯におりたては、夜經よりこゝに泊りせし舟子とも、磯なる丸屋形の菅苫とりはなち、さし組みよこたへし柱ども曳やり、みなこぼちはてて舟につみをへて、いさのりねといふに乘てんとすれは、下國季豊の館のしたつ磯にて、いと近けれは、

餘波おもふ別もしらてとも綱をとく〳〵となといそく舟人。

高き岡より、いまの出船をこゝに見やりつるなと書て、つぶねのもて來て舟に投入れたるを鹿子のとりて見せつ。

いまはとてなごりも浪の舳つなをとくとくいそぐ舟のつれなさ。

と、この返しものしてけるに、磯浪あらくして、のりたる舟のたゆたゆとゆりもて、筆のあてどもあらぬさまにかいなして、船なる飯炊く童に持せて、はしらせてやる。ほどもなう（やませの風）飯り來ぬれば、いざといふとき、楫取、ふな中にたちて四方八方を見渡して、こは彌雜の風たちて門波いと高し、まぎりても得なんいがしと、うんじ顔つくりて舟よりおりつれば、ともに下りて、この磯の家に入て休らふほどに、しばしのまに風なぎ、浪もしつまりてしかば、さら（磯を離れて）ばとて舟こぎづるに乘りぬ。こゝに日ころ、あさゆさ、めなれし磯輪ながら、貴きいやしき人の栖家、神のみやしろ、佛の舍、寺、四阿ならびたり。庫、苫屋形などのおしまじりて、山の姿もなへてならず。夏木立のいやしげきかなかより、こゝに見へ、かしこにあらはれたるを、このなだ船の中に在りて見つゝ、こかれ行ほとに、沖に小舟あまたこき連りて、から長き鎌を（ほそめ刈り）うなのそこにさしおろし、さしうかゞひて、小海帶ちふものを、ひたに刈ありく。（天註――ひろめは夏の土用はかり時ありて採りぬれと、ほそめは恒に、ときならすしても刈り、西磯の江差昆布にこれなたぐへ、かりに、それと名のりなとしてそうるめる。そら昆布にや。）

こきなれてからき潮瀬のいとなひや見るにこゝろもほそめかり舟。

（白神岬）白神の荒磯近く沖邊行ほどに、しほと風とにおしへだてられて行もはてねば、こゝに泊なんといふ。

荒谷村上陸

まるこ貝

陸路を行く

障子石

宮の澤俗説

浪あらき潮路を船の行なやみ暮れなてうらの泊もとめん。

うまのつゝみうつころ、荒谷村といふにつけて海士の家に休らふ。かくて船醉ひのこゝちもさめて、しまらくあるほどに、はやちふき雨さへいたくふりぬれば、舟子らも舟つなぎ捨て磯におりたち、圓舍（まるやかた／まるごや）いとなひ造り苫ふきさはぐまに、此ちかとなりの泉郎河森傳次郎といふかもとにやどつきたり。屋戸のをさめ、麼留古ちふ貝つものとり來て、これをゆふべのまさなごとになといひて潮にそゝぎ、眞水にあらふ。

舟よせてこよひはとまるこのやとにかひあるいそのなかめをそする。

宵よりのあめ風、をやみもなうあれにあれて、いもやすからで鷄は鳴たり。

いそまくら夢もむすはてあけにけりあめと浪とのよるのさはきに。

廿五日。けふも風のよからねはとて舟出さで、あす、あさてもよからじ、こは、いつの空をやまたんなど、あくびうちして、ふなをさもいへば、いさゝかのあまばれに、われひとり陸路よりしてむと、みかさのまさりたる小河を、いくせ渡て、山坂をのぼる。障子石といふ處のあり。こゝに五十とせのむかし、はたひろあまりの岩なんありつれど、大濤にうち砕かれて、空しき名のみたてりといふ。宮の澤といふあり。此山中に白神のみやところありしところなれは、しかいふとなん。ある山賤の話りてけるは、われ若かりしむかし、みたり、よたり、

伐木の業にこのみやの澤の山うち分るに、なめらかなる苺の八重むすしたに、石の神御室あり。こは、神のほくらの、土に埋れてありつるさて見おどろき、里に飯來て人あまたいさなひ、鉏鍬をたてて堀り起してんと、その見し處にいたれど、そこと、つゆ似たるところも見へねば、こゝは見しところにはあらじ、そこにや、こゝにやと尋ねまどへど、しるへもなければみなむなしうもどりしか、としを歴て里人山に入て、むかしたづねわびつる、しら神の石のみむろは、こゝに在りつと枝を折かけてしるしとして、人をたつさへて、ふたゝび此山へ入て、枝折せしところはいつこならん、又ふみまよひて、其宮どころの有しかたこそしらね、いさしら神の、あやしき御座にやといふも亦あやし。うべも、宮の澤の名そ聞へたる。みちのかたはらの、小川のへたに石地藏のたてり。もろ手に水掬ひ、ささ、此石のほさちの石の座に、うちそそぐわらはべ、はらからならん、わは父のため、わは母のためといふ。いみしき、けうの子ともにやと、かたはらの槐にかいつく。

石地藏に祈る

　手向するはゝその雫ちゝの露むすふはふかき心なるらし。

祖鮫明神緣起

松倉が岳、泉源か嶽など雲いとふかく、もゝへのやま／＼たちかくろへど、あをうなばらの、をちこちははれたり。そこふかき谷をへたてて、高からぬ磯山に鳥居の見へたるは、祖鮫明神といふ、あらふる神をうなはらに齋る。その緣は、むかしこゝに大舶のくつかへらんとせ

茶亭峠

ひまだをれ

いばる

しかば、舶長あめにいのりて、かゝるわさはひをのぞき、わが命をわれにたまへ、海の神のいかりならば、そのおほみかみをすゝしめまつり、いやまひ奉らむと、あら波の上に手を拍て、なく／＼ぬかづけは、大なる鰐の浪の中にあらはれて、海はしゝまにうちなごみて、船人等(ら)は、あらしほの辛き心地に磯につきて、まづ、折掛といふことをして草引結び、しるべばかりに神を祭(いは)ひ、のちに社を建てけるとなん。このころ、しほ風にふかれて、みやしろの海に落てしかは、浦人ともの作り奉るといふ。やゝこゝをのぼり得て茶亭峠(ちやや)といふ名あり。无邪志より國見めくらさせ給ふのときは、此芝生に假舍(かりや)を作り、あるしたまふとなん。女二人この岨かげによき清水のありとて、山蕗の葉にすくひもて、ひとりの女にのませ休らひて語るは、蘿蔔(たいこ)の種蒔んとおもふを、けふも雨の降れば、すべなう、こと業に行たり。ひまだをれ斗して、まだ鉏(すき)もふまぬよ。われも、いばりし斗の山畠ありなと、いとなきわさを、ともにうちなげいたり。以婆留てふことは新墾筑波(にひはりつくは)といひつぎて、あらたに田畠をおこし墾(ひら)くをいへる、ふる言葉にして、三河のくにうごは割畑(はりはた)といふ。新墾畠(にひはりはたけ)のはぶき辭ならん。こは、うねたつことにこゝにもいへど、そのこゝろはことならず。いにしへに通ひておかし。

　耕に海士も新治つくはやま葉山しけやましけきいとなひ。

濱路におりはつれば、眞砂の上に鹿角菜をいと多く、みちもせにほしたり。

行やらてこゝにねなましたひ人のひしきものとやあまのほすらん。

禮比祁にて

禮比祁の屋形になりて、浦の長齋藤吉兵衞といふもとに日高うついて、なにくれとひむつひしあるじなれば語りくれて、あるしの翁の云、けふ過こし給ひし居木の立たるかたに大鷹待の小屋あり。又、八夜布佐のすくふ岩群の高山のあり、その弓手のかたに見へたるを天狗澤といふ。津輕の海達飛の碕より、此白神のあら磯山に其神の飛渡りて休らひ、吹嶋の檜浦の澤といふ奥山に入りおはしけるか、たゝ火のとぶとこそ見つれ。をりさしては、神のみかたちを見し人もありしなど、あやしき長ものかたりに、夏の夜のいと更やすし。

禮比祁乗船

廿六日。此浦よりひろめ刈舟出行あれば、これにたぐへて乗り行ねなど、なさけあるしのいへば、さちなる便りうれしう黒岩のきしべよりのり出て、この浦の屋形を見さくるほと、鷗の、さらに老さらぼへるけちめもなう聞へたりしかは、

浪の花咲ちる磯のやまかけはいつもはるとや鶯の鳴く。

ふくらき群

かくて、吉岡、宮の宇多の澳捞行ほごに、泙たる海の面に潮やみちぬらん、音たてゝはる〳〵と小波たちさはぎ、此舟に近つくと見れば、こは布久良祇といふ魚の、こゝらうき出て、沖もせに行なりと聞てゝ戯て、

沖つ風波路はるかにふくらきとおもへは魚のなころ也けり。

白府の浦邊

白膚の鷹の舊跡いづこ

福島の浦の鯨

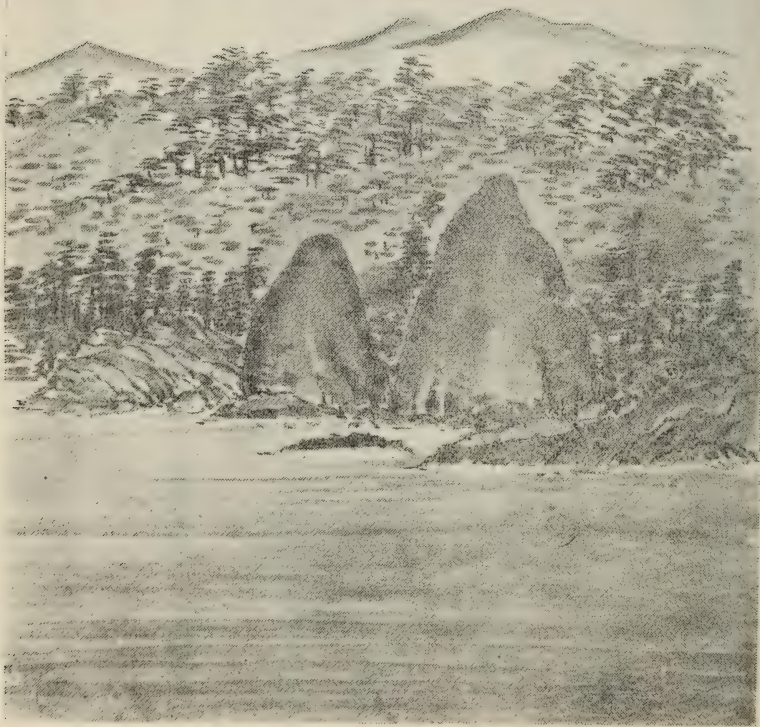
白府の浦の磯山近う、何鳥にかあらんいと高く飛を、鴟にてやあらん、鷲にてやあらん、鷹にてやあらんと、舟の中擧りてこれを見あらかへり。

磯にたつ浪のしらふの鷹ならは寄り來をしはしまちて見なまし。

遠きむかし、此處の山に白膚の鷹のあがけして、おほやけに、いくみつぎに、たてまつりしより名におふといふ。大納言政賴卿の歌に、「陸奥の栖家の山の黃金鳥かくとしらふの名にのこる雪。」と聞へたりしは、金花山とはいへと、まさしう、そこともおもひさだめられじ。津刈の郡の八ッ耕田山にや、はた、こゝをおもひてよめらんにや。鷹をこかね鳥といふは、これがことのもとなり。屎目の埼といふあり。みちのく人、葛かづらを、なへて久曾かづらといへば、葛芽ちふ埼にや。福島の浦追ふほとに、鯨の七八はかり、ひれふり浪をおこして、潮吹く音の海にひゞき、山も、さらにゆるくばかりにこたふ。都吉の崎ちふところあり。槻の木生る名にや、又月のさし出るを、よみしていふ名ところにや。

雲の波たちなへたてそ崎の名の月のよる〳〵さはらんもうし。

板橋の崎、黑岩の崎を過れば、小筆、大葦といふ山陰おもしろき所なれば、しはしと船つなかせて、

山の名の小筆おほふてさしぬれて誰か言の葉を波のかくらん。

鴫澤、シラツカリ、キワンベ、紫檀の碕といふあり。むかし、大なるその樹生たりしよりいひそめし名にて、今もさゝやかの木の生ふてふものがたりをせり。行ほどにふなかくしの崎、つゝら澤、マシタ、山背泊（やませどまり）を經て矢越の山近つけば、船長酒を提にうつして、舳に立て神をいたゝきまつり、このみわを海の面にこぼして、磯山の神に手向せり。

矢越山の手向

蝦夷の國より皈りくと見へて、舟とものしはし帆をおろし、この箭越山に向ひて、蝦夷の國より、それらが作りたる弓矢をつとに持來て、放ちて奉るためし也。さりければ矢越の山の名ありけるとなん。（天註―箭越の山の神は猿田彦の御神とも申奉れり。船のことなきことをいのり、弓矢をあがものに手向とせり。又南部路左井の浦のほとりにも箭越ちふ名の聞へて、いはれ凡ひとしかりき。）地獄間を過て、豆艘といふ處のあり、さゝやかのとこふしをとるてふ名也。

小田西

小田西といふ礒屋形のあり、もとコダンウシとて蝦夷の栖家たりしよし。（天註―この弓手の礒に在る三石は夷詞にミトシ、平切地をへケレベツとて淸たる河をいふ夷言也。又くれべつといふあり、夷言にクンネベツとて濁川をいふ。）横間、龜泊、蛇の岬（はな）をへて脇本の磯館など、みな尻内の山陰に在る名どころなり。

尻内を過ぐ

こゝをも蝦夷の祠にシーリウチといふとなん。空くらく、一むらけふりのなびきたつは内浦の嶽とか。キコウナキの浦、サッカリの濱、泉澤の村、竈屋の浦、ポンペツ、ヤンゲナキをへて（天註―ポンベツとは小川也。ヤンゲナイを和人（シヤモ）はヤゲナキとぞいひける。）、ウスンゲツ函館をいふをこぎめぐらしてこの嶋の姿を見れば、鰐なとの、うなの上に、はひもこよふにことならず。

函館も過ぐ

シノリ濱 錢神澤、石碕の白石にありつる、日持上人のふるあとも、よそに見渡しこがれて、海なかに日の暮かゝり、やけまさ

やけまさに泊る

汐首崎の險

三ツの潮瀨

の屋形に矴(いかり)かけておりぬ。（天註――ヤケマキは蝦夷辭にや、亦燒蒔など畠の名にや。もとも牧なと有りし處にあらず。）麿館をかけて宿ればアキロリといふ虫いと多く、横蚤といふ虫も多く來集るのうるさければ、あしふけるさゝやかの屋戸をたのみて入れば、十腑の菅薦あらたにしきかさねて、蚊のすたく聲こそきかね蚤はゐにゐて、さぞ、ふしうくやおばさんなどいひて、短き衣着たる女、掃きよむ。火たきやのはら〱と鳴るを、雨のふりこんとする夜は、かく葺たる萱鳴りのしてさふらふ。この夜あけなば、きはめて山背(やませ)や吹なんと、あるしのいひつゝふしぬ。夜もすがら波は枕にかゝるかと音して、いもやすからすして、枕をそばたてて、

菅こもの七府にぬれさめもあはてしきしのはるゝこしかたのそら。

明にあけたり。

廿七日。日の高うさしのぼれと、みな、いぎたなうあさいして、誰ひとりとしておきづるけはひも聞へねば、

海士の住むあしのまろ家は夜のほともみしかく明て夢殘すらん。

この朝泙にとておし出して、小安の浦をこき過て（天註――小安はもと蝦夷辭ともいへり、おなし名の、こと所にもあり。又出羽の國秋田べにチヤスちふ湯泉の名も聞へたり。）、釜屋の磯をへて（天註――釜屋は鰯烹るをわざとせしよりいひそめし名なりけるにや、ところ〱に聞へたり。）、汐首(しほくび)の崎にこき入るゝほど舟の行なやむ。この灘の迫間は、三の潮瀨（天註――達飛、中の潮、白神か岬を三の汐とて、津刈より松前渡の行なやむ船路也。南部路より箱館へ行舟は、三の汐のうれへ

なし。）に逾へて、はげしさいはんかたなう、みなぎりおつる瀧などのごとく、こゝしき濤の雲とたち、霧となびき雪と碎てちりぬ。これを鹽輿ₚとて、その音は鳴神にひとし。このなごろの中を、からくしてセタラキ、ヨモギナヰものり過て、トユヰの浦について、こゝより蝦夷舟にのりて鎌宇多、原木を經て檜浦の山陰をゆけば、立岩のはさまに瞿麥のいたく咲たり。

蝦夷舟にて

　さきにけりこや蝦夷ならて折る人もなみよるきしの撫子の花。

鴉（からす）か宇多といふ處に、高さ、いくそばくならん巖のたちならび、雲のふかうおほひたるなかをこぎ出て、しばしをこゝに舟さしとゝめさせて、ふりあふき見つゝ、

鴉がうた

　舟よせて見るも及はぬいやたかきいはほの末にかゝるしら雲。

ムヰの小嶋の近うなれば、しほくびのからかりし其潮瀬よりもいさはやう流て、荒河の岩波の來寄る音して、身もやすげなきこゝちせられたり。（天註――ムヰは蝦夷のひる箕をいふ、その形に似たる岩の海にあれは、しかいへり。こゝにミチといふ貝つものと鰒と戰ひし、童の島もの語あり。）こゝはムヰの黒鹽（くろしほ）とて、一とせ、ひろめ刈り見に來てからきめ見しかさ、かくはあらさりし。尙こきわぶる。

ムヰの黒潮

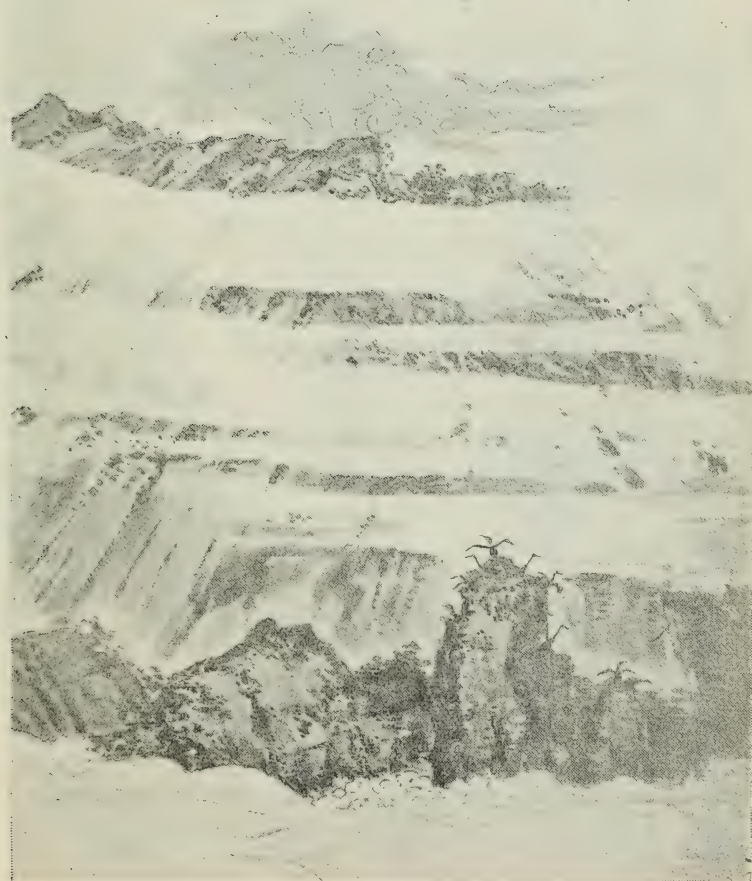
　あら潮のしほの八百路に神まさばみそなひたまへ浪のはや舟。

綿津神のうけひきたまふげにや、事なう出てシリキシナヰについて、亦この浦（コタン）の蝦夷舟にこがれてコブキのコタンもへて、ネタナヰといふ處（コタン）に泊をもとめたり。

ネタナイ泊

蹺山の麓

三年前登山

箭尻濱

廿八日。あさとく、この浦の蝦夷(アキノ)に轆(カンヂ)とらせて舟(チップ)のり出るほど（天註――轆をなへて、いにしへぶりにカンヂと云て、みな、車轆といふもの也。これを浦人轆とせりけり。）、靄(ウラリ)（天註――母夜は俚人の辭に霧霞をもいひ、夷の詞に是をウラリといへり。）いとふかき波路をたどる〳〵、七ッ石とて大岩ともの、つとたてるに、白鷺、黒鷺居ならひて、かゞ鳴聲のすさまじ。

あら磯のいはほにぬるゝわしの羽に妙なる文字や波のかくらん。

蹺山の麓をのみこぎめくれば湯濤(いでゆ)の流あり。（天註――此山を涌山、夷山、或涌山なと(マヽ)さたかならねば、蹺山とこたひ書たり、此山に湯泉あり、硫黄をいだし、山のなからにエノミコトンといふものあり。俚人これを苔の實とて採くらふ、七八月のころ熟せり。又山茶といふものあり、疝瘕をいやすといふ、臭氣あり。其莖は「ひろめかり」といふ册子にいたせり。）ウラリも、なごりなう晴れて嶺もあらはれたり。三とせのむかし此嶺にのぼりて見し處なれは、こゝまでは、めやすきやうなれど、行末はいさしら浪の、空とひとしう見やらるゝかたをさして、たゞ舟の漕くにまかせて行ほど、しほみちのいとくらく、雲とかゝり、霞とながれ、霧とたちこむるは、この蹺山のやけのほる烟也けり。赤兀(あかはげ)とて、その高さ、はかりもしらぬ岩の上に鵜の巣くふにや、雛鳥のいと多く、はねをふためかしてうちむれ、さゝやかなる身もて、いをとくひ親のまねひせり。

嶋つ鳥親のをしへを居ならひてひなもはねほす蝦夷の磯山。

トドホッケのコタンについて、休らふまもあらで舟に乗りいづ。弓手に、蝦夷の家七八ばかりたちて、木立いとおもしろき處のあり、名をとへは箭尻濱といふといらふ。

蝦夷人の毒氣の矢鏃とりむけて居るかたしるく見ゆるはまなか。

銚子碕の判官物語

銚子の碕といへる岩の上に、蝦夷(アキノ)の立るがごとき形したる五尺(いつさか)はかりと見へて、をのづからなれる石のたてり。此立石をアキノら、神鬼(カムヰ)と恐れたふとめり。其ゆへは、九郎判官義經の此石にかくろひおはしたりけるを、追來るアキノあまたが見おどろき、弓箭を舟に投て、身をふるはして禮儀(ウムシヤ)して、にげしぞけりとなん、それらがむかし物語をせり。夜舟のるに、雲(ウラ)霧(リ)なとのいとふかく、そこと行なん方もしられぬ空にまよふ舟路に、木幣(イナヲ)作(カル)してこの石神(シユマカムヰ)

石神に祈る

をいのれば、シユマカムヰの石頭(シヤバ)に火(アベ)なんたちぬ。それをしるべに舟追ふと、贓(カンヂ)とるアキノの語りつゝ、フルベの大瀧といふか十尋あまりとやいはむ、茂りたつ木の中より岩づらかけて、綿をくりいたすか、雪をこぼすかとおもはれて、

しらゆきのふるへは夏といはかねにくたけておつる飛泉の涼しさ。

判官屋形石

瀧のかしらに穴二あり、羆(チラマンデ)(しくま)のふる穴といふ。(天註――羆をチラマンデといひ、いと小なるをピヤアウレツプといふ。)その弓手に判官殿の屋形石とて窟あり。そこを離れて三段に掛り落る瀧あり。獅子鼻、小瀧、判官の兜石、立石なといへるを見過て、ヌイナキ泊、志呂委川、キナヲシ、中埼を撈へてピルカ濱といふ名の聞

ピルカの濱

へしかは、(天註――ピルカとは良といふこゝろあり、又あなうれしといふ意もこもれり。)

蝦夷の海いましほひるかはまひさし倚きし高くあらはれにけり。○○○

昆布の嫩苗

チサツベの運上屋

沖は好晴也

カツクミ浦

近き日昆布刈なんとて小舟いくらも漕出て、潮に眼をひちぬばかり見ありき、みな波の上にぬかさしあてていふ、ことしは昆布すくなからんとうれへ、又、舟のうちくつがへりぬべう、さしかたふけて見つゝ、來ん年はよからん、此嫩苗の多さよとうちよろこへり。（天註――ミヅは昆布のわか生ひにして、和言にいふにや。みつ枝さすなと和歌にもながめ、科野の國伊奈郡にて、蠒はしめてやしなふに桑のミヅちふもの採てこれにかけり。）ケニウチ、ヤギなといふ澳をこきをへて、ヲサツベ浦につきて、運上屋とて、嶋の守よりおかせ給ふ、さもらひのあるに泊りぬ。（天註――西磯にもケニウチコタンあり、シヤモは、よこなまりてケンニチといふなり。ケニウチとは、はんの木のこと也。俚人此木を、やちくわといふ、谷地桑ちふこゝろにや。）暁や近からん、波の音に夢さめて聞は、軒ちかき水鷄、うつばりの庭鳥あらそひて鳴ぬ。

夜ふかしと鴟は叩く眞木の戸をあけむとかけの告て鳴こゑ。

明にあけたり。

二十九日。つとめて出たゝむといへは、木綵付たる（天註――イナヲは、正月に作る柳のけづりかけのごときものなり。）ちいさき夷舟を、アキノども磯にひきおろしたるを、きし波のいとあらくしてうちあくれば、さもらひのあるし、けふは浪の高からんやと蝦夷の辭していへば、アキノ答へて、ピルカ・レプタノトアンといへり。このこゝろは、沖はいとよき汗なりといふことなりけると、人のとき聞ゆれば、こゝろおちゐてのり行に、ツキヤンゲちふところあり。通企は和人の詞にて（天註――雪の崩れて落ち、或、山なとのくつれておつるを、つくとはいふなり。）、ヤンゲちふことはアキノの言語なり。かくてチユツフヲマナキを捞

さうず川の足跡

川上の石堆

イタンギ

行ば、カツクミといふ浦(コタン)のあり、此山の奥にはよき溫泉のあるちふ。カツクミとはアキノの國(コタン)につかふ水杓をいへり。チユツフシヤクベツちふ流のあり。(天註—舟をチイツフといひ魚をチユツフといふイタク也。チユツフシヤクベツとは魚の夏川といふイタクにして、夏の魚漁る川の名にてや。遠きうらわに夏浦(シヤクコタン)とて斑竹をいたせるところあり。鱒のあひきして夏いみに在る名也。シヤモ是をシヤコタンといふ、おなしこゝろはへ也。)此川の底は石だゝみのことにして、いて湯のながれにや、石腦油わきづるにや、いろくずのすむことなし。さりければシヤモは、精進川といふなる名をみなよこなまりて、さうず川とたれも人もいへり。此川の落入る磯の名も亦しかり。此小川の中に人のあしかたあり、渡り見よといふ。こや、こひちのむかし、ふみたりし人の跡の、其まゝに潮に凝り、いて湯にくゑして石となれるにや。水底をうかゝひ砂かい分れは、足形のところ〲にありけり。この水にさかのほれば窟あり、そのほとりに石積の堆(つか)のあり。むかし、すきやう者のこゝに住たりしよし。鮭ものほらず、いしふしもすまずとなん。やはら蝦夷舟(チイツプ)にのりて垣根シユマといふを行、これも、れいのアキノの言(イタク)とシヤモの詞と、いひませたる名ところ也。シユマは石なり、籬(まがき)のごとき岩垣の沖邊によこたはる也。又籬根島ともいふなと。

あら磯の波もてゆへるかきねしまへたてもうすき夷の笹小家。

こゝにイタンギといふ磯(コタン)の名あり。(天註—イタンギは椀をいひ、シユマイタンキとは茶碗をいふとなん。)そのいにしへ、源九郎義經の水むすひ給ひし器の、浪のよりて、こゝに打よせてけるゆへを語れり。イタンギとは飯椀

判官とは誰を指すか

をいふなり。判官義經の公をアキノども、ヲキクルミとて、いまの世までもいやしかしこみ尊めり。あるはいふ、夷(アキノ)の、判官と、ておそれかしこみて神(カムヰ)といたゞきまつるは、小山惡四郎判官隆政と聞へたりし人、蝦夷の國の戰ひに鬼神のふるまひをなして、いさをしすくなからじ。小山統の家には巴の圖(かた)を付てければ、巴を蝦夷(アキノ)ら判官(オキクロ)のみしるしとて、かれにもこれにも彫て、身のたからといふいはれしかく〳〵。(天註——小山四郎判官隆政は下野大掾義政の子たり。小山の家なる自標は雙頭の巴形なり、さりければ蝦夷の國に巴をめて貴めり。是をなにくれの調度に刻て家の護りとす。蝦夷は巴をたふとむと、いやしくもおもひ、此島へ渡す具ともに何のわいためなう三頭の巴を標してわたせば、蝦夷人これを見て、をのかもてる具ともに三巴を彫てけることしかり。)源九郎義經の、ゆめ此嶋へ渡給ひしよしのあらさめれど、義經の高き御名をかりにかゝやかして、蝦夷人らをひやかしたる、名もなき、ひたかぶとのものゝ、をこなるふるまひにてやあらんかし。おもふに小山判官と九郎判官と、蝦夷人か、うちまどへるにや。西の浦江差の磯邊に小山の觀音とて、その菩薩の堂を社に作りて、隆政のはぎまきをひめ齋るよし。うへも、惡四郎のその勳功そしられたる。(天註——江差の湊にいと近き小山觀音といふは、あらはゞきの神也。四郎隆政いくさきみとして勳をあらはし、あゆひのとつおちたりしを、こゝに祭るといふ。又津刈の郡蒼杜の郷塘川のへたに、九郎義經の片脛膝こゝに齋ふ。處をシリベツの林といふ。又三河の國刀鹿の社のほとりにも、あらはゞきの神といふかみ社のあり。おなし神のところ〳〵に聞へ奉るものか。)さはいへと源の九郎義經この嶋渡したまひしとは、むかしいまの世かけて、もろこし人までもすてに知れりなと人もはらいひわたれば、さるゆへもあらんか。伊達治郎泰衡、人目は義經にそむき奉りしこゝろにてやありつらんかし、此君の行衞をしたひ奉り、はる〳〵と贄の柵

ウシジリの運上屋　阿袁を狙ふ　キソヤ經て　海栗　ウムシヤ泊

までのがれ來て、ほゐなう河田にうたれたりしと。」秀衡いまはとなりて義經の君を枕上にすへて、錦の袋を、なとき給ひそ、世にものうき時は此ひもときて、いかにもなり給ふべし。蝦夷の千嶋へも渡りおはしたまへといふことを、帒（ふみ）の中の書に、ねもころにかい聞へたりしといふ、みちのく物語もありけり。舟倚行て、リブンシリてふ、ちいさき嶋に鷄栖立て、辨財天といふ額を掲たり。此浦をウシジリといふ、おりて運上屋に入りて、又此コタンのアキノの舟にこぎ送られて、モウセジリといふもやゝ過て、オキガラ泊といふ海べたに葛葉生ひまどへるを見て、アキノこれをオキガラといへり。これや葛の泊てふところなるべし。阿袁といふ魚の、あら波をしのぎあまたむれ行を、艇なるアキノ、くはやとてしらすれば、楫（カンヂ）を捨てハナリをとり立ねらひ、ひとりにこぎまかせ、やといひてうちやれど、それ行てたゝさりければ、舟なかに足ぶみをしてウコラモコラといふは、あなくちをしと、いひはらだつことなん。クマオ（天註―網張わたす事などをクマナといへり。こゝにはコタンの名なり。）、ピルマ泊、ホカイカキ、キソヤをも過ぬ。（天註―ホカイカキといふは路のわたなるところ、曲路などをしかいへり。キソヤは石のさし出たる崎などをもはらいへり、同名南部路にもありき。）艇艫にみな投足をして、うしろざまにのみ撈ぎ行ほどに、楫（カンヂ）捨て衣ぬぎ、汐に、つぶりと潜り海栗（ノナ）多くかゝへてあがり（天註―ノナは、なによけんと唄ふその一くさにして、閭書にいふ海胆、あるはいふ海膽、靈贏子のことなり。加世、亦は坊主加世のふたくささありける。）、石につき碎て、これ食（エベ）とて、ひとりにも進めくひて休らひ撈づれば、ウムシヤ泊とて、三ッの石、磯もとに立ぬ。此ありさまの、アキ

飢渇濱

アキノの家

シントク

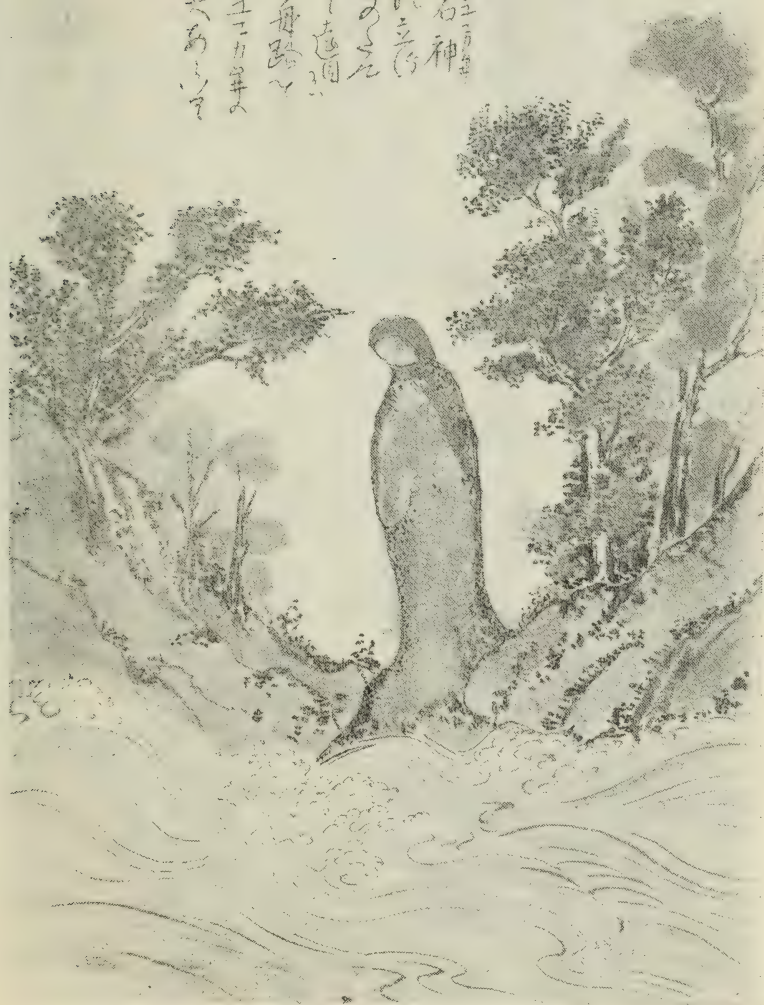
ノの三人ㇼせくごまり、ゐやし、ものいふふりに似たり。さりければ禮式(ウムシャ)とはいへるなり。（天註——出羽の國大館の郷の山川にも天鼓、コマリ合といふ淵の石とも、此ウムシヤといふアキノの禮するにいふ、こゝの形に似たり。）このあたりの濱に、むかしも、ひろめのいと多くありしかば人さはに來集るに、海のあれにあれて、ゑひすめ、ひともとも刈らで、みな、むなしう皈りいにしとて、シャモこのコタンを飢渇濱といひしか、今は海もあらからず、昆布も乏しからず、これを刈らば人さらに飢ず。いまし世は濱の名にはおはじとなん。

又見へき處のありといへば舟寄ていたれば、岩穴(ポヲロ)といひて、ひろきいはやどのあり。こぐまりて入は內間廣く、ニヰガリを、おりのほりして出て坂越れば、艸むらに舟つけて待ぬ。（天註——階子をニヰガリといふ。金坑の鋪階子、或いふ出羽の奥山郷にこれを雁木胡梯(はしご)といふものにして、たゞ柱に足段のあるのみ。）高草の中にアキノの館舎(チセヰ)のあり。あまた、まどゐして酒のみ唄ひ、とに、あやむしろを婦人(メノコ)の織れり。この莚は蒲の葉に木の皮、かづらの皮など文(あや)に染ませて、いづこのコタンにても編みつ。それらが生る男童(ヘカチ)、女童(カナチ)が歌うたひ、軒のした草に咲ませたる撫子を折りもて、戯れてあそぶ。

あやむしろあやしけれども蝦夷か家にこよひしきねん床夏の花。

舟のりつ。瀧のおち來るもとに、老たるアキノの、ちいさきシントクを持來て水くむとて、木綵襌(あつし)の袖もしとゝにぬれて皈りく。（天註——酒樽、桶やうのものをシントク、或シントコ、亦シントコボなといへり。カモ〳〵といふも凡おなしきもの也。）

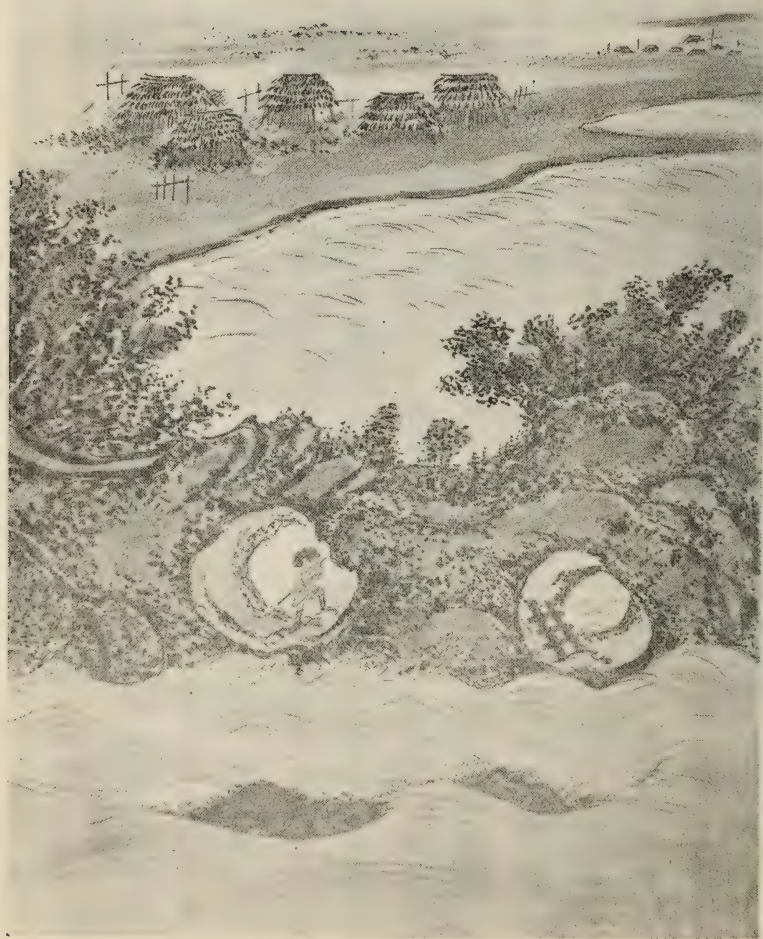
をりたちて涼しかるらん夷人のたもとにかかる瀧のしら糸。

調子の碕の石神

羆の子を飼ふ

カムヰ泊

溫泉ありて

シカべに著く

昆布の產地

さころといふ磯に舟つけたり。こゝに黃蘗のかつらの多かりければ、その名あるにや。此コタンより、メノコふたりに携せて出なんとす。緘つくらふひまに（天註——桿をも緘をもなべてカンヂといふは、いにしへぶりの夷の國に殘り、やかちてふことなども、うべとそしられたる。）、此運上屋のちかとなりなりつる蝦夷が家に入れば、狗子のおほきさはかりなるビヤウレップ（天註——しぐまのちいさやかなるをいひてビヤウレツフ。）のひとつ、宿のくま〳〵をはひありき、童子にひかれて、さらにあらふるすかたもあらで、おやのしぐまやしたふらん、うちつけに、うゝとて物嗅きありき、とに出れば、ヘカチ、つといたきてわが館に入ぬ。舟出して、ザルイシ（天註——津輕のそとがはまべにもザルイシちふ浦の名ありて、むかしは蝦夷の栖家せしところといふ。夷言はザルウシとこそいひつれ、俚人もはら荒石なと文字にせり。）をへてシユシユベツのコタンあり。シユシユとは柳をいひ、ベツとは川をいふ、柳生る流やあらん。ふかき森のかげに鷄栖のたてるは神泊てふ。海へたに溫泉のありて、ゆけふりのぼるをカンヂとるメノコども、この湯をさしてナシユヒルカといひもて物話せり。ナシユは病の名疝氣をいひ、ピルカとは、それによけんといふ詞なり。此山奧にもトメの湯とて、又よきいて湯のあるなと、シヤモの言語もいひませてかたらひつゝ、夕ぐれつかたに此シリカベツの泊につきぬ。シヤモは此コタンをシカべとのみそいひける。いつらもこのあたりは、ひろめやよけん、世にいひもてはやされし宇賀の昆布といふは、こゝなる、雲河の尻べの磯に採りつれと名の流ぬ。今もひろめは、此浦に逾るかたこそあらねと人のもはらいへり。星かあらぬかと見へ

螢多し

て、海へたのくさむらにすたく螢の濱風にさそはれて、苫屋の軒近く飛めくり窗のうちまで吹入る。われこの島に三とせ四とせを歴ぬれど、かく螢の居たらんは見しかはしめなれは、いとゝめつらしう、とに出て見たゝすむ。

夕まくれ泉郎のたく火も影そへてあしの丸屋にほたるとふなり。

とて更たり。

鹿部の運上屋にて

三十日。あしたより雨雲たちおほひ、やかて小雨のそほふる。けふはかちよりせん。きのふけふ分つる路は、シリベツの嶽のいとよく見ゆる處と、近きスクノへの山たに雲ふかくして、そこともしらじ。空まだくらし、雨もふらん、河水や深からん、けふ斗は止りてなと運上家のあるじのいへば、笠ぬぎ、あゆひとりて、ふたゝひ入てこゝに休らふ。とひ來る人ごとに、

鎌おろし

けふの鎌おろし（天註――夏月の土用にいたるの日より昆布刈初る年毎のならはしにて、そののりいみし。）は海あれにあれて、ぢりのみふりてと（天註――霧を、ぢりとは訛りていふにや。小雨そぼふるをこし雨といふ。俚俗のいつらにても糠雨、或こぬかさめといひ、ちり／＼雨なといふを濁言にぢり／＼雨ちふ略にや。）、蝦夷（アヰノ）に雑り住むこの浦子とも、うんじはてて（天註――蝦夷人に雑りて住は通事、番人、あるは、とし越（と）り人などすめり。又、こと浦人も昆布採舟をつなきて、つどふことなり。）髭かいなで、あくひうちして汗なきをうれへたる。をりしも、めくらしぶみもて來けり。あるし、是をひらき見て、此ごろやませの風のみ吹つゞきて、出こし船どもの、をそくうら／＼につきたれば、鎌おろしの日は水無月の二日に定むへし、と書たるをよみつゝ聞すれば、浦人ら、うらみあ

陸路出立

らじとよろこぼひて、あなうれしとてみないぬ。風吹かはせ晴たりしかば、ひるつかたより此宿をたつ。スクノへの河べたに、今朝はたちこみあふれたる汐もみなひきしそきて、いと淺ければ越なんとて、（天註――南部田名部のあたりにもスクノへの名ノ聞へたり、俚人、文字を宿野邊と作れり。）

海近きたきつはや川ふかければ汐のひるまを待渡りぬる。

坡のやうなるところに家五六たちならひたるをホンベツといふ。小川あれば、いづこにもいふ名なり。母呂米濱ちふ處に一箇石とて、そのいはれありといへる巖のあり。ゆくりなう風おち雨ふる。

ふらはふれぬるもいとはし五月雨もけふをなごりの雨つゝみして。

出來間より山路に入る

行ほどなう空晴て、出來間（天註――内浦の嶽はしめて燒たるとし、いて來るよしの名にて、シヤモ詞に氏貴麻と名つけり。）といふ森の下みちをふみ分て山路に入れば、朴の木の林ありて休らふ。

路のへの朴の木槲風すきて露吹こほす風の涼しさ。

羆多し

相泊に來けり。このあたりは羆のいと多くあれて、放ち養ふ野原の馬をひしくとゝりさきくらふなと、行みちすから、あないのもの話るを聞て身の毛もいよだち、すゞろ寒きおも

麼都也か碕

ひして麼都也か碕（天註――蝦夷辭にや、又はシヤモのイタクにて松屋か埼にや。）にいたりて、高岸に立のぞみて、みたにの底のやうに海へたを見おろせは、波よる岩の上に青艸をひきむすひたる中より、烟の細くたちのぼ

るは、海士なとの假りに小屋して住むならん。みちもとはまほしく、あないを先にはる〱と九折をりはてゝさしのそけば、八十(やそ)あまりのアキノの髪も髭もしらけて、わかきメノコふたりか中にカナチをかいなて居るが、とにみなさし出て、きのふヱトモのコタンより、漁(レバ)にとてのり來つるといふことのみしられて、シヤモの詞はつゆもしらぬアキノらにて、又このあないもアキノ詞しらされば、いひ通はさんすべなう、アキノもシヤモも、みなしゞまに、たゝ、口なしのそのに入身のおもひせられて、ものいはざれども、手と眼の行ふるまひを見て、その事としられて、しばしは、かたらふおもひして休らふ。このアキノども、鯙鮫(キナボ)ちふ魚のあぶらわたを檜桶(シントク)に入て、鱘(ダン)の肉を岩面に打かけて日にほし腐らかし、脯(ほし)や食ひけん、その臭さ、おもひやるべし。居ならびたる、このシウラン コといふ婦人(メノコ)をみちさきと憑みて、衣包などもたすれば、タアレとて、はちまきの如きものを頭(シヤバ)に引かけて荷の緒として、いとかろげに、ぬかのちからして負ひさいだち、岨路にかけのほりたゝすみて、チラマンデ・ポロノオカイ・コタンといふは、こゝは羆(しゝ)のいと多處といふ言(イタク)と聞て、あないも、おそれたる色見へて行〱境川といふあり。領をさかふるにてやあらん、坂井明神といふを、うなはらの神とて祭る小祠のあり。こゝをゆけば、夕くれ近うサハラといふ處につきたり。(天註——むかし弱檜の磯山にありし名にや、砂埼のあれは砂原てふ名ありけるにや、サハラちふ夷辭にや。)このコタンはシヤモのみ家居してけれは、なにくれと、めや

すけにかたらひて、こと國より日の本に入來しこゝちそせられたる。こゝは、内裏岳（ヲシラナキノボリ）（うちうらがたけ）の麓にして浦浪も高し。見やる沖の流れ洲のやうなる、布一むらを、うなゝかに引わたしたらんかとさし出たるを砂埼とて、エドモの浦に舟路のいと近し。此浦の、淡海家誰れといふもとに泊をさだむ。此宿にうちむかふ海の上遠からず、西に臼岳、北にはエトモのコタン、遠きはシリベツのノボリなど、なからは雲に埋れて見へたり。夕風吹入る窓のうちに在て、

砂埼に泊る

軒近く磯の浪うちうら風の涼しく通ふ山かけのやど。

くれて、海尙あれたり。

齒固の祝

六月朔。つとめて、あるしのめ、齒固の祝ひとて氷餅いたしぬ。けふのためしそ、いつこもしられたる。

氷室山ちかきふもとに一夜寐て涼しくもあるか袖のあさ風。

八尺の網漁

浦人の、ハッサク、あるはいふ八尺てふ網して（天註 — 砂濱を引く海鼠網の立木は凡八尺に作るよりいふとも、夷辭ともいへり。八尺、九尺なとは二人引といひ、底に岩ある海は二三尺斗の、弓網してひく海鼠あみを一人ひきといふ。東西の浦みなおなしう、津刈の海にもしかゝり。）曳得たる海參（こ）を熬海鼠（いりこ）となして、その中に白海參（しらこ）、總脚（まるこ）なといへるは、いかにもまれなるものから、たまたまひきうることありとて、サラネフてふかたまのごときものより、宿の翁とうたして見せける。（天註 — サラネフとは夷辭にして防已なとのかつらにて編る形見やうのもの也。）

サハラの

かくてサハラを出て里の中路を行ば、麻生（あさふ）、豆圃（まめふ）、胡瓜畠（きうりはた）、さゝげの畑、けしの花苑も

ありて、家は軒をつらねて、海士のとみうと多し。モンベサハラを過て野原を行は、懸リ間といふいそべのみちもせに、七尺、八尺の虎杖生ひふたがりて、分行末こそ見へね、いつこや人ののりくらん鈴の音のみ聞へて、はつかに見やられたり。

のる駒の音はかりして草たかみ菅のをかさの見へかくれなる。

木の生ひしけれる中に飯形の神やおましまさん、御名しるしたる幡を、けふの朔の祝ひに立て奉るといふか朝風にひるかへりぬ。このあたりに苫屋のいと多く、艸の中に、あばれてならひたてり。こはみな、春鯡の漁りのために立つる魚家とて、空しき宿のみにて人住むはまれなり。ヲシラナキといふ浦あり。うへもアキノの、ヲシラナキのノボリと、此内浦の山をいふにそありける。暑さにあゆみこうじて、水こはんと、あやしけなる一ッ家のあるにとひ寄て休らへば、いよゝたへがたう心地もれいならねは、しはしとて肘を曲るわさすれど、いねもつかれず。はや日影海にさしかたふけば、あるしの翁いひてけるは、多かる蚤のいとひもあらずは、そのまゝそこにふしあかしてと。こはうれしう、薬なめて日は暮たり。すこしはこゝちもよげなれば、いまた蟬の鳴のこるを聞つゝ、

磯波にうちもまきれて夕風のころ吹よする蟬の涼しき。

軒をあらそふ麻生の中に、螢のあまた、とひちかふなとのこゝろやりに、いふせき宿もわす

れて、はしかきに、

くれはやみおくほどもまたあさの葉の露をたつねて螢とふなり。

蚤蚊多くて

とに出れば、近き海へたに火のところ〳〵見へたるは、いさりするにやとゝへは翁のさしのそき、あれは森といふ村に、シヤモと栖家の入ましり居るアヰノの、蚤蚊の多かるをうれへて、夏は、いつも濱にのみ出てふしあかす、それらか、たきたつる蚊やりびなりといふを聞つゝ、

蝦夷人の涼しき夢やむすふらんよるはあつさも波まくらして。

更て、浪の音もしつまりて、

森村

二日。あさひらきの空のくもりて涼しけれは、又といひてやどりを出て、海邊つたひに朝川わたりて、聞つる杜ちふ村になりて、

波の音吹もさそひて行袖にすゝしくかよふ森のした風。

望む山々

沖のはつかに晴れたるを見やりて、行つるゝ人のいふ。上蝦夷のすむセタナヰ、あるはスツキのやま〳〵、はた、乾の方にあたりて雪のきら〳〵と殘りたるはカリバの嶽、シユマコマキ、スツツなどの山〳〵ならんと手を折てかぞへ、シリベツの嶽こそ、まさしう子の方なれ。この嶽も、西蝦夷の國ヰソヤといふなるコタンに在るなど、蝦夷のくになる山はわれよく知

鳥井か埼羆の頭を掲ぐ

りかほに、みなかたれり。鳥井か崎とてアヰノの家(チセヰ)ありて、そこに雛堆(ツセキ)とて、羆(チラマンテ)の頭(シャバ)のあめ露に晒たるを、またぶりのことき うれにさして、キナヲとりかけさしつかね、小竹(しの)の葉をつかねゆひそへ軒近う立て、神靈(カムヰ)とてこれを齋(まつ)る。此ツセキは、長(をさ)とみうどの門のしるしとなん。

蝦夷の大工

海へたにかたぬきたるアヰノの、毛は蓑着たらんがこと〳〵と生ひたるが、オツプとて木の棹を、ビルガネとて眞鉋(まがな)もてこれを削り、錐子(エキシヤカニ)おし立て眞砂の上に居るは、アヰノのたくみにや。森の中に八船豐受姫の祠あれば、鷄栖あまた立かさねて、是を埼の名におへり。

神酒宴の跡

尙行ほとに小川のへたの白沙の上に、三束(みつか)のキナヲさしたり。そのゆへをとへば、こゝにアヰノらが神酒宴(カムヰノミ)してけるあととなん。

　蝦夷人のみそきの解除ひとくすらし淸き河原に木幣(キナヲ)させるは。

石倉を過ぐ

石河原といふ磯屋形を過れは鷲の木といふところのありて、

　夷人のひなはとりかふおやわしの木々のこすゑや栖家なるらん。

行へきかたは浪くらく、八重のしほ風吹渡りてこゝろほそう、いつこにくれて泊してんと見やられて、

　末遠くしるへも浪のよるいそやこよひ根山の麓なるらん。

ボウヒ、ヱヒヤコタン、メツタマチ、カヤベ、濁川、石倉、ポンナヰなとの浦〳〵つたひくれば

昆布刈初め

モナシベより船にて

罪人の額に文身

イナチ埼の三枚浪

トマプの薪積み

けふなん、ひろめ苅そむる小舟の、沖もせにこゝらこぎ連りて、かづき刈り、あるは棹にからみ、いかりびきなど浦〱のわざことなれり。かくてモナシベに來つれば、さちなる蝦夷舟のありてこれにうちのれば、舳に車梲(カンヂ)さるアヰノの頭(シャバ)は、瘡に兀(はげ)て毛もあらぬ。シャモこれを賀宛といふ。かれが額(ぬか)に十文字の文身(いれずみ)したるは何のしるしにや、いふかしう人のいへり。（天註――此嶋ののりとて、罪なかしあるものは輕重をはかり、しもとうちして、つきあざとてぬかに入墨をしてはなちぬ。かゝるものら、あるはこと人、男女、卯辰の飢饉のとき蝦夷にいたりて命たすけられて、そこに住つき、女は夷の妻となり、男は聟となりつるなとあり。是うら人、シャモかへりといふ。そのつみ人なとのたくひならんを、あらはにいはで、あやしとのみいふはうへなり。）このアヰノこゝろたけく醉のまぎれにや、イナヲ埼（天註――西の浦にもイナチ埼あり。西のイナチ埼はシャモ地と蝦夷の地をさかふところといへり、東はしからじ。）の三枚浪とて三重にたゝみてうつてふ、名におふ高浪の中へ、ひたのりにのり入て、あら汐のからきおもひもせて、ひとり心やすけに、うたうたふを、せちにわびて、やゝこき出てヲトシベにつきたるほどに、白雨しきりにしければ、磯家に入て雨のはれまつに、袖のいたくぬれたるを、それほしねとて刀自の葦火たけり。

あし火たき波かけころもかはくまにはれて涼しきゆふたちの空。

此コタンより、ことアキノをあないにして、竹の葉の形したるちさき舟して、大河を、あやうけもなう棹さし渡る。此水を隔てノタヲキといふコタンあり。赤兀(あかはげ)坡(トマプ)とてその高さいくそばくそや、はかりもしらぬ高岸の上に樵木高うつみ上けたるは、近きとしるみしごものたむ

モノダイ一泊

ろせしころ、よせも來らば四方の軍にしらしめんの料とて、おかせ給ふとなん。又雨のいたくふり來ぬれば、モノダキといふやかたに一夜をとてとまりぬ。こゝなん、シャモの栖家もアキノのチセヰもいと多し。アキノふたり舟つけており、けふのレバにて大(ポロ)の浮鮫(キナボ)とりたるとて、此魚しゝどのつくりたるとて、宿のあるしのもとへその肉(しゝ)くれたるを、こよひのさかなによけんとて烹てすゝむ。夕くれふかく、キナボとるてふ舟のいくらともなう、沖べよりよりこぎく。

蝦夷舟にて

百重たつ波路はるかにこきてきなほのかに見ゆる沖の蝦夷舟。

キナボは、氣仙の海にいふ浮鮫にことならぬものか。

三日。雨もよに空のかいくもりぬ。こゝより、フルシベコタンとてアキノか住む郷あり。沼尻とて湖のあるへた傳ひ行ば、ポロムヰ（天註——箕(ムヰ)ちふ小嶋のあり、それにたぐへて大箕(ポロムヰ)ちふコタンにてやあらんかし。）、ポンユウオヰの村(コタン)に出る砂濱路(ヲタロ)のあれど、泙たれば、かきをくりとて、アキノの舟にこかれてはるはると行ば、シリベツの岳も、たゝなからばかりけふも見て、一日たも嶺のあらはれさるもねたし。

けふいくかあふけとそれとしりへしの山こそ見へね雲と浪とに。

ヤムナコシナキ上陸

風たち遠近の空はれわたり、シリヘツもやゝなこりなう見やりたり。ヤムヲコシナヰにつ

蝦夷村のみ

鳥の神とて

送りの宴

ユウラツプ渡船

シラリカに宿る

きておりぬ。(天註――ヤムチは栗ないふ辭にして、ヤムチ多かりし澤ちふ事をコタンの名におへり。)此コタンの運上屋よりあなたは、シヤモの入まじりたるコタンもなう、アヰノの栖家のみしげうならびて、それらか村(コタン)〳〵のあるといふ。トマムトシナヰ、フユンベ、オコツナヰの川渡り、ポロオコツナヰの川渡り、ハシノシベツの河渡り來てアヰノの宿に休らふ。軒のたけにひさしく太き虎杖の柵(さく)を作りて、チカフカムヰとてシヤモ、嶋梟鵄(ふくろう)といふこの大鳥を、鳥の神とてかひやしなひたてて、葉月、長月にもなれば、鳥にてまれ獸にてまれ、これをさきほふり、それをさかなに、あるしまふけをせり。一とせに一度のアヰノの國(コタン)の大祀饗餝にして、賑ひすといふ。シヤモの辭にこれを送るといひ、アヰノはこれをヨマンといふとなん。ユウラツプといへる、いと大なる、深さ、はかりもしらぬ河へたにつきたり。秋は此水に鮭の多くのほりくとなん。はぎいと高きアヰノひとり、さゝやかにうすき舟をトツパネチイツプといひて、柳の一葉の散り浮たるやうなるに棹さし寄て、獨りのみのれとて、いくたひにもわたせり。シヤモなとの川長のさすとは、ふりもことに、さはかり廣き河の面に露も波たてす、魚なとの行ことに、遠き岸邊に事なうつけぬ。かくてコタンあり。フヰトシナヰの河渡りてフレムコにいたるに、アヰノの館(チセヰ)の多く立ならひたり。ウソジミてふ川渡り、フシコフレムコの小川渡りてシラリカにつけば、浪の上に日のさしかたふき、雨やふり來ん、雲のいや重りて沖にたゝよへれば、いまに雨

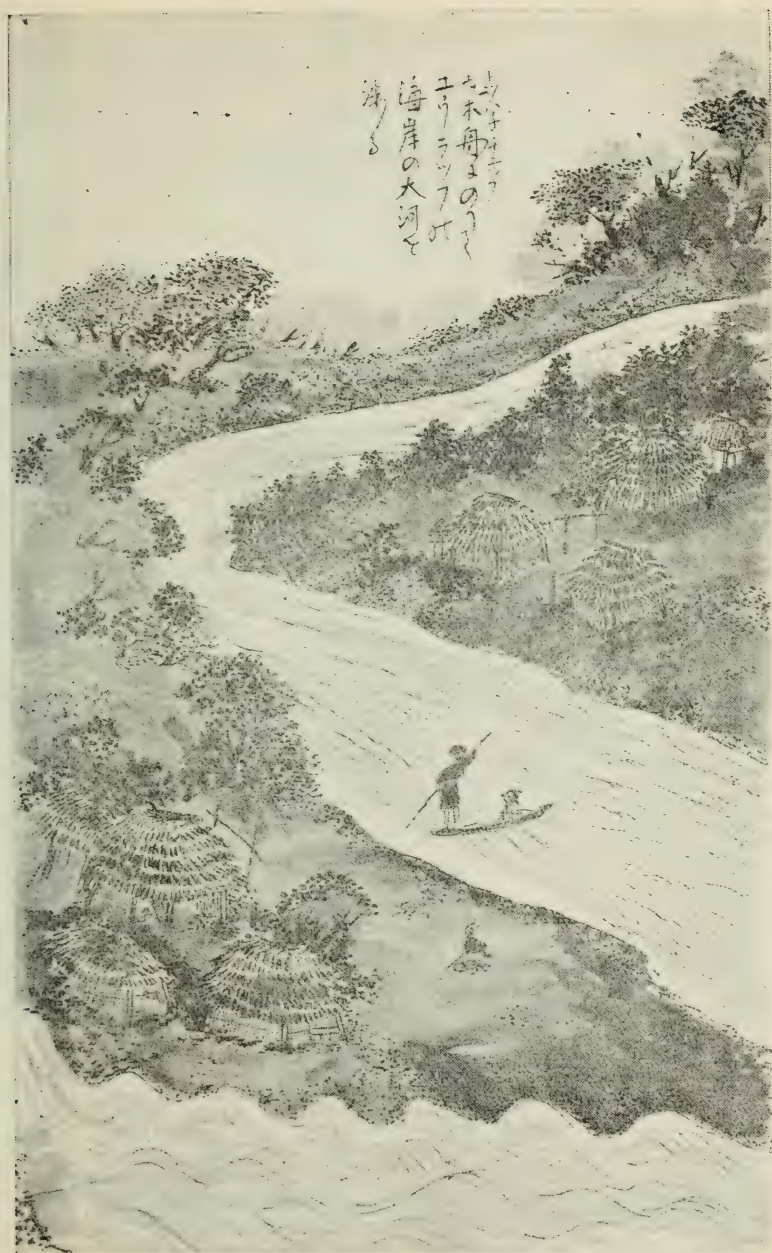
のふりくべきとあないもいへば、このコタンなるウセツぺといふアキノの舎(チセキ)に、一夜とて宿かる。家(や)は萱をかいつかね葺て、いぶせきやうに外(と)よりは見ゆれど、さし入ば内の間廣く、厨下は、あら砂の上に鼓簾しきものとして、きよげ也。かたへには高榻(セツカ)長ク作りて三處に在り、左をシゲヰショセムとて、この床(セツカ)には女房(メノコ)の居ならび、右をハルケヰショセムといひて男居れり。中なるルルケキショセムといふ床榻(セツカ)には、まろうどざねをまふくるの處なればとて、この床に文繡莚(シタラヘ)とて、きよきあやむしろを、しきあらためて、これにといへば、のほりぬ。牕は、いづらも榻(セツカ)ことの上に明たれば、夕風のおもふまゝに吹入て涼しう、蚤は、居に居て多けれど、床のいと高ければ、さらに飛ものぼらず、シヤモの臥房(ふせや)よりも、いとすみやすげ也。やかのくまに財貨(たから)といひて、こがね、しろかねをちりばめたる具ども、匜盤(キシヤラバチ)(みみだらひ)、角(キラウシ)(つの)盥(バチ)(だらひ)、貝桶(イチンケシントコ)(かひをけ)なとを、めもあやに積かさね(天註――イチンケとは龜の名なれども、八角なれば龜甲にたくへていふにやあらん。シントコともシントクともいひて桶の名なり。)外器(ケマウシ)(ほかひ)をケマウシシントコとて酒を入れり。この、ほかひちふものは酒祭(きかほかひ)をせし具の名にして、いにしへの手ぶりの、のこれることそしられたる。又大なる丹塗(にぬり)の桶に巴を画(かい)て、酒造桶(サケカルシントコ)とて、醷酒(ヤヤサケ)をかみしてける具どももこゝらとりならべ、ヰタシベのピセヰといひて、おほきやかなる壺蘆(なりひさこ)の如き海獺(とど)の胃てふもの、あるは又大口魚(エレクチ)(たら)のヒセヰなと、みな魚の油を入て梁に掛つらね、ブキとて黒く乾たる草の根を編て柱にかけ、隔葱(ブクシヤ)といふものを刻み、象山(トレ)(しかか)

魚を祭る

刀劍を備ふ

粥の食事

貝母(ツフ)の根を舂て餅菓のごとくにして大なる酒樽(シントコ)に入れ、あるは小檜桶(ニヤトス)に入れてあさ夕の糧とし、鹿のほじし、鯑(タンヌ)(いるか)のほじしやくひぬらん。(天註——トレツフ、これを俚人はうばゆりちふ事を訛りてうばいろといひ、桃生郡などにては、つんばゆり、妻百合てふことにや、或大葉ゆりなど所々にことなり。蝦夷人此艸をアヨウロといふ、トレツフとは根を制し團丸のごとくなるをいふ也。)ブクシヤの匂ひ、油の匂ひその臭さ、たくへんものなし。この家財(たから)など置たる方には、鯑の頭をタンヌシヤバとて、長串に貫て戸の上におし立、タンヌヘラとておなし魚の骨、又こと魚の尾鰭をも串にさして、なにくれの器をはしめ木綵(イナヲ)とりかけ、あるは、いくらともなう、やならうらにもさしわたせり。あないに持せたる袋のよね、とうだして炊んとすれば、婦人(メノコ)、ニヤトスに水汲もてきて、「タンワツカキイワンゲ。」といふは、この水してものせよといふにやとて、其水してかしぎぬ。主男床(オツカイセツカ)立そひらの壁には、タンネツフといふ、いとながやかなるつるぎたち、あるはエモシポ、シヤモシポなどの平太刀、頭巾(コンジ)、鉢卷(マタブシ)をもませ掛たり。女房(メノコ)とも魚のなましを鑱刀(エピラ)してさきくらふに、日もくら〳〵になりぬれば「シユンネアレ」といひて、樺皮(タツ)(かには)の火を木の枝にさしはさみて爐のもとにたて、飯(アマムエベ)吃といひて、粟(ムンジロ)、稗(ピワバ)(ひゑほ)などにブキ、ブクシヤ、なにくれの草の根入たる糒(チセロフ)(天註——粥をチセロフといひ、これをシヤモ、あらゆといふ。アラユも近つ蝦夷人の辭ともいふなり。)にキナボの油をさしませて、飯椀(イタンキ)ひとつ〳〵に調羹(カシユツプ)(天註——カシユツプは、もろこし人のタシピヤウにことならす、世俗の散り蓮華といふものに似たり。)して盛り分ちぬれば、をのれ〳〵が吃食筋(パラパシウ)(天註——ハラパシウは世にいふせつかひにことならす、うくひすちふもの也。)といひて、ちいさき飯匙(いひかひ)のごとく、鶯のやうなるものして、

丸木舟にのりて
エリラツフの
海岸の大河を
渉る

夜となりて
蝦夷の城柵
此宿を立つに

かいなですくひあげ、居ならびこれをなめて、みなふしぬ。夜るはすがらに、こなたかなたの睡床（セツカ）を隔て、うちもの語ひ、なにのおかしき事かあらん、セツカよりまろひ落ぬべう笑ふことどもあり。やゝタツの火も消へはつれど、爐火（アベ）の光あか〳〵としたるにうかゞひ見れば、又おき出て、なにならんほち〳〵とものくふ音の耳にたちて、つゆふしもつかれねば、

　小夜なかにものこそおもへ蝦夷のすむ艸の庵のかりまくらして。

かくて、ひましらみたり。

四日。夜の明るをまちて手あらはんとて細き流に臨めば、このコタンの源は、さゝやかの瀧のありて高く峙へ、木々深う茂りたる中にはサントミ、あるはシヤラカムヰのときアイノらのたてこもるといふ、チヤシてふコタンのありとか。（天註――涌泉のありて、人さらにのぼり得くまじき山にチヤシあり。柵やうのものにして、サントミとて軍陣のとき、あるはシヤラカムヰのとき、こもれり。シヤラカムヰとは諍論にして、ものあらがひ事と舌人のかたれり。いにしへの稲置或水城にかなへり。）水をもろ手にうけて、

　一夜ねしまくらの瀧のしらいとを夢のなこりにむすふ涼しさ。

飯やかしくならん、メノコの、ニヤトス提來て水（ワツカ）くみていぬ。

　蝦夷人のあさなゆふけにむすふらし軒はにかゝるたきのしらいと。

ものくひはてて、いさ出たちなんほりに、宿料（ブンマ）とてひと夜ねししろに、あるしのもとへ、いろ〳〵糸に鋮をとりそへてとらすれば、メノコども黄（シウニ）、赤（フウレ）、白（レタル）、黒（クンネ）の絲（カ）、針（ケム）とて、ラキクイロ

シカレといひ、ピルカとなかやかにいひもて、よろこべる色の見ゆ。この宿を立いつればアキノどもサランバ〳〵とシャモ詞にいへば、女子(メノコ)、善去(ピルカノヲマン)とて手を揚れば、男(ヲツカキ)手をすり手をあげ、髭を撫て別ぬ。（天註——䋝をがといふは蝦夷のイタク也、これをカンナといふはシャモのイタクのうつり也。ラキクイロシカレとは、これは〳〵過分なりといふ意もしか聞へ、さやうなりといふこゝろもあり。ピルカはうれしとも、よろこばしとも、あなおもしろしともいふこゝろのあり。サランバ〳〵とはシャモの詞のうつり、ピルカノチマンは、能く御歸りと俚人のつれにいふふりを、アキノら聞ならひうつしていふにやあらんか。）河ひとつ渡りて本シラリカに至る。みちすがら雨はふりぬれど、したがひ來つるアキノふたり、笠、あまつゝみもさらにせで、

夷人のをとろの髪のそほぬれてやとるかけなき雨の長濱。

黒岩の石神

ルクチといふ磯に小川あり。こゝをシャモの詞に黒岩といひて、おほきやかなる岩あり、このはざまことにキナヲさせり。そのむかし、遠郷(トキマ)俵洲(コタン)のアキノども軍徒(サントミ)をいだし、こゝらの船乘來てこのコタンをうちてんとやゝ近つきければ、此ルクチの黒岩の姿の、アキノあまた屯したると見へたるに、トキマのアキノみなをびやかされて、われさきと舟こぎ、にげしぞきたり。こは此コタンのアキノを守らせ給ふの石神(シユマカムヰ)（天註——石をさしてシユマといふ、石神ちふ詞なりけり。）とて、今の世までもかくいやまひ齋(きつ)りて、キナヲを削(ケル)し奉るとなん。フキトシナキの濱路をゆき、チリン

ホロナイのヤカタにて

ナキの川渡り、ホロナイのアキノか栖家(ヤカタ)に入て、しはしとて休らふ。（天註——アキノの詞に、茛屋をさしてヤカタといひ、苫屋、丸屋をさしてチセキといふとなん。）廣き榻(セツカ)の上に、やゝみそち近からんとしの婦女(メノコ)ひとり、耳鐶(キンカレ)にいろ〳〵の珠(た)

珠玉を飾る
槌撃
魚脂を貯ふ
メノコ唄ふ

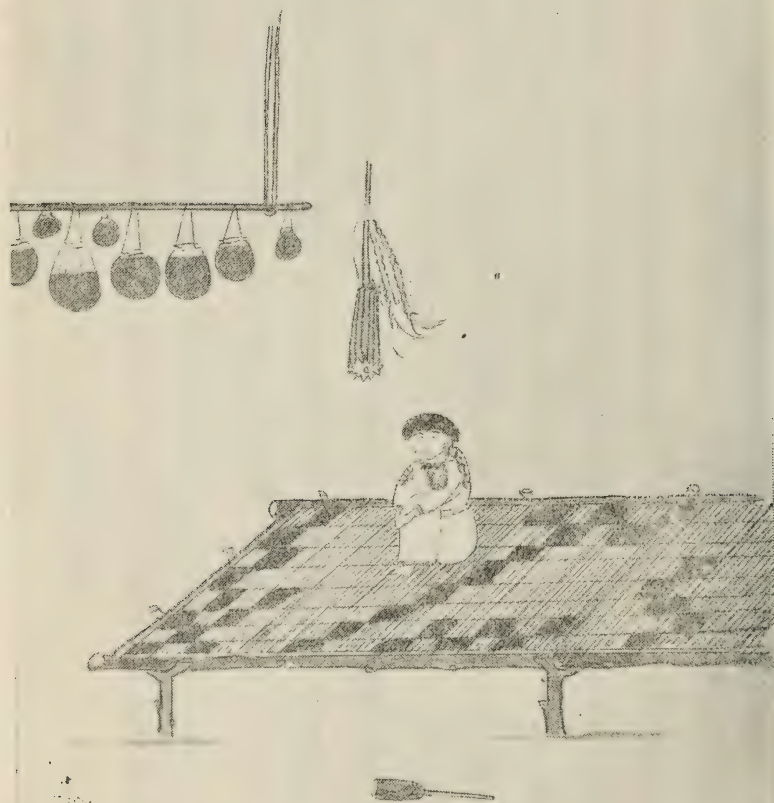
玉を飾り、頸（リクチ）（天註——リクチ、ルクチ、みな通ふにや過來しコタンにルクチの名そ聞へたる。）にもリクトン べとてくさ〳〵の珠をつらぬき纏ひたるは、遠き神代にいふ、頸にうなげるたまてふものも、かゝらんたぐひにや。（天註——素戔嗚尊、以其頸所嬰（うなげる）五百箇御統之瓊、なとも聞へ奉る。）この館のくまにはセトフとて、三尺よさかの槌に鐵條をさし入れて、いと重げなるを掛たり。これなんシャモのいふ槌撃とて、ものあらがひのときは互に心ゆくまでうち撲れては、さばかり、はらぐろにいひはらだちあらかひつる中も、うちなごむならひといふ。其料の調度となん。又おなしさませし短き槌子に、木綿（アツシ）巾の布を、ひた卷にまきたるが榻床（セッカ）の下に投棄たるは、わかきアキノらがつねのいとまあれは、槌搥（セトフ）のわざをならはせるの具となん。棹を梁によこたへて、ちいさき魚の胃（ヒセキ）にキナボの胜を內れて掛ならべたるは、熟菓柿を梢ながらに見たらんがごとし。あるしのメノコ床を立此油をとりおろし、あざらけき魚のつくり肉にかけて盤（ニマ）に盈り、あないし來つるアキノどもが前にすへ、又ことメノコの來るにも進めぬ。やはらこのコタンのメノコに旅の具とも持すれば、れいのごとく額に負緒をかけて頭（シャバ）の力つよげに、手を拍ち〳〵、つゆ聞もしらぬ一ふしを鳥なとのさへぐやうに、二人のメノコが行〳〵唄（シノチャ）しつゝムクンヌキのアキノの村（コタン）にいたり、尙行ほどにこのメノコらがうたふもおかしくて、

　コキノレラ、ヲビツタコタン、イトランマ、シノツチヤハオイ、アキノタンクル。

或るアヰノ

チシヤマンベ到著

青山氏の運上屋に

百卅歳のアヰノ

かれらが言葉をかりもて、そのまゝかくそうち戯れたる。これを吾邦(シヤモ)の言語(イタク)にいはゞ、

「浪風の治る御代のためしもやうたふなるらん蝦夷の嶋人。

ワリウの小河を渡れはアヰノの村(コタン)あり。このコタンに居るシヤオケといふ蝦夷(アヰノ)は、鬚(レキ)の長さ、みさかよさかに逾て、顏色赤(ナヌフウレ)に身のたけたかく、としは三十はかりならんか、眼(シキ)は玉を懸る如く歯は貝をあめるがごとし。はきつよげに見へて、魚うつほこのアリンへといふ、からの長きを杖つき、あら磯の巖の末に立て沖べ見やりたるが、わか行を見てほこを捨て左右の手をあげ、レキを撫て禮(ウムシヤ)をしたり。こゝを經てベチフといふ處をも過て、まほのワリウあり。モンベツ、フウラヌベツを來れば、いまた日のたかきにヲシヤマンべにつきて、行末も陸路うちつゝけど、さかしき眞木のしげ山に岩たち峙へて、さらに人の通ふへきにあらねば(天註―此海邊の山路近きころひらけて、もはら人の往復もいとやすかりけるよしをいへり。)、舟路行なんと野原をしばし行て、闕のあら垣を小川の岸べまで柵(ゆ)ひめくらしたる館(やさ)に入れば、青山芝備といふ人の知るところにて、膃肭臍の、みつきのえたちにたつさはりて、去年より此さもらひに栖てけるをとふらへば、あな久し、めつらしかりき。まつ福山にことなき人つてなとかたらひ居れば、去年福山の湊に見し頭(シヤバ)太(ボロ)といふアヰノの來けり。(天註――福山は、むかしいふ北山、今いふ勝軍山の山脚のあたりにして、もはら稲置のほとりをいふ。) はた、奥山のトシベツといふコタンに栖むアヰノ、名をコウシといふ。かれが年は百とせあまり三十ばかりに過た

百四十歳のもあり

アキノ二人の酒宴

りといふが、こゝし、十とせぶりにてこの海邊に出て、青山のぬしを、わか主士（ニシパ）と頼みまみへんとて、きのふ來つるといふ。此コウシの老翁（チャチャ）を見るに、さらに、をきなび、ぼけ〱しきふりも見へねど、たゞ、いにしへふりにウムシヤをし、をのれが持たる調度の彫工（テント）も、いまの世のアキノらがふりとは大にことなれり。かゝる、世にまれなる齢のめでたき人もありけるものかと、ひとりこちて、このコウシか姿をうちまもれば、こゝに在る舌人（わざさ）のいふ。アキノの、としたかきはめつらしからじ、カヤベの浦のポンナヰの、ウマキといふメノコが、としの數をいはゞ、百四十歳（アシキネ・ツナホツ・トホツ）になりきとなん。シヤバポロは、かうべ、いと大に、たゝむきの細長く、身のたけ四尺に足らさるアキノと、もゝとせにあまれる翁の、鬚眞白（レキ）なると、ふたりさしぐみに、コウシ盞（ツーキ）をあくればシヤバホロひさげをとりもてつぎぬ。（天註 ― 盞をツーキ。蝦夷の音いひときがたく倚しるすことあたはず。舌人にとふべし。）シヤバポロ盃（ツーキ）をとればコウシひさげしてつき、あな樂し、驗なき寶といふとも、一坏のにごれる酒に、あに、まさらめやとおもふにや、ゑまひしつゝかたらふさま、おなし國すら、かくことなれる人とらを、又見ん事こそかたからめと、めもかれず暮たり。シヤバポロ、とをのぞみ、螢の多かるをヌヌゲツプホロノヲウカヰといふ。さしのそけば、うへもしられたり。

むろちはら露とこほれてゆふ風のふきもさそふかほたるみたるゝ。

海狗漁の話

風を祈る

出漁の方向を占ふ

海狗の寝方

室茅といふ艸の、いつらの濱にも茂れり。

五日。つとめて風吹浪たち、雨さへふれば出たゝず。あるし青山しげよしのいへらく、ことしは海狗（ウネヲ）の多かりつれど、去年の冬は海のあれにあれて、おもふにたがひしかど、卯月の漁（レバ）もよかりけるなど語れり。此ウネヲてふものは頭（シヤバ）は猫に似て、身（むくろ）は獺（をそ）にことならぬ獸也。もろこし人は膃肭といふものゝ、それが臍（ハング）といへどしからず、まことは、それが雄元（チエキ・たけり）をとりて薬とはせり。ウネヲは、かんな月の寒さを待得て、冬の鯡（ヘロキ・にしん）の集（すた）くをくはんと追ひゐさるを、蝦夷舟（チイツフ）こゝら、このコタンより乗出て、突きてんとねらひありけど、冬の海のならはしとて、いつも浪あれ風はげしければ、アヰノら擧て平波（ノト・なぎ）あらん事をいのり、齋醺（カムヰノミ）とて神にみわ奉り、をのれらも酔ひ、かく祈禱（ツシユ）して、あら浪のうちなごむしるしをうれば、海はいづらにかウネヲのあらんと狐（シユマリ）の頭（シヤバ）をのれ〳〵がかうべにいたゞき（天註―狐をシユマリともシユマリカムヰともいひ、もはら黒狐ををそり尊めり。さりけれと撃てとりぬ。）そとふりおとして、そのシユマリのシヤバの口（ハル）の向（むき）たらん方に、ウネヲのあるてふ神占（トシユキ）して、それをしるへに十餘里の沖に、あまたの船（チイツフ）をはる〳〵とこき出るに、たかはずウネヲは、あをうなはらの潮と浪とを枕に寐るといふ。（天註―手尼哀（ウネチ）は海寐魚、又倦寝魚ちふシヤモ詞のうつりにてや。仁徳紀に、瀰灘曾虚赴於瀰能烏苦陟（みなそこふおみのをとめ）などいへり。こは水底歴魚（みなそこふを）とつゞきたる辭にして、ウネチも倦み寐る魚ちふこと葉にてや。）それか寝るに、そのかたちしな〳〵也。ヨコモツプといふは片鰭（テツヒ）にて、ふたつの足（ケマ）をとりおさへて、左のテツヒをば海

漁の留守の精進

にさしおろし、汐をかいやりてふしぬ。これには、投鉾(ハナリ)いと撃やすし。テキシカマオマレとて、片鰭(テッヒ)をば水にさし入れ、右のテッヒを腰にさしあてて、シャバのなからばかり潮にひちて寝たり。チョロポツケとは、かたテッヒを水に入れて、さし出したるふたつの脚(ケマ)を、かたテッヒしておさへたり。カキコシケルといふは左のテッヒを水に入れ、右のテッピを上にさゝげて、身をふるはして寝たり。セタボッケといふは犬(セタ)の寝(ふ)したる姿にことならず。かゝるなかにも、テキシカマオマレといふが耳のいとはやき宿(ね)やうなれば、いつも、これを突もらすと、蝦夷(アキノ)の物話(イタク)にせり。ウネヲの牝をポンマツプウネヲといひ、牡をデタルウネヲといへど、窟寐たるすがたは牝牡ともにことならず。ウネヲの漁(レバ)にとて男(ヲツカヰ)の沖に出れは、(天註――ヲツカヰの假字にや、オツカヒのかなにてや。)女(メノコ)はゆめ鍼(ケム)も把らず木布(アツシ)も織らず、飯(アマム)もかしがす手もあらはず、たゞふしにふしてのみそありける。其ゆへは、オツカヒ漁(レバ)に出てハナリとりうちねらふに、そのアキノの家に在るへカチにてまれメノコにてまれ家(チセヰ)にせしとせし事のかぎりを、波に寝たるウネヲの、ふとめさめてそのまねをすれば、えつきもとゝめず、手もむなしう、はらぐろにのゝしりこき飯り來て、けふはしか／＼の事やありつらんと、そのせし事どもを掌をさすやうにとふに、家に、せしとせしわざの露もたがはねば、屋を守る人をそれをのゝき、身しろきもせすして、ふしてのみそありける。かゝればウネヲも、うなの上に能ふし、よくいねて、

出漁の準備

獲物の處置

漁期

獲物の報酬

搏やるハナリのあたらずといふ事なけんと。つとめてウネヲを漁りに出んといふとき、なにくれと其漁の具どもを南の牕より取出し、カンヂ、アリンベ、ウリンベ、マリップやうのものとりそろへ搒出て、海の幸もありてウネヲを捕得て皈來て、其ウネヲをば船底に隱しおきて舟よりおりて、をのか家に入て、ウネヲ撃たる事は露もそれともらさで、なにげなう、つねの物話をし、烟酒くゆらせなとして、れいのことく南の窻より、撃たるウネヲも、その漁の具も取ぐして入れ、ウネヲをは厨下に伏せて、鏾刀もてウネヲの腹を割て膽を採りしぼりて、舟の舳に、ウネヲの血ぬる齋祀あり。ウネヲをさいたる小刀もて、ゆめ、こと魚を、さきつくることなけん。十月のヘロキにあさるウネヲより捕り始め、春の海に突めぐり、夏のはしめ卯月の海となりては、シヤモの名に智加といひ、アキノこれをヌラキといふ魚にあさるを取りて（天註——蝦夷辭にいふヌラキ、松前俚言に智加、飽田の方言地加と濁音にいひ松前方言なへて濇音也。此魚、東海、南海のわかさぎちふもの也。）、卯月の末にウネヲのレバの具をばとりをさめ、ひめおきて、こと漁にさらに用さる、此コタンのならはし也。ウネヲひとつとり得ても、米、酒、淡婆姑なとの酬料を、それ〳〵におほみつかさよりものたうばりければ、此御惠のかしこさに、むくつけき、あら蝦夷人もこゝろなごやかにうち擧り、よろこひの涙磯輪にみちて、かゝる貢をはをのれ〳〵が命にかへて、あら潮のからきうきめもいとはず、八重のしほちをかいわけてとりて奉り、公にも、みつきにそなへ奉り給ふといふ。

天隨意の空

ヘカチの目無千鳥

音曲を聞く

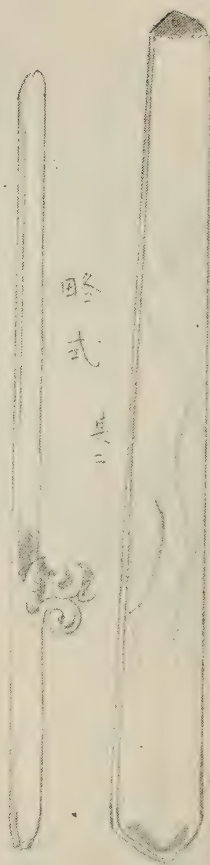
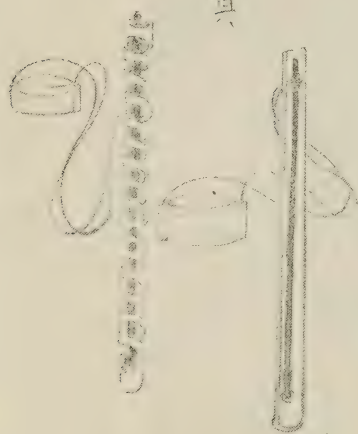
漕連れていつれは浪もしつかにて御代のめぐみをうねをかりふね。

紆尼叫のもの話に更てふしぬ。

六日。つとめて雨ふり浪もいやたてば、舟いださす。ひるつかたの空晴行は、けふの風はいかに吹ぞとゝへば、沖は潮のしつかなれど磯浪の高からん。風はあゆの風なりといへど、しかすがに汐と風とのほとは、えしも、はかりしられねばとて、アヰノの來るに、けふの空はいかに、泙(なぎ)か荒(あれ)かとゝへば、カムヰレンカイといらへて（天註――天隨意（カムヰレンガヰ）とは、神のまに／＼ちふこゝろにて、唯一向におしまかせていふ語意（イタク）也。）唯神にまかせてといふ事なれば、すへもなうアヰノのことについて、えしもいてたゝず。夕附行空の清う晴て、日かげ、うなの上にかぎろひて風涼しう渡れば、この浦べに出てあたり見ありけば、ヘカチ、カナチのむれましり、ひとりのヘカチをアッシの衣にて頭よりつゝみ掩ひて、あまたのヘカチ手を拍てアヰノフレ／＼といひめぐるは、蝦夷の身の匂ふ方をしるへに、もとめこよといふ、蝦夷の童あそひの戯れありけり。世にいふ、めなしとち／＼、こゝろに付てましませ、目無千鳥(めんないちどり)てふものにひとし。

晴渡る雨をアヰノのふれ／＼と月をおもはぬ蝦夷の嶋人。

夜さりになれば、アヰノども來つゝ音曲(ユウカリ)をかたる。そのさまを見れば煙草匣(たばこけ)を枕として、のけさまになりて、左(ハリキ)の脚(ケマ)を延へて右(シモン)の脛を左の股にのせて、左の手して額(おか)をおさへ、あ

淡婆姑筒二具

るはかざし、右の手をもて胷を敲き、あるは肘（たゝむき）をして脅腹をうち叩き、獸のうなるやうにたど、ううと唄ふやうなれど、この事や面白かりけん、聞つゝ居ならひたるアキノとも、烟管架（きせるき）したる一尺（ひとさか）にあまる細き木して、おしきの底、板しきなどをうち鳴らして、ほうしとり、ハオ〳〵とこゑをそろへて、あまたのアキノかはやしぬ。此ユウガリ休らふ事あり。そのとき、かたはらのアキノの進み出て、こはしか〳〵のことなりといへは舌人（わきさ）の聞て、これをシャイタクとて詞正しうものいひ、話るときには、ふるき譯辭（わきさ）も耳遠き言葉のみあまたにて、聞モの辭に託（うつ）し語りて、こと〴〵にしられたり。音曲（ユウガリ）、あるは使者（ションゴ）の詞（イタク）、あるはチャアラゲのうることあたはぬすぢ〳〵多ければ、かくぞ解き聞へたる。ユウガリしばし休らふのとき、又さきのごとくつばらにとき聞へたり。又談り出て、こたびは、ふしもことに鳥の囀るやうに聞へ、あるは奴要鳥の咽呼ぶやうに聲をひき入て疾く謠ふにあはせて、ほうしもはやめにうちぬ。これを外面に立聞しつるメノコども涙やこぼしけむ、アッシの袖に顏（ナノ）ふたぎ、眼（シキ）をすりてたゝすむが、夕月夜の光にてよくも見やられたり。ユウガリとゝむれば、れいのごとくアキノの告話りて、通詞（わきさ）これを語りて云、クスリのコタンとてこゝよりは道遠きコタンに兄弟のアキノ心猛く、ねぢけたるものありて、クスリに近きコタンのアキノらは、みな、それらか奴僕（ウタレ）とて、つぶね、やだこらのごとくになし、はた贄（ツクエヒ）とて、家に在りとある貨財（たから）はみ

長萬部舟出

寄木塚由來

なかすめ取りつくしぬれば、クスリの長官（ヲトナ）とて、アキノらをそれをのゝきたり。あるコタンに兄弟のアキノありて、クスリの山（ノボリ）に來て鹿（ユツプ）ひとつを射たりけり。長（ヲトナ）聞て、にくきやつばらかな、禮（ウムシヤ）もあるべきに、そやつ、うちもころしてんが命斗はたすくべし。獵し鹿（ユツプ）は吾（チヨ）等（ウカヰ）がとるべし、其方（イチヨウカヰ）にはやらじとて、クスリのはらからのアキノと、ことコタンのアキノと、ものあらかひして、やゝ槌うちそはしめたりける。クスリのアキノ、ことコタンのはらからを、ひとうちにうちはたしてんものをと、おもひはかりたりしかど、つよきセトフの力に反りうちにうちなやされて、身もうこかれず、このシヤラカムヰよりクスリのはらから死（ラヰ）したりければ、贄（ツクナヒ）も、みなとりもとしくれぬ。さりければ、ことコタンのアキノの兄弟を神（カムヰ）の如くおもひ、みな、かれがウタレとなりてよろこべば、クスリのはらからのメノコ、ヘカチともの、なきさまよひしものかたりとなん。」ユウカリしたるアキノもおきあがり、あるし酒出しぬれば、れいのふりに飲つゝ、更てヲマンとて去ぬ。

七日。いとよき汗とてアキノ、葛にとちたる船さしよせたれは、のりて此前なる小川よりこき出て、此磯山を見つゝ遠さかる。かゝる山（ノボリ）の雪の、やゝ消へ殘る形の王餘魚に似てけれは、アキノの辭に鰈（かれえひ）をシヤマンべといふ。斑雪（むらきえ）の形（すかた）をいふとならば砂王餘魚（ヲタシヤマンベ・かれえひ）といふべきを、略（はぶきこと）辭していへらん浦の名にや。行ほどに、流れ木をいたく積上げたるところをシヤモ

アキノと語り行く

の寄木塚といひ、アキノはこれをネッノシヤといふがあり。むかしカヤへの湖水(トフ)に、蛟龍(オヤヲ)とて神蛇(トコカムヰ)のをさたるがつねにすみて、をりとして海を渉りて、此濱にわだかまりてければ、行かふ人、メノコ、ヘカチおぢて、あたりを舟だにのらず。このことをアキノら、あさましきまでうれへかなしひ、木幣(キナヲ)をさゝげ神(カムヰ)醪飲(ノミ)して、オヤヲいまより、こゝにゆめな出まし給ひそ、身をかくろひ給ん料には、この處に行かひのメノコ、ヘカチに至るまで、來(き)よる波の浮木をひろひつみて奉らん。オヤヲ、あらふるこゝろをなごしめて、しつもりたまへ、はた、アキノらがコタンをまもらひたまへやと、アキノどもの居ならび手をすり、レキを撫て、ものさゝげつればオヤヲ、こゝにいでませる事たへてなけんとか。この寄樹堆(よりきつか)は、みづをろちの栖家とはいへり。海のある日は寄木なごりなう浪にうちいざなはれ、泙つゞけば、又もとのごとに寄木の山をなせりといふ。(天註――蛟龍一名外神、琉球嶼に多しといふ。山海經曰、大者數十圍卵如一二斛甕能呑之。附錄、蜃有二種、蛤類の蜃と蛟龍の蜃と也。みつちあり、みつちは、みつをろちのはふきこと、はた、みつくちなはあり、大にことなるものにして多し。)舟漕く二人の蝦僥人(アキノ)暑さにたへず、シャモの辭(イタク)に醮視衣(さかかたびら)とて、もろこし織の木縣布(センガキ)をいろ〳〵衣の如く染さして、又繡したる衣もアッシの衣着たるもみなぬきやりて、舳艫(ともへ)にしりうたげして、けふり吹やるアキノの身は、墨ぬり、うるしさしたるばかり黑きむくろに、雪の降たるやうに、おどろのしら髮ふりみだしたり。舳なるアキノとしは三十斗ならんか、いさくろく、身にむく〳〵と毛の生ひかゝり、草のことく茂れり。

シツカリを過ぐ

ケボロオキの岩舎觀音

圓空法師作

アキノのメノコとも、よき男となべて懸想(けそうし)戀渡るは、みな鬚(レキ)のいと長やかなるをいふと聞ばこのアキノを、メノコのしたひつらんと戯ていへば、老長(チャチャ)、さなりと。シャモのイタクの通ふアキノどもにて、なにくれとかたらふもおかし。シツカリの崎(シリ)をへて小川の沖べも過れば、ヒキフセ、アルベヌキの灘撈くほとに、鵜のくぞまりて雪のふれるかと、ふりあふき見つゝ行に、ちいさきはなれそのあり、これに笹家(や)二ッ立り、アキノこれを假屋(カシ)とて栖ぬ。尙撈れてケボロオキといふに至りつ。こゝに岩舎の觀音といふあり、舟つけてこの窟に入ば、いと長き、またぶり木の棹なとを横たへたるに、アキノの漁(レバ)の具ともをなにくれ、自在鍵をはしめひし〳〵ととりかけたり。奥深く入は、五軀(いつはしら)の木の佛をならへおけり、そか中の、みぐしたかき佛のそひらにかいたるを見れば、「寛文六年丙午七月、始登山、うすのおくの院の小嶋　江州伊吹山平等石之僧圓空」と記し、いまひとつには、「いわうのたけごんげん」、其次に立たまふは「くすりのたけこんけん」と、そひらごとに在り。三番の背のなからは朽て、文字のよみときがたく、四番、「たろまへのたけこんげん」と、おなし、そひらの方にしるしたり。此いつはしらの、ほとけのみかたしろは、みな圓空法師の作て、しか記せり。この五の佛の坐(みまし)はそれと見わくべうもあらず、古きあたらしきキナヲ取りかけ、はた、こなたさまにおほひかゝりたる窟の有に、笹の屋をその内に作りて、むかふ馬手にちいさき鷄栖見へた

岩の姿木の影

ハナリ撃たんと

岩を祭る

リブンゲツプ

釣魚を見る

り。何神のおはすらん、此佛の窟には、そむけてたてり。いはやどのカシに入て見れば、鬚(レキ)いと長く眼(シキ)の大なるアヰノ、ヘカチ、カナチをかたはらにすゑて、ひとつの榻(セツカ)を清め、あたらしきシタラへのむしろしいて、手(テキ)をあげテキを摺り、レキを撫て、れいのごとくウムシヤをせり。やがてこゝを搒出れば、巖の姿ことにおもしろく、蝦倈椴(フツプ)(ささろつふ)、あるは蝦夷檜木(シユング)(えぞまつ)の生ひまじりたてるは、人の作りなせるがごとし。なへて海の中に立伏る岩どもは、彩たる画(え)のさませり。此あたりは、わきて見へきところなり。舟のアヰノら葛筥(サラネフ)のなかより、おほふゝきの葉につゝみたる鰟魚、ブキなど取出して、ひたにくひて、ニヤトスの水(ワツカ)ひたのみにのみカンチさらで休らふほどに、こゝらの黒魚(タンヌ)(いるか)、沖もせに群れ行が行あらそひ、波を離れて五六尺(いつさかむさか)斗も飛あかるを見て、ハナリ撃てんとアリンベにギテヰてふものをさし、アキドスとて細き縄をギテヰに付て、柄(から)もひとつにとりもて、ぬかにこれをさしかざし、たちねらふにおちて、浪のそこにしつみかくろふを見て、あなねたしとて船追ふ。ヰコリといふ高巖に、ヰナヲあまたさしつかねたるあり、これをアヰノら、いとおもきカムヰとて、つねのうたけにも、まづ此ヰコリの神を唱ふといふ。このあたり近きコタンのアヰノらは、みなかゝる巖をさして齋(いは)ふとなん。リブンゲツプの濱はアヰノの館(チセヰ)、シヤモの番人の家(やど)あり。アヰノの、タ。ツ笠とて樺皮(かには)の笠着て釣し、あるは丸はだかなるも、あまた舟を舫ひ、あるは、こきならへたるに

山々遠望

アブタ到著

ちかく搒きよれば、貴人(ニシバ)とてみな衣とり着けり。キナボ突得たるに、ふたところまてハナリ立ながらきりあばき、あふらわた取いだし、その血にまみれたる、ちひろのゐなはの、栲縄のやうに流て波ゝ汐も紅に染ミたゐをたぐり、手にからまき、つくりとるべきしゝは、みなエビラしてきりとり、左右の鰭にキナヲかい削りさし貫き、ハナリの柄の石つきもて海そこにつき入て、舟こき散りぬ。高岸のありて木立茂りぬ。此奥によき水城(から)(チヤシ)(みつき)のありて寒泉(しみづ)清しと、カンヂ取るアキノの、つはらに語(イタク)せり。遠きシリベツの岳も、近き内裏の嶽も雲深くかゝり、臼の嶽はかゝり丹土(まはに)の色して晴れたり。ヲフケシベのコタンをへてヘンペのコタン、フウレナキのコタンの、アキノのやかた〳〵を見やり行ば、寄木拾ふメノコあまた、遠う、こゝかしこに群れは、れいの、

ツキマ(遠方)、ヲタ(沙濱)、メノコウヰノリ(集人)、リリヤンゲ(許)、ホロノヲウカヰ(多)、チクニ(樵木)、コーエキ(採)。

とうち戯れ、のさやかにアブタのコタンにつきたり。このコタンの運上屋の、まひろげに涼しかるへきにやとづく。蝦夷の栖家は八十斗もありといふが、濱邊、あるは林の中にも見へて、やゝ日もくれはつる空の、くもりもなう、波の千里もしつかに、いと おもしろきゆふへ也。

蝦夷人も月にはとらて弓張の影見てこゝろ空にひくらし。

口琵琶ふく

ひきものゝ音のやうに近う聞へたるは、なにの音にやさかたふき聞けど、さらにそれとわいだめなう。こは、いかなる音なひかといへば、あるじ、シャモは口琵琶といひ、アキノは是をムクンリといひて、五六寸(いつきむき)ばかりの網鍼(あはり)のごとく、竹にて作りたるものなり。其竹の中を透したる中竹(した)のはしに綵(いと)を付て、女(メノコ)ども口(バル)にふくみて、左の手に端を持て、右の手してその綵を曳く。口(バル)の内には何事かいふといへり。外(と)に出てこれを見れば、女子(メノコ)とも磯に立むれ、月にうかれて、こゝかしこに吹すさむ聲の、おもしろさいはんかたなし。この聲のうちに、をのかいはまほしき事をいへば、こと人は、そのいらへをも吹つ。又人しらずひめかくす事なとを、この含篭(ムクンリ)に互に吹通はすとなん。更るほど、いと多く浪の聲とともにしらべあひて、とよみ聞へたり。いはゆる胡笳てふものも、かゝるたぐひにして、はた是を胡砂ともいはゞ云てんかし。

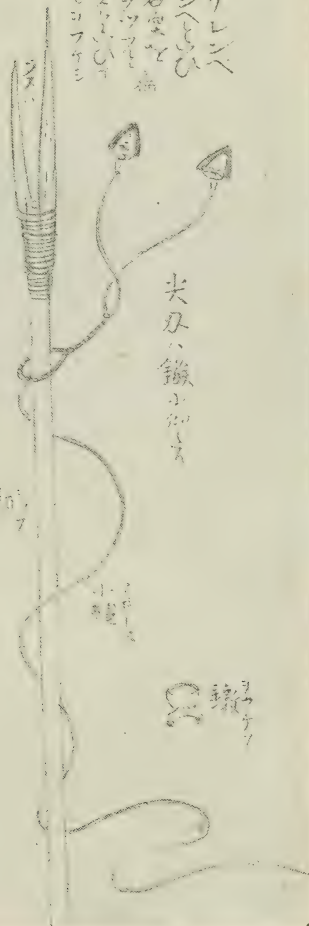
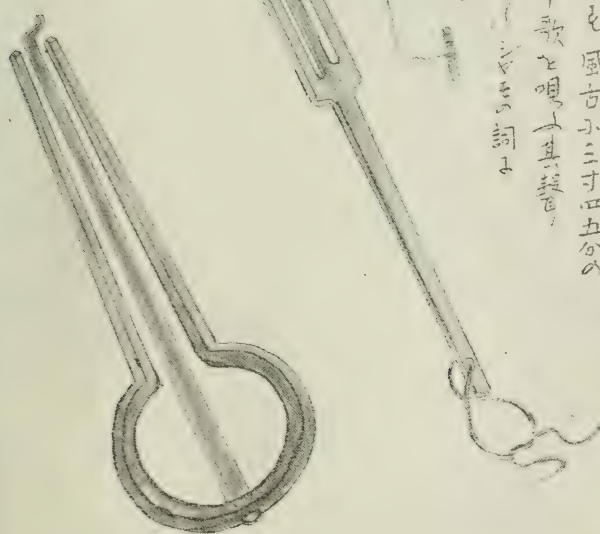
蝦夷見てもくもりも波の月きよく吹く口ひはの聲の涼しさ。

ふしぬれどムクンリの音、をやみなう聞へぬ。

名産アッシ

八日。夜半ばかりの雨、明ても尙零り、ひるのほど、しはしのはれまあれはさし出るに、小高きところに、鯡(ヘロキ)の漁のためにシャモの作たる、板布(いたしき)もなき四阿のあるに、うらわかき童女(メノコ)あつまりて、アッシ織る木綵(ヤ)をもて片帯(クツツ)を織り、あるは細帯(アンネクツチ)ちふものそ織ける。もとも此コ

波奈離
万利都府

弁久武利 えしめ 務矩離
長四寸 横亘三分
口琵琶
七月
津輕
繼傳の制作
合浦海濱
津刈の稻置四邊

タンのあたりをさして、臼アブタのアッシとてアッシの名ごころなれば、かゝるをさなきメノコより、其業をいとなみけるにや。

アッシの種類

よきアッシはヲヒヤウといふ木の皮をはぎ緌として、これをアツといふ。又級の木の皮を採り是をニベシとて織る、この糸は、そのヲヒヤウにや次り。至て品くだれるはニキガツプとて、大葉柳に似たる木の皮を剝き、たぎり湯に浸してのち流に晒し、日を經て、朽たゞれたるとき割き素として、カネダキとて、またぶりのやうなるものに線柱のごとにくり掛、あるは經亭のやうに玉に作りたるもあり。

製織の器具

筬はアッシヲシヤといひて、詞も形もいさゝかたがふ斗の具なり。したそ、うはそをおし分るに、アッシヘラとて二尺あまりに、ひろさ二寸斗の板に彫あるをさし貫き、緯を入るにアッシケムとて、法の師の持る三鈷の姿せし梭子に、木緌を曳かけ巻き重ね、纒木てふものは、細木にて隔木を三稜に組たるも、机のごときもあり。調緌を左右の手に引上て、機ものも無して、端は杙に縛付て腰にからまき、投足しても跏して織りぬ。クッツも、アンネクッツも、モロりちふ細帯も、アッシをるにことならず。濱邊に指もてヲタテントとて、もの画く童子あり幼女あり。童男は刀の鞘の彫刻をまねひ、童女は木布、かたひらなどの繡ちふものを手ならふとなん。

女の文身

木のかげにわかきメノコとも、風涼しとて青き唇をうごかして、むつ語りする中に、肘も、くちひるもいとふくらかに腫れあかりたるを、アッシの袖をおほひ隠したり。これ

蝦夷の治病法

流行病を恐れて

疱瘡に必ず死す

を文身すとて小刀もてさき、樺皮を燒て霜として摺り入れぬ。シヤモの鐵漿することく、バシユせし青色のうすらかになれは、女とも寄つとひ、互にバシユして身をもとろげ、髮をたつなと、つねのことなり。唇、かひなを月ごとに刺し、血をあやなすゆへにや、血のめぐりたゆたふ病もなう、男女骨節疼痛し、あるは屈伸しかたきにも、エビラして割き、血を流しぬ。これを蝦夷の身よりいたす血の、ことうちなれやのこゝろにひく入あれど、うべならじ。或傷寒、感冒のいとおもげなるをば、鍋に湯をかへらかし、やまふどを草席てふものもて、むくろを卷縛へ、アツシとりおほひ、鍋の上に木を亘し艸をしき、たゝしめてこれを熅て愈しぬ。眼わづらふものは、シキレベニとて黃蘗の皮を水にひたして、ひたに洗ひ、あるは、艾蓬の青葉を焙て瞼をおさへ、腹やめば、三椏五葉の根を採來て煎て飮み、なへてコタンの病を愈すことは、粗工くすしの及べうもあらじ。シヤモに風のこゝち、ゑやみなとはやるときけば、をのれ〳〵か家を棄て山をさして迯け行、路に垣根し箭を放ち、遠さかりては、亦籬ゆひ矢をはなちて、行〳〵て深山の奧に身を逃れ、かくろひぬ。アキノのコタンに、さる不快あらされば、シヤモよりこれを傳染ては藥せんすべなう、いはけなきものら熱にくるしみ、海河にとひ入り身を冷しなとして、遠行とてみな身まかれば、病と聞ば、をそれをのゝくことシヤモに逾たり。蝦夷國に栖む年越るは、通辭、番人、漁夫等か小兒も入ましりぬれば、瘡

網張りて避病を祈る

夕焼に驚く

羆養ふ檻

痘流行ば、それらか、シヤモの子のいまた疱瘡せざるは、みなシヤモの國へ追さぐるの島ののりながら、親の身として、幼をいたはり隱しおきなとして、もがさやめば、かならずアキノは死してけるものとなん。をりとして、アキノの館の戶窻、殘りなう網張涉す事あり。これも、やまふの入こぬまじなひなり、これをならひてシヤモの漁人らが、ゑやみし、もかさあれば、軒端、又は、やまふどの枕かみにもはりつ。」このメノコともアツシいとなむを、

梭を投るたもと涼しく蝦夷のめの木の皮ころもなみ居てそをる。

くれはつるころ、天開ちふものにや、大空の紅に、海の浪を染渡りて汐瀨照りかゝやけば、アキノともこゝちまどひて、空の赤なるはいかに、よきためしにや、よからぬ事にやと足を空にはせ來て、運上舍に入つゝ、いきもつきあへすいへは、よき事の、あめのみさかなりといひしらすれば、こゝちやおちゐけん、よろこひて邑長にかくと告ぬれば、ヲトナ、それとコタン〳〵にふれやりぬ。

九日。つとめてくもれは、雨やふりこん、けふは、いもゐをして臼のみたけにのほりてと、あるしのいへはいてたゝず。ひるつかた、近となりのアキノ栖家見てんと人にいさなはれて出いたれば、細き黑木の柱を三本づつ四の隅に立て、それに橫木あまたを組みあげて軒にひとしう高き柵ありて、羆の子をべウレツフといひて養ふ。さながら校倉にことならす。こ

鷲も養ふ

秋末に送る

れをセツツといふ。又、細き木をおなしさまに組たるセツツのちいさきには、かゞなく鷲(カベチリ)をこめり。偲山木立の奥になども是をなかめ、はた、のりの文字もあるてふなどの、なかめの意(こゝろ)もしられたり。この鷲の尾羽に、八幡府とて八字の書作(ふみな)すあり、それを、ほくゑ經の八の巻の數にたぐへてそ、蝦夷か千島の鷲の羽に、妙なるもしの有とここそ聞つれ、それらを、妙典の文字かいたる鷲の出しとは、いはれたりけん。このくまも、わしも、秋の末冬のはしめには、シヤモ詞にこれを送るといふ。こはみな、うちもころしぬらんかし。熊なとは春の子を、ちいさやかのころよりメノコの乳に養ひたてて、いと大に、いさみたつまてそたて、おしころし、この肉(しし)を喰ふとき、メノコども、聲をあけてよゝとなき、涙ながらにたうひぬなと語る。此皈さ日もやゝくれて、月は海つらを照らして眞砂の霜かと涼しう、濱を見ればアキノらのあまた、石、沙を枕として、ふし明すとて、ちいさき莚しいて、うちさやく。

浪枕うちも寐られすおき出て月にうかるゝ夷のしま人。

更ても、何ならん戯れ遊ふ聲の聞へたり。

臼嶽に向ふ

十日。御嶽のほりしてんといへは、あるし、アキノふたりにあないさせて、このアブタより岡ひとつ越る。みちもせに艸いと高くをほひふたき、ひろあまりの虎杖のひろ葉、葛葉に露多く、水などをこぼすがごとく、笠も、たもともいたくぬれたれは、臼のコタンについて運上

ウスの入江

島の堂にて圓空作佛像

善光寺佛を祭る

貞傳作佛

舎にしはし休らひ、日かけに、ぬれたる衣ほしなとして、

けふは又浪路行かねと露ふかき山わけころもぬれて來にけり。

潮のみちひする入江ながら湖水(みづうみ)めきて、ちいさき嶋山、岩なとのところ〳〵に在りて、松嶋、蚶潟の面影のこゝろと雙眸(まなじり)に浮ひ、林泉(には)なとに作りなせるがごとくおもしろさのあまり、この運上舎(や)の前よりむかふの岸べへと、小舟をヘカチふたりに撈せ乘り出る。弓手(シモン)の淺瀬に蜮蛤(あさり)とるとて、女(メノコ)、ヘカチ唄ふ。やはら、こぎ離れ遠さかりし磯邊より、頭をならへてしほかい分來るは、いかなるものかとおもふほどに、犬の牝牡(めお)ふたつアブタよりつき來つるか、休らひ有しほとは、よくふして舟のこき出るもしらで、楫の音にやおどろき、めさめて追ひ來る也。アキノ、カンチを止めてセタホクレ〳〵といふは、この犬を、とくこよと呼ぶ詞也。舟に近つけば艫おしまはして、アキノ、ぬれたる犬ともをかゝへのせて、舟を鳥居立小嶼に寄せて小坂のほりて、二間(ふたま)斗の堂のあるに戸おし明て入ば、圓空の作れる佛二軀あり。一軀(ひとはしら)は石臼にすゑたり。あふき見やる、みたけの形(すかた)の臼に似たれは浦(コタン)の名におふとも、ウスちふアキノ辭ともいへり。名の似たれは、みすゞ刈る科野の國、芋(いも)井の郷(さと)の御佛をうつしまつりて善光寺となずらふ。竹筬のうちに、こかねの光る佛を入たるは、國巡りの修行者のこゝに身まかりしかば、そのまゝをさめぬと。又すゝけたる紫銅のあみたほとけのあるは、鎮西沙

傍の小祠
石碑一基
岩穴の雫

門貞傳作之とあり。此法師は、津刈の郡委馬弊都の浦回なる本覺寺といふに在りて、きよげにをはりをとれり、在し世にかゝれし念佛利益傳といふ書ありて、人しれる僧侶也。この佛の御戸代に、「こさ吹し蝦夷か千島もくもりなくもらさて照らせ秋の夜の月。」「照る月の影ともしらてくもる身もたなひく雲にひかれてそしる。」歌三くさあれと、いまひとくさは虫はみて見へす。貞傳和尙の歌にや、又、こと人の落書なとにや。喚鐘、かなつゞみあり。鰐口の鐸に、寛永五年五月　下國宮内慶季、と彫たり。みな近きころ營しとは知られたり。堂のかたはらに、木賊多く茂りたる中に小祠ありて、これにも圓空法師の作る佛三はしらあり。そのそびらに、「内浦の嶽に必百年の後あらはれ給ふ」と書、又「のほりべつゆのごんげん」、いまひとはしらには、「しりべつのたけごんげん」と彫りたり。木賊生の中にいしぶみありて、善光寺三尊如來、開眼、善光寺十三世、定蓮社禪譽上人智榮和尙　享保十一丙午年正月五日　願主　上總國市原郡光明寺八世、天蓮社眞譽禎阿和尙」とぞ刻めたる。そのほとりに、さゝやかのいはやとめける穴ありて、それに潮汐のみちひありて、此したゝりの落る音高ううつほにひゞきて、夜更入さたまるころは、堂に夜籠とて夜居する人とら、その音を遠耳にはる〱と傳へ聞て、おほがねの遠くひゝくかとおぼへ、又かなつゞみの音かと迷ふは、このことにてやと、ふたゝび堂に入て休らふに、むしろきよげにしきて、うべも、こ

撞かずの鐘音

もり居の人のためならん。いつも、月のなかばより末のころまでに通夜し、ねぶちをとなへ圓居して、大珠數をくりめぐらし、こゝろしめやかに居るに、いづこともなうかねの音の聞ゆ。ことしも年越し住居するシャモの春の比岸には、この堂にうち集ひより、ねぶちをとなへてあるほどに、かなつゞみ敲つ音の仄に聞へたり、うきたる事にはあらじ、身の毛いよたつ斗たうとさと、かたりし泉郎の翁あり。○（天註――春秋の間彼岸は正時也、如此兩岸左右均等といへり。名比岸、又、日出日沒兩岸といへり。彼岸、あるはいふ比岸。）又ある驗者の云、此事かねて聞てんと思ひ、さちに一とせこゝにこもりしかは、廿日の月の礒山にさし出るころ、れいのごと鉦のはつかにひゞきたるに、きと耳たつれば、ふたゝび聞ゆるをしるべに、そこことたつねめくれど、嶋風に吹まよひてその音の絶てせざれば、いづこともしらで木賊原の石の上に夜もすがら踞しに、丑はかりならんか金皷をうつやうに聞へたるを、もとめ〳〵至れば、苺につたふ雫の、岩の竅に、たちりとおつる音にこそあなれとて、はたと手を打て、むねははれたりけるとなん。海士、山賤等は、いつも月の始には臼のみたけの御佛の、信濃の國に飛行給ひて、望のころほひまてはその國に居たまひて、いつも、いさよひとなりてはこの浦に皈り來給ひて、つごもりをかぎり、この臼の岳より、亦も、しなのにいたり給ふ。さりければ月のなかばはかり、いつもこゝに撞ずのかねの鳴るは、其佛のおましませるしるしとなん。これを、世に亦なき不思議ともいへり。やはら、アキノとも舟さし

出るにのり、出嶋に家(チセヰ)ひとつあるよりメノコさしのぞけば、舟こぐアキノ、何ならんか、ものいひつゝこぎやり、ほともなう、もとの岸べにつきたり。女犬の、舟より水に、つふりとゝひ入、はるく\と行は、なに見てならんと思ひ、アキノもいぶかる顔して見つゝ居るに、この

犬扇を拾ふ

犬潮(しほ)かいわきて行く\、わか持たりし扇を、いつ落したらんもしらで來しを、岩のあはひに浮き漂へるを咥へもて來て、濱べに落し身ふるひをして蹲る。こは、ためしもなき事とかいなで、ものくはせて、見る人々みなあきれぬ。こゝにたくへいはんも、おほけなくおもへど、

或帝の犬の物語

思ひいづる。むかしなにかしの帝、野の行幸の御時、おばせのみつるぎの、いしつきおちしかは、ふるきものをとおほし、したはせ給ふのをりしも、いちもつたりし犬の、その石突を、くはへもて來ける事のありしとなん。しか此扇も、賤しき身にもたるものから、神の御前に

眞澄の扇

いたるごとに幣帛(ぬさ)に代へてゐやしぬかつくのみか、片面に書しは、　神日本磐余彥尊の、伽牟伽笙能伊齊能于瀰能、於賚異之珥、夜異波臂茂等倍屢、之多儴瀰能、之多儴瀰能、阿誤豫、之多太瀰能（カムカセノイセノウミノ、オホイシニ、ヤイハヘモトヘル、シタタミノ、シタタミノ、アコヨ、シタタミノ）(天註——此御製の末は「異波比茂等倍離、于智弖之夜莽務。」しかいふ事のはふきかきつるる扇也。于智弖之夜莽務)と、かゝる御謠(みうた)の德(しろし)ならんと、いさゝか潮水(しほ)にふりそゝいで、菅笠の軒にさして、こゝを麓と、よちのほりなんとあふき見れは、峯も晴れたり。

わけのほるたもと涼しく山の名のうす雲はらふ浦のあさ風。

さいたつアヰノ二人に、わらぐつとらせぬれど、さしもはかず、此ふみものと、ニヤトスちふ檜桶に水入て持せつるが、これもてはせのぼるにしたかひて、ふたゝの犬もはせさいだつ。路のへに麻苧の種まかねど生ひしげり、牛房(セタゴリゴニ)なども種(うゆ)とはあらねと生ひましり（天註―セタゴリゴニちふことは犬の路といふ辭也。）、芒、眞葛の野良、もとあらの萩原あり、分行暑さいはんかたなし。荻ならん一群茂りたるを、シヤモなんこれを鬼萱(おにかや)といふを折しいて、アヰノらとともに休らへば、春のごとにもへ出るわらびを蕨(トツパ)といひもて、アヰノ手すさびにこれを折て捨たり。（天註―蕨の蝦夷詞をトハといひトツパといふ、又トウハリといひカムヰソロマとも、しな〴〵の名あり。蕨の初生より、ほたと老るまでの名にや、其根をもいふか。はたコタン〴〵にいひかはる名にてやあらんかし。）

　こや暑き野原の荻のした蕨秋風まねく手には似たれと。

尚よちて、みねや近からんと見やりたゝすむ。かたはらに藤幝のいと多く咲たり。

　秋近き色をみやまのふち袴すそ野の原にほころひにけり。

山はなへて丹砂(まはに)の色にして、彩るかことし。嶺の近くおぼへてとく〳〵とおもへど、富士にのほりたるこゝちにひとしう、からくして、たどる〳〵のほりうるとおもへば、又下れることはる〳〵として、その形、飯筥伏るかことき山亦あり。此みねに登らば嶺は極めなんと休らひ、アヰノに持せたるニヤトスの水も飲盡して、そこにてとゞまれるにやとやゝのほりうれば、又みたにの底より、たかうなの形していや高う、つと生ひ出て、その高さいくそはくそ

や、はかりもしらぬ岩山のそばたてるあり。それにのほらんに、下らん方は烟いふせく立くゆる岩群のありて、この火井(もろあな)に落らば身をほろひなんと、楯山(たてやま)にのほらんことをアキノもいましめぬれば、のほりもやらて見やり、折句歌を作る。

うちはらふすゝしき風にのこりなくたむけのぬさのけかれやはある。

山の動植物

この山の師臼(うす)の形したれば、宇数てふ名の高く聞へつるとおもひしかど、蝦夷の詞にはウシヨロノ・ノボリとこそいふなれ。なへて此ノホリに木はさゝやかにてもあらねど、小草(ポンキナ)のみこゝかしこに生ひ、虫は蟻(キツナベ)、蜂(ヤギ)、蝶(カマガタ)のありつ。羽音はげしう飛たるは、鷲(カバチリ)にやとアキノふりあふげば、胡鸝(カムキトクビラ)の、笠の端近うならびとひ行にこそあなれ。雙尾(ふたつを)のつはくらめをも越燕(カムキトクビラ)といひ、尾ひとつある、あまとりをすらカムキトクビラと、そのわいためもなういへり。

洞爺湖

この山かげに湖水(トフ)のあり、中嶼の四五も見へたり。この水に三尋にあまる水鮭(あめます)のすめりと。（天註 — 鯇魚、釋名鰀魚（音緩）、草魚、水鮭（揚氏漢語）、阿女（和名）。賀州方言ミツサク、陸奥方言アメマスといふ、凡國にアメノ魚といへりと。頓阿法師、魚名十なよめる詞に「あめ　ふりて、かはも水ます、あち、こちに、ふな人こひし、こさば、さはらん。）此トフの親嶋(ポロシリ)には蝮蛇(オヤヲ)すみ、ちいさき島(シリ)には凡蛇(トコカムキ)のすみて蟒呲(へび)嶋の名あり。兎の多かるをうさぎ嶋といへり。みなそれに蝦夷椵(ヲツプ)も、こと木らしけれりといふ。

シリベツ岳を望む

その遠かたにはシリベツの岳(ノボリ)は、もゝへの山をへたてながら、あまつみそらとひとしう、不盡を三河、遠つ淡海の高山よりうち見たらんにことならず。これを後方羊蹄山(シリベツ・しりべし)ともいへり。齊明天皇

正しくはマカルベツ也

の御宇、阿倍臣の肉入籠にいたり給ふのとき、問兎(トイウ)の蝦夷（天註——トキてふ蝦夷村のあるを問兎ならんといへど、そのふみのすぢ〳〵をおもふに、千島のアキノとはおもはれじ。）膽鹿嶋(キカシマ)（天註——キカシマは蝦夷辭に、もの、餘たるをとならん。今もセタナキてふ西のコタンに、キガシマといふ蝦夷の名そ聞へたる。）、菟穗名(ウホナ)ふたり進て曰、シリベシをもて政所とすへしとキガシマらかいふによて、遂に、みやつこをおいて皈りたまふとなん。肉入籠を、いまいふ鰐田の綴子のうまやといふ。こは、いてはの國飽田、渟代に近き處に在り。そのついて、津輕の蝦夷のことをかい聞へたれば、後方羊蹄山(シリベツしりべし)は阿曾陛の森ならん（天註——津輕の岩木山の舊名、あそべのもりといひ聞へたりしよし。）、はた、卒堵の濱に後方(うしろがた)ちふ村名のあるをおもへといふ人もありき。（天註——「津輕の青杜の堤川の邊にシリベツの林とて、源九郎義經の片はぎ巻を祭りて、あらはゞきといふ神のおはしませり。」おなしほとりに妙見の祉あり、此末祉とてキカシマの祉、名のみあり。「同平内小湊のほとりに蛇口、太夫なといふ畑の字あり、太夫は問兎にやあらんか。此事すてにいへり。）いま見るシリベツをシリベシといふは、うべなれど、シリとは嶋をいひベツとは河をいふ蝦夷方言(イタク)にして、いつこにてまれ河のべの島をいふとならば、ところ〳〵に嶋川(シリベツ)やあらんかし。此山をシヤモは、もはらシリベツの嶽といへれど、その山のあるコタンのほとりに栖むアキノらは、此山をマカルベツノノボリといひ、シリベツは其近となりに在る名なりといふ。さりければ、この見つゝむかふ布士の俤ある山を、マカルヘツといふか、まほの名となん。この山の、姿あらはに見ゆる日はまれなれと、けふは、あゆの風にてなこりなう見やらるゝといふ。ときのまに雲たちおほひたり。

うち見れは一眼にそれとしりへしの山いやたかく雲かゝりとも。

麓を望む

ウショロに下る

弓矢作るに

毒矢の仕掛

わけのぼり來し此麓のあたりは、リブンゲツプ、アブタ、ウショロなどのコタンのアキノの苫館(チセキ)の、こゝら、くさむらのなかにひし〳〵と立ならびたるは、青き蓆に、貝をふせるがことく遠う見おろしたり。臼の濱邊よりエドモか崎までの、うなの水めくりて巴(に)の字をなせり、此灣のすかたを江鞆(えども)ともいはゞいひてんと、ひとりゑみせられたり。登しみちを、こたひは左にそむけて、眞くだりにおりはてて、椊になりて寒泉(ワツカシンブキ)のもとにはせつき(天註——シンブキは穴てふ詞、ワツカシンブキとは水の涌出る穴てふこと葉にして水井といふ也。)水むすはんとしたるを、老わかき蝦夷女(メノコ)涼とるならん、小家の窻よりさしのそけば、

夏そこも岩井のしみつ軒ちかくむすはぬ袖も涼しかるらし。

此ウショロのコタンを、蝦夷(アキノ)の國(コタン)の都ともアキノらのもはらいひき。(天註——ウショロのコタンの風俗もて、都、中國たらんといふは、アキノの言語なにくれと正しう聞へたれはいふとか。)かゝるコタンにメノコらがいとなみ織るアツシは、こゝコタンにこゆてふ名にたてり。ある家(やご)にアヰノの弓(グウ)を作(カル)するを見れば、小刀(エビラ/まきり)ひとつのわざながら、眞(ピル/ま)鉋(カネ/かな)もて削りなせるがごとし。竹箭鏃(トップ)さしたる箆は高萱(たかかや)の莖太(くきぶと)なるに鷗(カピウ)の羽を四ッ羽、あるは二ツ羽にも魚肚(ユウベ/にべ)もて作(は)ぎ、もと末をば綵巻て、ことなれることなし。(天註——魚肚はユウベツといふコタンより產(いつ)る、シヤモ是を蝶鮫とてもて渡れり。此魚の腹より出るといふ。ユウベとはユウベツの短語ならんか、シヤモのニベちふものはユウベの轉語にてや。)竹鏃に毒(シウル)をぬれり。又樓弓のごとく弓(グウ)を曳き曲(まがな)ひて、これをアキマップとてこの弩(グウ/ご)を野山におくに、獸の大なるさ、さゝ

袵なき衣

黑百合

やかなると、其身の長を圖るに大拇をかゞめ、此高さしては鼠を撃ち、はた指を突立て、これは兎、これは貍、これは鹿、これは羆とて、わがかひな、肘のたけ、あるは立て、腰、膝なとのたかさ、それ〳〵に斗り立て操弓挾矢を架く。それに長緜を曳はへたり。此線に露ものさはらば、毒氣の箭飛來て、身にゆり立て、あといふ間もなう、命はほろびけるとなん。アキノの浦山をあないもあらで行て、此アキマップに撃れて身をうしない、放ちたる馬など、うたるゝこと數しらず。もしあやまちてこの毒箭にあたらば、中毒のあたりを小刀して、肉を割き捨るの外に術なけんとか、筑紫べに在ちふ兎路弩も、かゝるたくひならんと語る人あり。アヰノ何にてもものゝ尺とるに、をのれ〳〵かもろ手をのべて尺るは、いにしへの、たばかりてふわさ尙存れり。」沖よりちいさき舟を磯につけて、エドモのコタンより來るメノコふたり、モヲルとて袵もなきアツシを衣て（天註――袵なき衣をシヤモこれを袋といひ、アキノはモチルといひて、頭よりさし入て着て、むれにて紐をむすびたるものなり。凡魯西亞人の着る衣に形のひとしと。エドモより奥のメノコは、モチルをも又スサホロとて、袖口いと廣きアツシをもつれに服(き)けり。）、葛籠の内なる黑百合の根をアマムアンラコラとてとり出して、このコタンへの土產にもて來けり。（天註――黑百合（アマムアンラコラ）といふは、其山丹花の根に、米の如きものあれは、しかいふ。米をアマムといひ、アンラコラは百合をいふ詞也。）世にいふ白山の千蛇か池のほとりに在るてふものから、はた、こゝ處にもその草のありけり。このエドモの海に蛭兒嶋、大國嶋とてある、その大黑島に多かるよしの辭せり。其花は、車山丹ちふものに莖葉ことならず、只花の色黑

草木の夷名

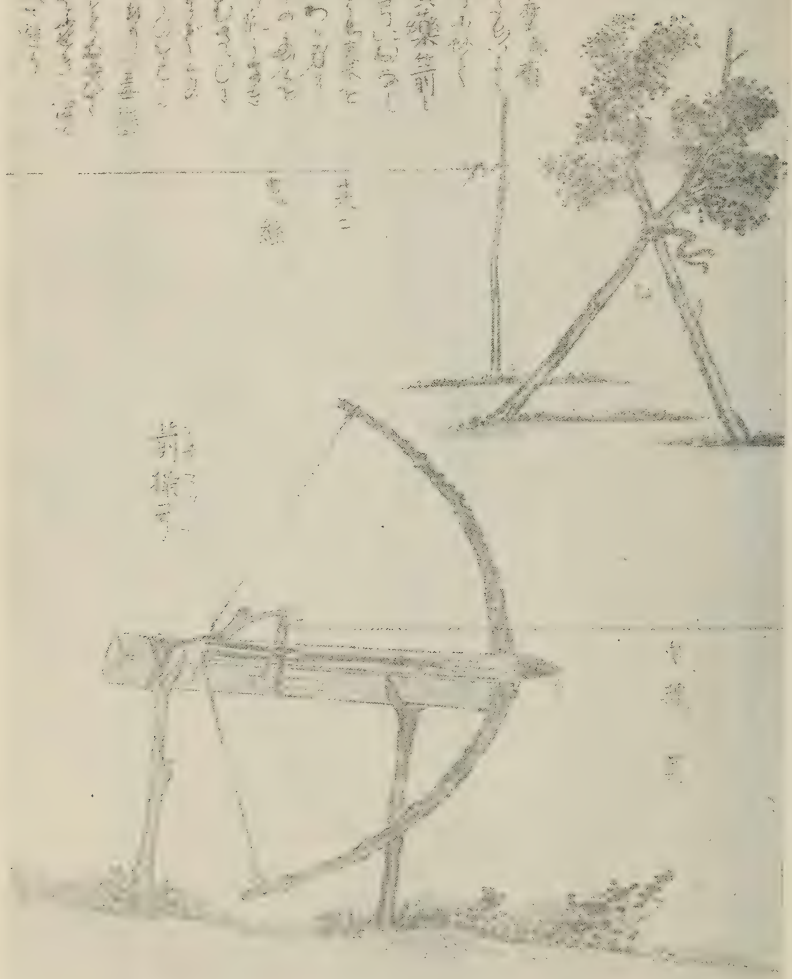
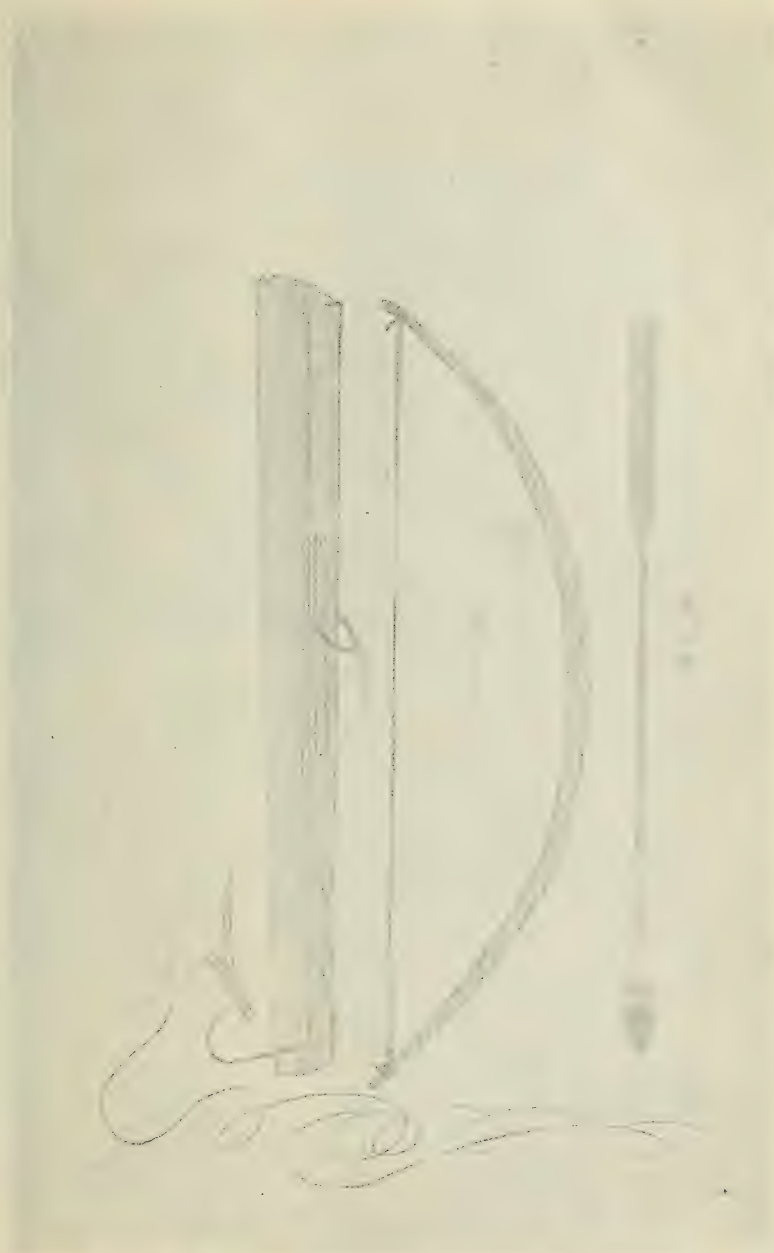
アブタ歸著

サカナの家の什寶器

し。こゝ所にうつし殖れば、黑色(いろ)うすらかに變(なり)ぬ、福山の花苑に見たり。臼(ウシヨロ)を出て二人のアキノに、みちのへの草を採て問へは、こたへしていへらく、隨軍茶(はぎ)をシンケツプ、芒(すゝき)をカバル、車前子(おほばこ)をエリモキナ、黃耆(くつはがらみ)をヌキホロキナ、獨活をチマキナ、山蒲陶をハアダム、蓬葉(よもぎ)をノヤ、鼠麴草をカムキノヤ、木賊をビシピシ、藜をシルシキナ、珊瑚菜(はまぼうふう)をバロウ、當飯をウベキ、此胡をオモキキナ、沙參をチカプムツケ、地楊梅をポンラキク、莓をキマウリ、羊蹄菜をナマシユキナ、紫蕨をショロマ、玫瑰をマ。ウ、山蕗をゴリゴニ、莓苔をシンルツシ、小竹をフツタチといらへたる。梢をさしてとへば、胡桃をニシコ、黃蘗をシキラベニ、あるはシケンベ、柳をシユシユニ、樺木をホウケルケニウチといらへて、夕つけ行ころアブタの濱邑(コタン)に皈り來けり。アキノらと、犬を撫てものくはせて別れぬ。

十一日。山背の風に浪の高けれは、舟出、こゝろのまに〳〵あたはじとて出たゝず。アキノ草(キナ)といひて、シヤモなんみかど、あるは鷲の尻刺し、あるは綰草(きしくさ)、こは、みくりてふものをあまた刈りおひ來るに、ヘカチら、したがひ行にいざなはれて行しかば、アブタのサカナとて、近きコタンにならひなき家財珍寶(たから)もちありしか、近き年物故(ラキオマン)してあらぬ。その家(チセキ)に入て見れは、あるしのサカナか、ありし世に持つたへたるたからさおぼへて、こかね、しろかねもてかざりたるつるぎだち、タンネツプ、折敷、貝桶、片口の銚子、ひさけ、杯の皿、こくしら、朱

家新築の祝

鶴の舞を遊ぶ

ぬり、梨子地、あるは、こかねの色に卷繪し、しろかねを蠻画にまきたるなど、貴き具ども、なへて、今の世のものともおほへず。外なる高庫には、めもあやなるくさ〲の寶多くをさめたれど。おなしコタンのアヰノにても、ことコタンのアヰノにても、ゆくりなうおし來て、あらぬすちを、たくみにものいひのゝしりて、その、いひけたれたらんものすべなう、そのときツクナヒとて、贖物(たから)を、それ〲にいだすのをそれとて、あるしの女(メノコ)、やもめながらも、さるものゝ婦とて、家をもりをさめ露あらはさず、寶などふかくひめて、ゆめ、人にしらせじとなん。此ちかとなりに草屋(チセヰ)を造し萱(カル)束ねて、層(かさ)ね〲葺をへて、棟の東(メナシ)、西(コヰボ)には幣束靈神(ヌシヤカムヰ)をあかめまつり、假りに弓箭を作りてこれをたばさみ、陞木(ニヰカリ)をふみのほり立て、南方(キモロ)、北方(キシヨル)のあはひにむけて、そら矢をはぢきて下り、みなカムヰ飲して、醉ひうたふ。夕暮つかた、わかき女あまた濱邊に群れて、鶴の舞てふことして鶴(サルロン)のかろ〲と鳴まねをしたるか、まことの鶴(たつ)のむれ渡りたるにひとしく、せばきアツシの袖をひるかへして、丹頂(オンネコツトコ)鶴の翅をひらきたる姿をしつゝ、トレエチカフ〲と、こゝらのメノコ聲をそろへて返し〲これを唄ひ、又羽をふためかすやうに袖をあげ戯れあそぶが、雲間もれ出る月光に濱邊まて見やられて、よくしるし。(天註――鶴をなへてサルロンといひ、丹頂をオンネコツトコといふ。トレエとははかせにや、チカフとは鳥といふイタク也。) ほどなうくもりてやがて雨ふれど、つゆもいとふけぢめも見へず、いよゝうたひ舞にや、くらき海べにトレエチカブの

聲、雨の聲、波の聲ことゝもにうちもをやまず、ふして尙聞へたり。

友したふつはさや雨にぬらすらんなみよりたつのあそふまねひに。

雨のふり頻る音にまきれてしらす。

昭和七年三月十五日印刷
昭和七年三月二十日發行

深澤

秋田叢書別集 菅江眞澄集第四

不許複製（非賣品）

編纂兼發行人 秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市

印刷者 千葉由藏
東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷所 東京印刷株式會社麴町出張所
東京市麴町區紀尾井町三番地

發行所 秋田縣横手町
秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市
振替仙臺八二五二番